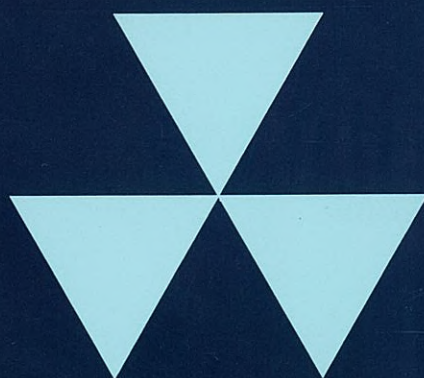




THE HISTORY OF DOSHISHA OARSMEN

同志社ローイング[®]100年

同志社艇友会

THE HISTORY OF DOSHISHA OARSMEN

同志社ローイング100年

松山義則 の 経営者としての 人生

本誌の題字は松山義則総長のご揮毫によるものです。



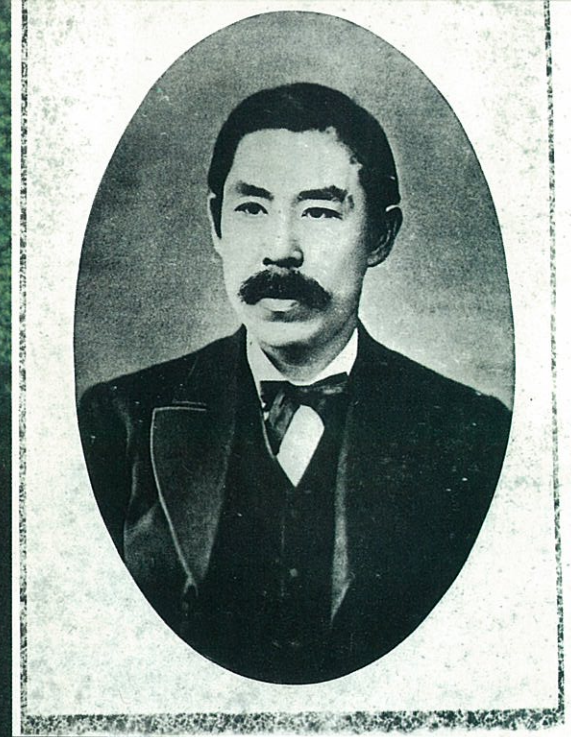
Doshisha College Song

Words by W.M. Vories
Music by Carl Wilhelm

1. One purpose, Doshisha, thy name
Doth signify one lofty aim;
To train thy sons in heart and hand
To live for God and Native Land.
Dear Alma Mater, sons of thine
Shall be as branches to the vine;
Tho' through the world we wander far and wide,
Still in our hearts thy precepts shall abide !
2. We came to Doshisha to find
The broader culture of the mind;
We tarried here to learn anew
The value of a purpose true;
Dear Alma Mater, ours the part
To face the future staunch of heart,
Since thou hast taught us with high aim to stand
For God, for Doshisha, and Native Land !



ヘンリーレガッタにて



良心に全身に
充滿した丈夫の
起り来らん事を

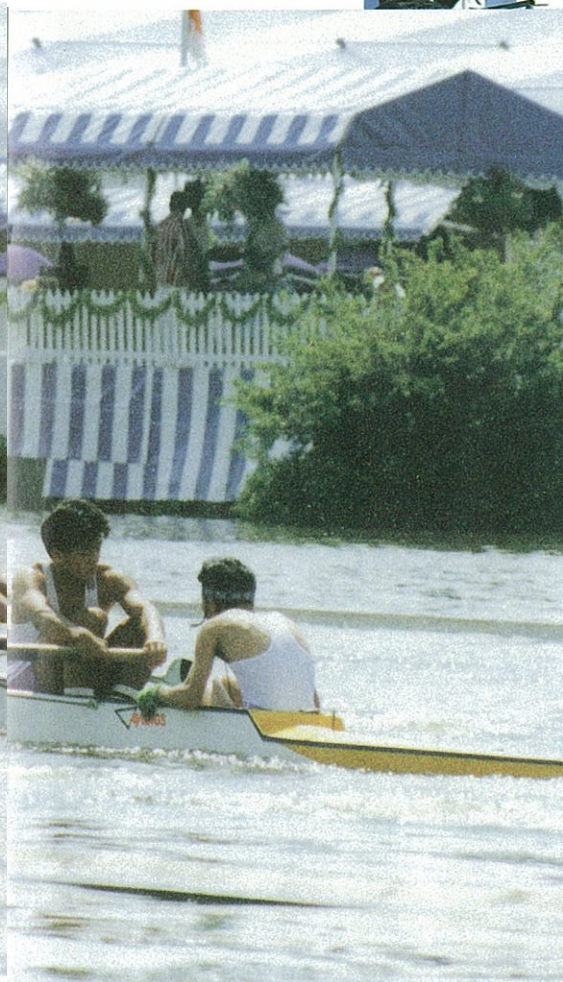
「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らん事を」

明治二十二年新島襄が一生徒にあてた手紙より



テムズの同志社エイト

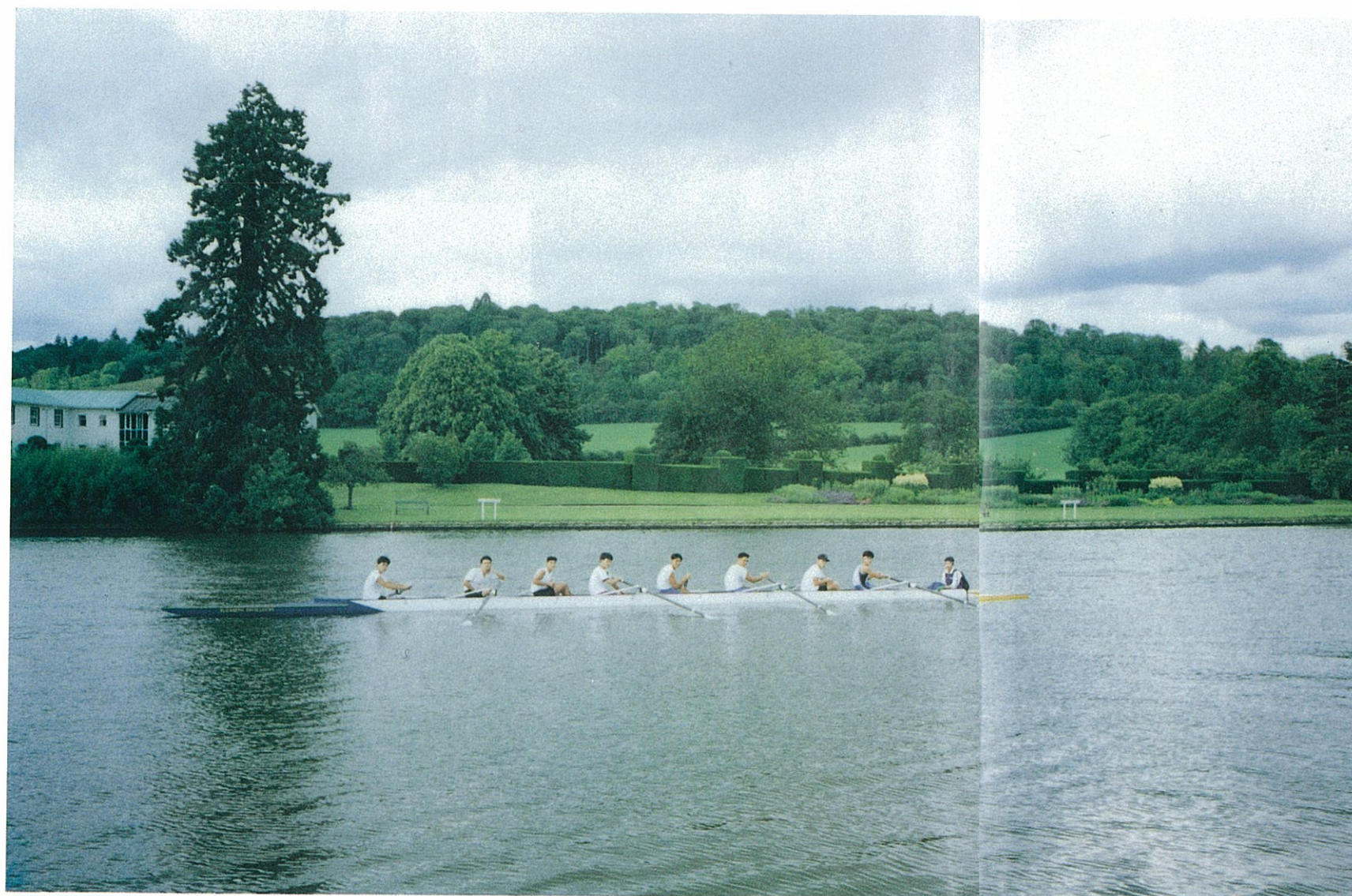
1991年 ヘンリーレガッタに参加



同志社大学歌

作詞 北原 白秋
作曲 山田 耕筈

1. 蒼空に近く 神を思う瞳
拳れり同志社 一の精神
伝えよ我が鐘 ひびけ高く
栄光新に 梢とそよがん
※樹えよ人を 輝け自由
我等 我等 地に生きん
2. 日を月を長く 神に出づる真
為すあり同志社 国の良心
活かせよ力に 立てよ我と
校祖の教化は 息吹と薫れり
※以下繰り返し



端艇部部歌

作詞 渡辺 勇
作曲 大中 寅雄

1. 恋をかこつか世を泣くか
終夜ら泣いて夢淡き
湖の乙女の憂きなやみ
嗚呼狂嵐よ起り立ち
藻屑と消えし真心を
赤き火をもて呼び返せ
2. 来れ怒濤よ立ち返り
志す身のたをやめの
燃ゆる情の燈火に
ほだすにあらで雄々しくも
法の光にこがしたる
強き心をたたえかし
3. なぎさづたいも此の夕べ
みつれば勇まし舟影
三つのクロバの旗高く
怒濤を蹴りて進み行く
目ざすは星か燈火か
はるかに懸る天の河

100周年日の力漕

関西選手権大会にて





五輪へのゴール

1968年 全日本選手権大会優勝



ダブル優勝

1973年 全日本・オックスフォード盾優勝

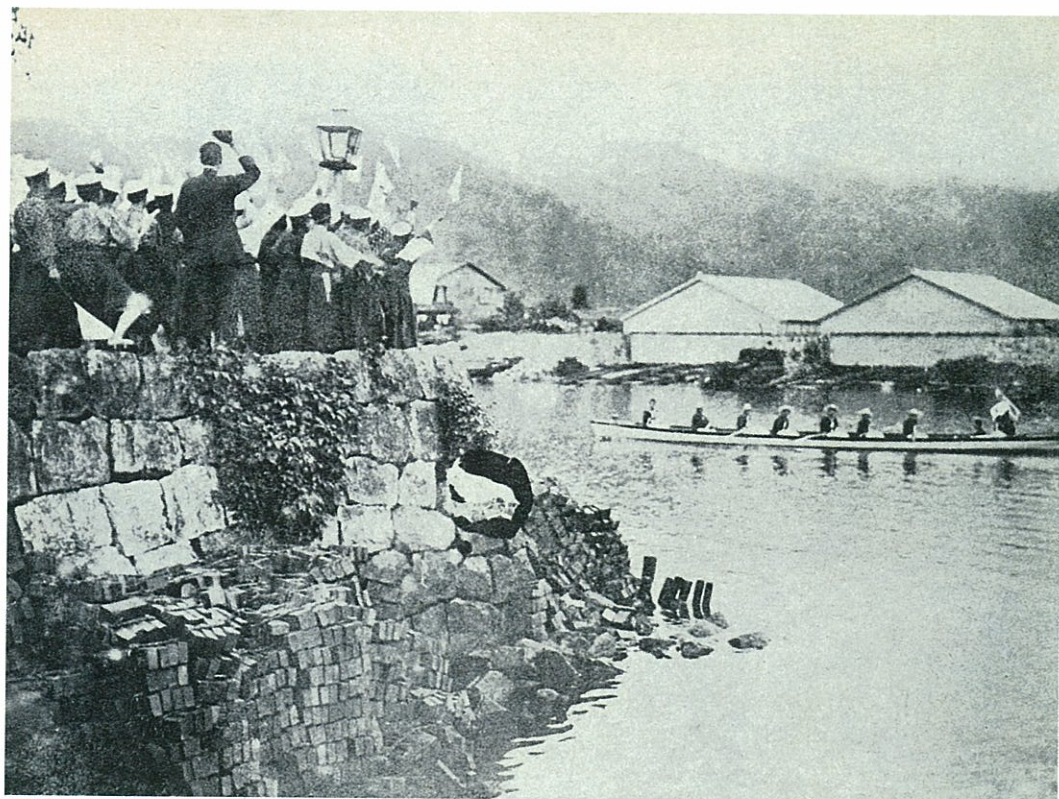


圧勝!

1969年 全日本選手権大会優勝



回想



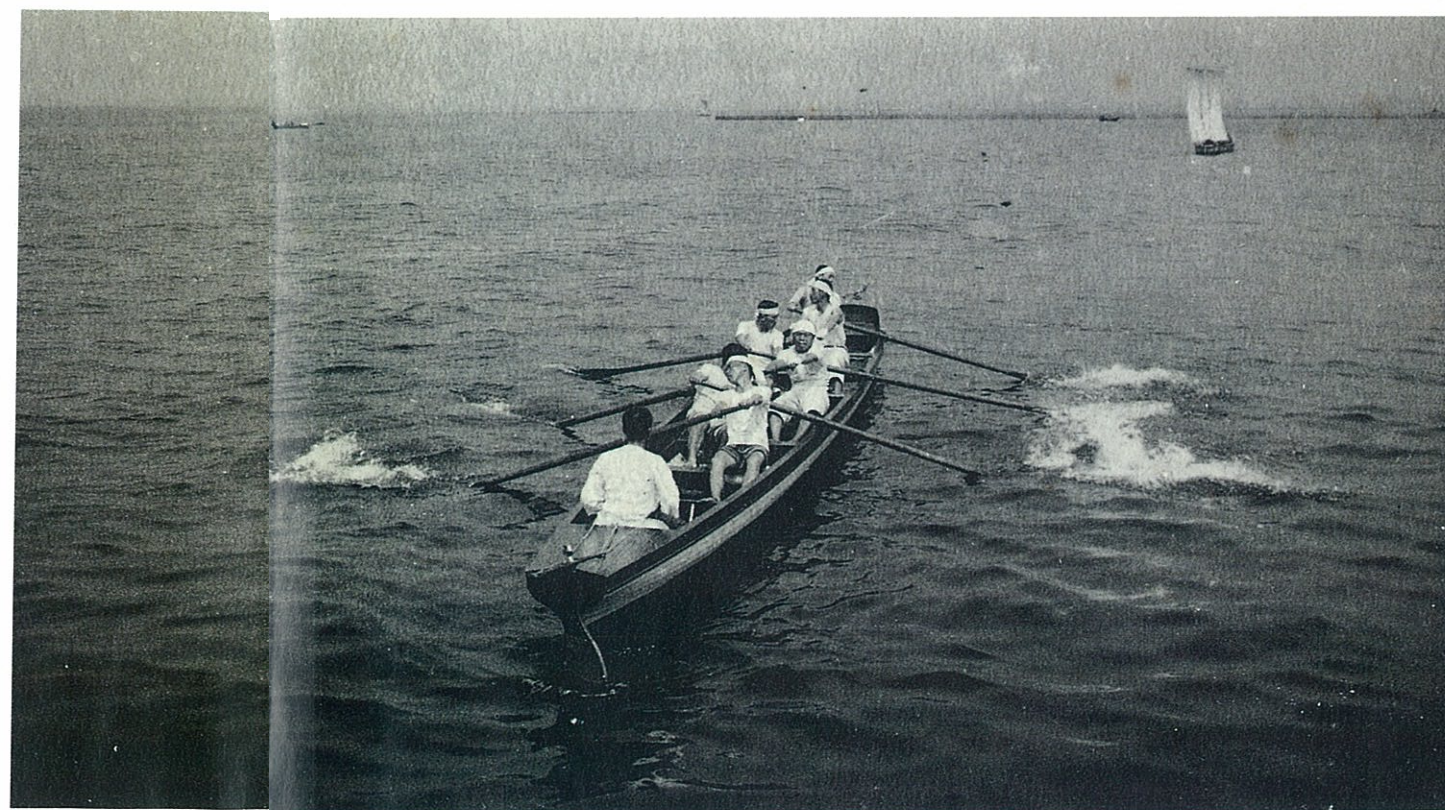
明治30年7月、琵琶湖連合大競漕大会で関東の覇者慶応を3艇身余の差で破り、同志社の名前を全国に轟かせた。



明治38年 水上運動会優勝の選手たち



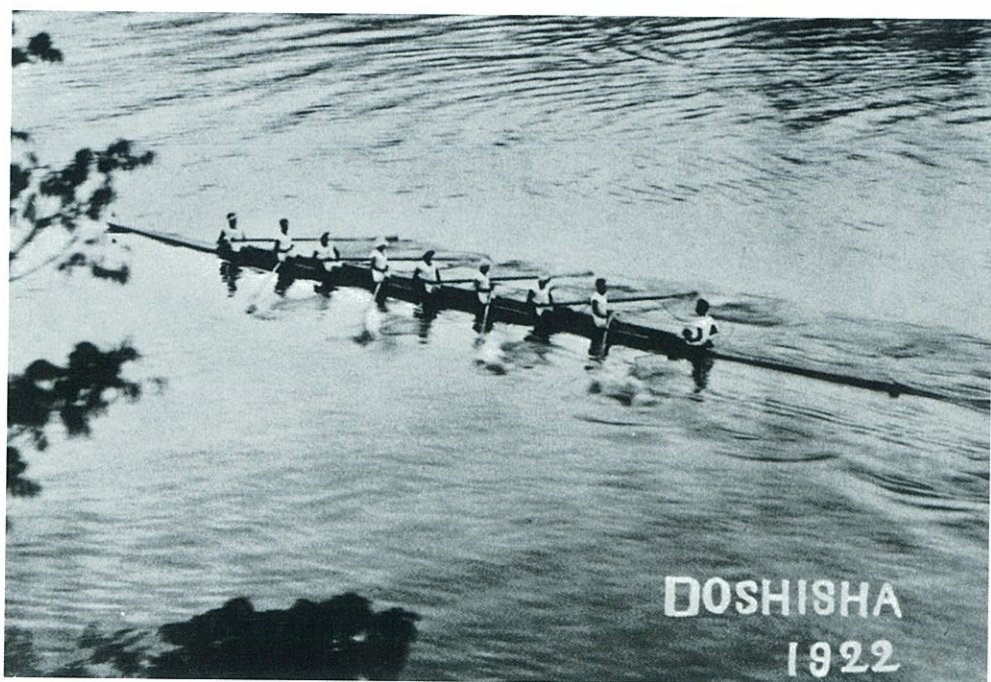
第1次黄金時代を迎えて連戦連勝のボート部、ブラスバンドを先頭に行進。



明治45年専門学校令による同志社大学発足。大学第1期生たちの琵琶湖での練習風景。



大正8年、不振をかこっていたボート部員は淡路周航を決行。難所で知られる鳴門の渦潮を漕ぎ抜けるという壮舉を演じて天下の耳目を驚かせた。



大正11年 同志社ついに滑席艇を導入。これは初代エイトの勇姿である。

は じ め に

同志社ローイング100年記念事業実行委員長

國富 卓也

明治24年、石山において第1回同志社水上大運動会が開催されてから、今年で100年になります。さらに、それ以前からボートが広く同志社学内で親しまれていたことを考えますと、ボート競技は同志社の歴史とともにあったとすることができるかもしれません。

ボートは一見単調な反復運動に見えるかもしれませんが、これほど難しいスポーツは他に例がないと思っております。精神と肉体を極限まで錬磨し、クルーの中に個を埋没させるという、言葉で言い表せぬ奥深さが、知・徳・体の三位一体を教育理念とする同志社において早くから導入され、伝統スポーツとして永く愛されてきた所以でもありましょう。

明治、大正、昭和、平成と四時代の永きにわたり、幾多の先輩達が、各々の時代に、各々の立場で懸命に模索し、努力し、泣き、笑ったことでしょう。そして彼らを陰から、側面から支えた人々の存在も忘れてはなりません。

同志社ローイング100年にあたり、この輝かしい歴史を築きあげた人々の足跡を記録し、200年への飛躍の資とすることを、この時に居合わせた者の責務と考え、記念事業の一環として本誌を刊行する次第です。

ご協力くださいました皆様に心よりお礼申し上げます。

目 次

口 絵

はじめに	1
発刊によせて・ご祝辞	5

通 史	21
-----------	----

第1章 草創——明治の多感

1. 第1回春期大運動会まで	23
2. 三高との角逐	28
3. 同志社の受難期とボート	38
4. 初期黄金期	44
5. 武徳会競漕会時代	49

第2章 雌伏——低迷に耐える

1. 学園安定化とボート	57
2. 大学設立とボート部	63
3. 大学対校クルー編成	70
4. 淡路周航の決行	75

第3章 中興——今日の基礎を築く

1. 滑席艇時代へ	80
2. 第1回対明大定期戦とスカル隊瀬戸内海縦断	85
3. 関西漕艇協会の設立	92
4. 第2回対明大定期戦	95
5. 第1回関選と明治神宮大会	103

6. 昭和初期の低迷と新時代への息吹	107
7. 水難事故前後	113
8. 同志社高商の成長と進撃	116
9. 戦雲下の光芒、そして学徒出陣	122

第4章 躍進——頂点への道

1. 高商ボート部の復活	134
2. 大学の戦列復帰と高商との合併	137
3. 「ワイルド・ローヴァー」号建造へ	141
4. ケンブリッジ大の来漕	148
5. 対京大教養戦始まる	149
6. ボート新時代へ向けて	152
7. 対京大教養戦に連勝	157
8. 合宿所の完成	160
9. 立て直しに総力を結集	161
10. 躍進の開始	164
11. 頂点へ	167

第5章 充実——限りなき挑戦

1. メキシコ五輪へ	176
2. 汚名返上に燃える	178
3. 高レベルに安定	182
4. 「断絶」との戦い	190
5. 新生なる	192

OB寄稿「私にとっての同志社ローイング」	195
----------------------------	-----

座談会「同志社ローイング 過去・現在・未来」	233
------------------------------	-----

戦績	253
年表	277
瀬田川コースと往時の合宿所	288
明治期の同志社学制の変遷	290
DOSHISHA OARSMEN INDEX	292
あとがき	302

発刊によせて

ご 祝 辞

「同志社ローイング100年」を迎えて、 そして200年へ今

同志社艇友会会長 高橋 宗

校祖新島襄先生没後101年目にあたります本年、ボート部、艇友会の諸兄弟ならびに関係各位の皆様とともに「同志社ローイング100年」を迎えることができますことは、まことに喜びの極みであります。今日までに皆様から賜りましたご厚情、ご支援に対し、ここに深く感謝申し上げます。

この大きな歴史の節目に、艇友会の、特に戦後の中堅クラスの人達により、後世に残すべき記念事業が各種進められてまいりましたが、その中でこの記念誌の発行は、これだけはなんとしてもやってほしいと私からお願いしたものです。伝統を築いてこられた幾多の先輩たちの足跡を、どこかで記録にとどめておかなければ、いつか永久にその機会が失われるのではないかと常々案じていたからです。

私が同志社大学予科に入学したのは昭和8年4月でした。桜花さかに前庭のクローバの緑に散り敷く中、今出川キャンパスのチャペルで各運動部の部紹介と新入生への入部勧誘が行われましたが、ボート部の、当時名コックスとうたわれた酒井先輩の「わが端艇部は今や50年になんなんとする歴史を有する同志社最古の運動部である。幾多先人の汗と涙で築き上げられたこの歴史と伝統と栄光を引き継ぎ、さらに輝きを増すべく、新戦力としての諸君の入部を期待する」との名演説が、私の入部の動機となりました。そのボート部が、今や100年目を迎えるに至りました。

昭和35年、同志社大学体育会より「同志社スポーツの歩み」が発刊され、その中の「ボート部」の項は佐野君（昭和35年卒）、路次君（昭和38年卒）、西村君（昭和38年卒）等の調査、執筆による、よくまとまったものでした。しかし、数頁という紙数制限のため概説的なものにとどまらざるを得ず、以後さらに意を尽くした全史の刊行を念願としてまいりました。今日皆様の多大のご支援のもとに本誌を刊行し、輝く伝統を築いた同志社オアズメンそれぞれの青春を改めて偲ぶとともに、さらにこれから200年に向かって新たな歴史を築いていく後輩たちへの贈り物とすることができますことは、喜びこれに過ぎるものはなく、また感謝の念でいっぱいでございます。

末筆ながら関係各位全ての皆様のご健勝を切に祈ってやみません。

100周年を祝って

同志社総長 松山 義則



同志社ローイング100年の祝賀のときをお迎えになりました。心からおよろこびを申し上げます。

100年の長い歳月の間に、ボートを愛する人びとがここに集まり、さわやかな湖風にふかれ、あるいは疾風怒涛のうずまくなかに、心をあわせ力のかぎりをつくして戦う若さにあふれる方がたがありました。このような先輩たちによって、一世紀にわたって培われてきた歴史と伝統が、時代から時代にひきつがれ、今日の栄光ある同志社大学体育会ボート部を見ることとなりました。ボートとともに青春の日々をすごされた人たちは、心を一つとするチームワークに生き、また戦いはフェアプレーの気概にみち、そして強烈なファイティングスピリットにあふれていました。

同志社は新島襄先生の情熱によって設立された大学であり、キリスト教にもとづく精神の高さ、広さ、そして強さが一人一人の学生の心身に生きて働くことを願いました。同志社スポーツはこの先生の教育理想を体し、聡明にして勇気にあふれ、品位たかい人物の養成にはげまれました。ボート部において学生生活をすごされた方がたがこの100年の間、海に生きる厳粛な精神をもってその技術と体力そして人格をみがきあげられました。その厳粛な感動は神に通ずるものであります。こうしてボート部で鍛えられた数多くの先輩がたが、真正の同志社精神を堅持して、全世界、全国各地各界において、なくてはならない人物として、地の塩、世の光としてご活躍下さいますことに心から敬意と感謝の意を表します。

この度の同志社ローイング100年、記念誌のご刊行をはじめ、意義ふかい記念事業のために労せられました、ボート部OB会、高橋宗会長、國富卓也実行委員長、また佐野閔一記念誌編集委員長はじめ先輩の方がたに感謝し、ボート部部長岡本博公先生はじめ、監督、コーチの方がたのたゆまざる尽力と現役の学生諸君のご健闘を祈ってお祝いの言葉といたします。

祝 辞

同志社大学長 笹田 友三郎



同志社ローイングが100年を迎えることになりました。心よりお祝い申し上げます。

ボートはわが国では最も早く普及した近代的スポーツのひとつで、本学でもいちばん古い歴史を誇ってきました。しかし、多くの競技人口を抱えていたり大観衆の集まるスポーツとは異なり、競技人口が比較的安定し、観衆の目や雑音に惑わされることの少ない、文字どおり紳士的なスポーツといえるのではないのでしょうか。今日的な意味でのスポーツの大衆化は、競技者に良い影響ばかりを与えるとはいえません。ですから、観衆が少ないということは大学スポーツの本来の趣旨からは好ましい面も多いでしょう。

ボートは舵手を除くクルーがゴールに背を向けて座り、舵手の指示にしたがってひたすら漕ぐという、きわめて純粋な団体競技であります。水の流れなどのコースの特徴、レース中の風波や気象状況などによって、クルーがそれぞれその時々にはたす役割が微妙に違ってきます。それらを調和させつつ総合化しなければ好結果は望めません。ひとり抜きんでて力をだせば、艇はバランスを崩して蛇行しますし、波にもうまく乗らないでしょう。なによりもクルー相互の信頼感が大切であります。精神第一、力量・技量第二といわれるゆえんも、こんなところにあるのではないのでしょうか。

新島は知徳をかねそなえた人物の養成を、その教育の根幹の据えました。たんに知識を学ばさせるだけではなく、その知識を動かすところの品性を高め、精神を正大ならしめることを目的としたのです。ゲームを通じて培ったフェアプレーの精神やスポーツマンシップを社会倫理にまで高めることが求められます。大学におけるスポーツ、とりわけ本学のスポーツはそうでなければなりません。

同志社の校風、琵琶湖の自然、近代技術がもたらした疎水、外人教師をはじめとするよき指導者と諸先輩に育まれて100年の歴史を刻んでまいりました。近年の環境変化はローイング200年への道のりには厳しいものではありませんが、困難に挫けることなくさらなる発展がありますように、祈念しております。

同志社ローイング 100年を祝して

同志社大学体育会長 今村 宏



このたび、同志社大学ボート部におかれましては創部100周年を迎えられ、まことに御目出とうございます。

わがボート部は、明治24年に同志社の端艇部として創設された、同志社大学体育会45部の中でもっとも古い歴史と伝統を誇る部であります。そして明治、大正、昭和、および平成の四時代にわたってつねに関西のトップ・クラスとして関西のボート界をリードしてこられました。特に昭和40年代には、全日本選手権大会で2連覇を含む3度の優勝と、メキシコ・オリンピック大会出場という栄冠を勝ちとられ、輝かしい黄金時代を築かれました。このボート部の活躍は同志社の名を全国にとどろかせ、どれだけ全国の同志社校友に勇気と力を与え、母校愛の育成に貢献してきたかわかりません。そしてこのボート部の活躍に刺激されて、その後同志社大学体育会の他の部も急速に力をつけてきました。その意味でわがボート部の活躍が今日の同志社スポーツの発展の引き金になったといっても過言ではないと思います。

このような輝かしい歴史と伝統を誇るわがボート部も、これまで歩んでこられた道を振り返ってみると、それはけっして平易平坦な道ばかりではなかったこととお察しいたします。長い歴史の中にはおそらくボート部の存続にかかわる大きな出来事もあったことと思います。しかし、この逆境を見事に克服して今日、このようにまで発展してこられたのは、同志社大学ボート部関係者一人一人のボートにかける情熱と全員の固い団結の賜物であり、私、皆様方に対しまして心より敬意を表するものでございます。

わが国におけるスポーツに対する国民の関心はますます高まりつつあります。その中にあって皆様方のボートにかける情熱とその結果は、「天下に同志社あり」ということを示すことになり、ひいては同志社の発展につながるものと私は信じております。皆様方の今後ますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

祝 辞

同志社スポーツユニオン会長 北村 光雄



我が同志社スポーツ45部の中で、今年創部100周年を迎える部は、ボート部と野球部であります。同志社スポーツの誇るべき100年の歩みの第一歩を力強く踏み出されて以来、今日まで栄枯盛衰はあれど、厳然として今日まで学生スポーツ界の西のリーダー、また学生ボート界の名門として君臨されて居ります事に、我々は心からなる感謝と敬意を捧げ、2万人に及ぶ同志社スポーツの仲間と共に、創部100周年を心からお祝い致したいと思います。

1960年発行の同志社スポーツの歩みによれば、1891年に同志社がボート購入して以来、水上校内大会が（端艇競漕と競泳）盛んに行われ、新島未亡人も賞状賞品の授与をされ、同志社スポーツの奨励に力を入れられたとあり、また創部当時、全校挙げてボート部の活躍に期待を寄せ、激励した文章が次の如く記されている。「八月四日は武徳会短艇大会の当日なり。今日より僅かに旬日のみ。我選手諸士は日頃炎威に加るに霜雨を以てするも已に数週間身を湖上に暴露し、巨腕を振って練習に従事す。基勞苦思ふべし。然れども記せよ選手諸士、数百の健児、二百の淑女は日夜卿等の健康と成功とを祈り、寤寝の間なほ卿等を忘れず。卿等ただ必勝を期して能く戦えよ。更に卿等に求む由来同志社健児の特質は沈勇に在り、大望に在り、士氣に在り、基督教徳義に在り。これを忘れずして勝利以上に眼光を放ち能く勇戦せよ。実に選手の責任たるや決して軽々しくない。大いに自重して天下の荒胆を抜いて貰ひたい。嗚呼、かくも厳しく選手を鞭うつものは誰であろう。誰でもない、是れ我端艇部の栄光ある歴史であるのだ」（同志社時報より）。以来、我がボート部は、明治30年7月18日の琵琶湖聯合大競漕大会に出場、関東の雄、慶応を3挺身余の差で破り、全国に同志社強しの印象を鮮明にし、続いて明治31年、32年と、3年連続勝利をおさめ、創部当初にして部の歴史に輝かしい1頁を記したが、以降学制改革等で、中学、大学別々のクルーになり、対外試合では、大正初期には目を留める程の成績は残っては居ないが、校内大会は盛んに行われ、これが同志社ボート部の潜在的力を培ったようで、大正8年7月には、淡路島一周、鳴門海峡突破の快挙を成し遂げ、世間をアッと驚かせたのを契機に、大正10年代は強い同志社の再現なり、大正15年の明治神宮大会優勝をはじめ多くの大会、定期戦で目覚ましい戦績を残し、昭和に入っても、9年の同志社高商フォア関西選手権優勝に続いて常に大学、高商が競って関西の覇権を握り、昭和17年高商関西選手権優勝を最後に戦前は終わった。戦後は昭和21年の復活第1回琵琶湖レガッタで経専優勝を皮切りに経

専、大学が共に関西の覇権を交互に手にし、23年大学、経専が新しい学制により合併されるや、強い同志社はより逞しさを増し、昭和30年代は、関西ボート界の古豪として君臨した。37年瀬田の合宿所が完成するや、練習量の増加は好成績に繋がり、全日本選手権には、41年3位、42年準優勝、43年念願の初優勝、そしてメキシコオリンピックの出場、44年にはメルボルン大学を招いての全日本選手権も勝ち2連覇、48年3度目の優勝と、黄金時代を築き、同志社ボート部の100年の歴史に重みを加えたのである。ボート部の歴史に在って我々が誇り得る事は、創部から100年、今日まで艇は、合宿所はOB、学生が中心に苦勞に苦勞を重ね、大学ご当局のご理解とご協力によって建造され竣工したもので、決して甘やかされ、与えられたものではない事、そして創部から今日までボート部が学園と一般学生と共に在り、校内大会をはじめ、各種大会で、同志社人の誇りと心を共にしたところに在ると思います。近年ボート部は栄光の歴史に照して芳しい成績は見られないが、創部100年を記念して、OB現役諸氏が栄光の歴史を大切に、新しいクラブ作りに励む姿を見る時、近い日に同志社スポーツの合言葉である「世界に通用する」ボート部として逞しく再出発する事間違いなしと信ずるものです。終わりに臨み、同志社スポーツの先駆者として栄光の同志社スポーツを導いて下さった多くの先輩の皆さんに重ねて心からの感謝と敬意を捧げ創部100周年をお祝い申し上げます。

100年記念誌刊行に寄せて

日本漕艇協会会長 久米 豊



同志社大学ボート部がローイングを始めて100年を迎えるにあたり、記念事業の一つとして立派な記念誌を編纂、刊行されましたことを心よりお慶び申し上げます。

同志社大学ボート部は我国で歴史の深い漕艇部の一つであり、また関西漕艇界の中心的役割を果たし、その発展に大いに尽力されました。

その歴史の中には、大正8年の淡路島一周、鳴門海峡突破、そして大正14年スカルがまだ学習院と同志社しか行っていなかった頃に、瀬戸内海縦断を行いました。これは大阪門司間460マイル、所要日数13日間、漕艇時間72時間半という日本遠漕史に特筆すべき我国最大のスカル遠漕との記録が残っています。

また競技実績では、昭和43年に全日本選手権大会に優勝し秩父宮盃が初めて箱根の山を越え、同年メキシコ五輪の代表となり、そして翌44年には全日本選手権に見事に連覇するなど、まさに関西漕艇界を代表し日本漕艇史上に輝く歴史を残された漕艇部であります。大学の漕艇部として輝かしい100年を迎えられたのも、学生時代にはボート部員として活躍し、卒業してからは学生の漕艇活動を物心両面から支援指導を続けてこられたOB諸兄のご尽力の賜と存じます。

また同志社大学ボート部ご出身の方々が社会の多くの分野で活躍され、指導的な立場で手腕を振るわれていることは、OB諸兄が築き上げた規律ある団体生活と言語に絶する厳しい練習による精進が、終生の人格形成に大きな影響を与えていることを物語り、ここに伝統の重みを感じると共に深甚の敬意を表する次第であります。

現在日本漕艇協会は、我国の漕艇を世界の水準に引き上げるため、協会の選手強化と選抜方針について実力のある大学及びOBの皆様から深いご理解とご協力をいただき、国を代表するクルーの競技力向上に努めております。ここに、同志社大学ボート部のご支援ご協力をお願いすると共に、101年目の新たな頁を迎えた同志社のボートが益々発展されることを期待いたします。

琵琶湖ボートの魁同志社

琵琶湖漕艇協会会長 獅子堂 正隆



同志社ローイング100年おめでとうございます。今日までのご功績に対し心からお祝い申し上げます。

私はよく、琵琶湖にボートが浮かんだのは何時ごろのことであろうかと思うことがあります。先年、滋賀県体育協会史の編纂に当たってその揺籃期を調べる機会がありました。幸い同志社ボートOBの高橋宗さんより「同志社スポーツの歩み」という本を見せて頂き、琵琶湖のボートの魁は同志社大学であるということが判りました。その中に次のようなことが記録に残っております。

「近代的スポーツとして最初に同志社に輸入されたのは、端艇競漕である。一説によると、明治16年（1883）ごろすでにボートがあったといわれている。はっきりと活動を始めたのは明治23年（1890）のころからであり、この年疎水工事の竣工とともに大津美保ヶ崎でボートを漕ぐ学生が多くなり、土曜の早朝から、また前夜より徒歩で大津まで行き盛んにボートを漕いだ」と記されています。その結果明治24年（1891）第一回水上運動会が開かれ、表彰式が後日、学内で行われ新島未亡人より賞状、賞品の授与があったということです。正に琵琶湖のボートの夜明けは同志社大学より始まったということができます。また明治33年（1900）ごろ同志社の学生であった山川均（1880～1958）は「山川均自伝」（昭和37年岩波書店発行）に次のように書いております。「私は今でもそうなのだが、名所や旧跡に興味はなかったところへ、同郷の先輩にボートにつれてゆかれたのが病みつきで、すっかりボート気違いになってしまった。同志社2年の間土曜日には、ほとんど欠かさず琵琶湖通いをした。大津まで3里の峠道を歩いて、それから一日漕ぎ回り、夕方また3里の道を歩いて帰るのだが、並大抵ではなかった。雨の日に傘をさしたり赤ゲットをかぶって、足駄で坂道を往復したこともたびたびあった」。そして石山三日月樓の棧橋まで漕ぎ下ったこと、また琵琶湖周航の思い出などが詳しく書かれています。

以来一世紀にわたり、如何に多くの先輩が青春の涙を流したことでしょうか。

上記のように、栄光ある歴史と伝統を誇る同志社ローイング100年の将来のご発展を祈ると共に、今後ますます琵琶湖のボートが世界に雄飛するようご指導の程をお願いする次第であります。

記念誌発刊によせて

京都大学端艇部監督 高野 晃兆



同志社ローイングが100年を迎えられることになり、心からお祝い申し上げます。

100年の歴史のなかで、われわれ京大が達成していない全日本優勝三回、オリンピック出場1回されましたことには特に敬意を表しています。

竹生島の弁財天の奉納額の一つに「明治二十六年四月三日、第三高等中学校千鳥会有志二十一名」という落書があり、三高の水上部の前身千鳥会の21名が3隻のボートに分乗して、琵琶湖周遊の途中、ここに上陸したことを書きとめています。この落書の2、3年前、即ち同志社ローイングの誕生と同じ頃に京大教養部の前身である三高のボート部が創設されています。当時京大生は超過重労働のスポーツであるボートには興味を持たなかったとか。明治39年に三高出身者が中心となって京大のボート部を興しています。

さて、私事になって恐縮ですが、私は昭和30年に大学に入学し、学生時代は漕手として、卒業後は長年コーチとして、最近監督としてボートに関わってきました。私のボートの歴史は、同志社に負けると、こんちくしょう、来年は返してやろうと思いつけて、翌年借りを返したとき、痛飲して喜ぶという、単純なくりかえしでもあったように思います。昭和30年から8年間、同大・京大ジュニア定期戦が鉄橋一平津の2マイルで行われました。例えば昭和32年第3回目のレースを、私は上級生として自転車に乗って観戦したのですが、螢谷を2艇がぴったり並んで走っているところが妙に記憶に残っています。

昭和37年に対校の定期戦の第1回がスタートしたのですが、当時われわれ若いOBの意向で始めたもので、双方の手配の人たちを含めて機が熟したものでなかったようで、続きませんでした。

全国制覇するという目標は瀬田川で練習している選手の立場からすると何となくばくぜんとしているように思えるのです。京大の立場からすれば、具体的に同志社を横目でみながら、こんなことでは同志社に勝てないぞ、といって毎日練習にはげむ方がやりやすいと思うのです。その結果、同大と京大が競い合う。今でも関西選手権では競い合う形になっていますが、もっと高いレベルではげしく競い合う。同大と京大が競い合って、全日本大学選手権の決勝レースでその決着をつける、つまり優勝争いをする。こういう形になると同大や京大が時々強くなるというのではなしに、早明のラグビーのようにいつも高いレベルが保持されるのではないかと、またそうあってほしいと願うのです。

私と同志社

立命館大学漕艇部監督 岩崎 和弘



私と同志社ボートとのかかわりは昭和36年である。因みに私が立命の理工学部に入學したのは昭和36年である。大学に入學した頃の頃は他の大学のボート部を見るゆとりはなく、自分自身を鍛えることしか頭になかった。だが、やがて同志社のボートというものを意識しなければならないときが来た。確か大学1、2回生のとき、関西漕艇連盟主催で関西でも東京オリンピックに向けて選手を強化し、関西選抜クルーを組んではどうかという話が持ち上がり、関西各大学から2～3人の選抜選手を集めて京都大学農学部のグラウンドで2週間程の強化合宿をしたことがある。実際に合宿したのは僅かな期間であったにもかかわらず、これが私とボートの関係を切っても切れないものとした。ここでお世話になり、自分のボートに対する認識を変えさせられたのが同志社の菊岡さん(昭和36年卒)、中原さん(昭和39年卒)、加野さん(昭和39年卒)であった。この3人が3人とも素晴らしい人であった。今でも彼等のやさしい心遣いとそのスポーツ能力の素晴らしさには忘れられないものがある。そのときの印象深い話は他日に委ねるが、彼等を目標としたそのときから同志社に追いつき、追いこせと思う心が私の中に芽ばえた。選抜クルーの話は結局立ち消えとなったが、このとき教えられた事はこれから先も、私の人生の半分を支配していくことだろう。

私事であるが、当時私は姓が井村であり、大学を卒業するまで井村の姓を名乗り、その後母の実家の姓を継いで岩崎になった。その後再び私が同志社ボートと接するのは、今から5年前に立命の監督になってから、同志社は前監督新井さんのときからである。新井さんにもそうであったが、現監督の横山さん、コーチの中村さんにも、同立という伝統的友好関係から数多くのご指導とご厚情をいただいている。その他同志社OBの方々に、いちいち話せば枚挙に暇がないので省略させていただくが、言葉には言い尽くせぬ程のご指導を仰いでいる。

とりとめのない話になりましたが、同志社は今後も150年、200年に向かって堂々と進まれる事だろうと思います。我々立命の目標は今も昔も同志社で、同志社に追いつき、追いこせを合言葉に頑張っております。

なお一層のご飛躍、ご発展をお祈り申し上げまして、お祝いの言葉に代えさせて頂きます。ローイング100年、おめでとうございます。

祝 辞

龍谷大学端艇部監督 林 茂雄



同志社ボート部100周年、誠にお目出たく、心よりお慶び申し上げます。

伝統ある貴ボート部へお祝い申し上げますこと大変嬉しく光栄に存じ上げます。

私は、昭和42年から4年間、良きライバルの貴ボート部と競い合ったことが昨日のこのように思い出され、長い人生の励みになっております。

当時の龍谷大学ボート部は、予選で負け、敗者復活戦でも敗れ、連戦連敗でありました。対岸の水色のブレードに濃紺の模様が入ったオールが蝶々の様に水面から出てくる情景が本当に美しかったのが脳裏に焼きついております。また、私たちより1年先輩の貴ボート部がオリンピックへ出場されて大変な憧れでもありました。

やがて八木繁信氏に私達をコーチして戴き、ようやく連戦連敗から脱し、優勝の喜びも味わうことが出来ました。そして、同志社大学と互角に戦えるようになり、ようやく憧れの人と相思相愛になったような気分でもありました。

当時、ボートと云うのは単純で、ただひたすら辛いスポーツでありましたが、私にとってほんの4年間だけのスポーツであるにもかかわらず、当年42歳になる私の心身に溶け込み、人生の糧として、20年間いつも私の中でボートを漕いでいます。

いつまでも私の中でボートを漕ぐことが出来得ること、青春を全てボートに投じ、青春を忘れずにおられることを有難く思っており、又、伝統ある貴ボート部と競い合えたことを有難く感謝をしております。

今後とも益々貴ボート部に多くの人々が参加して頂き、同志社ボート部が永遠に「瀬田川の華」でありますことを、心よりお祈り申し上げます。

同志社とボートと私

元同志社大学ボート部コーチ 南部 喜一



学校当局、OB諸士、部員の結束により、ここに同志社ローイングが100周年を迎えられた事はまことにめでたい事で心より敬意を表する次第です。

私と同志社の関係は昭和16年の春の入試時にさかのぼる。商業学校出身のため、その課目で入試のできる同志社高商を受験したが、幸い合格して早速合宿にも参加したものでしたが、同時に受験した慶応義塾高等部の合格通知に接し、いろいろ迷ったあげく、家より離れて暮らすのもよいなあーと、同志社に不義理をして東京へ行った経緯があった。

戦後の虚脱からぬけ、ぼつぼつスポーツが復興し始めた昭和24、5年頃と思うが、同志社大学のボートを見てくれないかと話があり、割合すんなりとコーチを引受けたのも、前述の様な事が頭のどこかにあったせいかもしれない。前任の太田さんのあとを引受けて最初に考えたのは次の3点であり、これは私のボートに対する考えの基本でもある。

第1は、ボート部としての確立、選手の強化・技量の向上、コーチを支援するアシスタントコーチの養成(勝利よりよいCREWを)、第2は学校当局の熱意あるバック・アップを目的とした、艇庫・合宿所・艇の整備についての連絡の為の体育会への積極的働きかけ。第3は艇友会の物心両面の支援等。第2、第3については部外者の私にとって是非共必要であった。これら3つが揃って初めてボート部の成績があがると確信していました。在任中、4、5年の間に、第2の事項については初代学生体育会々長に旧い仲間の平井、少しおいて小野木が再び会長になり部の活躍に貢献した。第3の艇友会については会長大宮さんや地元の高橋さんの熱心な姿が極めて印象的であった。本来の仕事である強化・育成については、戦後初めて東京の水に慣れる事と現在の力を測るために全日本に出漕して準決勝まで進出、地方組としては好成績を残し、かなりの手応えを感じたものであった。当時の山田・森島・下西・松井(四方)・堀井の名が思い出され、中でも堀井は卒業後もア・コーチとして協力してくれたものである。引続き体育会の推薦が採用され、加藤・松本・國富等が入り、更に北尾・竹村・村井達が入り、最後の年には阪田・内田等が新人として加わった。さて昭和27年には、永らく待ち望んでいた新艇がデルタ造船で誕生してワイルド・ローヴァーと命名され、瀬田川にその姿を見せたのは夏のインカレの半月程前であった様に記憶している。この艇は旧いものより五キログラムも軽く平均体重17貫以内に適応した設計で非常に軽快であったが、選手をのせたところ、漕ぎ入れでは極めて艇先がスーッと

浮く感じで滑りがよいが、フィニッシュではトップが沈み、艇速が急に落ちることがわかったので、今までやって来た、確実に漕ぎ切る漕法を替えなければならなくなった。つまりキャッチした水を逃さず真中だけ漕ぎ抜く漕法に切り替えたのと、思い切って大きいものから順次整調から並べるという事が幸いして宿敵京大を破り、優勝する事が出来た。所期の目的を達したので艇友会OBのコーチの手に委ねることにした。これを契機として合宿所・艇庫の建設へと促進することとなった。

在任中OB諸士の協力と部員の努力があった賜物で改めて感謝したい。

最後に次の言葉を贈りたい。

「勝利は歴史を生み、伝統は勝利をもたらす」（慶應義塾漕艇部百周年記念の挨拶より引用）。

折角の精進を心から祈ります。

「同志社ローイング100年」 刊行によせて

同志社大学体育会ボート部長 岡本 博公



同志社ローイングは、本年、100周年を迎えることができました。誠によろこばしいことです。同志社大学体育会ボート部は、この機会に、同志社ローイングの100年を支えてくださった幾多の諸先輩と関係各位に対し、心から感謝申し上げる次第です。また、この100周年を期して「同志社ローイング100年」が刊行されたことは、貴重なことだと思います。本誌刊行にご尽力いただきました多くの皆様に御礼申し上げます。

同志社ローイングの歴史は、明治24年、石山三日月楼下で開催された第1回水上運動会に始まります。近代的スポーツで同志社に最初に導入されたのが端艇競漕であり、以後、端艇競漕が草創期の同志社体育の発展にとって中心的な役割を果たし続けてきました。そして、この点こそ、同志社オアズメンが大いに誇りとするところです。

往時を伝える記事には、水上運動会に参加するために、「或るは白川に由て行くあり、或るは大文字嶺を越ゆるあり、さては叡山より寄するもの、また大津街道に出るもの、三々五々、各隊思ひ思ひにぞ進みける」とあります。そして、紅・白・紫の3軍に分かれて覇を競ったとは、まるで絵巻物を見るようではありませんか。

その後100年、幾多の先輩の歩んだ道は多様だったでしょう。栄光に輝いた者、敗れた者、琵琶湖に、瀬田川に、多くの先輩が刻んだ足跡はさまざまなものでしょう。「思い」をとげた者、「思い」を残した者、しかし確かなことは、そこにはまぎれもない青春があった、青春のあふれるばかりの「思い」があった、このことでしょう。そして、この「思い」が引き継がれ、受け継がれて今日を築いている、この100年をつくりあげてきた、このことはまちがいのないことでしょう。

現役の部員諸君もやはりさまざまな「思い」を込めてオールを握っているはずです。時代とともに青春は変わったのかもしれませんが。あるいは、時代を越えてもボートに燃やす情熱は共通なのかもしれません。しかし、間違いなく、今もボートにかける青春があります。100年の伝統をばねに、さらに大いなる前進をめざす今、本誌刊行によって、多くの先輩の青春に接することができる幸運をありがたいことだと思います。新しい100年の第一歩を私たちが踏み出せる喜びをかみしめて、一層の飛躍を期すものです。

同志社ローインダ100年

通 史

第1章 草創——明治の多感

1. 第一回春期大運動会まで

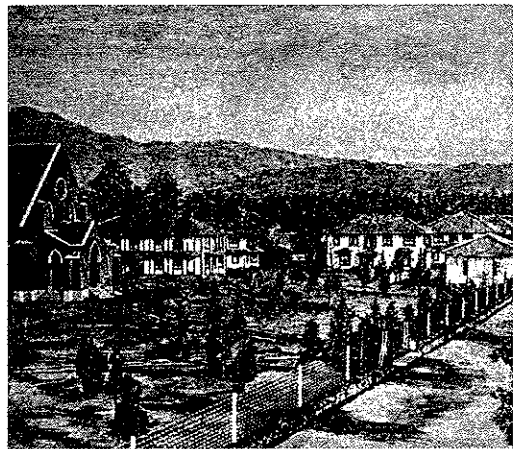
「先づ思い出すのは当時同志社の学生の風采である。洋服など着こんで居る者はなく、袴羽織の姿も見えず、誰も彼も筒袖、兵子帯で幅のひろいもも引き、たしか兵営の払いさげものでエレファント・ソーと通称したものを穿いて居た。それに冬期に向うと赤毛布を首にまきつけて、まるで車夫か人足かと見まがう姿で市内を横行闊歩したのである。赤毛布は便利なもので雨や雪にはマントがわりとなり、遠足の時には敷きもの、寝るときには夜具、平生は首巻きと、まことに重宝なものであった。京童は我等同志社学生を通称して赤毛布さんと呼んでいた」

同志社第11代総長牧野虎次が昭和35年刊「同志社スポーツの歩み」に寄せた追想文の冒頭部である。

明治中期、近代化の緒についた日本は未だ憲法を持たず、政府はいわゆる鹿鳴館外交を展開して先進列強との間に横たわる不平等条約の改正に腐心していた。開明の気のようにやく人心をとらえ、新生の希望と緊張感の世に漲る頃、質実の風容の内に青雲の志を養いつつあった我らが先輩達の気象が偲ばれる。

牧野の記述はその後、当時の同志社学生が行った比叡登山、イノシシ狩などに及ぶが、これらは同志社の健康重視の教育方針に基づくものと言うことができる。

国禁を犯して渡米後、アーモスト・カレッジで体育教育を受ける経験を持った校祖新島襄は、同志社創立当初より、生



明治20年頃の同志社

徒の健康増進、体力向上に意を用いた。その間の事情を、商学部教授瀬口彰が昭和50年、京都新聞の同志社創立百周年記念特集に寄せた小文より引用する。

「アメリカに上陸してから二年後の一八六七年に新島はアーモスト・カレッジに入學した。彼の心はアメリカ文明の基盤である新しい知識とキリスト教の信仰を通じて徳性を修めることにあった。しかし、アーモストにおいて新島は知と徳のほか、彼としては恐らく予期しなかった身体についての教育を受け、その人間観、教育観に新しい局面が生まれたに違いない。

一八六〇年頃、アーモスト・カレッジにはアメリカにおける体育・スポーツの先覚者であるエドワード・ヒッチコック博士を中心とする優れた研究スタッフがいて、当時では世界で最も進んだ設備を持ったバーレット体育館があり、早くも保健体育を教科にとりいれ、立派な施設を十分に使って身体教育を行うとともに、行き届いた健康管理をしていた。新島はこの体育館について次のようにいっている。

『珍奇をあつめ置く所がジムネージャンで、ここは身をかため、学生達が腹こなしをするところである。(中略)ただ学問に精を出し、日に一度ずつそのジムネージャンに寄り、球をころがし、色々の遊びをします』。珍奇とは木アレーなどの体操用具、球ころがしはボウリング、クロッカーなどで、これらは同志社設立後間もなく、ラーネッドなどアメリカ人宣教師によって生徒に紹介されている。

新島はアーモスト・プリンシプルという方法で定められた計画に従って運動をしたが、この方法は学生リーダーを中心とするクラス単位のスポーツ活動であり、クラス対抗競技が盛んに行われた。このようなスポーツの自治組織とそれによって結ばれる深い人間のつながりは青年新島に深い感銘を与えたと思われる。

新島は在米中も帰国後も禁酒禁煙の節制をするとともに、並々ならぬ注意を健康の維持に払っている。『このような事業(キリスト教主義大学の設立)に従事しようと欲すれば強健なる体力を必要とする。御意にかなうならば私に健康を与えてくださいと祈っております』とあり、生徒にも『あなたも少年として浩然の気を心に留め、研究の余暇には日々二、三里を散歩し、時々山野を遊行して浩然の気を養いなさい』と教え、自らは生徒と共に散歩、山野の遊行、加茂の河原でのランニングを欠かさなかった。そのほかにも毎朝寢床を離れるなり腕立て屈伸をしていたようで、たまたまそれに行きあわせた生徒が、その様子を『両手と両足を畳の上につけ、四つ這いになって体を宙にし、米をつくように身体を上下に動かされた』と言っている。目を丸くしてそれを眺めた様子が思い浮かべてほほえましい。

このように身体と健康について並々ならぬ理解を持った校祖と、各種のスポーツやゲームに堪能な宣教師で教師でもあったアメリカ人達の薫陶を受けた初期同志社の卒業生の中から優れた教育者、布教者があらわれ、日本における体育、スポーツ、レクリエーションの揺籃期に偉大な貢献をしたことは明らかである。

明治十一年（一八七八年）六月に初めて制定された同志社概則を見ると、休日は毎週土曜日、日曜日、元日、紀元節、天長節とある。同志社の教育は月曜日から金曜日までが学問、土曜日は体育、日曜日は魂の安息日として、よく使われる教育の三原則が確立されていた。

土曜日はスポーツ日だという共通の理解があり、生徒達はこの日に終日山河を跋涉するのが習となっていた。生徒達の多くがたどったコースは比叡山周辺で、ある者は山を越して坂本に下り、琵琶湖で貸しボートを漕いで帰った」

すなわち、土曜日はスポーツ、レクリエーションのために意識的に設けられた一日であったわけである。こうした教育方針は、各種スポーツやゲームに習慣的になじんでいたアメリカ人宣教師・教師達によってさらに推進され、同志社の伝統として定着して行ったのである。精神主義、知育、徳育主義に偏せず、肉体をも重視する教育思想は、文字通り「開化」を健全なるものとする新風を当時の教育界に送り込んだことであろう。

この文章の最後にも触れられている、同志社におけるボート競技について、その濫しょうを正確に尋ねることは容易でない。

「同志社大学体育会史」の年表によれば、端艇（ボート）部の正式な創立は明治24年とされている。また「同志社百年史」には、明治23年に疎水工事が完成すると共に大津三保ヶ崎に大型貸ボートの店がいくつか生まれ、生徒達が盛んにボートを漕ぐようになったので、翌年の明治24年に第一回水上運動会が開かれたとあり、この水上運動会（種目は競泳と端艇競漕）をもって同志社ローイングの歴史の起点とされていることがよく分かる。

同志社波理須理科学学校を卒業して東京大学教授となった三宅驥一の追想談に

「ボートレースは毎年した。最初の年石山の流れでやったが、急流で危無いと云ふので一回で止めて、次の年からは江州の大津でする事にした。ボートレースは土曜日曜等に皆練習に出かけて盛んなものであった。個人的の競争、又、組と組の競争もあったが、同志社と第三高等学校とのボートレースが毎年あった。第三高等学校とはベースボールもやったが、競争では時に依ると喧嘩をした事等もある」

とあり、また宗教家として出発後産業界に投じ、稀有の敏腕実業家として10数社を経営するに至った近藤賢二の談に

「最初石山で和船の競争（漕）をやったのが起因で、それより大津の疎水口でやる迄に進歩した。私も時々競争に加わったが、一度も勝った事はなかった。

今もって忘れられ無い一事があった。天長節頃ボートレースの練習と称して、密かに授業を休んで琵琶湖一周をやった処が、難船して半死半生の体で浜辺に打ち上げられた所を漁士に助けられて、其村の村長の家に一泊させて貰って、天気が穏かになってから、彦根、竹生島、今津等を経て帰った。

又、或時大津の旧街道に在った牛乳店から新しい牛乳を買って、昼食の際唐崎で飲むつもりで、大津から船を漕ぎ出す時に、水に冷す為に牛乳の壺を船の艫の方へ下げて置いた処が、愈々目的地に着いて牛乳を飲もうと思って見たら、壺の口だけ残って中味は何時か壺と共に海底に沈んでしまったので、甚々失望した事があった」というのもある。

この両者の談に現われる「石山」でのボートレースというのが、「百年史」でいうところの「第一回水上運動会」であるが、ボート漕ぎそのものは、言うまでもなく、それ以前から同志社の学生間で大いに愛好されていたのである。

「同志社に明治12年ごろボートがあったと伝えられ」と「関西漕艇界小史」にあり、さらに京大端艇部の育ての親として、また日本ボート界の指導と振興に奔走した「ボート狂」として知られる大國寿吉は

「同志社の学生が明治16年から石山へ来て、三々五々、ボートを漕いでいた」という言葉を残しており、これらが同志社ボートについて語られた最も古い年代となっている。

京都府漕艇協会が出した「京都府漕艇協会史」には

「京都で最も早く漕艇を手がけたのは同志社であろう」

とある。三高はその前身である「舎密局」（明治2年大阪に開校。「舎密」とは「化学」の意）時代からボートの同好会組織を持って堂島川で漕いでおり、関西におけるボートの草分け的存在であったが、琵琶湖に本格的に進出して来たのは大阪から京都への移転（明治22年）後と考えられるので、とりあえず同志社が湖水に櫂先を浸けた最初の学校としての榮譽を担ってよいのではないかと考えられる。

「第一回水上運動会」以前から、同志社学生は毎年嵐山を訪れて和船に分乗し、互いに水をかけ合う「水合戦」を恒例として行っていた。これがいつの頃からかボート

競漕に変化して行ったと考えられる資料も現存する。

明治22年5月30日発行の「同志社文学会雑誌」に次のような記述が見える。

「春期運動会 桜花まさに笑ふの際嵐峽運動会の企あるは恰も是れ同志社学生の不成文律の如し茲に四月二十日を期して同所に会遊し桜花の翻々水に点ずるの辺短艇競争を試みんとて三々五々相携へて之に向ふ」

ところが、このときは大雨のため舟遊びどころでなく

「更に良日をトし当日の遺恨を琵琶湖上に訴へんとす知らず比叡の山靈琵琶の水神果して吾人が壯遊を助くる耶否」

という次第となっている。この年、明治22年に結局琵琶湖で「短艇競争」が行われたかどうかは定かでないが、いずれにせよ当時、何らかの形で春の「運動会」で競漕が行われ始めていた。

因みに「運動会」という言葉は当時の一種の流行的新語であったようで、各種の団体により大小さまざまなものが行われ、例えば商店等でも「丁稚運動会」というものが行われていたことが当時の新聞紙上にも散見される。明治の御代のハイカラなレクリエーションとして、かなり一般化されていたもののようである。

このような、いわゆる「第一回水上運動会」以前にも既に自然発生的で「恰も不成文律の如く同志社学生達は「運動会」を行っていたわけであるが、ある程度の規模と形式を備えた全学的公式行事として「水上運動会」を定義するならば、明治24年4月のそれをもって嚆矢とするのが妥当であるかもしれない。

「同志社春季大運動会は去る十五日之を琵琶湖の下流、石山に開きぬ運動の種類は端艇競漕と競泳にて朝の十時より日暮にかけ二十余番を催ふせり紅勝ち青負け甲着して後れ観衆喝采の声山を動し私製楽隊の響水に振ふ校長以下内外教師も大抵見受けたり教師の競漕に米國女教師の混ぜしは一入床しく覚えぬ、越えて三日火曜の夕には同会の賞賞授与式を校内に開き校長の演説あり新島未亡人夫れ夫れ賞状と賞品を渡されたり」（「同志社文学会雑誌42号」）

ここに初めて、単なるレクリエーションであった「運動会」が「大運動会」と称せられ、「表彰式」も大々的に行われて、この催しが学校行事として定着した。この大会実現にあたっては学生福井大三郎が奔走したことが記録されている。

同志社はこの前年に校祖新島襄の長逝を見た。多くの逸話に示される如く、師弟の間に家族関係にも似た精神的紐帯の固く結ばれていた学園にとって、新島の死がいか

半ばにして資金面の問題、官学に対する私学の不利、キリスト教主義教育を非とする
排外思想の高まる中で新島を失ったことは「同志社九十年史」に記述された通り「同
志社ならびにその関係者にとってはまことに大打撃で、支柱がたおれて崩れ散った建
物をながめるごとき感慨」であったが、「しかし前進途上にある学校の業務は一日とい
えどもゆるがせにできない。ここに社員、教職員ほぞをかためて新島の遺志を達成す
ることに一丸となって前進を誓」ったのである。

このような大苦難、また大きな悲しみの内にこの大会が企画され、準備され、挙行
されていくところに、関係者全員の胸中にあったものを我々は今ひそかに推測せざる
を得ない。かつて新島の慈愛に触れ、薫陶を受けた生徒達は緋茫たる湖上にその一漕
一漕を校祖の霊に拝げ、未亡人の傷心を慰謝し、かつ自らの意を励ますべく、全力を
オールに打ち込んだのである。同志社ローイング百年の伝統は、まさに新島精神を継
承発展させる決意の象徴として、感動的に草創せられたものであることを我々は銘記
しておきたいのである。

2. 三高との角逐

明治24年の「第一回水上大運動会」に至るまでに、学生達がボートと出会っていつ
た様子の一例が、前掲の牧野虎次の文中にある。

「たしか明治二十三年初夏のころ、私は級友梅沢武一郎と二人連れで石山柳屋でクラ
ス会を催した時に、浜大津でボート（三人乗り）を見つけ、漕いでみようでないかと、
そこの小僧さんにオールの扱い方を習って、コトンコトンとあやしげな音をたてつつ
幾辺（なんべん）かボートをくるくる廻させ、約二時間かかって漸く柳屋河岸まで漕
ぎつけ得た。その翌年のこと、我等は校内対学級競漕のクラス選手に伍する腕前とは
なったが、惜しくも舵手がしくじった（？）ため負けた。我等は負けたが、三高との
対校競漕には我同志社ボート部は見事に凱歌をあげ得た」

これによると第一回水上大運動会の年に既に三高との対校戦が行われ同志社が勝利
したもののようにも取れるが三高側にその記録はない。これは三高の校友会組織であ
る「壬辰会」の結成が明治25年であり、その会誌である「壬辰会雑誌」が当時の数少
ない史料となっているためかもしれない。先に掲げた三宅驥一の追想談中にも同志
社－三高戦が毎年行われたという言葉があり、記録に初めて現われる明治26年以前に

も何度か両校の対戦があったものかもしれない。

明治25年発行の「同志社文学」第54号には同年の春季運動会の模様、競漕の状況が詳しく記されている。それによると

「来るもの男女の教員生徒無慮数百名、来観者の為湖汀に天幕を張る。紅黄青の三標旗は樹てて二哩の湖沖に在り。一舟五名一回概ね三艘を用ゆ」

とあり、勝者の名が記録されている。出漕者は普通学校（4年制）と予備学校（2年制）の生徒が中心となっていたのである。

「チャンピオンレースの第一等賞は銀牌にして二等賞はニッケル牌。其他賞品数多し。……チャンピオンレース組合の一等賞は板原兵三郎、加藤備、井上平二、赤松勘六、黒住猪太郎(以上普通科二年生)。伊藤良蔵、高橋彦太郎、村瀬民三郎、田村長太郎、田島虎衛(同三年生)。大谷英一、清水団三郎、中山周作、松岡亀雄、阿部忠次郎(予備校二年生)。そして二等賞は一戸清海、大石七郎、黛鵬二郎、松島寛三郎、塩澤龍次郎(普通科一年生)。小林千代、山崎恒司、樋田治三郎、初田利三郎、中嶋政一(予備校一年生)。千谷諭之助、牧野虎次、二宮峯男、郡淳、小林峯蔵(普通科四年生)。又通常競漕は一等賞吉川喜士太、神宮茂八、長尾柳吉、水崎基一、山内龍、平井亀之助、亘理省三郎、照井丙吉、佐々木抱吉、神坂静太郎、石川廣吉、伊野甚内、横部實之助、今井眞次、東勝熊、末田範造、大谷英一、白石嘉十郎、樋田治三郎、中嶋政一、菅谷雄太郎、仲野太蔵、内藤啓吉、古谷久綱、辻良之助、緒方徳一郎、森脇義朗、小滝無事郎、桜庭十蔵、吉川安遠、阿部忠二郎、初田利三郎、山崎恒司、松岡亀雄、中村栄二郎、前田平四郎、小林愿、鈴木達治、上田正興、田中弥太郎の四十名又二等賞は槇和一郎、松井時二郎、清水徳三郎、土倉龍二郎、塩見勇吉、符阪直吉、中川儀一郎、高口庄司、正田熊太郎、加藤備、有本常太郎、片貝鏈三郎、服部清矣、三砂和一郎、坂上安蔵、伊藤良蔵、津村鶴松、高田富治、秋元秀太郎、長谷川祥輔、横矢重勝、矢野光太、山下元治、武重善八、藤田嘉五郎、波多野培根、鈴木重嶽、林朝太郎、上谷統、八田常吉、辻井愛之助、藤野修吉、若松兎三郎、島益吉、金澤鶴吉、佐久間秀雄、井澤克己、小島今朝二郎、篠田昌武、田中啓造の四十名なり。此外教員の競漕には浮田、ペレー、ベントン、小野、福島の一組捷を得たり」

言うまでもなく今は全て鬼籍中の人々であるが、その後江湖各界に活躍したこれら人名を眺めていると、百年の昔の琵琶湖畔の歓声と若者達の喜々たる表情を眼前に見る思いがする。現在同志社ボートに関わる者もまた、いつの日か同じ感慨をもってそ

の名を読まれる日が到来するであろう。伝統を創る喜びと使命を今ここで感じておきたい。

この明治25年の水上運動会では、学内戦終了後に、当日最終番組として、大阪から来漕の泰西学館（明治18年創設の私立学校。昭和10年大阪城東商業学校〔現大商大付属高校〕が吸収）との間に対校戦が行われた。

「泰西学館と同志社の競漕には衆皆堅唾を飲みしが、同志社の勝を得し時は喝采湧くが如くなりし」

記録に残る、これが同志社最初に対校戦であった。またこの年、同志社学生により初のボートによる琵琶湖周航が行われたと伝えられている。

翌明治26年の水上運動会は5月6日に举行され、同日は再び泰西学館、そして三高との間に対校戦を行った。この日の模様は「傍観生」なる人物の署名入りで「端艇競漕記」として「同志社文学」第65号に掲載されている。しばしこの歴史的な文を味わいたい。なお、当時の競漕には直航競漕と回航競漕（目標点で折り返してスタートラインまで帰ってくる競漕）の2種類があった。

端 艇 競 漕 記

傍 観 生

本月六日琵琶湖上に同志社端艇競漕会を催す。此日挑戦に应じて来れるは京都第三高等中学及大阪泰西学館の有志者なり。いでや傍観の記事を左に。

鶏鳴曉を報じ、早晨戸を排して天を望めば、東風静かに窓を掠め、天空薄く曇れり。然れども降雨の憂なきが如し。此に於て一校の軍勢勇氣常に倍し、輕装薄衣、戦場に向ふ。或は白川に由て行くあり、或は大文字嶺を越ゆるあり、さては叡山より寄するもの、又大津街道に出るもの、三々五々、各隊思ひ思ひにぞ進みける。午前十時湖畔に至れば追手搦手の軍勢凡そ六百余、応援の兵士を併せて殆んど千有余、浜手の方に陣所を聳めたり。旭旗東風に翻るは勇將の止る所なり。人声の騒然たるは戦士の快語するなり。十一時と覺しき頃敵軍亦湖畔に寄せて軍備頻りなり。彼負けじと意気込み、我勝たんと勇む、彼も勝れりと思ひ、我も劣らじと信ず。知らず中原の鹿、果して誰が掌裡のものぞ。

比良山頭未だ春風の到らぬ隅あり、残雪白点を止めて之を証す。然れども江州已に輕

風暖かに、四方の山岳雲霞に没し、湖光磨し出して鏡面の如く、亦冬風寒波の跡を止めざるなり。遠く没し、近く顕はるゝ帆影、右に行き、左に帰る漁舟、汽船は万丈の黒煙を吐て北に走り、汽車は百雷を轟して東より来る。志賀の旧都已に墟趾を余さずと雖も花色旧時に異らんや、否花色已に散落せりと雖も緑葉青樹山を装ひ、湖岸を飾りて春色滴らんとす。誠に青鯉洲の美光は江八景に集り、江八景の秀粋は琵琶湖辺に極ると謂うべし、其美其秀実に快絶又爽絶。

幽々静々たる秀美の風景、忽ち見る、関声湧き砲雷碎け、喇叭声裡敵呼び、味方叫び、彼喜び、是怒り、一は笑ひ、他は泣き、勇将猛士腕を扼し、髪を立たしむるの一大修羅場と化し来るを。

競漕船の出発点は疏水の渠頭、埠頭の尽る所とす。之より東方凡そ十丁の所に目標あり団々として海水を出す月の如し、並立するもの紅白紫三箇其一を廻漕して出発点に帰着するの遅速を以て其勝敗を決す。最初五回の競漕は同志社部内の兵士なり。而して其の勇将兵士の面々は左の如し、(舵手は最初の人と知るべし)

第一回。紅軍 勝井周達、齊藤忠一、星野徳治、広田松次郎、三輪与次郎。

白軍 藤原竹治、飯田一馬、中山文哉、稲垣襄之助 篠塚八郎。

紫軍 松井嘉一郎、古賀快象、浜田正穂、鎌田玄四郎、横田安止

第二回。紅軍 三宅驥一、藤野修吉、三砂和一郎、菅谷雄太郎、井上嘉太郎。

白軍 旦太助、大森兵造、岡本桜、大谷恭助、石川清治。

紫軍 松山淳吉、加藤達平 岡野甚吉、今井眞二、寺島宗一。

第三回。紅軍 松原博 和地永堯、戸名肱三郎、河原崎文二、横山昌次郎。

白軍 神坂静太郎、亘理省三郎、平井亀之助、神阪唐太郎、橘詰良吉。

第四回。紅軍 納三治、草野堅二、片山与太郎、金尾信雄、田中兵二。

白軍 吉川喜士太 中野大蔵、加賀武四郎、桜庭十蔵、小島今朝二郎。

第五回。紅軍 望月三郎、岡本繁哉、西村幸之進、後藤直一、遠藤市二。

白軍 大橋幸平、藤田新治、森実章三郎、奥村信伍、武田君太。

喇叭ひゞき、旭旗翻へるは是毎回勇士の出発と、勝負とを表明する合図なり。関声雷の如きは数千の観客が勇者の出陣を励まし、又勝利を祝するの声なり。第一回の勝利は紅軍にして次は紫、又次は白。第二、白、紅、紫の順なり。第三は紅、白、第四は白、紅、第五は又白、紅の順に勝敗決せり。

此時湖上の目標を移して更に遠くすること凡そ七丁。是何が故ぞ。曰く泰西学館と同志社との将士勇を争ふの時となりたるなり。其人は誰ぞ、曰く、泰西学館より出でたる

は、原忍、岡田嘉一郎、寺尾義一、陶山孝三郎、田中与五郎、同志社より出でたるは、大石七郎、黨鵬二郎、中山周作、松島寛三郎、塩澤龍次郎、是先の競争が一校内の生徒に限りて半ば遊戯なりしと大に趣を異にし、彼は遠路遥々大津に押寄せ、一は以て高名手柄を外校に表はし、一は積年の恥辱を雪がんと欲するの大望ある間はずして知るべし、是は修練に修練を加へ、いざや宿敵ござんなれと、腕を固めて控へたり、イザと云はゞ打出でんと用意厳しき程こそあれ一発の砲声と共に、両軍力を揮て漕ぎ出でたり、岸頭に群衆の人々一度にドッと呼び叫び、関の声をぞつくりける。未だ岸を去る遠からざるに早くも勝敗の数定めぬ、泰西学館の将士は未だ修練や足らざりけん。はた途中にて其気力や沮喪したりけん。敵に及ばざること速く、其帰着点に於ては殆んど三町余の敗を取り。今にして思へばあはれ一校の声名を負ひて勝敗を争ふの器にあらざりしが如し、今年に於て左なりと云ふのみ、今後は我知らざる所。兎も角もモロクも負け給ひしものかな。また同志社の勇将はいたくも勝てるものかな、勝敗は天にありと雖も亦人にも由るところ知られたれ。

此に亦同志社内の有志者二番の競漕を為す

第六回 紅軍 武重善八、高田富治、赤松勘六、横矢重勝、山下元治。

白軍 辻井愛之助、末田範造、南珍一、佐久間秀雄、小林千代。

紫軍 鈴木庄造、東勝熊、伊野甚内、内藤啓吉、中島政一。

第七回。紅軍 上谷統、若松兎三郎、林朝太郎、鈴木重嶽、金澤鶴吉。

白軍 藤田嘉五郎、一戸清海、中村栄二郎、大谷英一、秋元秀太郎。

紫軍 宇津均、西村稔、白石嘉十郎、長尾豊、松岡亀雄。

前者は紅軍第一、白、紫之に次ぎたり、後者は白の勝にして次は紅、次は紫。

今や校内有志者の競漕は終りぬ、是よりの争は実に今日の敵味方共に氣遣ふ所。

数月以来待ちに待ちたる第三高等中学と同志社との競漕者が勝を湖上に決する一大決戦なり。彼等はベースボールの敗北を端艇にて報ひんとす。我之を迎へて花々しく雄を争はんとす。彼等もとより水には縁ある千鳥倶楽部中、勇壯の勇壯なるもの、陸上に於てこそ弱卒なれ、水に入ては出沒進退只心のまゝ、素より万夫不当の剛者、会稽の恥は只此一戦にて、洗ひ去らんと思ひしが、こたびは必勝を期せりとの評、屢我等の耳にせし所也。されば味方の選手も豈心を緩めんや。彼必勝を期す、是亦全勝を望む。一は必らず敗るべきの競争なり、而して両者斯の如く意気剛なり、故に見るもの大に注意せり。

高等中学の選手は、井上親雄、石黒健、莊手市太郎、平井熊吉、岩田博蔵。之に対す

る同志社の将士は、古谷久綱、高橋彦太郎、八田常吉、田島虎衛、初田利三郎。両軍相對峙し、用意正に整へり、砲声一発、彼我共に漕ぎ出でたり、敵味方の軍勢及千余の観客、一度に叫ぶ鬨の声、さながら万雷遙かに轟き、天地を動かし、山河を驚かすに似たり、或は双手を挙ぐるもの、或は帽を振るもの、座せるものは立ち、立てるものは走り、衆人狂せるが如く、声を励して味方の将士に力を添へたり。勇者の面々は何れも是一校の榮譽を身に負ふものなり。敗れんか、豈自個の名声を汚すに止らんや。されば何れ負じと、力を揮ふ虚々実々、彼先んじ、是おくれ、彼進めば我も負じと競ふ。両軍共に進む内、前後何れと分き難く、観るもの手に汗握らぬはなし。流石に勇者と勇者との争ひ也。端艇速くして飛ぶが如く行々煙波に没し去て観客其前後を見るべからず。此に至って勝敗を知らんとするの心一層強し。已にして舟目標に達す。之を廻るもの何れが先きぞ、あはれ同志社の選手亦先とはなれり。されど今度は其差僅に数間未だ必らずしも勝敗を定むべからず。衆皆危んで見る。帰着点に近づくまゝに、速きものは愈速く遅きは益後れ、遂に三十間の差とはなりぬ。さればこたびもまた同志社生徒の勝利とはなりぬ。

祝砲天に轟き、歓声地に鳴るの時、無形の桂冠を得て勇士が凱旋の途に上るの時、無数の観客亦帰路に就けり、埠頭の漣波は微音を発して祝歌を歌ふが如く、習々たる春風は静かに耳に音づれて歓語を寄するに似たり。然り彼等喜ぶものと共に余は喜ぶ也。祝する人と祝する也。歌へと云はれんか、歌うたはん、舞へと云はれんか、我舞はん。然れども、嗚呼然れども亦同情の念誠に禁じ難きものある也。

戦に臨んで誰か勝つ事を思はざらん、勝つもの誠に其志望を達したる也。強弱を争ふて誰か負くるを覚悟せざらん。負くるもの実に其予め覚悟せる所也。されど戦はゞ勝んと欲す。勝てば喜びあり、強弱を争はゞ負けじと期す、負くれば即ち落胆す。是人情の常のみ。然れども勝敗亦天にあり、強弱人によりて異り、今日の敗亦必らずしも後日の勝とならざらんや。敗軍の将士よ、乞ふ暫く気を沮する勿れ。願くは望を失ふ勿れ、人豈同情の心なからんや、悲む者と共に悲しむ人なからんや。退ひて養ふ所あらば何ぞ後日の勝利を望むべからざらん。泰西学館の勇者よ、高等中学の将士よ、乞ふわが同情を容れよ。われ同志社の凱旋者に向て勝ちて兜の緒をしめんことを望むと共に敗者が気を沮喪せざらん事を望むもの也。蓋し競漕の目的は勝敗を争ふにありと云はんより寧ろ運動を奨励するにありとなし、勝敗榮譽に重きを置かず、同じく是邦家の為に尽さんとする有為なる青年が、共に遊び、共に楽しむの美事を天下に示すは誠に此上なき事と信ずれば也。六日の夜起草す」

明治26年5月6日、同志社の爽やかな勝利はこの美文の内に高らかに謳い上げられたのであったが、これが三高側の史料によるとかなり異なる様相を呈している。成道斎次郎の追想談に曰く。

「大津で三高・同志社対校のボートレースが行われて、四時頃出発。スタートに於て三高一艇身ばかり後れたが、ゴールで力漕して極差にてゴールに入る。審判長（外人で同志社の教師）は同志社の勝を宣したが三高側に異議あり、大いにもめた」

この両者の記述の齟齬についてどう理解すべきか。一方は「三十間の差」をもって同志社の大勝利とし、他方は「極差」で「もめた」と伝える。さらに詳しく見てみよう。三高の「壬辰会雑誌」第13号（明治26年5月25日発行）は大なる敵愾心を示して次のように述べる。

「選手の苦心一敵は勃々たる野心禁ずる能はずして我に戦を挑み己の名を成さんと欲する者、校課を抛ち身を委して滋賀の浦波に手腕を鍛へり、我千鳥倶楽部の選手五人鉄骨の男子なりと雖ど、日々校課の負担あるあり、僅に午後の余暇をぬすみて疎水に半破の短艇を浮べ、休日太湖万頃の波上に消し、漸く之が操練をなせり、其苦心思ふべく、其心情悲むべき者あり、而して其万障中の精勵誠に感すべき者あり、此の如くにして始めて選手の名に背かず、倚貨を空ふせざる者といふべし。

奴郎不弁玉石不分、嗚呼彼れ終に何たる者ぞ眼に見る能はずんば盲者のみ眼に映じて心に識別する能はずんば心に盲する者のみ、眼之を見心之を認めて猶実を枉げ事を誣ひ以て世を欺かんとする者に至ては我れ終にその何者たるを知らず昔時羊頭を懸けて狗肉を売りし者の垂流か然れども羊と狗とは相肖たるを懸て人を欺かんとするに在り今や全く実なきの事を捏造して天下を騙せんとするものあり其言に曰ふ去六日に於ける同志社対千鳥倶楽部競漕は全く千鳥の敗に終ると借問す言者果して当時三保埠頭に其現状を見しか走発線に於ける我艇が退却の余勢あるの中にして艇首太だ右に偏し二擡をして全く其効を尽す能はざりしを見ざりしか見て之を見ずとならば目に盲せしが為め也之を見て之を怪まずとならばこれ未だ競漕なることを知らざるの盲心者也之を認めて虚構の言をなすものは狗肉を以て羊肉となすものに非るか目に盲する者は路傍に立ちて人の憐れを受くるを得ん心に盲する者は猶ほ鞭達せば或は之を区使すべし独り彼れ破廉恥漢に至ては世人何の辞を以て之に付せん人にして非ずと云はんか未だ其辞の尽さざるを怨む。

又た千鳥の敗は一哩の予約を突然二哩余に変換せられし不意討の為によると云ひ或は下宿楼上管絃をのみ弄する蒲質は太湖の波の艇をやるにたえずと誣ひ甚しきに至ては

年々我れ敗を取れり独り本年のことに非ずと暴言する者ある。

借問す不意を討たれて敗を取りしとなすを輩は the longer the better と云へる語を知るや知らずや。

私の敗れは独り本年のみに非ずと云ふ者よ汝は昨年果して何人が我より之に出でしとなすものぞ、如し夫れ汝にして岩倉村座敷牢を逃れ若くは永観堂病院を走りし狂漢なれば吾人は汝の病を憐みて責むるなくして止まんも苟も汝自らに於て多少真人間らしき感のあるあらば去年我れより幾人出で如何なる勝負ありしやを詳に報ぜよ然れども咄汝に告ぐ汝の為に計るに先づ同志社に赴て誠に之を問ひ而して後ち答へ得べくんば答へよ人を誣せんことにのみ急にして凡ての人を瞞視するは却て汝誣者の良策に非るべし管絃の外他に壮快なる遊あるを知らざるの輩は日枝風に舵をとる能はずと云ふに至ては吾人ただ之に答ふるに苦しむ。稠人の中には絵入新聞を淫風媒介の源泉とのみ妄断し近眼者中には米国の旗を大日本帝国旗と誤認する者もなきに非ずと聞ゆ誤見誤聞の全くなしと断言する能はざる世の中に於ては或は尊き会堂々裏オルガンの響を男女媒介の宣言と間違ゆる耳もあるべく此輩の耳には神楽丘辺の松風も或は尺八の音と聞ゆることのなしと云ふべからざればなり聊か奴郎の事を会せざるを論じ併せて狂言を排すと云。

談判の結果 千鳥倶楽部よりは同志社運動会へ向け掛合ふ所あり市原同運動会長は五名の交渉委員を出すべき旨の話ありたるも当日の審判長の意見を聞くこと至当なればとて之を謝絶し審判長を訪ひて其意見を糺したるに彼は自ら公平なりと信ずるとて更に応ずる所なきを以て我談判委員は終に引取りたりと云ふ」

感情的言辞が横溢しているため要点がつかみにくい、つまりは三高が態勢の整わぬままにスタートが切られたことに問題があったと解せられる。かつまた先の成道の談にある通り着差が微差であり、審判長が同志社教師であったこともあって紛糾したもののである。さらには同志社側がその勝利のニュースを内外に揚言してはばからなかったがために、三高側はかくも激しく敵対意識をむき出しに表現したのであろう。いずれにせよ、同志社側「傍観生」の大差をもって同志社の勝利とする報告は一種の誇大宣伝に類するものと結論されるべきであろうが、三高側も不利のために敗れたと言い立てることは名を惜しむ所為とは言いがたい。にもかかわらずこれ以後の三高の同志社に対する雪辱の願望はほとんど憎悪に近いものとして表現されて行くのである。

この年8月に、三高ボート部「千鳥クラブ」は伊吹行を行った。これは大津から米

原までの遠漕のあと伊吹登山を行ったものであり、「壬辰会雑誌」にその経過や途中の風物などが詳しく叙述された後に次のような文章が続く。

「其壯途思ふべし、嚮には琵琶湖周遊あり今また文科生の周遊、倶楽部員の伊吹山行あり、水陸両運動部爾後益々盛なるべし然れども記憶せよ単に遠航周遊は水上運動の本趣にあらず、レースに於ける部員の決心は如何、同志社に対する吾人胸間の鬱恨は未だ光風吹き霽月の照さざるにあらずや」

さらに11月24日三高は水上運動部第1回端艇競漕会を開催するが、その状況報告の前文は以下のようなものである。

「本月廿四日我が水上運動部大津三保ヶ崎に於て第一回端艇競漕会を催す此地我校嘗て千秋の恨を遺せし所江山に対して今日猶ほ余哀あり況んや此日天凍へ風寒く埠頭日を張りて天の一方を凝視するの所凜たる志気人を衝きて来り痛恨の涙暗に滴るを見る。彼等の弘暁を以て顔を湖辺の朝嵐に曝らす者蓋し盛典大義に与らんと欲するの好奇心あるに非ず願くは之に依りて大に我が技を進め聊か報ゆる所あらんと欲するが為めのみ観る者の情已に此の如く之を証する者豈に無用の閑文字を弄して自ら喜ぶの辺あらんや請ふ直ちに進んで競漕の状を伝へん」

このように三高は対同志社戦の敗戦を「心外千万遺憾遣る方な」きものとし、「夙夜報仇の事を忘れず」、執念また執念の猛練習の果てに「熟慮已に成って」再戦の挑戦状を同志社に送付するに至るが、同志社側は選手の調整不十分を理由に一度はこれを断る。これに対して三高は前回自らは準備の不十分なままに挑戦を受けたにもかかわらず、同志社のそうした態度は首肯できずとして大いにその非を鳴らし、切齒扼腕の内に日を送るのである。

明けて明治27年、三高側は春の到来を待ちかね、2月15日に至ってついに再度の挑戦状を発す。同志社これに応じ、3月3日、両者再び三保ヶ崎に相見えることとなった。

「比良山角の雲は春風の尚未だ江州に至らざるを示し微寒尚ほ膚に徹するの三月三日、昨春の古戦場三保埠頭にはD章帽子は白三線破帽草鞋掛の一団と相紛雑肩摩し互ひに反目す然れども兼て我部世話掛の厳令もあれば敢て疎放喧争の声なきも殺気天を蔽ふて惨又懨、当日は夜来の陰雲尚未だ霽れず細雨霏々に雲靄湖面を蔽ふてなき果たる面には漣の跡だになし。……」

午後三時両校選手は艇に乗じてスタートラインに出づ両校の同窓は恰も狂気の如く我等は一歳余忍び居たりし讐を今目前に報ひんものと意気込めば彼れ同志社連は先輩

の一度得たる名声をこの一挙に失はんは残念なりとて六百余の壮士固唾を呑んで見物す判定者高橋雄一郎君は吾人が昨年同志社のフランク氏の判に服する能はずして空しく箱根山嶺の露と消しを察し一入注意し最も公平に其の任に従事せられる用意の一声は如何に両選手の動悸を激せしよ。

号砲我選手のスタートは見事にして流石連日比良嵐に鉄腕を練りし程も見えて頼母しかりき彼れ同志社選手のスタートは可成にしてスタートよりピッチは頗る早く従て選手を氣遣ひし程にて我選手のピッチは左まで早からずいと落ち付たる様に漕ぎ行けり石垣の外れ辺にては両に相並び岸より見物せる輩は頻に叫びて声援を張り彼れ同志社連も大声に其選手を激せりこの際我艇は五六本の軽きヘビーにて一艇身余りを漕ぎぬき是より我艇は如何にしけんコースを誤りたるが如く岸上より見れば恰も敵のゴールに向って進むに似たりこれを見て同志社の人々は拍手喝采し我校気早の躍起連は眉を顰め息を凝て覺へず舵手を罵りぬ兎角する内我艇は俄然方向を転じ恰も「く」字をなしてゴールに向ひ是に達するや否や僅か四五本にて巧みにゴールを回れり是にて思ひ合すれば我舵手はゴールを容易に回らんが為に殊更にコースを転じたる疑も晴れゴールを回る時などは我校の同窓は帽子をふり外套をまはししめた／＼と叫ぶに反し彼同志社の艇はゴールの回り方見苦しくしかもボス、サイドにて漕ぎながら回艇せしが如きは素人眼の我等さへ其の不利なるを笑ひたりき両艇ゴールに達せし際には我れ已に一艇身をぬき居りしのみならず其の回艇の巧みなりし為めにボス、サイドを掛けし時は二三艇身の差ありきこれより両々力を籠めて漕ぐに彼は如何にしけむゴールを回りし時よりピッチ俄かに遅くなりて敵の弥次連もこれを訝るに關せず我艇は益勢を得石垣の辺にては四艇身の差を生じて敵は最早失望せしが如き有様なりしを流石に名を惜む心に激せられて腕を限りに漕ぎし様見ゆ之れに反して我選手は益々勢鋭く石垣に取り付きし辺より我舵手はヘビーの必要なきが如く腕を拱ぬきて独り微笑し居りしも余りに興なしと思ひけむヘビーと一声を掛けしに両艇益々隔りヘビーの張合ひもぬけ易々の内に十五六艇身乃至廿艇身余の差を以てウイニング・ラインに漕ぎ入れり。(中略)

我同窓この時は如何に歡喜せしよ帽を振るあり傘をたゞき破るあり感極まって狂に近し宜なるかな我庭球部廿五年の春を以て御苑内に破れしより戦場は常に敵の歓声に満たされ一たびも我等同窓が双手を挙げて凱歌を奏せしことなきに於てをや多年吾等同窓にのみ蔽ひ重りし悲雲も茲に漸く霽れて胸中万斛の鬱は光風に吹き去られし心地しぬ」

ここに同志社は一敗地にまみれた。琵琶湖における漕艇発祥以来自ら覇を唱えてきた同志社の完敗は、漕手達にとっても大きな落胆であったに違いなく、大差をもって三高側が入線するや全員オールを投げ出してしまったと記されている。あるいは前年先輩達の達成した栄誉を汚したという絶望感がクルーを襲ったものかもしれない。

もともと両校の反発は相当に常軌を逸したものであり、レースともなればこの観戦記にも記されている通り、「D章帽子」と「白三線破帽」は「相紛雑肩摩し互ひに反目」して、前掲の三宅驥一の追想談にもある如く「時に依ると喧嘩をした」というような状態であったが、そうした反目はこの頃にピークに達していたようでもある。三高側の記述に「我校敵愾の氣象時に極点に達する者なきに非ず」また「書生の情として鉄拳空に舞ふの事なきに非ず」等とあり、以後三高側庭球部の挑戦に同志社側が応じない状態が続いたことに端を発した諸々のトラブルの末、三高が発した次の書信をもって両校は暫く絶縁状態に入ることになる。

「拝啓

過日来御校と運動上の交渉談判に付略々貴意を了し候間当方にても大に決する処有之爾来運動上の関係を絶ち申候間此段及御通告候也

明治廿七年六月十二日

第三高等中学校内

壬辰会庭球部

千 鳥倶楽部

同志社運動会御中

」

3. 同志社の受難期とボート

同志社のスポーツはこのころ事実不振に陥っていたのだが、それは学園の経営自体が苦難期に入っていたことと無縁ではない。新島の没後生徒数は年々減少の傾向を示し、その理由について「同志社明治廿四年度報告」は次のように述べる。

「明治廿三年来年々生徒の減少を来しつゝあるは強ち新島総長の永眠の為めのみにもあらざるが如し近年生徒の減少あるは何れの私立学校も然らざるはなし之が原因たる一にして足らざるなり第一は学者の需要一般に減じたるために学生の数二三年前より

全体に減じたる事なり、第二は近年商業不振と共に学資に窮するもの多く為めに生徒の減少を来したる事なり第三に昨年高等中学にて尋常中学より直に生徒を取る事に定めたる以来各私立学校其一体に其影響を蒙りたる事なり。終りには反動の潮勢尚ほ盛にして洋学の需要大に減じ殊に基督教を嫌ふの精神頗る盛なれば基督教主義の学校殊に其影響を受けたるも理なきに非ざるなり」

生徒の減少が具体的にどのようなであったかと言えば、例えば普通学校の入学者数は明治23年の113名に対し24年は23名、理科学校は33名からわずか2名へという激減ぶり、普通学校は高等科を廃してさらに従来5年制であった尋常科も4年制に短縮されるというありさまで、諸事まさに苦難のどん底という状態を迎えたのである。（「同志社九十年史」）

すなわち官学の優位が顕著になる中、明治23年の「教育勅語」の発布によってこれが教育の基本とされ、キリスト教をもって徳育の基本とする同志社は排外思想の攻撃対象となっていったわけである。

明治25年には「同志社」の命名者であり、新島に対して物心両面での大協力者であった山本覚馬が逝去する。

ここに至って、新島がそれに所属し、かつ多大な協力と援助を得てきたアメリカの宣教師組織である「アメリカン・ボード」と日本人教師との間に宗教と教育の問題、あるいは学校经营理念の問題についての論争が発生するなど、同志社は未曾有の混乱期に入っていく。運動部の振わなくなったこともそうした事情が大きく影響していたであろうことは容易に推察されるのである。

さらにはここに徴兵猶予に関する問題がある。明治以来太平洋戦争に至るまでの我が国の軍制の基盤は言うまでもなく徴兵の制度であったが、山県有朋が推進者となって明治6年に公布されるに至った「徴兵令」の時点から既に一方では教育の必要から就学者に対する免役を認めていた。この方針により公私立の学校に徴兵猶予の特典が与えられる中、同志社はキリスト教の学校であることを理由にその対象から除外されていた。軍制の未だ整わず徴兵令の実施も試行錯誤的であったころには、対外戦の想定にも現実味がなく、このことが学校経営上不利とは言え、決定的な影響を与えるには至らなかったようであり、また神の下に万民平等とするキリスト教精神からも同志社は敢えてこの特典を求めなかったと思われる。

しかし明治中期に至り、国力の増強につれて国家主義が主流となり軍国化への傾斜が始まり、日清戦争の前後より徴兵が強化されて行く中、この特典を賦与されていな

いことは同志社にとってはほとんど致命的なハンディキャップとなった。因みに、新島生前には一時1000名近くに達していた生徒数が、明治30年頃には350名程度までの激減を見ている。

このようにさまざまな内憂外患がまさに同志社存亡のバイタルな問題として次々と怒涛の如く押し寄せた新島没後10年余りの期間は、当然ながら同志社スポーツにとっても艱難期であり、三高との間の不調が起こった明治27年頃は、特にそうした苦渋が、部員の問題、指導者の問題、資金的な問題として目に見え始めた転換点であったとも解せられるのである。

その傍証として、明治28年より創設された、当時初の全国的規模のレガッタである「琵琶湖連合競漕大会」の第1回、第2回大会に同志社は対校クルーを出していないことが挙げられる。

この大会は三高教授として東京から赴任して来た野村弥三郎が提唱し、各方面に働きかけて実現したものである。野村はわが国ボートの育ての親、ストレンジ師の直弟子で、東大でも法科の選手をしており、まさにわが国のボート第一期生ともいふべき大先達であるが、「琵琶湖という絶好の水利を抱えてボートを振興させない手はない」という考えのもとに近畿圏在住の東大及び一高の学生、また著名人、有力者に協力を要請して実現させたものであって、大会の運営には多く三高学生が参加し、また使用艇には三高所有のものを貸与し、夏期休暇を利用して開催した。

折からの日清戦争によって海事思想養成の要を認めた海軍の後援もあり、多くの寄付も寄せられ、未曾有の規模を誇る大会となり、観衆一万余、出漕者数は数百名から千名近くにも及んだと言われ、各競漕の勝利者には賞牌（白銀丸形表面上部に『琵琶湖聯合競漕會』の文字があり、膳所城、唐崎の松、さざなみ琵琶の模様をちりばめ、裏面には枇杷の実の模様と『海國男子』の文字があった）が与えられた。

明治28年の第1回、29年の第2回に同志社が混合競漕（各校混成チームによるレース）用員としての参加のみで対抗クルーを出漕させていないのは主に前述の理由によるものと考えられるが、明治30年の第3回に至って勇躍ついに団体の対抗戦である責任競漕への出場を見たのは、同志社が苦難のどん底にあったことを考えれば正に驚嘆に値することである。先述した如く、この年はついに在校生徒数が三百数十名程度にまで減少しており、校勢自体が衰微の極みにあった頃と考えられるのである。特にこの頃は同志社に対して外圧が頂点に達した時代であり、ボート関係者達も何とかして校名と同志社スピリットを世に再認識せしめるの要を痛感したものかもしれない。

疲弊しきった学校財政の中、数々の苦難を超えて猛練習につぐ猛練習を重ねた同志社オアズメンは、この年4月、水上運動会の2日後、本願寺文学寮（現龍谷大）の主催大会への招待に応じて出漕し、滋賀師範（現滋賀大教育学部）、滋賀尋常中学（現彦根高校）の二校と対戦して勝利を納めた。この時のクルーは舵手塩津誠作、整調森光太郎、5番清水和三郎、4番都留信郎、3番石川弘、2番ト部八右衛門、艇艄小野寺寿雄である。さらに5月には尋常中学のメンバーが京都尋中の招待に応じて滋賀商業（現八幡商業高校）と対戦して勝った。この時のクルーは舵手松井万緑、整調都留信郎、5番清水三郎、4番ト部八右衛門、3番鈴木岡造、2番山本兵一、艇艄沢田実であった。

このように、数年にわたり衰退の嘆をなしたボートがようやくの思いでその年の春好成績を残すことができたため、連合大会への対校クルーの初出漕を決意するに至ったものと考えられるが、自信のほどはと言えば、半信半疑のようなことであったかもしれない。

当日の競漕相手として、同志社は当初二高（現東北大）あるいは四高（現金沢大）を希望しているが、その理由は不明である。今日その理由を推察するに、こうした大競漕会でなければ対戦できない遠来のチームと腕比べをしてみたいということであったかもしれず、あるいは官学を倒すことにより同志社のエネルギーの高さを世に示し、不利な評価をはね返そうとする意気込みであったようにも考えられるのである。さらに言えば当時まだボートには初心のこの両校ならば高等学校レベルでの戦いでも十分勝ち得るとの計算も働いたかもしれない。いずれにせよ衰勢いちじるしい当時の同志社は、出漕する以上は何としても勝たなければならないという、どん底での宿命を深刻に担っていたのである。

大会本部との数回の往復談判の後、二高四高との対戦はまとまらず、さらに交渉を重ねた結果、対戦相手は関東私学の雄、慶応義塾と決定した。選手層の厚い慶応は当時いくつかの端艇クラブを学内に有していたが、その中でも最強と言われる「赤（レッド）クラブ」が琵琶湖連合大会に遠征して来たのである。

同志社クルーは興奮と緊張にうちふるえた。慶応義塾・赤クラブ。相手にとって不足はない。勝ちたい。何としても勝ちたい。だが果してこの強敵に勝てるだろうか。新島の死後数年にわたり同志社のかじ取りに献身した小崎弘達は、その功も実を結ばず、ついにアメリカン・ボードとの絶縁に至り、この4月、その責を自から負うて辞任するに至った。目をおおうばかりの惨状の内に第3代社長兼校長に就任した横井時

雄の課題は内外共に孤立化の窮地に追い込まれている同志社を、社会的潮流に乗せて機運を興隆させることであり、それがためにまさに土俵際の必死の努力が払われていることを学生達も骨身に徹して知っていた。たとえ学生の余技の運動競技の試合とはいえ、ここでの勝敗がいかに大きく校名にかかわって象徴的意味を託されてあるかを痛感せざるを得ないのである。当時学生スポーツは今日のように完全に学業と分離したとらえ方をされておらず、却ってその学業・研究への肉体的・精神的エネルギーとスピリットの示し合いという意味を持った。ために対校戦においては選手はその学校の「榮譽を身に負」い（「同志社文学」）、試合は学校・学生にとっての「クリティカル・モメント」（三高「壬辰会雑誌」）であったのである。

連合大会の晴舞台において勝利せんか、官民ともに同志社に向けた軽視を反省せしむる力となり得る。敗れんか、同志社は既に力なく国情に添わずしてさらに凋落の一途を辿るものとして世間の目に映ずるであろう。

衰勢をたどった同志社ボートが、必死の練習で今年は好成績を維持しているとはいえ、強豪ひしめく関東の雄、慶応によく敵対し得るか、危ぶむ声の多かったろうことは想像に難くない。だが勝敗は戦いの後にこそ決する。同志社クルーはただ黙々と練習を積んでこの大試合に備えるのみであった。

慶応赤クラブは、名にし負う赤のユニフォーム姿で、悠々と湖面にその練習姿を映していた。同志社はそれまで通りの質素なる白シャツである。これを見ていた同志社女学校生徒は、その見映えの点においても敵に負けてはならじと乙女らしい闘争心を燃やし、大会直前になって一同相寄り、クルーの試合着たる白シャツに赤布を縞目に縫いつけた。それはレースの直前になってやっと選手全員の分が揃い、ここに史上初めて同志社クルーはユニフォームを着用しての出漕ということになったのである。

7月18日、千余名という未曾有の競漕者数をもって午前6時という早朝から開催された大会の様子は当時の大阪朝日新聞に以下のように叙述されている。

「阪本町交道館を事務式場、漕手休憩所に、樓上を來賓觀覽席、賞牌授与場に宛て別に交道館裏の浜辺にも來賓觀覽席を設けたり会場入口には国旗を交叉し緑門を作り審判船を始め各小蒸気船の満飾旗は翩翻として暁嵐に翻れり、連日の淫霖未だ全く霽れず朝来霏々の小雨に人々今日の天候如何を氣遣ひて易き心もあらざりしに天も亦多幸なる諸子が真情を諒としてやらん密雲いつしか散じ微風緩く湖面を摩して激漣鱗の如く競漕会には無二の好天気とはなりぬ頃て午前六時と云へるに号砲一発天に轟き当日の開会は報ぜられぬ開会式の順序は以下の如し一君が代の奏樂合唱、二折田会長の式

辞、三加藤主計氏の開会の詞、四委員総代高橋龍太郎氏の事務報告、五來賓祝詞、六委員総代皿井操氏の答辞、七奏楽、此に於て式全く終り競漕は始まりぬ、廻航競漕は交道館裏を発艇線となし四百メートルの沖合に繋げる小船を一廻して再び発艇線に帰着するなり直航競争は石場を発艇線となし交道館裏を決勝線となす其間一千メートルなり瀏唳たる奏楽は一発の号砲とゞもに健児の発艇を壮にし勇壮なる漕艇歌は舷を叩て朗唱せられぬ、午前は混合競漕にして午後第十四回よりは責任競漕なりと報ぜらるゝや漕者は何れも名うての選手なり味方の榮辱は懸りて雙腕にあり、日頃鍛へし腕前頭はさんも今日なるぞやと勇み立ち観衆は片唾を呑んでぞ控へ居る其昔し波斯王の驚きしオリンピヤの競技も斯くやあらんと思はれて勇しなると謂ふ許りなし決勝線を距る三四百メートルの所に達すれば観衆一斉に動揺めき立ち、アレー艇身イナ二艇身後れたり、急漕せよ、一舵外れたり、整調よ、舵手よ、舵軸よ、赤……白……緑……紫と連呼の声は潮の湧くが如くたうたうとして波間に響き号砲一発勝負決しぬれば勝者には交道館樓上に於て会長より名誉の賞牌を授与せらる拍手喝采は樓の上下を動せり……」

かくして数十番というレースが湖上に繰り上げられた後、午後6時過ぎ、当日最後の番組として報ぜられ、万余の観衆注目の内に静かに湖上に姿を現したのが赤のユニフォーム慶応義塾、そして前述の如く女学校生徒の即製になる赤白のユニフォームを着用に及んだ同志社のクルー、舵手塩津誠作、整調都留信郎、5番清水和三郎、4番渡辺節二郎、3番沢田実、2番ト部八右衛門、艇軸小野寺寿雄の7選手であった。明治の二大先覚者、福沢諭吉と新島襄の教育理念をそれぞれに体して、ここに東西私学の雄が直航1千メートルの走発線上に艇先を揃えた。

号砲一発、双方スタートに落度はなかった。そのまま両艇互いに引かず、どちらの有利とも見えぬまま並行して進む。まさにこの一戦に母校の命運を託して、見守る同志社学友は手に汗を握った。しかしクルーの力漕にもかかわらず、さすがに豪の者慶応は先手を許さぬ。300、400、500、まさに互角のがっぷり四つの態勢は揺ぎもせず、優劣なき力の均衡は何人にも勝敗の余断を許さぬ迫力で進行する。行程の中程を過ぎても両艇はスタートラインにおけると全く同様に並行し、永久に互角であるかと疑われるほどであった。さらに600、700へと力漕相拮抗を続け、あるいはこのまま無勝負かとの思いが観客の脳裏をよぎったとき、慶応の櫂先がわずかに乱れた。瞬間、微妙なる勝機を耽々とうかがっていた舵手塩津の間髪を入れぬ「ラストヘビー！」の号令が飛んだ。そのタイミングの貴重さは全クルーに電撃の如く了解された。勝利への軌

念が現実の自覚をもってクルーの身体を猛然と襲った。ついにリードを奪う。ここ数年来の汚名をすすぐときは来た。耐え続けて来た不振の口惜しさはここに至ってついに爆発。同志社ここにあり、万余の観客の目にももの見せてくれようとの思いがオールを折らんばかりの闘志となって火を吹く。追いつがる慶応。ラスト200、100。慶応必死の追撃も同志社の気魄に及ばず、同志社はついに三艇身差をもって決勝線に躍りこんだのであった。

4. 初期黄金期

この対慶応戦の勝利を契機として、同志社内ではボートに対して学園振興の夢を託する雰囲気が高まって来る。

この頃に至るまで同志社にはまだ自前のボートがなく、常に貸ボートで練習、試合



当時の選手

を行っていたのであるが、これはいかに財政上の困難があつたにしろ、不遇とせざるを得ないものである。先の三高との不和の際に、その挑戦に対して「若し短艇を一週間前より貸与せば応戦すべし」と答えたりしているのは少し痛ましい感さえある。

同志社が自前艇を持たなかったのは決して学校側の冷遇ではなく、ボートが盛んになるのに反比例するかのように学内の混乱と経営の困難が年々増して来たこ

とによるのであったろうが、経営不振のどん底たるこの頃に至って、決然自前ボートを同志社に設備せよとの声が澎湃として挙がってきたことは、まさにボートに学園振興の夢を託するムードが生まれていたからではないかと察せられるのである。この年の秋に至り、「同志社校友会報」第3号に次の様な広告が掲載された。

「

『ボート』新造費募集広告

今ヤ数百ノ健児皇居ノ北閑雅幽静ナル学窓に在リ灯火親ムベキノ候に際シ汲々トシテ日課ヲ修ムルニ余念ナシ彼等ハ天地ノ真理ヲ研究シ学海に覇權ヲ握ラントノ壮図ヲ抱キ寸陰ヲ惜ミテ励精スルノ氣慨アリト雖モ時ニハ洋々タル琵琶湖ニ舟ヲ浮ベテ壮遊ヲ試ミルノ快ヲ夢ミズンバアラザルナリ然リ我同志社ハ独リ智徳兼備ノ教育ヲ以テ天下ニ鳴ルノミナラズ体育ノ一事ニ於テモ実ニ榮譽アル歴史ヲ有スルモノナリ彼ノ『ベースボール』ノ如キハ五六ノ学校ト技ヲ比ベテ末ダ嘗ツテ敗ヲ取りシコトナク『ボートレース』ニ於テモ殆ンド関西ニ於ケル『チャンピオン』トナリ今年夏期ノ大競技会ニ於テハ好敵手タル慶応義塾ノ選手ト競争シテ名譽アル勝利ヲ得タリ是レ同志社健児ノ為メニ万歳ヲ唱フベキノコトニアラズヤ顧ミテ想フニ他ノ学校ハ多く自ラ『ボート』ヲ備ヘテ修練ヲ便ニシ經費ヲ節セリ独リ我同志社ニ至リテハ自ラ『ボート』ヲ所有セザルガ為メニ幾多ノ不便ヲ感ジ若シ此僣ニシテ過ギ行カバ健児ノ雄心ヲ沮喪セシムルノ恐ナキニシモアラズ今ヤ満校ノ生徒茲ニ見ル所アリ大ニ醵金シテ『ボート』一隻ヲ新造セントノ企図アリ吾人ハ此際同志社々員教員及ビ同窓諸君ニ訴ヘ更ニ『ボート』二隻ヲ造リテ生徒ノ希望ヲ達センコトを願フヤ切ナリ『ボート』二隻ノ代価凡ソ三百円決シテ少額ノ金ニアラズト雖モ我校ニ關係ヲ有スル諸君中ニハ有力者乏シカラズ若シ諸君ニシテ一片ノ同情ヲ垂レ賜ハバ今年中ニ三隻ノ新造『ボート』ヲ見ル敢テ難キニアラズ而シテ諸君ノ同情ハ必ズヤ健児ノ勇氣ヲ百倍スルモノアラン諸君願クハ吾人ノ微意ヲ容レテ応分ノ助力を賜ハンコトヲ

一、寄付金メ切ハ十一月三十日トス

一、寄付金ハ凡テ同志社内津下紋太郎宛ニテ御送付ヲ乞フ

明治三十年十月卅日

横井 時雄

安部 磯雄

津下紋太郎

」

この檄に応じて寄付金は順調に集まり、造艇計画は着々と進行、翌年春には早くも全三艇が竣工、4月13日午前8時、輝々たる旭光の下、春風にゆれる大津三保ヶ崎の豊かな湖面に新艇は進水した。

進水式には同志社の男女両学校の職員生徒が集い、加藤太郎松が司会、津下紋太郎が同志社水上運動会の小歴史を述べると共に新艇の設計及び経費について報告した。湯浅吉郎が新作軍歌を披露、そして安部磯雄が演説を行い、君ヶ代を斉唱して式を終了した。

新艇の名は懸賞募集に応じたものの中から選ばれ、それぞれ「阿蘇」「霧島」「浅間」と命名された。進水式に引き続いて開催されたこの年の水上運動会は、初めて同志社所有のこの三艇をもって挙行されたのであった。

自前艇を得て同志社はさらに奮起し、ここに初期黄金時代ともいうべき一時期を画することになる。その舞台は、明治31、32年の琵琶湖連合競漕大会であった。

まず明治三十一年の第4回大会の模様を「同志社校友会報」第5号に見る。

「『ボート』大会 八月七日は実に天清く風静なるの日なりき当夏校内に残れる二十有余名の生徒は昧爽京都を発して大津に向へり会場は三保ヶ崎にして諸種の準備行届けり番附を見れば混合競漕責任競漕打混じて卅二回あり而も最後の取組は吾同志社と大坂商業学校にして是ぞ其日の晴の勝負と見へたりけり昨年は吾同志社が慶応義塾に勝ち最後の大坂商業大津師範文学寮の競漕に於て大阪商業が勝を占めたることなれば昨年の勝者たる同志社と大坂商業とを取組ませたるは至当のことと謂ふべきなり

(中略)

同志社と大坂商業との競漕は午后六時前にして夕陽正に叡山に隠れんとするの頃なりき唯見る二隻の端艇汽船に引かれて沖に向ひつゝあるを緑は是れ商業赤は是れ同志社観客は何れも片唾を呑んで彼等を見送りつゝあり一方には大坂商業の応援として十有余隻の端艇整列し他方には同志社の声援として文学寮真宗中学彦根中学等の端艇控え其勢ひ凄じかりしやがて二隻の端艇並列し一発の号砲の下に出発するや殆んど八九百メートルの処までは優劣なく進み来りたり漸く千メートルに近づかんとする時双方共「ラストヘッピー」の号令を発す此処半分間にて雌雄の決する処なるが故に観客何れも手に汗を握り「緑進め」「赤進め」の声盛に起るゴールに達する前十間位の所にては吾端艇敵を抜くこと殆んど一艇身なりしが敵もさるものにて死力を尽して進みしたため稍之を回復せしも奈何せんゴールに達せしときは尚ほ半艇身の差を生じ見事に吾校は栄誉ある勝利を得たり吾人は今此栄名を負ふたる選手の名を記せざるべからず

舵手東勝熊、整調都留信郎、五番清水和三郎、四番ト部八右衛門、三番ト部京三郎、二番大塚英雄、艇舳北脇作治郎」

校長横井時雄は、当時同志社衰退の決定的要因であった徴兵猶予に関する問題を解

決せんものと最大限の努力を払うことを決意し、ためにそれまで不易として守り抜かれていた「同志社通則」の一部変更（キリスト教教育に関する信条を政府の意向に合わせて手直しする）を社員会で決議するに至ったが、この決定が引き起こした波紋は大きく、全国校友からの大反対、宣教師団からの訴訟問題にまで至った。結局この問題は、通則改正によつて徴兵猶予の特典を得た後、横井辞任、通則復旧という綱渡り的な形で解決を見るに至るのであるが、結局人柱的犠牲者となった横井は連合競漕大会のこの時点において、まさに満身創痍の状態の内に来会し、同志社クルーに声援を送った。大阪朝日新聞に以下のような雑報がある。

「・去年の競漕会には本願寺文学寮も出でしが新法主の熱心中々にて始終汽船に乗りて之を見其艇の過ぐる時は宛ながら狂人の如く船上に躍廻りて之を励ませしも見事打負けしかば其腹立にや今年は出でざりしと

・新法主の熱心に劣らぬは同志社の横井校長にて自らも他のボートに乗り書生に操らせて競漕艇の後より随ひ之を励ませしかば幸に勝利を獲其喜言はん方なりしと

・其日最後の競漕は即ち横井校長の熱心なりし時にて艇は大阪商業と同志社の二艘なりし去れば観客の轟屑は右と左の真二つに分れ赤よ緑よと叫び天地も崩れん許りにて両艇も何れ劣らぬ速力なりしが僅かの差にて同志社の勝なりしは大阪商業に取り返す返すも残念なり」

この年の末、横井時雄社長兼校長は一連の混乱の責任をとって辞任する。「同志社五十年史」に曰く

「終に十二月二十八日社長横井時雄氏はじめ社員一同総辞職をした。……此の事件に因り、一般の宗教学校までが徴兵猶予の特典に均沾することになった。……同志社は其通則の一部を削除して之を条件として特典を得、既に之を得るや一年にして、三十二年二月十八日に至り復た之を復活したから、形式上恰も文部省を欺いたようなものである。然るに日頃威信を重んずる官庁が其僣にしては置けぬと口のみは云ひ乍ら、之を黙過して矢張其僣特典を継続して居たのは、其処に何等かの事情があったに相違ない」

ここで言われる「何等かの事情」の内容を察することは困難ではない。「同志社九十年史」で分析されている如く「維新以来の国民の要望として米国との間の不平等条約改正の政策の進められていた折柄、政府としてもアメリカン・ボードと同志社の法廷の争いは、反動の波に乗って基督教主義という一点に拘わって同志社に徴兵猶予の特典を与えていないということは、欧米諸国に日本が未開発国であるという印象を強く

するものであ」ることを政府が慮ったからであろう。3年後には「日英同盟」が結ばれるという時点であった。

このようにしてともかくも長期にわたった難問の一応の解決を見たことは、同志社全体に光明をもたらしたに相違ない。同志社スポーツにも好影響が及ばされたものの如く、この年、明治32年の連合競漕大会において、同志社ボートは黄金期のピークを示す活躍を見せるのである。第5回大会である今回、時事新報社が優勝旗を寄贈し、これを争奪する「優勝旗競漕」が番組の最後に設定された。この競漕への出漕クルーは2度のセレクションを経て、新潟中学、高知中学、同志社と決定した。大阪朝日新聞はその戦いの模様を以下のように伝える。

「右の優勝旗競漕は恰も午後六時四十分には始まる、三艇何れも今日を一大事と操櫓勇しく審判船の下に近寄れば審判官より何かコックスに注意する所あり頓て、此の船に引かれて発艇点に至り遙に一発の号砲と共に進行を始むれば水には数十隻の声援艇舷を叩いて思ひ思ひに競艇の後を追ひ陸には数千の観衆哄声を作りて之に応ず斯くて四五百メートルの処に達する迄は青（新潟中学）赤（同志社）二艇両々相列びて進み来れりしも如何にかしけん青は少しく櫓を高漕ぎせし為か赤は早くも其先を制して半艇身をぞ抜いたりける青も劣らず猛進したれど赤の力や勝りけん決勝点にては殆んど一艇身半の差にて見事赤の勝と為り名誉ある優勝旗は遂に同志社諸氏の手に落ちたり」

この競漕において同志社が記録した千メートル4分51秒の漕破タイムは当時日本新記録であり、まさに同志社ボート初期黄金期を象徴するものであった。すなわちこのレース自体がそれほどハイレベルでの死力を尽したものであったということであり、破れた新潟も「さすが豪のもの、決勝点に入って気絶したものもあり、權に食らひついて泣いて居ったものもあった」と記録されている。このときの同志社クルーは、舵手大西猪之助、整調都留信郎、5番清水和三郎、4番ト部八右衛門、3番井上竹次、2番鈴木吉満、舳手北脇作治郎であった。まさに絶頂期のシックスであるが、中でも整調都留、5番清水の名は関西ボート界に鳴り響いており、この二人が出ると聞けば出漕する他の学校は凡て震駭したと伝えられている。

優勝旗獲得の快挙は遠く米国留学中の同志社出身者の元にも報ぜられ、彼らから祝賀状が届けられた。

「拝啓在北米エールの同窓生たる我等一同は過般琵琶湖上の端艇大競漕会に於て我同志社選出の健児諸兄が名誉ある勝利を占められし事を承り欣躍の情に堪へず候我等常に当エールの学生間に於て運動の盛なる状態を目睹し私かに我日本邦人体育の振は

ざるを慨し居たる事に候へば此捷報に接し転た我党の為に意を強ふする事に御座候幸に諸兄が此一捷に甘ぜられず活発なる精神と靈妙なる智識と堅忍なる主義とを以て遂に中原の鹿を獲るに至られんことを偏に希望の至りに不堪候当夏以来同志社の刷新に就ては実に天下の耳目を惹き居ることに候へば何卒校内同窓諸兄の御自重御奮発を相願度万祈此事に御座候敬具

明治卅二年十月

中瀬古六郎 三宅亥四郎 河邊治六 山口精一 横山昌次郎 牧野寅次

この頃の練習ぶりを追憶した文章が明治39年の「同志社時報」第22号に載っている。

「当時の練習振りは如何であったかと云へば唯一つの逸事ですらよく察することが出来ると思ふ。それは練習中キャプテンが中々厳格なので、一本のオールの入れ方と雖も決してゆるがせにさせない、練習が余り厳しいので或る選手はとうとう手が破れてしまって、血が出て一本も漕げなくなった。然しキャプテンは練習を欠かす事を許さない。で其選手は酷い手を我慢して泣く泣く漕いで居ったが、たまらずとうとう夜逃げをした。処が直ちに又捕まへられて泣く泣く漕いで居る内、遂に金をたゞく様な音のする腕になったそうな。

斯の如き苦心をした結果はどうか、実に当時集まった東西の選手を驚倒せしめたのである。それは我選手のボートが一度び襴の水音勇ましく進み出すやトップから二番の背まで舳で切る泡沫が飛んだそうである。そのみでない舵手のシートに両舷から波が躍り込んだと云う事である。何と凄まじい腕前でないか。さすが新潟中学も舌を巻いて驚いた。何れの学校も同志社と組むのを避けたと云ふことである」

5. 武徳会競漕会時代

「大日本連合競漕会」は明治34年より武徳会が事業を承けつぎ「大日本武徳会競漕会」と改称した。これに伴い、これまでの試行錯誤的な運営から大会規程も整えられ、期日は毎年8月4日、距離は1100メートルの直航と定められた。

競漕は普通競漕と名誉競漕に分けられ、普通競漕の勝者の中から、審判長がタイム等を参考して優秀と認めた数艇を選んで、争覇戦とも言うべき名誉競漕を行い、勝者に優勝旗が授与されることとなった。

この名誉競漕への出漕者の決定法について、同志社は当初より疑義を呈していた。

「同志社校友会報」第9号に言う。

「番組編成に就ては委員間に種々異論ありし様なれども結局不完全なる調査によりて實力の匹敵せりと認むるものを組合はす事となり我同志社は耶志摩俱樂部となむ呼ぶ一烏合の団体と組合はされたりされど我々は普通競漕に勝利を得る位は勝利と思はぬ事なれば、名譽競漕は如何にして行はるべきかと注視せり、從來に於ては勝艇と勝艇と相争ひ最勝者を定むるものなれば實力あるもの月桂冠を得る訳なり然るに此度の名譽競漕にははかゝる公平の法を用ひず各勝艇中最も時間少なくして決勝点に着せしもの三艇を択ぶこととなりぬ、言ふまでもなく是れ甚だ不満足なる選定法なり若し時間を以て定めんとならば二艇三艇宛競漕せしむるの要なし、十艇十五艇を一時に試むるも妨げず、蓋し競漕は戦争なり機に応じ変に処し敵艇の短を窺ひ虚を衝きて勝を争ふもの此処舵手の掛引整調の技量を要する次第にして況んや一日の中風位風力同じからず波動亦随て異なるをや單に時間を標準として優劣を定むるの不合理なる明かならずや」

というわけである。同会報には別項において、大会運営委員の一人が「此度は同志社に勝たせたくなし、毎年毎年同志社に勝たれては他の元気を沮喪せしむ」と洩らしたことが記されており、また「大日本武徳会」という日本精神の権化的団体がキリスト教主義の学校にどういふ評価をしているかを勸案すれば、微妙な懸念を感じざるを得なかったように思われるのである。

文中に記されている「耶志摩俱樂部」はまさに趣味的初心のグループであつたようで、レース前より勝利を期するにも至らず「せめて二十本ついて行ければ満足である」とコメントしていた。案の定そのレースは

「スタートに於て約半艇身の利益を敵に与へ五六本にして忽ちぬきとりずんずん進みて二丁も三丁も終りには四丁も五丁も懸隔を生ぜり、是れレースにあらず」

とあり、

「知らず委員は何の見るところありて此組合せをつくりしかを」

とさらに記されている。その後の経過は次のようである。

「かくて我選手は各メダルを受けて直ちに本陣に帰り、めざせる午後の競漕の為に布団引きかぶり休息しぬ、普通競漕は全く了りて暫時休憩となりなぐさめ競漕は遂に始まり、されど我選手に向ふて未だ審査官より次の名譽競漕を促がし来らず、なぐさめ競漕は了れりされど何の通知もなし、一同不思議に思ひ居る中、島根師範、滋賀師範、滋賀商業が名譽競漕の選に当りしとの事にて我輩は茫然手中の珠を取られしもの

感なきを得ず、実に呆気にとられて言ふところを知らず、直ちに宿屋の払ひをすませ最後のレース終るや否やボートハウスの飾を撤して帰途につきぬ我鍛へに鍛へたる漕手の腕は遂に名誉競漕を試むるの機を失ひしなり。法外生は当日の呼び物となり優勝旗を争ひし三艇の優劣を細評し最後に『青（滋賀商業）は体力漕力共に他二者よりも劣て居た様に見受けた、然し櫂の揃った処は第一であった。ともかくレースとしては青の代りに同志社選手を加へたならば、……』と云ひき、又朝日新聞は『名誉競漕に同志社と京都第一と島根師範とを組合したら随分面白い目覚しい勝負を見たらうか……将来は東西大学の委員等が感情をすてゝ面白く目覚しき勝負を見せる事に注意して貰ひたい』と注文せり。」

同志社落選の理由はその漕破タイムが6分15秒という平凡なものであったため、さらに優秀なタイムを出したクルーが他に多かったというようなことであろう。しかしこの時は逆風であり、また余りの大差であったことを併せて考えれば、タイムの低調はある程度無理からぬこととすべきである。過去の実績を含め総合的見地からすれば同志社落選は不当というのが大方の感想であったようで、当の審査官の一人も次のような談話を残している。

「余は白艇（同志社）を以て名誉競漕の候補艇となすには躊躇せざりし故に其名誉競漕に加はるを得ざりしは一般観覧者と共に白艇の為に余の遺憾とする所なりし」

しかしながら、ふだん同コースを4分20秒台で楽々漕ぐ力を持っていたクルーにして、いかに逆風とはいえ6分15秒というのは余りにかかりすぎであったように思われる。敵の初心に乘じ、名誉競漕に備えての体力温存であったことは明らかで、一応タイム優先の大会規程を了解している以上は失策とみなされてもやむを得ないであろう。この時代に至って学校スポーツとしてのボートは各地に急速に伸長しつつあり、武徳会大会においては過去の連合大会の頃と比べて、官庁や企業の出漕数は減り、代って各地からの学校の参加が急増して行くのである。このささやかな油断による失敗を境として、以後同志社ボートが徐々に衰退して行くことを、当時どれほどの人が予想し得たか疑問である。「過去をして過去に葬らしめよ、今は来年の名誉競艇選定の法に些の遺憾なからむことを希ふのみ、因に言ふ来る可き短艇大会の為に我校は已にチャンピオンを選定し彼等は此冬期の休課を唐崎に於て寒風凍波を相手に送りつゝあるなり、いでや来年の手際を見られよ！」という校友会報の樂觀に反して、翌明治35年、武徳会大会の普通競漕において同志社は新進の鳴根第一中学校（現松江北高校）に敗れを喫した。

「嶋根第一中学は新進気鋭の選手にして、其力量といひ手腕といひ今回の競漕会中第一流の定評あるもの、此選手を以て我が勇士に対す、其当日第一の観物たることは観者一同の許す所にて御座候、既にして両艇汽船に牽かれ行くや、満場動揺めき渡り殊に盛なる応援の声は我が同志社に向ひて揚られたり、而も同志社に縁故あるものゝ応援は小子とト部君と他に二三あるのみ、……号砲一発、スタートの令は下りぬ、我が勇士のスタート甚だよろしく、ピッチは三十四五にして極めて沈着に甚だ有功なる潜力にて幾分か先きを制して航程の半迄来り申候、此勢を以て終りまで進まば勝利は我が選手に帰すること疑ひなかりしなり而かも是からが運命を決する大事の場合にして其潜力を最後まで持続するや否やは元気如何によるものなりしが悲むべき哉我が選手は戦正に耐ならんとするに臨みて気既に死し神疲れ、バック足らず、船脚遅く、之れに反して嶋根中学は平生熟練の功愈表はれ来りて一漕は一漕より強く、ロングヘビーは有力なる急漕となり而して姿勢態度一毫も乱れず、正々堂々決勝点まで漕ぎつけ申候、同志社の方にては常々我慢強く意気天を衝く慨あるリーダーも今日に限りて余力を濫ぎ尽くして些の余力を遣さず、三番の幾戦場を経来りたる鉄腕剛骨を以てするも如何ともする能はず総崩れにて姿勢乱れ遂にラストヘビーを施すの余裕なく殆んど二艇身余後れて敵に名を為さしめ申候、此の如くにして敗軍の将となり、此の如くにして優勝旗競漕に加はるを得ず、一同血涙を呑み鉄腸を断ち屈辱を嘗め申候、勝敗元より兵家の常とは言へ彼等の心事誠に憐む可く候、御推量可被下候、我が選手は其責任を果さゞりしを思ふて学校に対する面目なしとて遺憾遣る方なき様子に候」（「同志社校友会報」第11号）

連合大会時代を含めて、同志社は初めてこの大会で敗戦した。前年からの選手がメンバー中ただ1名しか居なかったことも一つの原因ではあるが、全体的な流れから見ると十数年前からの同志社危難の時期を乗り越えて来たハングリー精神と緊張の糸が、このあたりで切れてしまった感がある。これに対してボート界には次々と新進が参入する時代となり、もはや先達としての技術的、精神的優位が力を失って来たと見るべきかもしれない。これ以後同志社はしばらくこの大会に出漕しない。

この頃から徐々に、同志社ボートは対校戦勝利よりも言わば学生の健全趣味たることを主たる目的とされるようになって行つたようである。

その一例として、この頃から秋季に「饅頭レース」が行われるようになっている。これは本来対校選手がその後継者を見出すことを目的に、それぞれ舵手となって各艇に乗り、有志漕手によって行われたレースであったが、実際は純然たるレクリエーシ

ョンであった。敵を打倒する気概のようなものは薄れているが、温和で協和的な同志社カラーの始まりとも思える微笑ましいものであった。「同志社校友会報」の記録の中からその二、三を拾ってみよう。

明治34年

「新元気は校内に満てり、活動は学問上にも宗教上にも又將た運動上にも始まれり。来年の短艇競漕大会の用意として十月十二日の土曜に校内の健児打ち連れて唐崎に饅頭レースを試み『チャンピオン』は舵手として各艇に乗り込み其継続者を見出ださんとす、会々西原社長来校せられたれば其参観を乞ひぬ、広川、山口、大塚諸教授も赴かれたり、老松の翠影濃かなる辺、百余の健児秋晴を弄して幾番の興味饒き「レース」をなし勝者は誇り顔に饅頭を食ひ敗者は頭かきかき苦笑するなど亦面白し黄昏の頃一同帰校す、此日女学校の生徒も女教師に導かれて来観したりき」

明治35年

「十五日唐崎にて饅頭レースを行ふ、此日天晴れて三尾の楓葉花よりも紅なる時なれば杖を西山に曳きしもの多くして来会者僅か五六十名に過ぎず、人々三四回のレースをなし勝ちて饅頭を食ひ負けてまた饅頭を食ひ饅頭に満腹して夕方引き揚げたり、実は此レースは前週の土曜即ち八日に執行の筈にて委員は七日より其用意をなし八日には早天細雨なりしも午晴を望みて饅頭を大津に買ひしに不幸にも陰雲益々湖面を圧し来りて壮士空しく天を望みて浩嘆するより外なく遂に夕方使を学校に致し明日レースを行ひたしと申し来る、生徒間の重もなる人々大塚氏の宅に集まり評議の末、日曜日にレースを行ふは同志社の生徒として避く可き所なれば饅頭の価は有志の教員にて寄附しレースを一週間延期すべしと決定したり、さて此決定の旨を電報や車夫を使として申遣るは面白からねばとて来会者中の二人自ら奮て其使者たらんといひ遂に夜九時、焼きめしを背負ひ、例の赤毛布を被り、終日ふりしきりて泥濘滑かなる而かも月黒き夜道を冷風細雨を衝きて出発せり、見送りし或人は何となく落涙を催せり、彼等は午前一時過ぎ鍵屋に着し来意を委員等に告げしにいづれも寢所より飛び起き来りて二人の朋友を迎へ歓待其情の未だ足らざるを恐るゝが如くなりしと、かくて是迄一個も手をつけずして護衛しつゝありし饅頭の箱を開き盛んに快食したりしといふ、其風想見するに堪へたりと云ふべし」

明治39年

「これは秋季水上運動会の別名であって、レースで勝てば紅白の饅頭をドッサリ呉れるからである。それから饅頭レースは唐崎の老松の下でやると成文律になって居らぬ

けれど、チャンと極って居る。去る十月十三日は即ちその日であった。

会場は既に委員が整へてあるから、漕手はその朝大抵白川越をして唐崎に下りる、或は山科街道をとった者も居る。唐崎は何となく風流だ。志賀の浦風がそよ／＼と吹いて来る湖面を見ると、ゴールのフラッグが飄々として波上に躍って居る。開会は午前十時であった。此の日は特に各級責任競漕をやったから随分の賑ひであった。三年級対二年級、一年級A対同Cなど面白い競漕であった。勿論春の大競漕の様な事はないけれど、之の饅頭レースは一種の特色を持って居る。それは家族的ボートレースとでも云はうか、兎に角非常に和気藹々である。閉会したのが午後三時。茲に是非とも特筆して置かねばならぬは当日号砲の大半は銃の代りに唐崎神社の大太鼓を合図に打ったことである。堂々の響が鳩の海づらに聞えて寧ろ詩的だ。然しボートレースの発着の合図を太鼓でドーンドーンとやって平気で居る処なぞこれ純同志社的だ。吾輩は此の日これが一番気に入った。天気は秋の飛切上等であったから、多くの教師諸氏や女学校の姉妹も来り会して中々の盛会であった」

同志社のスクールカラーは衆知の如く「古代紫」と言われるものであるが、これが定められたのもこの頃であり、まずそれがボート部のために製作されたことは同志社オアズメンにとって名誉とすべきことであろう。明治35年、春季水上運動会の優勝者、2年級クルーに送られた優勝旗がそれである。

「六月二十五日朝礼拝堂に於て片岡校長は左の優勝旗に関する規則を朗読し新たに高島屋より調へ来りし優勝旗を満校生徒の面前に於て二年生端艇選手の総代に授与せられたり、満場拍手して之を祝す。優勝旗の地質はシホゼにて色合は古代紫其大きは縦二尺三寸横三尺三寸にして中に優の一字を白く出だし縁に美しき絹糸の飾りあり、竿は黒塗にして竿頭には三寸余の光鉞爛たる鎗の穂先きを嵌め実に美事なるものなり。今後同志社のボートレース一段の盛を加ふる知る可きなり。

優勝旗ニ関スル規則

第一条 本旗ハ本校端艇部漕技奨励ノ為メ特ニ設ケタルモノニシテ毎年举行スル処ノ春季水上運動会ニ於テ各級選手競漕ヲ行ヒ其優勝艇ニ授与スルモノトス

第二条 本旗ノ所有権ハ第一条ノ競漕ニ於テ之ヲ定ムト雖モ一ケ年間保有シタル後次期ノ運動会ニ返付スベキモノナルヲ以テ使用スルコトアルモ汚サマル様注意ス可キ事

第三条 本旗は常ニ事務所ニ於テ保管シ使用ノ節ハ其都度部長へ届出其許可ヲ受クベキモノトス

右

明治三十五年六月

同志社端艇部

」

片岡校長手づから、この歴史的な同志社シンボルを授与された幸運な7名は榊原哲文、石井虎太郎、磯田留三郎、町田進一郎、中島兼次、町田甚太郎、吉田清吉であった。

明治37年、滋賀師範との対校レースを行い、一度はスタートの不利で破れた後、後日別の機会の対校戦で滋賀師範に雪辱したという記録がある他は、当時余り対校戦を行うこともなかったようで、水上運動会、あるいは湖水周航等の記録が残るのみである。

明治37年春に行った湖水周航は1日目が唐崎から勝野、2日目が勝野から塩津、3日目塩津から彦根、4日目彦根から長命寺、5日目に唐崎帰着という経過であった。クルーは、舵手松岡一男、整調大林政雄、5番芝貞光、4番池本甚平、3番中島兼次、2番山口実、艇舳磯田留三郎であった。この年、春季水上運動会の優勝者は5年級クルー、遠藤英二郎、町田進一郎、稲岡二郎、池本甚平、中島兼次、石井虎太郎、小栗栖六郎である。

明治39年の水上運動会では4年級が優勝、クルーは河上英彦、小谷益次郎、中川健次郎、蠣崎敏雄、西野盛衛、弘中慶一、佐藤信温である。

この明治39年に至り、4年ぶりに同志社は武徳会大会に出漕、期待を集めたが久方ぶりの大レース、選手は初陣の者ばかりというわけで、レースを有利に運びながら痛恨のコースミスで「舷々相摩す」の大活劇を演じた結果破れ去った。クルーは河上英彦、小谷益次郎、松岡一男、大原隆美、八木由三郎、蠣崎敏雄、北脇春吉、弘中慶一。あまりに残念なこの敗北に、ぜひともこの汚名を雪がんと翌明治40年、クルーは一大決心のもとに大会に出漕した。当時の選手の一人の残した記録がある。わずかのリードを保って進む内、

「六百メートルの辺に来てから少しく此方のオールが鈍って来た様に思っている所に敵は悠々と後から抜かんと試みるので、気が付いたと同時にヘビーの号令が下った、漕手は一生懸命今度敗けては校友諸氏に対して、我校八百の兄弟姉妹に対して済まぬといふ考へが絶えず頭の中に往来して居ったからあらむ限りの力を出して泣いて漕いだから見る見る間に一艇身は抜いて仕舞った。夫から少しくすると又もや抜かれそうになったが、再びヘビーの号令が下った時には最早決勝点に近き事僅かに三百メート

ルに足らないのであった。此時も難なく抜いて実に痛快であった。

漸く迫れば難なく抜く、実に見る者をして手に汗を握らしめたるは吾等の競争であったとの事だ、漸く決勝点に近き事百五十米突の辺に来るとラストヘビーの号令が下ったので潛力を余ます必要がないからあらむ限りの力を絞り出して漕いだところが、敵も思切ったのか気拔がしたと思はるゝ程彼等のヘビーはきかない様に見えた」

かくて責任競漕には勝った。しかし

「如何に思ってもあきらめが付かない、実に残念であった。其れも敵が思ったよりも弱かったので、何しても力一ぱいに漕いで居ったが、艇が進まない為に五分七秒かかった」

そしてわずか二秒の差のために、優勝戦たる名誉競漕に出漕することができなかったのである。

失策、不運も実力低下の証と言うことはできる。しかし直前まで堂々と覇を唱えていた我が同志社が、武徳会大会においては優勝どころか、名誉競漕への出漕さえ、一度として果すことなく終わったのはいかなる因縁によるものかと嘆ぜざるを得ないのである。

第2章 雌伏——低迷に耐える

1. 学園安定化とボート

先述した如く対校争覇の列からはしばらく離れながらも、スクールスポーツとしてのボートは同志社内において益々隆盛の道をたどって行く。時あたかも原田助が社長兼校長に就任、同志社の混乱期に終止符が打たれ、ようやく安定のきざしを見るに至った頃であった。

原田はこの好機を生かし、校祖新島の宿願であった大学設立を果たすべく運動を開始する。「同志社九十年史」には次のように記されている。

「原田は就任後もっぱら同志社の内外関係を調整して、その友好を深めることに力をそそぎ、原田の就任と時を併わせて校友会の発起により、社運の発展に協力支持するため同志社維持会が組織され、五月東京で開催された全国教育大会は創立者新島襄を明治時代における日本の六大教育家の一人として顕彰し、翌年十二月帝国教育会からは教育上最も顕著なる功績ある私立学校として同志社に功牌が贈られるなど、明治中期に社会的弾圧をうけた同志社も、時勢の進運につれて再び脚光を浴び、校運も次第に上昇を始めた。原田は大正八（一九一九）年一月辞任まで十三年の永い間安定した社長の座にすわるようになった。就任の年の『年度報告』の末尾を『吾等が此報告書に略述したる一年間の同志社は多年の難境より漸く脱却して光明の境に入らんとするの徴候を示したりという可ならんか、内は理事及び職員協同一致して校運の挽回に勉め、外は校友及内外社友の熱誠なる同情あり、吾等は過去一年の経歴に就て深大なる皇天の恩寵を感謝し更に新なる希望を以て将来を迎へんと欲するものなり』と結んでいるところ、当時の実状語り得たりというべきであろう。

四十三（一九一〇）年四月原田はエジンバラに開催の世界宣教大会及びアメリカン・ボード百年記念会に参列を兼ねて同志社大学資金募集の目的を帯びて欧米を歴遊し、欧米諸大学において講演をして、エジンバラ大学からドクトル・オブ・ロース、アー

モスト大学からドクトル・オブ・ディウィニティの名誉学位を贈られるなど、英米の学界に広く同志社の名声をあげる上に大きな功績を築き、アメリカン・ボードとの関係の回復にも努力して明治四十四（一九一一）年二月帰朝したが、原田の欧米行によって海外の同志社に対する信用は意外に大きいことが認識され、彼の外遊前から校友、理事、教職員の間に論じられつつあった同志社大学設立の議は、次第にはっきりした構想となって盛り上り、水崎基一、古谷久綱、三宅驥一等が先鋒となってこれが推進に奔走し、四十四年十一月理事会も満場一致、四十五年四月を期して大学設立の議を決定し、理事、校友、社友、教職員中から委員を選んでその準備、計画を進めることになった」

こうした安定発展期にあつて、同志社は生徒数も増えて来たために、ボートも対外的意味よりも学内充実に資するということが自ずから求められるようになって来たと考えられるのである。無論これは第1回水上運動会のときから同様の主旨であり、またその効果を挙げてきたものではあるが、一度混乱期を乗り越えてきたものであるだけにその意味合いがさらに深まった感があるのである。

明治40年、舵手森宗定、整調宮本興、5番芦田亮、4番白井季吉、3番北脇春吉、2番西岡啓太郎、舳手平野直樹の3年級が春期水上運動会において優勝、翌41年の「同志社時報」第41号には次のような記事が載った。

「

端艇新調の計画

端艇部に於ては兼て新たに製造の議ありしが愈々左の通り全国の校友諸氏に訴ふることゝなれり

拝啓春寒の候益御清栄奉賀候扱十数年前諸君の御高庇の間に製造致候ボートは爾来之を利用して琵琶湖上我同志社の雄名を轟かし来り候年々と共に老朽して殆ど使用に堪へ難く相成候随て生徒も進みて操舵を試みる者少なく為に昔日の如き好選手を出すこと能はざるは頗る遺憾と存ずる所に御座候旧勢の挽回且又奨励の一策として一昨年来武徳会競漕大会に出漕致居候へども前述の如き老朽の船体にて今日に至りてはもはや之が練習さへ出来難く相成申候依て今回同情ある諸君の御寄附を仰ぎ取敢へず三隻丈新調目下の急を補度候間何卒贊助の上奮って御寄附の程願ひ上候尤も造船費としては約八百円余の金額を要し候へば其積りにて来三月末日までに御寄附の金高御通知に預り度候若し直に御送金被下候御都合に候得ば同志社会計下里貞次郎宛に御願申上

候草々頓首

明治四十一年二月

同志社端艇部委員

原 田 助

宇 野 重 喜

福 井 大三郎

」

先に挙げた明治30年の同主旨の広告と比べて、今回のものには前回ほどの意気壮んといった印象のないかわりに、どことなく余裕のようなものがうかがわれる。読む側には当然周知の社長兼校長の原田の肩書が「同志社端艇部委員」となっているのも、形式上妥当のものとの判断によるものと察しられつつも、どこかに微笑まじさが覚えられるのである。

募金も前回に増して順調であり、2月のこの広告に対して4月には既に1隻が完成、「比叡」と名づけられてOBにより試漕が行われている。「愛宕」「鞍馬」も相次いで完成、5月22日の春季水上大運動会当日、大会の開会に先立ち、進水式が行われた。君ヶ代斉唱の後、原田校長の演説、宇野運動部副会長の祈禱、そして吉郎・湯浅半月作「進水祝の歌」を生徒一同で歌い、各艇に花籠を持った女学校の少女を乗せて進水、150メートルばかり漕ぎ出して帰着したという。

次いで行われた水上運動会の模様については詳しい記録が残っており、当時の同志社ボーイのおおらかさがよく映されている。

「第十三回は当日の見物であった。四年五年専門校のレースであった。何れも劣らぬ者ばかりで、各級に去年の夏の大会に出た選手が二人ずつ其の運搬役を務めて居るので、実に面白いレースであった。専門校は第一コース、五年は第二コース、四年は第三コースに就かむとして、徐々として進みつゝありしが、其の艇舳揃ひたれば出発点までは少しの距離ありたれども号砲は鳴り響いた。専門校スタート好からざりしが、其のスタートヘヴィー好く其の功を奏し、直ちに他艇を抜く事一艇身余、加ふるに舵手の号令其の時を得益其の勢を強めた。然るに五年如何にと顧みるに、不幸にも其航路を和船の為に遮ぎられ之と相触れて少しく舵器を損じたる為め中止したり。故にレースは専門校対四年となった。依然として専門校は四年を抜き居たるに、最早決勝点近くなった時に、汽船其の間に来て双方相見る事の出来ない様になった。専門は依然勝って居るものと思って居たのに、豈計らむや、決勝点に百米突近くもなった時には、早や一艇身ばかり後れて居たから、ラストヘヴィーをかけて抜かむとしても、万

事休す遂に僅かに尺余の差を以て決勝点に入る。即ち審判旗は四年に掲げられた、四年の要せし時間は六分三十六秒。次に來賓競漕を二回行ひ、それより直ちに優勝旗レースを催したり。然るに少々責任競漕に於ける五年の不幸より紛議起り、為めに時間を徒費したる故を以て少しく遅くなった。

優勝旗競漕は三年対四年である筈であつたけれども、五年の例令第一着にても優勝旗を受けずとの条件の下に、優勝旗レースに加はり度しとの望を容れ、三艘レースを行ふ事に決した。

汽船に引かれて発艇点に至り、相並で合図を待つ。合図と共に漕ぎ出したが、三年見る間に後れて四年の敵に非らず、さながら四年対五年のレースとなった。其の中に五年も亦後れ、遂に其の俤にて決勝点に入る。茲に名誉ある月桂冠は四年級選手の頭上に落ちたり。四年の要した時間は六分十七秒、時に午後八時優勝旗と共に原田夫人より贈られたる賞品を受領せり。

優勝旗を得たる四年級選手は左の如し

舵手	柏木邦太郎	整調	山根	基	5番	森口	潔	
4番	山野	良吉	3番	白井	季吉	2番	鴨脚	憲
艇舳	小林	修亮						

」

翌明治42年、3月26日より琵琶湖周航を行う。これは全校に参加者を募り、応募者多数の内から選抜して5隻の艇をもって挙行した。途中猛吹雪に遭い、一部警察の世話になるなどして、決して順調とはいえない経過であつたが無事漕破。こうした多人数で行われた周航は、まさにスクールスポーツとしての定着度の高さをよく示しているのである。

この年の水上運動会では大会途中であまりに第三コースばかりが勝つためにコース設定に疑義が起り、審判長の意見により途中から二コースに一艇身、三コースに二艇身のハンディキャップを与えて続行するという珍しい方法が取られている。この年の優勝クルーは五年級であり、舵手大橋宗四郎、整調山根基、5番小路虎三郎、4番鴨脚憲、3番神明万次郎、2番山田庄太郎、艇舳児島重太郎であつた。

この年、艇庫が開発予定の「第二疎水」の工事予定地域に該当したため移転せざるを得なくなり、尾花ヶ崎に新艇庫が建設されたため饅頭レースも同所で新艇庫落成記念レースとして行われた。

明治43年、前年と同じく3月26日より29日まで湖水周航を決行。37名が5艇に分乗

しての周航であった。前年のように猛吹雪に襲われるということはなかったものの、春先の天候の不順な時節であることに変わりはなく、強風、強雨、また濃霧の中、一部艇の行方不明騒ぎなどもあり、またもや交番に協力を願う場面があった。しかし結局全員無事帰還、周航記は次のように結ばれている。

「此の行や実に艱難の行であった。而も其の艱難に勝利を得、凱歌を唱へて目出度く帰ったのである。此の事が将来吾人が白髪の老人となった時に話の種となり、亦脾肉の嘆となるのである」（「同志社時報」第65号）

4月10日には帝大大会に出漕し、第五中学（現桂高校）と対戦、初心の敵とはいえ150メートルの大差で勝利。昔日の威力こそ保たずといえ、十分にその基礎力を示している。

5月13日の水上運動会は悪天候のためと接触トラブルのため優勝戦を翌日に行い、結局専門校の優勝となった。舵手大橋宗四郎、整調松岡一男、5番山中平次、4番木安望、3番杉本正男、2番麦生陸郎、艇舳明田重義であった。

この年には原田校長の外遊などもあり、また悪天候のため、水上運動会はいささか盛り上がりを欠く質素なものであったと記録されている。

また秋の饅頭レースも同様に来会者のはかばかしくなかったことが記されているが、これははボートの人気が落ちたということではなく、ボートというものが学生間ではもはや一般化して初期の頃ほど特別な感覚のものでなくなり、日常的な楽しみとして愛されるスポーツになってきたことによるものであろうと思われる。そうした雰囲気はこの年の饅頭レースの記録はよく映し出している。

「此の会は題目の通り饅頭レースと吾人は呼んで居る、何年頃から此の会は起ったか知らぬけれども中々歴史は古い様に聞いて居る。前には唐崎でやる事になって居ったが四十年から大津に移したのである、然し其のやり方は今も昔も異りは無い。誰れ彼れの区別は無く、レースに出度い者があれば何遍でも出る事が出来るのだ。それで殆んど番組の必要は無いと云っても差支は無い。委員が前の晩十二時までも眠いのを我慢して作った番組も駄目になって仕舞ふのである。然し夫れかと云って作らずに置く訳には行かない。

こんな風であるから自然競漕も実に面白く、敵と云ふ観念がある様で無く、無い様で有ると云ふ様な訳で、勝って賞品を貰っても負けた者と一所に食って楽しむのだ。此の日もそんな風で実に面白く、人数は少し、饅頭は予定通りに作ってあるから沢山余つた次第、大に漕いで大に食って、実に愉快に此の会を行ふ事が出来た、只残念で

あったのは人が、俄かの天気であったのでもあらふ、少かった事であった。

最後に尚一度漕ぎ度いと云ふ者計り集めて見たけれども僅かに一隻しか出来なかったもので、仕方無く会を閉ぢんとした処が独漕すると云ひ出したからやらす事にした、敵が居無いので奇麗に漕いで見せられた。是にて愈々仕舞ひにした、時にまだ午後二時過ぎだった」(「同志社時報」第70号)

翌明治44年4月、同志社は三高大会、帝大大会に相ついで招待を受け、これに応じて出漕するが、どちらも京都二中(現鳥羽高校)に惜敗している。

この年の水上運動会は原田校長の帰朝後でもあり、天候にまづまず恵まれたこともあって女学校生徒の応援あり、また来賓も多く盛会となった。主な競漕の勝利クルーの名が姓のみ記録されている。

・対寮競漕 東寮舵手田中寮長、西寮舵手榎本寮長、北寮勝利一舵手原田、整調松岡、5番品川、4番植田、3番山下、2番上野、艇舳日下部

・5年級対級 Bが勝利一舵手吉田、整調小島、5番田中、4番谷口、3番臼杵、2番美濃部、艇舳大林

・1年級対級 Bが勝利一舵手佐伯、整調池田、5番村田、4番古市、3番千葉、2番伏原、艇舳河田

・3年対2年 3年勝利一舵手及川、整調石田、5番國府、4番溝川、3番北村、2番中西、艇舳下間

・三高在学学校友対補習科在学学校友 三高在学学校友が勝利一舵手大岡、整調南部、5番高橋、4番神明、3番小島、2番行宗、艇舳山崎

(補習科軍舵手田中、整調村上、5番谷、4番渡辺、3番島本、2番俣野、艇舳坂本)

・3年対4年(優勝旗レース) 4年級勝利一舵手大庭、整調安川、5番北脇、4番小西、3番亀山、2番野村、艇舳三浦

」

この頃の同志社学制は5年制の同志社普通学校(旧制中学に相当)、その上級学校である4年制の同志社専門学校、さらに女学校、神学校という形であったが、普通学校から官公立上級学校へ進学する者のために、卒業後官公立学校の入試のあった7月までの間、受験のためのクラスが設けられていた。三高在学学校友と競漕した「補習科」はつまりこれである。

HISTORICAL SKETCH.



大学設立の頃の同志社

2. 大学設立とボート部

翌明治45年、校祖新島が「大学設立の旨意」を発表後24年の歳月を経て、専門学校令」による「同志社大学」が成立した。これは同志社専門学校と神学校を合併したもので、予科、神学部、政治経済学部、英文科よりなる小規模のものではあったが、同志社の草創からの宿願の達成であり、学生、教師、校友、その他関係者にとってまさに至福の時であった。

大学成立とともに大学ボート部も発足したことになるが、実際には非力な同好会程度のものにすぎなかった。このように有名無実のボート部をともかくも部としての体裁を整えて一応の形に作り上げて行った過程を、大学一期生塚本純一が昭和11年の「後援会報」に追懐談として載せている。

「私が同志社に入学したのは、明治四十五年で、其の当時は、端艇部と言っても名ばかりで、誰が選手だか、責任者が誰か、従って、部長もなければ、理事もキャプテンもない、烏合の集団でしたのですから、入部の何のと言ふ事もなし、勿論勧誘して入部さすと云ふ事ありません。

初めの内は、二三の学生が石山に行くべく、普通部のボートを引出し、それが次第に部らしくなり、部長に、普通部のボート部長の福井先生を引出し、形式だけを作り、くり出したのですが、尾花川の艇庫も廃物のやうな艇庫ですし艇も三十八呎位の小型で、水は入るし、オールもない、色々の物を集め、練習を初めたのです。

その当時の選手と言ふのは、現在奉天の朝鮮洋行に居る京口謙一郎、京都に居る亀甲金次郎、その他山本宅三、西村伍一等の諸兄で、先日なくなった林孝一氏も選手でした。此等の選手諸兄は、部費を一ヶ年六百円位受けて、自分が理事と云ふことになり、しかし、誰が選挙したのでもなければ、学校から命令があったのでもなく自称です。それでいて大津で勝手に練習に行き、又は合宿等もして練習しました。

当時の先輩としては、帝大の大國先輩が居られたのみで、コーチとてもなく只馬力で進めていました。しかし、当時の練習は、尾花川から先づ石山へ直行三日月で五銭



当時の大学部員

の飯を食って乗艇して、石場の浜へ来て、千匁百米を引き、それも大抵三四回は引きました。艇庫へ帰ると夜の八時頃、それから家に帰って夕食、今から思へば、よくもあのやうな事をして、誰一人落伍する者もなく、勿論不平一つ言ふ者もなしに、四年程を終りました。

しかしその間戦ふ相手とてはなし、

他校の仕合に出た位です。部費が少なく、艇の修理は古い故に多額にいたので、とても練習費は出ず、何から何まで自費です。止むなく、大正三年の夏に、学校に相談もせずに、四十一呎の艇を三艇作りました。金額も一艇が三百五十円でしたが、艇庫が三十八呎の艇庫で入らず、前の方をつき出して一時の間に合せました。そして、製氷会社の前で進水式をやりました。

これが私が端艇部に居る内の仕事位です。そしてこの金も支払出来ず、福井先生に御願ひして、大正五年に卒業して、端艇部にお別れした次第です」

5月25日、大学発足後の水上運動会には原田校長も自ら職員レースに舵手として参加、大いに生徒の声援を呼んだ。

大学クルーは「鞍馬」に乗じて普通科4年（愛宕）、同5年（比叡）と対戦。1位は5年で2位の4年艇との間に大差を生じ、「兄貴分の大学は殿軍の光栄に浴した」（同

志社時報)。

優勝旗競漕も5年級の勝利となった。舵手大場詮、整調安川鐵藏、5番北脇末吉、4番山本寅太郎、3番亀山克一、2番松尾一男、艇軸日下部純一であった。

校運の隆盛に反して、同志社ボートの不振が延々長期化して行ったことの原因は、やはりハングリー精神の喪失とすることができよう。学園は安定化し、生徒・学生の数も増加し、使用艇・設備等の条件面でも最盛期のそれをはるかに上回りながら、不振は大正期に入っても続くのである。

こうした同志社ボートの衰勢を惜しみ、あるいは嘆く声はこの頃数多く記録されている。

「同志社時報」大正2年6月号は、不振打破の一助として三高生から「操艇術概要」と題するアドバイスの寄稿を受けたものを掲載しているが、その前書きとして大國寿吉の次のような文章が載っている。

「同志社といへば関西の覇者であった。慶応の選手が一たまりもなく敗れて帰った事もある。然し之は一昔の事、今はどうであるか吾輩遺憾ながら強いとは云ひ得ない、同志社の端艇部の先輩山本民三郎君の如き今でも遥かに吾方に書を寄せて「母校の端艇部如何」と問ふ、同志社端艇部員諸君、諸君の先輩は猶諸君の事を自分の事の様に気にして居るのである。諸君は先輩の残した立派な同志社端艇部の歴史を汚さない様努力せずばなるまい、福井部長より吾輩に御依頼があったから三高の深谷伊夫伎両氏に執筆を囑して左の操艇術概要を得たのである。簡単なれども要を得て居る。

之を読んで益々研究せられたい。

然し吾輩から一つ諸君に申上げる事がある。漕艇に漕艇道ありとは由来吾輩の信条である。漕艇を以て単に体育のみと考へないで深く見るのである。要は physical discipline より進んで mental, moral training に及ぶのである。基本を忘れて技術の末に奔るなどいふのである。部員諸君が「彼は立派な男也何となれば端艇部員なるが故に」と云はるゝ様になった時は業已に同志社端艇部は再び関西に覇を称して居る時である。諸君心身共に健在なれ」

三高生深谷徳郎、伊夫伎直一の筆になるこの「操艇術概要」の第一節は「漕艇道」と題し、当時の学生のボートに対する考え方が述べられている。

「武士に守るべき武士道ある如く、漕艇家に漕艇道がある、学生が艇を漕ぐのは技術を上達せしむるが第一の目的ではない、技術は第二で技術よりも寧ろ漕艇により精神訓練をなすが第一の目的である。無意味に漕艇をやるのでもない、また面白半分に娯

楽の為にやるのでもない精神を磨く為に漕艇をやるのである。武士が精神、意気を重んずる如く、漕艇家は意気を尚ぶのである。如何に巧みな漕手と雖も精神的方面に欠点あればそれは立派な漕手と言へない。寧ろ技術は拙くとも精神の立派な人がよい。諸君もよくこの点を考へて頂きたい。

漕艇をやれば精神的方面にいかん利益を得るかと言へば先づ第一観察力が緻密になる。水流、風波、其他種々の天候を常に観察しまた他の漕手に就ても常に注意を払ふから自然に観察力を養ふことが出来る次に忍耐力が強くなる。舵手の命なれば自分は如何に苦くとも矢張漕かねばならないから、忍耐力が強くなる。これが社会に立つても必要であるから常に今の内から養っておかねばならない。事の成不成概ね我慢の二字に帰するのである。第三は機智にたけることである。競漕の勝敗は極く僅の分数で決し秒時を争ふのであるから常に敵の状況を窺って臨機の処置を執る必要がある。それで機智にたけるようになる、次は冷静になることである即ち落ちつきが出来るのである。頭の冷静といふことは大に必要で、少しも感情に走らず敵の状態を判断するには冷静が必要である。最後に共同の精神を養ふことが出来る、これは野球でも庭球でも蹴球でも同じことだが、漕艇の方が早道ぢゃないかと思ふ。其他利益は沢山あるが余り我田引水になるから此の位で止めるが要するに我等が社会へ一歩踏み出せば必ず必要な精神を養ふことが出来るのである。

故に諸君は是れからは娯楽と思はずに熱心に精神修養に努め即ち漕艇道を会得し而て後、漕艇術を学んで頂きたい」

言わば一つの精神論であるけれども、まさにそうした精神的なものこそが、当時の同志社ボートには求められていたのかもしれない。

この年京津電車の開通により、水上運動会はなかなかの盛会であった。招待競漕のために三高をはじめ六校を招いているが、招待者同士のレースのみで同志社自身はそのどれとも対校戦を行っていないことについては淋しさを禁じ得ない。

この大会における学内優勝は普通学校5年級であった。舵手近藤誠三、整調笠松辰造、5番荒尾信太郎、4番石田米一郎、3番服部祐一、2番中西順三郎、艇舳西沢弥太郎である。

大正3年には新艇「鳴」「桂」「淀」を建造、10月11日、進水記念運動会を挙行政した。この頃同志社は大國寿吉に多大の指導を受けており、ここでも新艇の取扱いに関する懇切なる諸注意を記した書面が来着、式中に朗読された。

この記念大会で漕手名の記録に残るのは予科同士の対戦の勝利者である一クルーの

みである。舵手小川、整調上田、5番田中、4番関、3番竹内、2番西村、艇舳大江。

職員レースでは普通学校側が勝利したが、対戦クルーは次の通りである。

普通学校—金子先生、藤田先生、浅野先生、純田先生、岡田先生、小縣先生、福井先生
大学—波多野先生、組谷教授、阿部教授、学沢先生、水崎教授、末弘教授、嶺岸教授

生徒・学生の増加及び京津電車開通で便が良くなったために来会者が多くなったことによるのであろうか、場所狭隘を理由に大正4年からは水上運動会は石場ヶ浜で行われるようになった。選手名の残るレース記録は次の通りである。

普通学校1年級ABC Cが勝利

舵手岡田、整調石場、5番吉川、4番鎌田、3番黒田、2番楽、艇舳小島

大学経予科対英予科 英予科勝利

舵手飛田、整調前田、5番大賀、4番河本 3番吉田、2番小林、艇舳永田

普通学校3年対2年 3年勝利

舵手海辺、整調矢野、5番大久保、4番日下部、3番横田、2番清田、艇舳小野

神学部対英文科 神学部勝利

舵手平田、整調上野、5番上出、4番小林、3番原、2番丹羽、艇舳寺沢

職員レース 福井軍勝利

舵手福井先生、整調鈴木先生、5番藤谷先生、4番浅野先生、3番佐々木先生、
番山縣先生、艇舳小山氏（校友）

大学本科対予科4期 本科勝利

舵手亀甲、整調安川、5番菅、4番野村、3番美濃部、2番河原、艇舳松本

優勝レース大学本科対普通学校4年 普通学校4年勝利

舵手植田惣七、整調大倉三郎、5番加藤貞寛、4番近藤鷹馬、3番有田志朗、2
番李鐘駿、艇舳益江憲吾

同志社普通学校は翌大正5年「同志社中学」と改称。これを機に水上運動会において優勝レースは中学、大学別々に行われるようになった。

この年には初めて学友会の対部競漕が行われ、音楽部と弁論部が対戦。レース前音楽部は部員達の合唱に励まされ、また弁論部の舵手片桐は艇上に立ち上がって一場の演説をなして士気を鼓舞するなど華やかなものであったが、レースは音楽部の勝利となった。

舵手飛田、整調橘、5番吉田、4番橘、3番川中、2番吉川、艇舳露口

その他の主なレース結果は次の通り

予科一期AB A勝利

舵手島田、整調和田、5番高橋、4番大沼、3番井上、2番村尾、艇舳瀬尾

野球部対蹴球部対青年会 蹴球部勝利

舵手北脇、整調露無、5番美濃部、4番有田、3番諏訪、2番大脇、艇舳鈴木

中学3年対2年 3年勝利

舵手吉川、整調大角、5番馬場、4番清田、3番木村、2番喜多、艇舳岡本

予科4期対1期 4期勝利

舵手岡本、整調渡井、5番二の宮、4番村津、3番上田、2番広瀬、艇舳前島

職員レース 中学部勝利

舵手久永教師、整調鈴木教師、5番浅野教師、4番田崎校友、3番前窪教師、2番重松教師、艇舳深井教師

(大学ー舵手和田教授、整調村上校友、5番藤谷教授、4番蜷川教授、3番組谷教授、2番園教授、艇舳浦口教授)

神学部対英文科 英文科勝利

舵手飛田、整調橘、5番大賀、4番陳、3番吉田、2番鈴木、艇舳石田

大学優勝旗レース 政治科対経済科 経済科勝利

舵手弱甲金次郎、整調上田清次郎、5番安田一、4番井尻進、3番松本談井、2番西村伍一郎、艇舳菅巖男

中学優勝旗レース 5年優勝

舵手青盛繁男、整調大倉三郎、5番加藤貞寛、4番李鐘駿、3番有田志朗、2番広瀬香一郎、艇舳益江憲吾

このように水上運動会のみならず、ボートは同志社の学生スポーツとして盛んに愛好されてはいるものの、対外的競技としては低迷を続けた理由は、ボートルーイングそのものの持つ特殊性によるとも考えられる。

即ち、趣味のスポーツとしてはこれほど爽快な楽しさのあるものも少ない反面、競技としてとらえたとき、これほど苦しいスポーツも少なからうと思われるということである。これはどのようなスポーツもそうであろうけれども、特にボートにおいて顕著な特徴であり、それ故競漕の道に秀でるためには尋常ならざる厳しい打ち込み方が必要になるのであり、ひとたび内外共に認められ、評価を得た同志社の学園自体の安定化傾向が、そうした競技へのこだわりを望まず、文字通り英気を養うレクリエーションとしての快を取ることにボートの意味付けをして行くようになったのではないかと推察されるのである。

しかしそうした傾向が一般的であったにしろ、輝かしく誇らしき伝統は、それ自体が自己主張し、その伝統の延長線上にある者をしてある義務感、強制力のようなものを自認せしめるものである。大正5年10月1日付「同志社時報」に載った「運動各部の消息」に、数行、次のようなコメントが見える。

「短艇部に至りては昔湖上の覇者として天下に轟きし我同志社の影だになく、競漕界には殆んど忘れられつゝあるが如きも、一般学生の短艇趣味は盛んにして毎土曜日には艇庫に残る船なく時には遠漕の壮挙さへ行はるゝを見る、されど湖上に於ける昔日の同志社を再び呼び起す健児はなきか？」

こうした声がある一定の期間においては「同志社時報」に掲載され、競漕界における同志社ボート復活への待望論は常に根強く維持されて行く。

大正6年の水上運動会では大学レースのみ漕手名が記録されている。

文科対神学部 神学部勝利

舵手平田甫、整調上野義一、5番原忠体、4番上出雅孝、3番高橋重義、2番野間辰次、艇舳寺沢愛之

優勝レース経済科対神学科

大正7年は中学優勝は4年

舵手杉浦義人、整調岡田友貞、5番馬場龍雄、4番喜次一三郎、3番山本健吉、2番久保喜夫、艇舳西条信之

大学神学科対英文科 英文科勝利

舵手福原勤之、整調橘威、5番飯森寿、4番陳清忠、3番渡辺勇、2番中村弥三郎、艇舳石田龍介

大学優勝レースは英文科棄権により経済科独漕

舵手関目成通、整調綱島信一、5番喜多一二郎、4番松井七郎、3番青山彦五郎、二番小林芳郎、艇舳北脇鴻造

3. 大学対校クルー編成

この大正7年、長い眠りからやっと覚めたかのような動きが同志社ボートに起こった。京都一中出身の青山彦五郎、関目成道は同じ中学出身ということで親しくしていたが、また青山は柔道、関目は陸上競技長距離というように両者共にスポーツマンであった。

ある日、どちらからともなくボートのことに話が及び、その頃ほとんどなかった対外試合に出漕できるクルーを編成してみようということになった。以後両者は積極的

に人選、呼びかけを行い、ついに大学の対抗クルーを編成した。大正7年5月、水上運動会前後の出来事である。

運動部等から選り抜きの猛者を糾合したこのクルーは、6月、御影師範（現神戸大教育学部）と対戦、これを破って初陣の功とした後、7月2日より凛々たる意気を抱いて琵琶湖周航を行った。

強者揃いのクルーの中でも最も向う意気の強かった渡辺勇は、「琵琶湖周航の歌」など唄いながらやって来る三高生に出会すと自ら突き当たって行き喧嘩を始めるという血気の男子であった。当時のクルーの一員であった八木重兵衛は、渡辺がある時腕に大怪我をして帰って来て医者手術を受けたのを憶えていると語っているが、その渡辺がこの時の周航記を残している。大学端艇部初代対校クルーの記念すべき周航記として次に掲げる。この頃流行した感冒のために当時同志社学内でも数名の死者が出るという出来事があったらしく、渡辺の文章はそのことに触れて始まる。

「『塚も動け我泣く声は秋の風』猖獗を極めし悪性感冒の吾が学徒の四五をしてとこしへの故郷へ拉し去りたる今日俳聖の句に涙を流す者は翻って自己身体の頑健なりや否やを考えざるを得ないであろう。肉体的弱者は必ずしも精神的弱者であるとは言ひ得ないけれ共精神的強者であるためには必ずや肉体的強者でなければならぬ。吾が短艇部選手の多数が肉体的にも精神的にも強者であると誇り得ると同時に如何にそれらに対して努力しつゝあるやの一端を得意の笑と経験の苦しみとを持って語る事の出来るのを喜ぶのである。

降りそゞいだ霖雨もなごりなう晴れて紺碧の空に東山の端より西山の嶺まで一点の浮雲をも見出す事の出来ない7月2日の朝元気に満ちた体を三条京津電車停留所へ運んだのは関目理事を始め青山君、綱島君、松井君、永田君、小林君、平瀬君の猛者連に僕を合せ8名であった。予め関目君の注意により防寒、防雨具、足袋、繃帯、ビスケットそれに地図、磁石、天幕ロープ、ランタン等用意し来りし荷物をボートに積み込み朝風に艇旗を翻えしながら『練習第一』の周航中の金言を守りつゝ堅田へと向った。戴く海水浴帽の正面には墨痕あざやかに同志社マークが描かれてある。吾々が同志社に学ぶ以上そのマークに対しては満腔の敬意を表さなければならぬ。僕は嘗てさる知名の教育者より夏帽に附すべきマークの位置に関して『校章は須らく正面に附すべし』と聞かれた事があった。夏帽に関してさへかく論ぜられて居るのに吾が同志社学生の中でハンテングの横にチョイとマークの附しあるのを見る時には非難の声をあげる前に皮肉の笑を發せざるを得ない。

碧満々たる湖水を眺望すれば『唐崎の松は花より臍にて』の一句に尽くるべくもあらず。しばし美景に酔ふて叡山を見れば『夏山に足駄を拝むかどで哉』に興を添えざるを得ない。堅田沖まで一万二千米、時間二時間のノーストップ。劈頭第一に此の猛練習に快哉を叫びながら順風に帆を上げて讚美歌高唱。四百四十九番を歌ふて『母の憂』ならざらましと祈る。近江舞子の雄松に上陸、八名全部裸体である。裸一貫程原始的なものではなく原始的なものの程気持のよいものはない。そこには虚栄もなければ虚飾もない。『太陽は思想を嫌ふ』と言ふが実は真夏の日を浴びて砂上に立てば思索もなければ冥想もない。唯活動あるのみである。座してビスケットを喰ひ、立って砂上を走り、入って水中に泳ぎ、渴して湖中の碧水を飲む。束縛もなければ牽掣もない。自由そのものであり、平和そのものであり又自然そのものである。快哉を叫ぶ程度を超して唯走り泳ぎ喰ひ飲むのみである。漁夫の綱引あれば句あり。

夏の日や 躍る魚の 琥珀かな

大溝まで力漕を続く。白髭神社の前にて夕立沛然として来り、続いて突風の襲ふありて艇の進行遅々たるを得なかった。黄昏大溝着。湯に入れば窓の星笑ひ明日の快晴を告ぐ。食後、青山、平瀬両君の尺八あり興移りて戸外に出て歌ふ。歌ふ所のものは和たるを問わず洋たるを問わず、名曲もあり童歌もあり。声はこれ拙なけれども天を呑む気現るればこと足れるとなすのである。声は天地に響いて銀河躍ると見れば湖水に漁火あり譟と静とを合して茲に壮大なる一大現象を描出したのである。三日七時上艇、貴重品を第一に荷物ことごとく積んで出発、貴重品の種目は地図、磁石、バース、万年筆、カメラ、本など。それに綱島君の魔法瓶。湖水の碧水飲みあかした後は魔法瓶の茶湯を飲む。八人のもの体は異れども心は一つとなれば船は凧ぎ切ったる大湖の真唯中を指して進む。藤樹書院の方向に敬礼。白石島遥沖に鷗とまがふばかり。これより所謂琵琶湖にて大津にて見る小琵琶湖とは比する事さえも出来ない。竹生島までの航程一万五千米。此の間二千五百本ノーストップ時間二時間半。竹生島見え初めて遠く、島影近づけば去り去ると見れば又近づき、直ちに到着する事は出来ない程距離は大である。渺々たる湖上に微な一艇が目ざす目的にまっしぐらに進み行くその様、遅然として而も確然として、如何にそれは人生の功事にも似てなつかしいではないか。ボートレースがある以上ボーテングなるものは体育的のものでもなければ遊覧的のものでもない。即ちレースに於て勝つためのものである。ボートレースに勝つ必須要件は頑健なる体軀と鞏固なる意志とである。吾々がスポーツマンとして立ったのは此の二大要件をそなへて居らなければならぬ。天下に名をなし功事を百世に伝ふるものは

必ずしもスポーツマンでないかもしれぬがスポーツマンたるもの必ずやそれらに値する功事をなし得るプロバビリティーを有するや明である。ボートレースに於ける吾々は漕ぐその事のみが目的である。それ自身が目的である行為程正直なものではなく正直程力強いものはない。されば僅か五分間内外に於て吾々の全精力は傾注せられ全思想は統一せらるゝのである。特に最後の一分間たるや六人の漕手は各自のすべてを放棄し残るものは根柢のみである。そこには空間もなければ宇宙もない唯自己のみである。否自己と宇宙とが一つとなる時であるかもしれぬ。その場合に於てスポーツマンとして最も強き力を出し得るものは精神の確立したる者即ち死ぬまで離し得ざるあるものを握り居るものである。此の点に於て同志社の学生たるものは必らずやそれらの修養を積まざるべからざると同時に同志社チームが覇を唱へ得るプロバビリティーの大なる事を喜ばねばならぬ。目下同志社各チームの不振は練習不足と不統一にあると云はれて居るのに対して、吾がボート部は反駁の声をあげると同時にそれらの誤点に対して反省熟慮して、来るべきボートシーズンに於て覇者たるべき用意に腐心して居るのである。徒に伝説に老ひ行く竹生島は千古の緑を碧なす湖水に湛えて折りしも来著せんとせしプリンスコンノートの奉迎に急しかった。艇は竹生島を後に屈ぎに屈いだ真夏の湖水を長浜へと急ぐ。艇の人は舷をたゞいて吟じ歌ひ碧水に泳いで快哉をさけぶ。真夏の楽是以上なるものはないであろう。とかくして又『練習第一』の金言実行。湖水は碧々として帆の白きを写すのみ。真夏の午後の島の湖。人は酔ふて歌ふ事なく唯凄壮に打たれて黙するのみ。『自然を見て雄壮だとか偉大だとか崇高だとか人格上の言葉に翻訳し得ないものは自然がその人に少しの感化を与へて居らぬものである』と言ふた人の言を思ひ出して、出来るだけ自然の感化の多からん事を願ひつゝ長浜着。旅舎の側に力士の石像あるを見て元気な平瀬君一層元気となる。夜星づく夜に浮かれて昼の疲れも日にやけた体の痛も忘れて街中散歩、元気な歌に元気な歩調、長浜の人は驚いて見つめる。偉人が絶大なる精力を持して一走りに走りさりし後を愚人が驚異の眼を見はる様に。夜中に蚊の入りて睡られぬのに起き上りて蚊帳を裏がへしてせしなど滑稽の裡にも友情の暖みを感じたのである。

四日、彦根へ空腹を覚へ『喫飯第一』をさけびながら上陸城趾を見て井伊氏の苦心の末を偲ぶ。城中の梅、枇杷など頗張りながら長命寺へ。

暴風来りて艇危き事限りなし。健児の意気堪え忍ぶ事三時間、気晴れて湖畔の新緑鮮なり。多景島を過ぎ沖の島を通りて長命寺着最後の夜とてトランプにて興を添ふ。夜中雨の音を聞く。

五日、雨中堅田へ六百本の力漕、此の間太湖汽車と競争、疲れ切った体も、いざとならば、血を見ずには納まらぬらしき形勢まで漕ぎつけたるは勇し。堅田にてまづい飯を頬張って艇庫へ。叡山が見え出せば松井君、網島君、長田君など元気づいて一時帰庫、京都へ帰れば三条の旅館連『御泊りやす』を連発。閉口の裡に誇の顔を高めりて各自の宿所へ帰った時に『凡て善き樹は善き実を結ぶ』事を心の中で祈った次第である」(「同志社時報」第159号)

こうして湖上に十分な英気を養い、また練習を重ねた大学クルーは、休暇が明けると進撃を開始する。「大学端艇部第二学期報告」は次のように記す。

「今年五月始めて選手を編成して練習を開始した吾が部は六月には関西に於ける中学界の雄、御影師範を破りたるを初陣の巧として其後練習に余念なく夏期休暇には琵琶湖周航を決行して秋のシーズンに備へたのである。

九月の学期が始まるや選手は休暇に養ひ得た新たな精力を以て猛練習を続けたとしてその猛練習の結果は次の様にして顕はれた。

九月二十八日 京都第二中学水上大会に於て京医専と戦つた此日吾等は作戦上メンバーを変更して予科を主として編成した彼も亦選手不揃ひであつた為め試合は予想通り最初から大接戦であつたが吾が最後の力漕功を奏して半艇身の差を以て勝つを得た。其選手は次の如し。

C小谷 S青山 5北村 4平瀬 3北脇 2山中 B今井

十月二日 京都市立第一商業学校のレースは石場浜に行はれた、吾等は京医専の挑戦を快諾した彼に取つては雪辱戦であるからベストメンバーを以て必勝を期してゐる吾も亦之に対して充分な準備を以て応じた午後三時半両軍は見事スタートを切つて吾れ先づ三十七のピッチに上げば彼又三十六にて追及して来たがバットリングに移るに及んで吾が力漕よく利きて彼に一艇身を先んじたミッドルに在るや彼先づピッチを上げて快復に力めたが漸く乱れ始めた之に乗じて吾等は一糸乱れぬラストに移り五分二十八秒四艇身の差を以て悠々ゴールに入つた当日のメンバー左の如し。

C関目 S網島 5渡辺 4松井 3青山 2小林 B北脇

蓋し当日タイムの遅かりしは風浪の爲めである。

十月二十七日 大阪高等工業学校レースは控訴院前に举行せられた吾等は招きに応じて大阪高等商業学校と戦ふ事となった。午後三時スタートを切つて始めより吾れ優勢にして常に先頭にありミッドルヘビーを行ふに至つて五艇身の差を生じ終に十艇身の差を以て決勝線に入つた其のタイムは四分三十六秒であつた。選手の氏名は左記の

如し。

C関目 S綱島 5 渡辺 4 青山 3 北脇 2 小林 B林

」

(「同志社時報」第159号)

まさに昔日の同志社ボート復活の兆を表して十分なる戦績である。しかしながら惜しいかな翌八年に青山、関目が卒業したため、対校競漕での活躍は再び頓挫をきたすのであるが、復活の容易ならざるを覚えたとはいえ部員の意気の高さは近来にないものであった。

4. 淡路周航の決行

こうして新生なったにもかかわらずその意気の発揮場所もなく勃々たる闘志に苦しんでいたところに降ってわいたのが、同志社ボート史上に残る「淡路周航」の話で、部員達はこれに飛びついた。初めて母なる湖水を離れ、海上に同志社健児の精神を示す機会を得たのである。この話は毎日新聞社から持ち込まれたものであるが、航行の難所として知られる鳴戸の渦潮を片々たる手漕ぎボートで漕ぎ渡ろうというのは余りに危険であり、今日ならば海上保安庁の許可はとうてい得られないであろうと思われるまさに暴挙というべきくわだてである。まずは実現不可能な計画というべきであろうが、先に挙げた剽悍の渡辺などがリーダー格となっているクルーは躊躇なくこれに応じ、勇み立ったのである。

これを聞きつけた大学当局はあわててこの暴虎馮河の非を悟らしめるべく、学生を説得に努める一方で学生の各家庭や関係者に電報、急便を発して大騒ぎとなった。

波穏やかな琵琶湖においてすら、遠漕の際に過去幾度か警察に世話になったこともあり、また十年前に発生した逗子開成中学の七里ヶ浜の惨事が今なお「真白き富士が嶺」の唄と共に語りつがれている状況である。大学のこうした反応は決して過剰なものでなく、むしろ当然すぎるほど当然のものであって、その説得に応じなかった学生こそ、今日公平に見て蛮勇のそしりを免れ得ないと考えられるのである。

しかしながら既に騎虎の勢に乗じたクルーを止む手だてはなかった。

このときクルーの内の一人が、恐らくは家庭の強硬なる反対の故であろうが参加できなくなり、代わりに加わったのが、今日艇友会の超OBである八木重兵衛である。八

木は当時卒業論文作成のために部を離れていたが、そこに参加の依頼が来る。そのあたりから八木の談話によってこの「淡路周航」を振り返ってみよう。

「私の卒業論文のテーマは『中国の税金』。中国の税制はややこしいのですが、その論文を書いている最中でした。一番を漕ぐ人がある事情で行けなくなったのでピンチヒッターを務めてくれと言って来た。『卒論にかかっているので行けない』と断りましたが、『先輩が来てくれないと、この計画が中止になる』とたつての頼みで、とうとう引っぱり出されました。

この計画がどういう経緯で立てられたかは、私は当時部を離れていたので知りませんが、ボート部と毎日新聞社の間で以前から話が進められていたもののようです。それにしても手漕ぎのボートで鳴戸を越えようというのは危険だなと思ったのですが、『他に頼む人がない』と言われてやむなく参加したのです。

出発の際は、毎日新聞が太鼓や楽器を集め、盛んに出発式をやってくれました。ちょっと恥ずかしかった。疎水の取水口のところです。そこへボートを浮かべて、太鼓を叩き、楽器を鳴らして大いに宣伝をかねた壮行会をやってくれました。

集まったのはボート部の者、毎日新聞社の人たち、楽団員、近所の人たちでした。大学側は反対の立場だったので、一人も来ていませんでした。

私は身長はあまり高くないが、体重は25貫ありました。メンバーは漕手6人、舵手



淡路就航のメンバー

1人、そして水の汲み出し、故障者が出たときに備えて予備1人の計8人です。

疎水は勾配が高いので、水を溜めては下げる、つまり段々のある関所が3つくらいありました。それを下って淀川へ出ました。疎水を下るまでに雨が降ってきた。どこかで雨宿りをしないとイケないということで、

私の家で雨やどりしました。七条大橋は大きい。その下へ船をつなぐには格好の場所。それに私の家は広い。ということで、私の家に逗留して、雨が止むのを待って再出発しました。

宇治川へ出るともう、自力で漕いでいきます。そうして大阪湾へ出ました。ところが、非常な難関がありました。私らも、どうしようかと思ったほどでした。大阪・天

保山を出るときは海が凪ぎ、夕陽が映える時分。さわやかな風が吹いていました。天保山を出て神戸へ行くまで、右手は陸です。そのときは夕方で、灯りがついて陸が見えた。それを目当てに、陸に沿って行った。

ところがそこを出て、阪神電車の大物駅のあたりにきたところ、急に強い風が吹いてきた。えらい風が吹いてきた。いわゆる「摩耶おろし」です。パーッと吹いてきたかと思うと、同時に雨がザーッと降ってきた。そして何んにも見えなくなった。真暗になった。なんで見えなくなったかという、波の間にボートが入ったときに見えなくなる。それくらい波が高くなったわけです。

私はその時分から浄瑠璃が好きでしたが、「義経千本桜」を思い出しました。あれは大物浦から船出して、義経が四国へ行くときに、平家の幽霊が出て、そこで戦いが起こる。その場所でした。そのとき私は「これはえらいことになった。まるで義経千本桜や」と思ったものです。そしてとうとう終いに浸水してきた。その水を舵手が必死で汲み出しながら、みんなで懸命に漕ぐのですが、なかなか艇が進まない。神戸へ到着予定の七時はとっくに過ぎました。艇は「桂」です。新聞は「桂号行方不明、遭難か」と書いた。それほど嵐でした。それを取り越し、やっと神戸に着いたのが九時でした。

神戸では毎日新聞が都合してくれた宿屋で泊まりました。港に近い安宿でしたが、なんと、ちょうど私たちが泊まっているときに誘拐犯がさらってきた娘をその宿に残して逃走するという事件があって大騒ぎ、ゆっくり休むどころではありませんでした。食事はずかしたので新聞社が翌日宿をかえてくれ、そこでもう一晚、今度はたっぷり休養をとって、翌日、淡路島へ向かいました。

神戸から淡路島の岩屋へ、それから問題の鳴戸へ向かいました。

鳴戸の渦に突っ込んで行くときはさすがにみんな緊張していました。突っ込んだ瞬間、下へ沈むかとの予期に反して、私の感じでは何だか艇がふわっと上に持ち上げられたようでした。潮流の関係でしょう。沈むのではなく浮き上がる感じなのです。渦にさしかかり、ふわっと浮き上がった瞬間にパーッと一所懸命に漕ぐ、必死でそうやっているうちにまもなく福良の港へ入りました。

そんなわけで、鳴戸は意外に楽でした。福良の港には漕手の一人平瀬四郎の実家があったので、そこに泊めてもらい、それから州本など淡路を一周し、岩屋から大阪へ帰ってきました。すでに淡路一周が終わったあとなので岩屋からは荷物にかぶせていた布を帆がわりに使ったところ、ちょうど追い風で、漕ぎも何もせずに一時間ほどで

大阪に着くことができ、来るときの難儀がうそのようでした」

八木はこうに鳴門が案外に楽であったと述べているが、軽舟故の捨身の挑戦が結果として有効であったものであることはこの追想談からも十分想像できるというものである。荒木節郎は当時の模様を、

「出発当初から何がさて関西の大新聞挙って此の壮挙を書きたてたものだから天下の人気はいやが上にあがり、殊に淡路島全島を挙げてこれが歓迎につとめてくれた。可愛い小学生は周航の歌を唱和して海の若人を激励してくれた。がむしやんな若者達はそれだけにまた一倍感激性に強い彼等であるほどに言い知れぬ心の戦慄と感奮を禁じ得なんだ。鉄腕こめて天下の鳴戸の険を漕ぎ切ったとき、終生の感激に胸ときめかしてヨゝと泣きくづれるさえあった」

と記し、「同志社スポーツの歩み」はこのとき全島で歌われた歌を記録している。

同志社淡路島周航隊歓迎歌

一、頃しも欧州大戦の

講和条約成る瑞祥に

同志社譽れの端艇部

我淡路島を一周す

二、其真先を迎へてん

千歳揺がぬ岩屋港

桧島が磯の朝日影

君等が行く手を祝うなり

三、淡島三十六周里

白砂青松絶え間なく

漕ぎゆく労を慰めん

されど一つの期待あり

四、明石海峡鳴戸峡

由良海峡の三つの瀬戸

激流天下に轟けり
疎水下りてそれ以上

五、君等が日頃の鍛練は

茶飯事とけんこの渡航
目出度一周終し時
江崎の汀台輝やかん

六、更に君等の一行を

招じ迎えて勇ましき
感想談を聞かまほし
我等はそれを楽しまん

この淡路周航のクルーは寺田、渡辺、北村、中川、平瀬、森田、八木、東辻、佐藤であり、三日目に病気になった佐藤以外は無事に鳴戸、由良の両海峡を端艇で突破という史上初の快挙をなしとげて帰校した。一行が再び校門に帰りついたとき、さんざん手こずらされた中村総長は自ら令嬢を伴い、目に涙を浮かべて彼らを迎えたという。

第3章 中興——今日の基礎を築く

1. 滑席艇時代へ

大正8年は日本ボート界における画期の年となった。東大の学部大会で、初めてシェル滑席艇が使用されたのである。

宮田勝善著「ボート百年」によると、わが国での滑席艇の歴史は明治18年頃からとなっているが、学生にはヨール艇クリンカー艇が一部に使用された他は概ね固定席艇による競漕であり、まして高級なシェル艇は漕法も難しく、これに手を出す勇氣はどここの学校にもなかったという。また、艇体にオールをとりつけただけのものこそがまともなボートであって、スライディングシートで尻を滑らせてスピードを出すなど無用な小細工と一般に見られる傾向にあったのである。確かに当時の目で見れば滑席艇は一種の奇妙で柔弱な新工夫に過ぎないものと映ったかも知れないが、この滑席艇導入によりボートは競技性を増し、一時凋落気味であったボート人氣が俄然高まるのである。

同志社もまた当初は「滑席艇は我国に適せず」というムードに支配され、ために何年か潮流に乗り遅れることとなる。もともと官公立学校と異なり、有志の募金によらなければ新艇建造は不可能であるために、なおのことシェル滑席艇などは思いもよらぬことであったろうと察せられる。

翌大正九年、「短（端）艇部の窮状を告げて千余の校友に懇願す」と題して、5月1日付「同志社時報」に次のような募金広告が載る。併せて「合宿練習日誌」なるものが綴られており、当時の練習の時間配分などが分かる。

「

短艇部の窮状を告げて千余の校友に懇願す

琵琶湖を想ふ人はボートを思ひ、ボートを想ふ人は同志社のボートを想ふ。」とはあ

る先輩の言であるが、かつては「同志社のボート」と言ふ事が「依藤太の蜈蚣」や「滋賀の都」と同じく琵琶湖を代表して居った。時代が老ひ行く伝説とともに老ひ、消え残る「茶の煙」と共に消えて、あとは嵐の後の静さやら、緊張のゆるんだ倦怠やらに化してしまった。我部の現状をひっさげて、をこがましくも時報の一端を汚す事は、先輩に対して汗顔の至りである。然れ共『貧者が貧と知った時、弱者が弱と覚った時、それは已に貧でも弱でもない』と云ふたある人の言が真であるならば、我部も以て意を強ふするに足ると思ふものである。

昨夏、淡路周航して鳴門海峡突破のレコードを作った時、神戸の校友に「琵琶湖周航のレコードは僕等だ」とはげまされ、大阪高商に大勝した時は「武徳会レースの第一回優勝は僕等だ」と誠められて、我部は緊禪に加ふるに緊禪、努力に加ふるに努力を以てして、来るべき新艇建造のよすがにもせんとひたすら励んで居るのである。

然るに本邦競漕界が復活されて隅田川はやがてチームズ河ともなろうとして居るのを見ては、我部の窮状をつげて校友の御同情を懇願しなければならないのである。

先輩のなされし赫々たる威業をオールの後の泡と消さしめたる事は申しけない次第であるが、現時の我部を見る時は、誰か佐野源左衛門の瘦馬に鞭つ残酷を取てするものがあるのか。

建造後五ヶ年を経過せし桂、淀、賀茂を未だに新艇と称せざるを得ざる。廃艇の廃艇たる比叡、愛宕、鞍馬を猶旧艇として使用せざるを得ざる。これを帝大、三高の四年目毎に新艇建造制に比すれば、妻に聞かれし一豊の慨きも実なるかなと思はるゝのである。

すべてが改造さるゝ今日、独り我部のみ旧時の廃艇を守らなければならぬを慨いて、敢て校友千余の御同情に訴え、新艇建造を期してやまないものである。

大学短艇部合宿練習日記

三上山の嶺が真紅に燃えて円い大きな太陽が登ると、静寂をきはめた湖上に紅のさゞめきをなげる。靄から靄、霞から霞、湖上の朝は春のゝどやかさに未だ寝って居る。「猫は鼠をとることを忘れ、人は借金のあることを忘るゝ春」もさすがに朝だけはさすがしい。

「朝ほど緊張した時はなく、緊張ほど修養に利あるものはない」との言によって、余等は朝の練習を第一とする。午前五時上艇。潑刺たるオールに寝れる湖水を覚せば、

港々たる泡は艇の進行につれて残る。

エールの選手が、その作る所の泡を以てオールの強弱を定めることを知る選手は、エールマンを模倣してやまない。

しかも湖上の靄を縫いて進む時、人も舟も詩か現実かを疑ふ。馬上で眺めた俳聖の景色を艇上で眺むる選手は、しばし「残夢円遠き」をしのぶ。

バットリング二十分続く時は手は豆の豆、足はストラップで血がにじむ。

真紅の太陽がようやくまぶしい光を放つ頃は、比良の暮雪が鹿子まだらの姿を靄の裡より現して湖水にひたす。六時半汗みどろの選手は艇庫に入る。

午後五時、学業を終へた選手は雨で上艇する。「あはれ暁の星ぞ影寒き」と歌ふた詩人も、「など平和なるはえある夕陽よ」と叫びしを見れば、旭日昇天の勢を以て朝の練習を始めた余等も平和にのどけしその日の練習を終へねばならぬ。

湖上の春景は朝の嬉びに比して夕の悲しみがある湖畔の桜が夕風にさっと散れば、湖に寫す黄金の花も不安の影にとざさる。

八分づつのスパーチングに、思ふ存分腕を練った選手は、比良の暮雪を浮べ、湖畔の新緑をひたす湖水に渴をいやす。

三井寺の鐘の音に驚いて埒にかへる鳥の後を追ひて艇庫に入れば正に六時半。

赤い太陽が比良のかなたで、黒くなった選手の顔へ残りの光をなげる。かくして我部選手は、須磨神戸新聞ボートレースに優勝を夢見つつ、雨の日風の日練習にはげんで居る。その選手の氏名は左の通りである。

C東辻 S渡辺 5北村 4平瀬 3酒井 2池尾 B西谷

この募金広告の時点ではまだボート部は滑席艇建造を企図していたわけではなかった。

しかしこの年創設された京大端艇部が9月23日、瀬田川に東大を迎えてわが国最初のシェルエイトの対抗競漕を実施、天下の耳目を集めた。同志社ボート部はこれを観戦、当時の模様を荒木節郎は次のように記している。

「唐橋の上から之を眺めつゝ『スライディング』が欲しいなあと歎息しながら低徊之を久ふしたのが鳴戸の勇士たちであった。ほんとうにうらやましかったろう。彼等の眉宇に一種悲壮な決心がうかゞはれた。新しい希望に燃えてライトボート創建のゴール目ざしてあらゆる困難と闘って協力奮闘を続けた。

オール持っては人後に落ちない彼等も頑固な親父を説きつけて建設資金を獲得するのは、容易のわざではなかった。懸命の苦心が学校当局と先輩の容るゝところとなり、大正十年度学友会予算総会の席上大論争の末スライディングの建造案通過しそのため五ヶ年間積立金を設くる段取に立ち至った」

大正10年4月8日から5日間、同志社端艇部は弁論部との提携のもと、京都日出新聞（現京都新聞）後援により琵琶湖周航を行う。途中大溝小学生に同志社エールをもって迎えられたとあるのは往時の情景を偲ばせて微笑ましい。この周航のメンバーは舵手林及び東辻、整調渡辺、5番加藤、4番西条、3番二星、2番酒井、艇舳池尾であった。

5月13日水上運動会。この大正10年大会よりコースを瀬田川にとることとなる。優勝戦は大学、大学予科、中学の三部門に分けて行われた。

大学は文学部（C飯義寿、S魚忠一、5角田健三、4中村三郎、3森川正雄、2絹笠梅治郎、B西谷清）対法学部（C小川政雄、S佐藤賢治、5渡辺勇、4中川孝史、3平瀬四郎、2東辻嘉三郎、B山内谷雄）の対戦で法学部の勝利。

予科は旧余科2年（C伊藤助貞、S酒井猛夫、5黒川一郎、4西条信之、3河合道正、2小原貫一、B北川正夫）対新2年（C綱木直之、S池尾孝正、5住井富士男、4二星八郎、3千畑七郎、2伊東虎雄、B中村信）対新1年（C桑田一夫、S大町弘蔵、5桜井太郎、4武津真佐太、3荒木節郎、2畠野寅夫、B南本虎一）の対戦で旧予科2年が勝利。

中学は5年級（C島本進、S八木辰馬、5名古屋義男、4格田愛治郎、3楠正喜、2南里勇、B小林順三）対4年級（C塩瀬治房、S元持昌二、5竹内仙之助、4斎藤七郎、3東田太喜男、2車均、B牧野正）の対戦で4年級の勝利。

という結果であった。各優勝クルーには女学校より寄贈の花環が送られた。

同志社において史上初のエイト滑席艇の完成が報告されたのは、大正11年1月1日付「同志社時報」においてである。

短艇建造報告

先般『窮状を告げて千余の校友に懇願せし』（同志社時報第百七十五号）吾が短艇部は幸に大方の御同情と御指導とによって茲に新艇建造をみるに到った事を喜んで御報

告する次第である。

此計画は昨年十一月故永田部長の熱誠なる御尽力によって又総長、中学長、主幹の諸賢を始め多くの先生方の懇篤なる御助力によつて漸くその緒についたものであるが其後着々進捗し来って新春早々には外艀艇滑座席九人乗三艘、二人乗二艘並びに固定席三艘を花の琵琶湖に浮べる事の出来る様に到ったものである。

けれ共此間或ハ若王子山頭に故永田部長が赤誠を偲び或は將にその途を誤らんとしたる学生が涙を拭ふなど血をはく思ひの落胆や涙ぐましい煩ひを持ったとは雖もなほ生れ出でんとするものゝ悩みが幸に望まんとする彼岸へと導いて呉れた事を常に感謝せなければならぬ。今や希望に満てる新年を迎ふるに當って吾が先輩塩見先生を新部長に喜多氏を顧問に推戴するを得て『新しき酒を新しき皮囊に入れる』ことの出来た事は吾部にとって威大なる幸であらねばならぬ。

終りに當って此の計画を御助け下された多くの方々に感謝し且つ。千二百円を投じて吾部を通して吾同志社に不滅の功獻をなし下されし大谷保氏の御父君大谷仁兵衛氏にひたすらの御礼を申し上げねばならぬ」

ここに同志社はついにシェルエイト「時津風」「天津風」及びフォアの「陽炎」、ペアの「村雨」を装備、これを機として再び競漕界の争覇戦列への本格的復帰を開始するのである。

この年、大正11年の水上運動会は新艇の進水式を兼ねて挙行、多数の観客注視のうちに行われたシェルエイトの櫂先に一条の乱れもない見事な独漕は大喝采を浴びたという。

大正7年の「大学令」公布に伴い同志社は改組を進め、大正9年に至っていわゆる旧制大学令による同志社大学を設立、旧制高等学校3年にあたる3年制の予科の上に3年制の文学部（神学科、英文学科）、法学部（政治学科、経済学科）の二学部が設置されていた。専門学校令による旧大学はこの大正11年に「同志社専門学校」と改称、まず神学、高等商業の二学部を開始したが、この専門学校高等商業学部が後年の同志社高商の前身である。

新艇建造後、同志社端艇部は滑席艇漕法マスターのため東大コーチ瀬田修平、東俊郎両氏にコーチを依頼、シェルエイトにおける競漕界での立ち遅れを取り戻すべく熱心な練習を続け、またボート先進地東都の空気を摂取すべく慶応との間に定期戦の協定を結び、この年9月、第1回の試合を行った。記念すべきこのレースの同志社初代クルーはC東辻嘉三郎S大町弘蔵7 桜井弥一郎6 武津眞佐太5 荒木節郎4 元持勝一3

東田多喜男 2 市田勇 B南本虎一である。

滑席艇初心のわが同志社クルーは大方の予想に反して健闘、終始慶応を苦しめたが、接戦の末、シェルエイトに一日の長ある慶応に惜敗した。

翌大正12年の水上運動会では大学本科対予科がスライディングエイトによる初の競漕を行った。メンバーは本科C安井S西条 7 黒川 6 酒井 5 伊藤 4 遠藤 3 瀧川 2 東辻B河合、予科C大町S武津 7 荒木 6 市田 5 東田 4 元持 3 青木 2 袂B南本であったが、天津風のりガー破損のトラブルがあり本科が勝利した。

専門学校高商部は1年2年それぞれ独漕のみ、大学優勝戦は神学科棄権のため経済科が優勝となった。中学は4年級が優勝、C厚見S藤井 5 大村 4 渡辺(喜) 3 矢口 2 渡辺(増) B村田であった。

この年、大学端艇部の春期遠漕は武津、桜井、東辻、市田、元持、東田、青木、遠藤、堀井、坂野、南本のクルーで行われた。

第2回対慶応定期戦を控え、前年の雪辱の念に燃えていた同志社クルーのもとにもたらされたのが大正12年9月1日に発生した関東大震災の悲報であった。

死者行方不明者14万余、家屋全半壊及び焼失70万余という未曾有の大災害により隅田川畔向島の慶応艇庫も東大、商大らのそれと共に地盤沈下のため大きな損失をこうむり、練習中のシェル艇も沈没するという大被害となり、このため定期戦も中止の止むなきに至ったのである。

2. 第1回対明大定期戦とスカル隊瀬戸内海縦断

ボート人氣が固定席艇から滑席艇へと急速に移行して行く中、同志社ボート部クルーは過渡期の苦悩を経験しつつ技術向上への努力を続けて行く。

日本漕艇協会は、大正9年発足以来、毎年東京の各大学、専門学校のエイト対校レースを挙行してきた。これが今日の全日本エイト選手権であるが、大正12年は震災のため中止。大正13年春、震災後の漕艇界の復旧と振興のために、小人数でできるフォアとスカルにより「復興レース」を開催、同志社は関西から唯一のクルーとしてこれに出漕した。フォアの参加クルーは全部で20の多きに上り、復興の氣運を十分に認識せしめる盛会であったが、同志社はこの大会で大方の予想に反する大健闘を見せ、優勝戦は一橋漕艇クラブに4艇身差で屈したものの見事に準優勝、既にして覇を争い

得る力を蓄積して来ていることを天下に示した。この時のフォア・クルーはC人見健造、S武津眞佐太、3 荒木節郎、2 元持勝一、B市田勇である。

5月16日に行われた水上運動会においては、本科(C黒川S西条7 桜井6 武津5 河合4 池尾3 伊藤2 遠藤B大町) 対予科(C人見S元持7 市田6 西邨5 津田4 猿丸3 北村2 堀井B樋上)のスライディングエイトの競漕が呼物となり、好レースを展開したが本科不運にして和船に進路を妨げられるトラブルがあり、予科の勝利となった。

この年の夏、わが国においては未だ珍しかったスカルの競技会が行われたが、このとき同志社選手の活躍が目立った。これを機に在阪校友と在学生の交流を図ることを主たる目的として、大阪に「同志社スカーリング倶楽部」が誕生、艇庫を淀川畔桜宮に設け、スカル5隻を備えた。委員は関目成通、露口四郎、渡辺勇、安井義人、大町弘蔵である。このクラブの活躍はその後目覚ましいものがあり、例えば記録に残る大正14年の第4回関西漕艇大会においては優勝室原、2位大町、3位岡本と同クラブメンバーが上位を独占、スカルレースは同クラブのレースの感があつたという。

大正14年5月1日付「同志社時報」には「大学短艇部部報」として当時の部員状況を記した後、第1回対明大定期戦を告知している。

「比叡七嶺の雪解と共に、瀬田の清流を中心として、オアーズマンの世界が始まる。秋の日本フォア―選手権大会以来、しばらく御無沙汰をした校友同窓諸兄姉に短艇部の近況及び本年度の計画を御報告申し上げます。

東京漕艇界の雄、慶大を迎へてより既に3年、其間フィックスよりスライディングへの過渡期の苦悩を共に経験し、且つ今や30有余の部員を有するに至って、漸く今年度初めて確然と選手を分ちて、スライディング・クルー及フィックス・クルーの2部とすることを得、新しく陣容を整へて、3月中旬以来練習を開始しました。スライディング、クルーは武津、元持、市田、東田に、新たに人見、北村、猿丸、津田(和)鮎川、西村を加へ、瀬田、網定旅館に合宿。宮尾、坂野の統率するフィックス、クルー(吉田、小島、田伏、榎原、大浜、津田、松井、矢吹)は鳥井川、伏見屋旅館に合宿、二者共に都の春を外に猛練習を続けています。

本年度短艇部の計画として、先特筆大書しなければならないものは明大、同大対校定期戦(スライディング、エイト)の協定の成立したことであって、之は大阪朝日新聞社後援、京阪電気鉄道株式会社援助、当大学短艇部主催にて、5月24日(日曜日)、瀬田川コース(二哩)に於て第1回戦を行ふこととなりました。尚、当日は京都中等学校優勝競漕大会を短艇部主催にて行ひ、朝日新聞社より対校レースにトロフィーを、

中等学校優勝競漕に優勝旗を贈られる事となりました。既に新聞にて御承知の通り、京大東大のレースは隅田川にて行はれることになったので、本年度の関西漕艇界唯一のエイト、ライトスライディング、シェルによるレースとしての斯界の注意を惹くことと思はれます。且明大は昨年、日本漕艇協会主催の日本選手権大会に優勝した強クルーなるため、我スライディング、クルーは此レースの最高唯一の目標として、最大、全的の努力のうちに、瀬田の朝夕を迎えてゐます。

又フィックス、クルーは先輩達が昨年堂島川にて獲得した関西専門学校選手権を再び得んものと終日、オアーに親むでゐます。

かく多忙な年を迎へんとする時、短艇部先輩塚本、青山、関目、林、渡辺、東辻、黒川、西条の諸氏によって短艇部後援会が組織されるといふのを聞き、此処に厚く御礼を申し上げ、更めて当短艇部より校友同窓諸兄姉に十二分の御援助を切にお願い申します。

(桜井記)

記されている如く明大は前年度の全日本選手権優勝の当時日本最強のクルーであり、これと対校戦を行うことが同志社ボートに与える影響は計りしれないものがあつた。日本一のチームと戦つてこれに勝とうとすることは自らが日本一になろうとすることである。長い間忘れていた覇権への野心に、ここでようやく火がつけられた観がある。前年復興レースでのフォア準優勝と、この明大定期戦は、同志社ボートにとって、百年の歴史の中での一大画期であつた。滑席艇の導入と共に、この大正末期の一連の動きは後年の同志社ローイングに対してまことに重大な役割を果たしており、この間に払われた努力は特筆しておくべきものである。さらにはこの部報にある通り後援会発足によりボート部バックアップの態勢が整えられ、固められて来たことは、そのタイミングといい支援意欲といい、同志社ローイングの覚悟を決定的にしたものとして最大の評価が与えられなければならない。

この後援会を、その発足以来終戦後に至るまでの長期にわたって物心両面で支えて来たのが、大学ボート部草創の功労者の一人であつた塚本純一である。自らの在籍当時、部としての形を整えるのが精一杯で、何ら誇るべき對外実績も残さず世の注目を浴びることもなく、ただ黙々と将来に向かつての土台を築くにとどまつた彼は、母校ボート部の発展に生涯その情熱を傾け続けた。会誌の発行をはじめさまざまな部面で便宜をとり続け、また恵まれぬボート部経済事情のため私費を投ずることも多かったが、自らの功績を他に語ることを好まず、わずかに先にあげた追懷談が今日残されて

いるのみである。おそらく彼としては、自分の夢を心ひそかに育てていこうとしたにすぎないのであろう。しかし戦前のOBで、往時を語るとき、彼に対する感謝の言葉を口にしない者はいない。地味で力強い、温かく大きな後援者であった。

こうして支援態勢も整う中、5月24日の明大定期戦に向けて、大学ボート部は3月16日から合宿練習を開始する。

折から春の嵐、また寒の戻り厳しく、強風降雪の不順な天候の中、元持主将の下に練習を開始、ペア、フォア、及びバック台を使用してトレーニングを進める。長い合宿生活の内には様々のトラブルが発生するが、舵手人見の合宿日記4月1日付には次のようにある。

『〇〇本日不快の為か練習不熱心、やむを得ずこれを叱責す。今度の勝負はよほど自重しなければならない。ただし舵手が漕手の機嫌を損ねるのはよくない。ただし漕手の内に一人でも情気を面に表す者があると他の者の志気に関係するところが多い。一馬の為に百馬を捨つることはできない。言わば団体生活の産出する悩みか』

4月3日よりエイト乗艇、フィックスしか知らぬ新選手はスライディングに相当とまどったようである。大町をはじめとする先輩コーチが熱心に指導をする。

スライディング艇導入によるボート人気の再隆、また日本一クルーの来漕ということで、同志社対明大戦は早くからマスコミに取り上げられている。4月4日付朝日新聞は次のように言う。

「昨秋東西両帝大の対抗競漕で賑った瀬田川は今春は明治大学対同志社大学の競漕で非常な賑いを見せるであろう。明大対同大のレースは石山の新緑に春の風薫る五月二十四日であるが、両帝大の淡青濃青のレースについて斯界の人気を湧かせること請合——二三日このかたから湖南は急に春めいて温かくなり瀬田川もボートの練習が追々賑ふシーズンであるが昨今は京大と同志社のクルーがスライディングの練習をはじめ壮快なオールの響きが瀬田川の春を告げてゐる。中学クルーでは京二中がしきりに練習してゐる。明大、同大の選手も五月勿々石山に合宿して猛練習を開始する筈であるし、今夏琵琶湖石場浜で挙行される京大大学友会主催の全国中学校競漕大会を控えボート熱を湧かせてゐる事とて四、五、六月は天津の湖上一帯と瀬田川は天気さへよければ連日賑ふであろう」

4月中旬に入って練習メニューを強化、午前中はフォア→シックス→エイトの順で校正を専ら行い、午後はエイト中心の練習となる。バック台は午前中150程度行い、降雨の朝には350本を行った日もあった。

5月に入って関口コーチの作ったメニューによってより実戦向きのトレーニングに移行する。

明大は5月12日より瀬田における練習を開始したが14日に両校遭遇、蛍谷から唐橋まで明大のあとを追うが、同志社クルーあせり気味で艇進まず、舵手日記に「今少しの沈着を欲す」と嘆いている。

18日午前、レースコースを引いた直後の明大と出会い、初コースに一方ならぬへばりを見せているのを目撃するが、午後再び明大がレースコースを引くのを見て、敵の頑張りの強さに面くらったと記録されている。

レース当日は午前中スタート練習を繰り返して休息、午後四時乗艇。レース経過を合宿日記に見る。

「スタートはわがクルー三本にて敵をリードす。わがセツルダウンアンドラツシュアウトにおいて敵急ピッチにて我に先んず。敵わがコースを圧して進む。我に心算あり。今に敵を抜くぞと例のロングレングスにて敵の後を追ふ。蛍谷カーブにて敵は我を二艇身抜く。我また敵のわがコースに進入せるを見てラストヘビー三十をかく。ここにて敵にバンプせんが為なり。今やバンプせんとする時、敵は観月のカーブのインサイドを利して急に舵を引く。我も柳屋カーブにて敵を苦しめんものと観月より柳屋めがけてヘビー四十。然しながら敵我を抜きたるに乘じ益々元氣盛んなり。我等必死の努力をなせどもついに能はず、敵に遅ること二十七秒にて敗る」

当日のメンバーはC人見健造S市田勇7津田礼作6猿丸源太郎5東田多喜男4元持勝一3北村國次郎2鮎川浩B武津真佐太であった。

スライディングエイトによる対校戦は先の慶応に続きこれで二連敗となったが、滑席艇の導入期にこうして関東勢と対校戦を行うということ自体が、それ以後のボートの興隆に大きな意義を有しているのである。無論当時のボート部員にとってはそうした大きな使命感は実感されず、今日のように監督、コーチ、主将、マネージャーという画然とした役割り分担もなく、自由に青春の情熱をボートに注いでいた。特に管理する者もない中で、部員は自主的に部を運営し、練習を重ねた。艇があった以外には学校側からの部費の支給もほとんどなく、合宿・遠征等の費用も概ね自前であり、足りないところを後援会員その他の寄付で補いながらの活動であった。

部員達は授業が終わると三々五々、電車に乗って瀬田に集合、数時間の練習の後帰って行った。また学内の図書館の傍にあった小屋の中にバック台を備え、昼休みに練習したとも伝えられる。特に部室というものもないので、この小屋が言わば部員達の

溜り場となっていたようである。

淡路周航の壮挙から6年後のこの年、同志社ボートは再び天下の耳目を集める大イベントを企画した。同志社スカーリングクラブによる瀬戸内海縦断、即ち大阪から門司まで、700数10キロメートルの距離をスカル4隻で漕破しようという大遠漕計画であった。「同志社スポーツの歩み」に、このスカル隊の隊長であった安井義人の詳細な記録が載っている。

同志社スカール隊瀬戸内海縦断記

大正の末期は同志社大学ボート部の勃興期であり、此の副産物として同志社スカーリング倶楽部が大阪に誕生した。

主たる目的は在阪校友と学生の親睦がスポーツを通じて為されることにあり、艇庫を淀川の上流右岸桜宮に設け、スカール五艘を保有した。

其の当時のスカール界は、学生の部では学習院と同志社大学のみと云う状態であった。

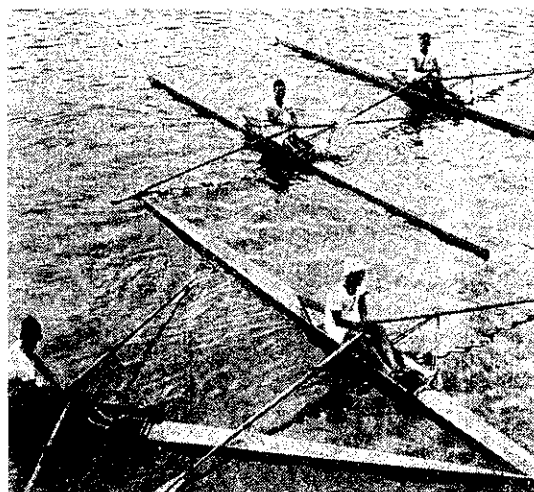
大正14年7月、同志社スカール隊が瀬戸内海（大阪―門司）460哩縦断の比挙を計画発表するや大朝大毎および大阪商船の好意を得て、遂に全コース漕破を為す事を得たのは、顧みて奇蹟とも云い得る。

スカール隊のメンバー

漕手（主将）	安	井	義	人
同	室	原	慶	一
同	猿	丸	正	三
同	山	下	雅	男
監 督	大	町	弘	蔵
水路掛	池	内	泰	三
マネジャー	森		雄	吉
同	耕	山	愛	太郎

スカール四艘、警備船、勝丸（八〇屯）

十五日 大阪肥後橋より出発。在阪校友学生及び大朝大毎スポーツ記者の歓送。当夜



は大阪港外に碇泊、勝丸に宿泊。

十六日 漕発、大阪－神戸此の間波高く艇小損あり、神戸入港、同行の船大工に直ちに修理せしむ、勝丸に宿泊。

十七日 朝五時起床直ちに乗艇、この行最初の難所明石海峡を九時に突破、風は順、潮は逆、此の為三角波に困難す。正午高砂に入港。三宅利平氏（同志社代議士理事）初め吉田、原田、河合の校友に迎えらる。

十八日 天候悪しきも遠漕を断行。午後三時牛窓（岡山県）に着く赤穂御崎沖では横波をくい難渋す。

牛窓港内の安宿に一泊、初めて畳の有難さを味う。

十九日 朝七時半牛窓発児島湾に入りて、波なく湖上を行くが如く九時岡山市外三幡港に着く、六高ボート部選手の艇来り、代表、舷に立ちて讃辞を述ぶ。その時モーターボート来る 岡山校友会支部長大塚小一郎氏（日銀岡山支店長）の出迎をうく。

同氏の艇の案内にて艇首を揃え横隊にて旭川を溯航、京橋畔社交倶楽部会館に憩い、校友会支部の盛大なる歓迎をうく。席上大塚氏は「日本スポーツ界としても此の空前の計画が、我等の同志社学生によって為さるる事は最も歓喜に堪えぬ」とあり、安井主将之れに答辞を述ぶ。

二十日 三幡港を出発、宇野港外もり屏風岩を通りスカール隊は運河にぬけて児島半島を横断、警備艇は迂回してスカール隊に合流、下津井港（岡山県）に入る。校友中西文太郎氏（県会議員）同中西幸太郎氏（下津井町長）の慰労会をぬけ郊外山上の旅館に泊す。

二十一日 港外に黙在せる小島の間をぬけ平静なる漕程を辿り鞆の美景を横に見て尾道水峡を経て尾道市に到着す。

校友大森、岡本、三谷、諸氏の出迎をうく。

二十二日 尾道発、音戸の瀬戸を通り、広島市に入る、校友百武、沢田外数氏および学友川崎馨君の出迎あり、更らに艇足を伸ばして宮島に泊す。

二十三日 宮島発周防灘の波浪は高く、正午頃大島の一端に難を避く、勝丸に宿泊。

二十四日 波静まる様俟ちて、奔流狂う大島の瀬戸を漕切り室津に至る。

二十五日 室津－三田尻。

二十六日 三田尻－小野田、小野田セメントの沖に勝丸を留めて船中に泊す。

月明らかにして、吾等の壯途を祝福するに似たり、関門既に十七哩の眼前にあり。

二十七日 天気晴朗、海上また一浪なし、同志社スカール隊は今日を最後とオールの響もさわやかに、艇足は飛びて、絵島の灯台の辺りにて大阪商船のランチの出迎あり、汽笛を鳴らして漕手を励ます。壇浦右手に眺め、関門支部長末弘氏始め校友の出迎えの裡に下関に着く。正午支部の歓迎会をうけ直ちに難所関門海洞を十五分間にて漕破す。

さしも世人の不可能とせし瀬戸内海縦断は同志社スカール隊の把握するところとなりぬ。一行は二十九日商船扶桑丸にて帰神。

翌八月五日大阪今橋大阪ホテルにて在阪校友の歓迎会あり、橋本喜作氏（大阪屋証券専務）広岡久右衛門（加島銀行副頭取）等諸先輩より選手随員一同に慰労の辞あり。

註 漕程 四百六十哩
所要日数 十三日間
漕艇実時間 七十二時間

因にこの壮挙が完遂され得たのは偏に在阪校友の資金的援助の賜と漕手の不屈の精神が実を結んだに外ならぬ。また壮挙計画に当って安井主将と大町監督が鳩首チャターを見て、綿密に立案し、随員亦周到なる注意を以て全航程が無事故に終始された事は誇りに足るものと謂ふべし」

3. 関西漕艇協会の設立

大正9年に両帝大戦が開設されて以来、京大は一度も東大に勝利することなくここまで来ていたが、この年も京大は東大とスライディングエイトのレースを隅田川で行い敗れていた。京大にもスライディングにおける関東に対する立ち遅れを嘆く声が多く、帰京後ボート部の委員会を開いて打開策を検討した。その結果、関東の日本漕艇協会に対抗すべく関西漕艇協会を創設すべしとの結論に至り、この案を同志社に呈示した。同志社直ちに賛成、協会設立に向けて積極的な活動を開始する。8月1日付同志社時報に次のような記事が載るに至った。

「

大学端艇部々報

盛夏之候諸彦益々御清祥賀し奉ります。顧みますに始めてスライディングの瀬田川に浮びましてより既に幾星霜川畔の緑も年毎に弥深く関西の漕艇界も愈々多事と相成りました。今回吾等相計り別項の主旨を以て関西漕艇協会を發起致しました。

就きましては吾等の微衷を御諒察下され是非御賛同を得度偏に御依頼申し上げます。追而右協会は別項の如き順序に依り創立致度いと存じますから別項相談事項に就き忌憚なき御意見を承り度尚右相談事項は御意見を承る便宜上仮定的に定めましたものですから他に御気付の点がありますれば御遠慮なく御申聞下さいますよう御願ひ申します。

関西漕艇協会創立の主旨

関西の漕艇界は其歴史古くフィックスに於ては夙に我が国漕艇界の中心勢力たり、只スライディングの採用に於て関東に後るゝこと数年なりしも今日に於ては我が両大学を始め関西の諸豪は克く関東軍と拮抗し今や殆んど彼に一籌をも輸せざるに至れり。

然れども翻って我がスライディング漕艇界の分野を見れば関東は既に相結んで一大中心勢力を成せるに反し関西には全体として之に対抗すべき連盟的勢力なし。即ち関東に於ける十大学の競漕年と共に隆盛にして我が国漕艇界の最大年中行事たらんとし加ふるに昨年より明治神宮競漕生れて関東に於ける諸大校間の提携協調は益々緊密の度を加へたるに反し関西にあっては今日に至る迄群雄割拠の状を呈し其の間何等の統一なし。是れ心ある者の密に遺憾禁ずる能はざる所なりき。茲に関西漕艇界勃興の新氣運に乘じ関西諸豪の連盟を作り以て関東に拮抗して立てば天下二分の形勢を馴致し得るは必せり。是れ独り関西漕艇界の為に図る所以の道なるのみならず又必ず我が漕艇界の進歩に一大貢献をなす所以たるべし。

我が両大学端艇部は以上の如き情勢を看取し今春来屢々会合熟慮を重ね茲に関西漕艇協会なるものを發起し其の事業の第一歩として近畿諸大校のスライディング四人漕の争覇競漕を今秋を期し瀬田川に行はんとす。是れ固より我等が抱負の一端にして将来氣運の熟するを待ちては広く西日本全体の諸学校の糾合を期し且つスライディング並にフィックスに於ける西日本権手権の統一を期せんとす。

相 談 事 項

- 一、関西漕艇協会本部を石山に置く事の可否。
- 一、本会組織の単位、各学校の端艇部を単位とすべきか。
- 一、本会の組織、各学校より代表者を選出し議決機関並に代表兼執行機関を設け各学校の端艇部関係の先輩教授中より顧問を選ぶ。
- 一、本会の経費は全学校一ヶ年金参拾円とす、但し大会参加費は各自負担とす。

創立の順序

- 一、先づ関西の諸大学高等専門学校に賛否を問ひ並に別項の如き相談をなす。
- 一、其の回答を八月末日迄に同志社大学短艇部宛に送附を乞ふ。
- 一、其の後に於て発起両端艇部の委員間にて参加校の意見を斟酌し宣言書並に会則草案を作成す。
- 一、今秋九月を期して石山に於て発起並に参加諸校が協会創立校となりて発会式を行ふ。
- 一、発会式の前に各校より発会式準備委員を出す事。其の準備委員会に於て宣言書並に会則の草案を修正し以て発会式に附議す。

附 記

現在瀬田川にスライディング四人漕の艇は各校所有のものを合せて拾隻あり。練習及競漕用として協会参加校に貸与し得る様便宜を計る考あり。

関西漕艇協会発起者

同志社大学々友会端 艇 部

京都帝国大学々友会端 艇 部

こうして他大学及び高等専門学校にも働きかけて計画は着々と進捗、第1期参加校

京大、同志社、竜谷、大阪高商（現天王寺商業高校）、同志社高商、彦根高商（現滋賀大経済）の六校で発足、さらに岡山医大を加え9月23日、瀬田中之島公園にて創立大会を行い、各校のスケジュールの都合で争覇競漕はできなかったものの、式後來賓を含めてフォアによる混合競漕を举行、参加クルーは30に達し、関西漕艇協会は高らかに呱呱の声を上げたのであった。そして協会主催による第1回対校競漕会を翌年開き、その優勝者を関西代表として明治神宮レースに出漕させることを約定した。この第1回競漕会こそ、今日の関西選手権大会の始まりである。当時関西でスライディングエイトを所有していたのは京大と同志社のみであったので、エイトで競漕を行うには艇数等の問題で困難があり、第1回大会はフォアで行われることとされた。

争覇の場はこうして整えられた。これ以後各大学・高専はこの大会を努力目標として大いに研鑽を積むようになり、関西の漕艇界は飛躍的にレベルアップして行くことになる。

4. 第2回対明大定期戦

明けて大正15年、対明大定期戦は東西両帝大戦と同日に合同で行われることとなり、早くから世人の注目を集めた。マスコミの報道も前年に倍するものがあり、部員は前年の雪辱を固く心に誓って合宿に入る。

一昨年の全日本選手権者である明大は、昨年度もその実力を示して全日の決勝に駒を進めた。商大との決勝は明大有利のおおかたの予想であったが、以下の事情であたら栄冠を逸した。

「第五回競漕大会は、九月二十六、七日の両日、鐘ヶ淵、三囲間一マイル五分の四のコースで行なわれた。明大相変わらず強く、早くから優勝の呼び声が高かった。（中略）

決 勝（中略）

明大よく出て、たちまちリードしたが、商大食いさがって天野工場で並行、第一カーブを利して商大抜き返して非常に好調に見えた。その時、明大急に舵をひいて、二コースに寄ったため接触し、そのままレースは中止となった。鐘ヶ淵のスタートから約八〇〇メートル、タイムにして僅か二分であった。岩下審判長は協議の上、明大をオミットし、商大に独漕を命じた。

期待した決勝レースの中止は、数万の観衆をすっかり失望させ、ボート選手はフェア・プレイの精神を欠くといって、ゴウゴウたる非難の声が起こった。そこへもって来て明大の応援団が、この審判を不当として、再レースを要求し、怒号しながら本部に殺到したため会場は混乱して全く收拾がつかなくなった。この騒ぎに対する世論はかなりきびしく、明大を除名せよという声さえあった。漕艇協会でも緊急役員会を数回開いて、善後策を講じたが、その結果、審判の宣言は最終で、変更すべきでないという意見に一致、これを明大に通告して、この問題は一応解決した。

（宮田勝善著「ボート百年」より）」

こうした事情で覇を他に譲った明大であったが、第一人者の貫録は自他共に認めるところであり、同志社にとって巨大すぎるほどの敵であることは前年同様である。

同志社が前年よりも数日遅れて3月21日より合宿に入ったのは、前回の敗因として合宿が長すぎたという反省があったためである。毎日の起床時刻は前年より約一時間早めて6時から6時半頃となり、また前年のように余暇に花札等のゲームに興ずるといようなこともほとんどなく、通常9時、時には8時の就寝と記録され、勝利にかける意気込みが前年を大きく上回っていることが察せられる。毎朝起床後のランニングも前回の記録にはないことであり、また病気あるいは体調不良を理由に練習不参加のケースも前年の例に反してほとんど見られない。

4月1日よりスライディングの練習に入り、フォア2隻を使用しての本格的トレーニングとなる。4月7日の時点では一艇にC人見S松岡3大浜2松下B松井、他の1艇にC坂野S小島3田伏2村上B元持となっている。

合宿所は前年と同じく網定別館であったが、当時の木造建築のこととて大雨の夜等は雨漏りに悩まされたと記録にある。

4月22日よりオーバーホールの完了した「時津風」を出してエイトの練習に入る。フォアとは相当に勝手が違うので、初めてスライディングエイトを経験する新人選手達は大いに面くらったと記されている。

この頃大阪朝日記者の合宿訪問があり、やがて記事となって紙上に載った。夕食時の様子が活写されていて面白い。

「眼ばかり白く光らせた黒いのが煮えかけた焔爐をとりまいて身構へた有様はまるでブルドックのおあづけといった図だ。煮えたが最後始めから脱兎の如き箸の働きに肉片は忽ち姿を隠す、令嬢処女の如きは遂に肉片を拝せず葱の残骸の焦げついたのを口惜し気にしゃぶる丈である。

飯のよそい方と来ては墓場のそのの如くおてんこ盛である、『瀬田盛りといひまね』京都っ子の桜井マネージャーが説明してくれる、瀬田盛り一杯でへこたれた記者は平均九合の飯をくふと『たほる小母さん』（飯炊）が驚嘆してゐる怪童諸子の名乗りを聞く、お互ひに『又の名』を洗ひたてるのですっかりネタが上る。

舵手 坂野 公夫（ガンボ一）

○整調 鮎川 浩（関伯爵）

○七番 市田 勇（電報）

五番 田伏 徳次（風彩）

四番 村上 武夫（スポーツ）

○三番 北村國次郎（鬼瓦）

二番 小島 瀧三（海坊主）

○舳手（主将）荒木節郎（屁ビヨ一）

コーチャー 武津 真佐太

大町 弘蔵（甘チャン）

補欠 松岡秀給、松井進、松下勇

○印は旧選手

それに桜井、人見の両君が世話役に控へてゐる。

右の中元持、市田、荒木の三君に至っては一九二二年（対慶応戦）以来の古狸である。荒木の屁さんはいかにも主将らしい落ちつきを示してゐるが時々風上の舳でビヨ一と奇異な音をたてて芳香を放散するには閉口だと艇友諸君はこぼしてゐた。昨年の整調市田へチマ君は、弱冠を越ゆること僅かに二歳「若くてあきまへん」とはにかむ、三羽鳥の一人元持電報君と来ては鋭気颯爽当るべからざるものがある、同志社の氣勢は俺一人で上げるといった程元気な勇士もニックネーム電報の由来を尋ねると『いふないふな』と何故か頭抱へて逃げだす。甘郎そっくりの甘チャンこと大町コーチは同志社スカーリングクラブの創始者であり又昨夏同大スカール隊が瀬戸内海縦断を決行した時名にし負ふ音戸の瀬戸の渦巻を衆議を排して木葉の様なスカールで漕ぎ切った冒険子である」

さらにはこの合宿中、「日活」による、練習風景の高速度撮影なども行われている。その映画完成の連絡を受けて全員烏丸三条の日活支社に出かけ、各選手とも自分の漕ぐ姿を見て大いに語るところがあった。

5月9日に明大クルーが到着、これを元持と市田が出迎える。その夜クジ引きで競

艇を決めたとあるが、これは先年慶応が自艇を瀬田まで運搬した異例を除けば、当時は遠征チームには艇を貸与して競漕を行ったからであり、同志社所有の「天津風」、「時津風」の二隻のエイトのどちらを取るかを決めたものである。クジ引きで時津風を引いた同志社側は、明大側が帰宿した後、大いに喜び合った。オーバーホールが完了したばかりの艇であると同時に、日頃この艇で練習している有利があり、また愛着も深かったからであろう。

長い合宿生活の内にはさまざまな事件が起こる。レースを旬日の後に控えて緊張感のつる合宿所に次のような珍事が発生した。

「此夜奇異なる出来事あり、瀬田の里にTと云へるカフェーあり、此家の女給何時の頃よりか病いに冒され衰れにもフーテンとなり女性にあるまじき振舞多し。この女我等が合宿所に来りてオルガンを弾かせよと云ふ。流石剛の国さんもかなわずと見て奥に逃げ入る間に、悠々と入り来りて、衆人の叱責するを見向きもせで、暫らくはおぼつかなき手付きにて弾き鳴らして去る。こはてっきり我等が風采の大將田伏居士に惚れたるに依って来れるなりとの説高し」

対明大戦は新聞社の後援を受けていたため、レースが近づくと練習の様子や予想の類が新聞紙上ににぎわせ始める。5月16日の記事。

「

明大対同大対校レース

本社の後援で廿三日瀬田川にて

明治大学対同志社大学の第二回対抗ボートレースは本社後援のもとに来る二十三日江州瀬田川コースで挙行することゝなった。同志社クルーは目下瀬田の網定に合宿して昨年度の敗戦に報いんと必死の猛練習を続けレースを旬日の後に控へていよいよ脂が乗って来たが、一方明大クルーも向島に合宿し先輩鈴木氏のコーチで最近一段と充実味を加へ必勝を期してゐるから当日両軍の快漕には異常なる盛況を呈することゝ想はれる、両軍選手は下のとおりである。

明大（略）

同大 舵手坂野公夫（五尺三寸十五貫三百）△整調鮎川浩（五尺六寸七分、十六貫八百）△七番市田勇（五尺七寸、十七貫）△六番元持勝一（五尺六寸七分、十八貫二百）△五番田伏徳次（五尺七寸五分、十八貫五百）△四番村上武夫（五尺九寸七分、十八貫四百）△三番北村國次郎（五尺九寸七分、十八貫七百）△二番小島龍三（五尺六寸五分、十七貫三百）△舳手荒木節郎（五尺七寸二分、十七貫七百）補欠松井進、松岡

秀三

なほ二十三日の瀬田川コースでは京都府下中等学校（午前九時）大阪高商対同志社高商（午後二時）同大対明大（午後三時から四時の間）京大対東大（四時半より五時の間）以競漕が挙行されるはずで当日は空前の盛観を呈するであろう」

5月19日記事

「二十三日の東西両帝大レース及び本社後援の明大対同大レース、京都中等学校優勝レースは目睫の間に迫った。瀬田川の今日このごろは未曾有の活気を呈している。練習時間になると中等学校のフィックス艇が重い艇足を引きづって行く間を四大学クルーの軽艇が飛ぶように上下する。何れも仕上げの練習に入ってレースコースを漕ぎ始めた、これからスパイの活躍となり作戦計画に先輩やコーチがカンカンになつてくるのだ。（中略）

明大対同大

明大のブレードワークは土手評子が賞讃する所であり無駄のない漕法はスイングの小さい割合に艇足を出してゐる、ロングコースにも強いので同大の苦戦を予想されてゐるが明大の三十二半のピッチに対し同大は三十六のコンスタントピッチで元気一杯に必死の練習をしてゐるし荒削りであるが五哩練習等で耐久力にも自信を持つてゐるので未だ勝敗の予断は許されない。

なほ二十三日の当日は大体京都中等学校優勝レース（一中、二中、三中、一商、同志社中学、コース瀬田川下流直線コース、千三百メートル溯航）の予選を午前中に、同決勝戦を午後二時ごろ行ひ午後三時半明大対同大レース、午後五時東大対京大レースを行ふ予定」

レース前の敵情視察合戦も激しく、互いにレースコースを引く敵艇のタイム等を熱心に研究し合つた。5月21日の時点で同志社側はその計測をもとにレース予想と作戦を試みる。

「我艇はタイムの上より見て、スタートより唐橋までに敵艇に約一艇身遅れ、蛍谷に至る間にその差実に倍加する。然し乍ら蛍谷より柳屋カーブに至る間に我艇は猛烈なるスピードを出して敵艇に迫り、更に半艇身を追抜くことになる。この事実は単にタイムの上から見たものであるが、実際レースの場合としてこれを実戦上より見れば、この現象は我軍にとって非常に不利な状態にあると云はねばならない。何故ならば今度の様な屈曲の多いコースに於ては最初より敵艇をリードして行かなければ思ふ様に

コースを取れないばかりでなく、常に敵の泡をかかねばならない様になって、タイムの上より見てはいざ知らず、実戦になっでは甚だ面白くないと云ふのである。ここに於て我々は蛍谷までにタイムを是非とも十秒短縮する必要がある。殊に唐橋までが関ヶ原で、ここで殆ど勝敗が決まるとっても過言ではない」

こうした分析の結果、選手の面上には蛍谷までに如何なることがあっても必ず十秒縮めると云ふ決心と確信の色が浮んだ。

各チームが秘策を練る中、新聞報道はいやが上にも決戦前の興奮を高めて行く。レース前日、5月22日付新聞記事

「明二十三日午後本社後援の下に琵琶湖瀬田川で行はれる第二回明大対同志社大競漕、引つゞいて行はれる第七回東大対京大競漕は期日の切迫とともに四大学クルーは午前午後二回時を定めてレースコースに鉄腕の冴えを見せ、川岸の要所々々に張り込めるスパイは敵のタイムをはかるなど活気漲って早くも当日の壮観を偲ばせてゐる、同大は艇足が何となく物足らないような感じを与えるが昨年の復讐戦とあつて最後まで同じ調子で頑張つて行くところに強味があり、明大は昨年のような凄味はないやうに思はれるが年来の好調子を見逃すことが出来ない。それに連勝せんと意気込んでゐるので同大の油断を許さず、京大は十日前は艇足が鈍かったがその後元気が快復し確実な底力を見せ、東大は十九日の骨休みのためか二十日は調子が悪かったが伸び行く可能性があるのと若いクルーだけに調子に乗れば一段と切味を発揮すべく、四大学のクルーは今のところ伎倆伯仲、勝敗を予想することが出来ない、なほ当日午前本社後援の第二回中等学校六人組競漕がある」

レース前日の合宿日記

「May22. 曇小雨、東北風

二ヶ月の間我等が血と汗を以て築き上げた尊い努力の結果を衆人の前に発表すべき晴の日は愈々明日に迫った。選手の胸にはいやが上にも復讐と勝利の血が跳ねる。実に我々は一年間恨を呑んで復讐の日を待った。今こそその日がやつて来たのだ。選手は一同意気軒昂だが気疲れのせいか食欲はさっぱり進まない。殊に此度のレースはカーブが多い為にコックスの苦心と心配は一通りでない。朝五時COX坂野、小嶋、松井の三人バッテリーに乗りて水流測定に出掛ける。午前小雨あり、晴間を見てスタートより蛍谷まで力漕す。午後は同じくスタートより柳屋までの力漕をなして本日の練習を終る」

そしてレース当日の新聞記事

「◇……………」

今廿三日瀬田川で催される四大学対抗レースは各大学ともきのふで最後の練習ををはりいよいよ決勝のスタートをきるのは明大対同大は午後四時、東大対京大は午後五時である。

京大と同大とは去年墨堤で何れも惜敗の怨みをのんで以来瀬田川に敵を迎えて今度こそは一挙に雪辱しようと二旬に余る猛練習をつゞけたが一方連勝の意気たかく乗込んだ東大と明大との鉄腕のさえはいやが上にもうちふるひ互に放ったスパイの報告では明大対同大には明大に自信があるらしいが両帝大は伯仲らしい（中略）

◇

〔同大〕（網定合宿）は練習のかなり多かった割合に特に目立った進歩がないけれども下らない策略をもたず最後まで必死の頑張りを見せようといふのが力強く練習もピッチごとに艇足が強くやゝ完全なストロークであるからあれで最後まで力漕を頑張れば明大の油断を許さない所

◇

〔明大〕（双橋亭合宿）は鈴木コーチの熱心な指導で戦術をこらしてゐるが東大と同じくカーブに腐心してゐるらしい、練習ではバックに今一息と思はれる点があつて敵を安心させてゐるが果して競漕にはどう出るかわからず或はピッチで押通すのかも知れないがともかく相変らずどこかに底力が流れてゐるようだ四大学とも今年のコースは鉄橋から平津先までジャスト二マイルで去年より延長された上にカーブは鉄橋から唐橋までまた一つ殖えそれに昨今水位が非常に低いので堂谷のカーブも柳屋のカーブも普通の操舵ではカーブが切れないほど大きくなったので各クルーとも舵手の苦心は一通りでなく操舵が勝敗の上に重大の結果をもたらすのは明白で更に案じられるのはファウルの問題である」

懸念された通り当日は雨であつた。同志社は午前九時に練習を開始したものの、まもなく襲つて来た豪雨のためズブ濡れとなり急ぎ合宿所に引き返す。同日午前中に雨で行われた中等学校レースで同志社中学が優勝の朗報あり、一同遅れを取らじとの決意を新たにす。午後三時半の乗艇時刻になつても雨は止まなかつたが、四時、スタート寸前で雨が上がった。

四時ジャスト、一発の銃声と共に両艇見事なスタートを切る。作戦会議の結論として、どんなことがあつても唐橋までにリードを奪おうと心に期している同志社クルーは死に者狂いで漕ぎまくり、唐橋前の第一カーブの前でついに天下の明大から半艇身

のリードをもぎ取った。そしてカーブにさしかかったその刹那、非運が訪れた。両艇のオールが接触、一瞬のトラブルであった。レース経験の差がここに露呈する。同志社の瞬時の狼狽に乗じて歴戦の巧者明大は技のさえを見せて逸早く脱出、唐橋を越えたときには逆に明大がリードを取り、ここにおいて同志社既に万事休した。地力に力る明大は以後小気味良いほどの艇足の伸びを見せ、同志社必死の奪漕を尻目に十艇身、四十七秒の大差をもってゴールに入ったのである。

前年よりさらに着差を上げられての大敗であった。合宿日記の最後にはこう記された。

「復讐を誓った一年間の苦心も今は遂に水の泡となり、勝利を再び敵に譲った。然し乍ら考へて見れば敵と望む明大は余りに大き過ぎる。彼は実に我国のNO・1である。それに対して我同大はスライディングを始めて日尚浅く、未だ創業難の中にある。今再び惨敗の憂き目を見たりと雖も、決して悲観すること勿れ、我等の世界は実に之からだ」

レース後両校主将は同志社時報に稿を寄せ勝因敗因を挙げている。明大主将村田鍬次郎は同志社の新旧選手間のユニフォーミティーの欠如を指摘し、ボディーワークよりもブレードワークを重視すべきことを説くとともに、急ピッチの割に艇速の出ない理由をやはりブレードワークの未完成に帰している。そしてさらに勝負にかける意気を高めるのを説き、東京の十大学レガッタに加入してもっと刺激を受けたらどうかと意見を述べている。

同志社主将荒木節郎は敗因をやはり漕法の研究不足と結論し、就中ブレードワークの未完成を反省すると同時にこれを急ピッチで補おうとしたことに無理があったと述べて、最後に今の東高西低の状況を打破するには関西連盟のレースを振興させ、各校刺激の場を早く整えたいと結んでいる。

確かに技術面での立ち遅れはいかにも明白と言うべく、勝因敗因はそこに帰結せられて当然なのではあるが、さらにこの第1回第2回の明大定期戦を分析すれば、勝敗にかける執念にたいして同志社の甘さ、あるいは明大の抜け目ない狡捷さが明らかにうかがわれるのである。

第1回のときも明大は同志社のコースを侵して同志社に泡をかかせるの有利を得ているが、この第2回においても唐橋前での接触は明大のファウルによるものである。両校審判艇の声を聞かずレースを続行しているが、このとき同志社がオールをなげうってレースを中止すれば、前年の全日本選手権と同様明大の失格ということもあり得

た筈である。レース後特段の抗議もなく、審判の審定もなかったのは、実力の差が明らかであったことと、遠来のクルーとの一種親善レースのムードがあり、紛糾を避ける配慮が働いていたためかもしれない。

明大は次の全日本選手権でも東大コースに入って審判艇に警鐘を乱打されながらも進路を変えずついに接触、再試合となっている。

日頃対校争覇レースを行っていない同志社エイトはかく老獺かつ強引な明大の前にあまりにお坊ちゃん的であったに違いなく、明大主将の

「……昨年と云ひ、本年と云ひ、選手諸兄が実に元気で愉快で親しみ易かつた事です。だからレース当日でさへ、東京の十大学レガッタの折に感じる様な緊張とか、ファイティングスピリットとかを覚へませんでした。熱中し過ぎて勝負に拘泥し醜い争ひを惹き起こすより、こういふ睦じい気持ちでレースを永久に而も盛大に継続してゆく方がどれだけ望ましいことか分りません」
という言葉の中にも軽い嘲弄が感じられるのである。

5. 第1回関選と明治神宮大会

スライディングエイト導入以来の対校戦は3連敗となったが、未だ創業期との自覚を持つ同志社はさらに旺盛なる意欲を燃やしこそすれ、気落ちなどは少しもなかった。前年結成された関西漕艇協会の第1回競漕大会に向けて、元気の練習を重ねて行く。新発足の関西漕艇協会の参加校は前記7校であったが、京大は学内水上大会とのスケジュールが合わず不出漕、彦根高商は試験のため、また岡山医大は準備不十分の故をもって参加を見合わせ、9月19日、記念すべき第1回関西選手権大会は同志社、龍谷大学、大阪高商、同志社高商の4校で行われた。栄ある第1回大会の勝者として歴史に名を残さんものと各校の意気込みは盛んなものがあつたが、予選レース同志社大学対同志社高商は大学一日の長を示して高商に勝利、大阪高商対龍谷大学は大阪高商の勝利となり、決勝は同志社大学対大阪高商で行われた。前述の通りシェルエイト普及が未だ不十分であったため、この第1回大会はフォア選手権大会として行われている。同志社大クルーはエイトより選抜のC人見健造S鮎川弘3北村國次郎2元持勝一B市田勇である。この中にはエイトからサイドの変わった者もいる大らかさであった。コースは鉄橋より蛍谷の「月の家」前に至る1マイルである。

当時のクルーの一人、市田勇の追懐談によれば、作戦はとにかく先行逃げ切りの一手のみで、あとから追い抜くということなど考えもしなかったという。その言葉通り同志社スタートより勢いよく飛び出して大阪高商をリード、京大艇庫前過ぎから大阪高商力漕追撃に努めるも及ばず、同志社大6分28秒、3艇身差をもって勝利、フォアによる第1回関西選手権大会の覇者となった。そして約定通り関西代表として10月末開催される明治神宮競漕大会への出漕権を得たのである。

同志社大クルーと大町・桜井の二先輩及びスカルの室原が勇躍東上したのは10月24日である。大学ボート部として2度目の東京遠征であり、前回の準優勝時の宿舎は一高艇庫の二階であったが、今回は明大艇庫である。宿舎には貸ぶとんを持ち込んでの合宿であった。これについて一つのエピソードが残っている。

同志社大バウの市田勇の父は戦前米国視察旅行を行ったほどの開明の士であったが、息子のボート狂ぶりには常に批判的であった。何事につけ堅実さが尊ばれた時代である。ボートなどという道楽に夢中になっている息子の精神をうわついたものと見て顰蹙していたのかもしれない。

東京遠征での貸ぶとんを貸りての雑魚寝などの様子を、市田は一種の新鮮な高揚感から面白おかしく書きつづった手紙を父に送った。元気に過ごしているというあいさつのつもりであった。ところが遠征後帰省したところ、いきなり親父殿のカミナリが落ちた。曰く

「俺はお前に乞食の真似をさせるために東京へ行かせたのではないぞ！」

まさに当時の堅実厳格な父親像の面目躍如たる逸話であるが、どこことなく微笑ましいものが感じられるのは、やはりそこに「青春」が香るからであろう。いずれにせよ当時のボート狂は多かれ少なかれこうした特殊な目で見られたようであり、ハイカラな人種と一般的には目されていたに違いない。

さて、大正15年の明治神宮大会において、関西から遠来の同志社大クルーは早稲田大の「次郎」を借艇、遅れて来た坂野も見守る中、着々とウォーミングアップを重ね、準決勝から出漕というシードの特典を与えられた。

参加10クルーの内、日大淡紅会はA、B2クルーで出漕、両クルーとも予選を勝ち上がり優勝を狙う。準決勝第1レースで日大Aが東大を降した後、同志社大は日大Bと対戦した。コンディションは快晴無風、コースは隅田川上舩2000メートルである。予選レース観察の結果、同志社は日大Bの各クルーのボディーワークやリストワークが不揃いであり、ディップ及びフィニッシュが合っていないのを見てとった。そのため

ローリングが起こっており、またレッグワークに留意しないために艇足が伸びず、要するに練習不足による漕法不統一という弱点を抱えている。これにつけ入ることができれば勝利できるという希望を持ったが、そうは言っても敵方は既に昨年の優勝校東京商大及び強豪東京高師を破った力を持っており、勢いに乗っているので油断はならない。そこで作戦としては必ずスタートを決めてリードを奪い、これによって相手心理を動揺させ、前記の欠点を大きく露呈せしめることができればよし、万一敵方にリードされたならばいかなる犠牲を払ってもピッチとスパートの二漕法を併用して相手を抜き、そのことによって相手の狼狽と弱点露呈を呼ぶべしということになった。何にせよ一勝も挙げずに帰るということになっては関西代表としてやって来た面目が立たない。

スタートに対して全クルーが一大決意をもって全神経を集中する中、9時25分、戦いの火蓋は切られた。同志社猛然たる勢いで進発、その気迫がオールによく乗って直ちに一艇身のリードを奪う。日大これにピタリとつけ、着実な挽回を期するかのようである。

同志社はまず作戦の第一段階を成功させた。このリードを決して相手に渡さずにおれば相手心理の動揺が大きくなるにつれ戦局は有利になるとの確信があった。果して400メートルの第一カーブでは同志社が如上の確信のもとに落ち着いたレース運びをしているのに対し、日大挽回への気持のはやりを押さえきれず、各クルーのあせりが目に立ち始めた。ついに敵方はこちらの作戦にはまったのである。

不利な状態で一度冷静さを失うと必ず長所よりも短所が前に出て来る。日大側のはやりとは逆に艇差がじりじりと増し、明大艇庫前では2艇身差となる。白髪を経た後、日大必死の追撃を試みるがさらに艇差は開き、同志社3艇身差をもってゴールに入った。タイムは8分50秒であった。

同志社会心のレース運びで準決勝を勝ち、とりあえずは関西代表としての面目を保った。

決勝を控えて、同志社は再び鳩首作戦を練った。

日大AはBと同様の弱点を持っている。しかしながら警戒すべきはその友艇が破られたことに対する復讐心である。さらには同一校の2クルーが準決勝まで進出しながらひとり同志社に両艇打ち破られて優勝の長蛇を逸するの無念を味わわざるべく必死の底力を現して来るに違いない。スタートでリードを奪うことに力を傾注することは前回と同じであるが、たとえ幸いリードを奪えても、ピッチとスパートをゆるめては

ならない。

かくして作戦計画はなり、決勝のときは来た。コンディションは極微南西風、下げ潮、コースは上航2000メートルである。

スタートは見事に決まった。たちまちにして1艇身半のリードを奪う。しかし勝負はこれからだ。予期の如く日大は猛然と追撃してくる。ペースは準決勝よりは一層上がった。息を入れることもできぬ。リードを保つため、敵と同じく最大限の力漕が強いられることになった。苦しい。だが敵も苦しい筈だ。極限の苦痛に耐えるクルーの表情を見ながら、舵手人見健造は冷静であった。追撃を振り払う機をうかがっていた人見は、第一カーブ、果然理想的な舵を引いた。リンチ主義の妙境というべきこの水際立ったカーヴィングが敵に与えた絶望感は大きな効果を生んだ。限界が来た。日大はついに弱点を暴露、艇足にわかに乱れた。リードが開いた。敵はへばった。同志社クルー、既に頭の中には何もなかった。「それ行け！それ行け！」とただ心に唱えつつ、ひたすら漕いで漕いで漕ぎまくるのみであった。真白な意識の中に、青空のような大きな喜びが見えている。艇差はさらに3艇身、4艇身と開き、ゴールでは4艇身半差という圧勝であった。タイム8分40秒。

ついに同志社フォアは全国制覇をなしとげた。

「かくてフォア日本選手権を獲得し、優勝トロフィーを授与された端艇部の大先輩津下氏に褒められた。渡辺氏は悦んでトロフィーに溢れるばかりビールを湛えて一気に飲み乾した。明大の校友春日氏は祝宴を開いてくださった。京都へ帰ると、駅頭には塚本、東辻その他の諸先輩、相沢君、西君、渡辺団長はじめ応援団幹部諸君、京大端艇部諸氏、わが端艇部員などに歓迎された。そして同夜直ちに塚本先輩の祝宴に招かれ、愉快的な功名談をしたのである。まさに歓びと楽しみと誇らしさの連続であった」(同志社時報)。この勝利はひとり同志社のみならず、関西漕艇界の関東に対する反撃



明治神宮大会優勝

の狼煙として広く天下に認識された。しかし漕艇界はスライディングエイトの時代に向けて着々と移行して行く。この分野での関西の後進性は当時明らかであり、エイトにおける関西の雌伏は以後さらに長年月にわたって続くのである。

6. 昭和初期の低迷と新時代への息吹

年号改まり昭和2年、同志社水上運動会は「大学高商連合水上大運動会」の大会名を冠して、5月12日、瀬田川で行われた。これは高商と大学予科を中心とした大会であり、また滋賀県庁、京阪電車等の来賓競漕も行われている。予科年級の優勝者たる2年級には塚本純一寄贈になる大カップが贈られたが、これは以後学内大会で「塚本杯」として定着して行くものであった。なお、この大会では高商3年がベストタイムを記録しており、高商においてもボートがいよいよ盛んになって来つつあることを示している。

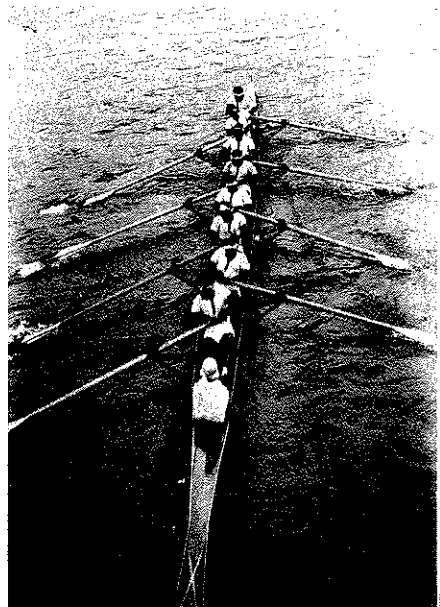
なおこの頃「同志社新聞」に「同志社小唄」なるものが掲載され、短艇部の巻には松山克己の作詩で次のような歌詞が載っている。

「 揃ろた揃ろたよ
オールが揃ろた
漕げよ勇みの
ボート団

男伊達なら
乗りきれ波を
波は男の
こゝろいき

波だあらしだ
千両の命
うしろ向くなよ
腕にぶる

腕は南蛮鉄
胸にはクロバ
湖は命の
さらし場所



昭和初期のクルー

命知らぬが
情にや泣くぞ
鷗ひくいときや
出て送れ

(以下略)」

この年、関西漕艇協会はさらに大阪高工(現大阪府大工学部)、関西大学の新加入を見た。この年より加盟校は協会の基礎を固めるため代表校の明治神宮レースを見合わせ、さらに競漕大会をできるだけ早期にシェルエイトの大会とすることを決定、早くもこの年の大会よりシェルエイトのみの競漕となっている。

その故であろうか、この年9月4日に行われた第2回関西選手権大会は京大、大阪高工、大阪高商、同志社大の4校のみで行われている。未だ各校にエイト艇が行き渡っていなかったことが想像できるのである。

予選第1レース京大対大阪高工は京大の勝ち、第2レース同志社大対大阪高商は同志社の勝ちとなり、決勝は京大対同志社と決まったが、これが史上初の両校対戦である。京大側史料によってレース経過を見る。

「京大瀬田側、同志社大学石山側、スタートの滑り出し同志社よく京大を圧迫して進み艇庫前で約半艇身抜く。京大の調子よくあせらず同大に追従す。しかも堂谷のカーブに至るや猛然スパートに次ぐスパートを以てし、インナーカーブを利して観月前にて京大一艇身半を抜く。同大漕大に努めたがあせり気味でフィニッシュはね上り艇足伸びず京大益々調子よく漸次艇差を増し3艇身、タイム7分42秒5分の1を以て京大関西権手権を獲得す」

史上初の同志社対京大戦はこのように京大の勝利に帰した。以後京大は関西における同志社の最強敵として長く同志社の前に立ちはだかることになる。

翌昭和3年の関西選も京大が優勝した時、シェルフォアの振興のために府立医大、龍大、同志社大、同志社高商の4校により京都インターカレッジ漕艇協会が発足、10月28日に第1回大会を行った。瀬田川鉄橋下から油屋旅館前に至る下航1マイルのコースで、結果は同志社大の優勝、2位は同志社高商であった。同志社大クルーはC志賀正夫S神田重太郎3樋口明2小島龍三B清田博である。

同志社の濃淡青色のブレードカラーが決まった時期については諸説があるが、この第1回インターカレッジ競漕のクルー記念写真に見るオールはモノクロ写真のため色

彩判明は不能ながら先端部を濃色とした現在のデザインに近いものとなっている。第1回、2回明大定期戦当時のブレード色はグリーンであったことが明らかであるので、以後、1、2年の間に少くとも濃淡色塗り分けの原形が定まったことが推定できる。また明治神宮競漕の第3回大会でフォア全国征覇を達成した当時はユニフォームはなく、ただ短パンに白シャツで揃えていただけという市田勇の談話があるが、この昭和3年時点では既にクルーはユニフォームと覚しきものを着用している。おそらくは東西共に対校選手権競漕が盛んになる中、観客のためにも自校弁別の要が起り、関東で行われた旗印的自己主張がこの頃急激に関西にも浸透して来たのではないかと思われる。いずれにしても、当時のクルー樋口明の談に「ブレードの色は自分達の頃にしたい決めた」とあり、現在のブレードデザインの原形は昭和2、3年頃に定まったとするのが適当であろう。

この年にはまた神戸在住の外人クルーとの定期戦も始まっている。

日本におけるボート競技は横浜在住の外人グループYR&AC（横浜レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ）が始めたものであるが、これと相前後して神戸にもKR&AC（神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ）が結成され、ボートをはじめ陸上競技、クリケットなど多くのスポーツ活動を展開してきていた。中にはボートの本場ケンブリッジやオックスフォード大で名を売ったような強力な選手もあり、同志社と練習試合を行ったこともあるが、そのレベルの高さ故に同志社はほとんど歯が立たなかった。このKR&ACとのエイト定期戦はこうしたハイレベルのクラブとの交流を通じて技能向上を図ろうとするものであったが、案の定、定期戦開始以来、同志社連戦連敗であった。

概して言えば、この頃同志社においては端艇以外のスポーツも相当盛んになってきており、明治期には数部にすぎなかった体育部も十数部まで増加し、それまで同志社体育に占めていたボートの比重もかなり縮小されて来る。またスライディングエイトを京大と同志社以外には所有している学校がなかった頃から比べると関西各校のレベルも急激な進歩を見せており、同志社の対外戦績はこの頃振わないものになっている。こうした落ち込みを見せながらも伝統の力は根強く、同志社ボートはわずかながらもじりじりと盛り返しを見せて行く。まず一つのその現われが昭和5年の明大定期戦初勝利である。

大正14年の定期戦以来同志社は明大に連戦連敗、一時は明大側から対戦を断られかけたこともあると言うが、必ずや一矢を報わんとの意気に燃える同志社は、この年勇

躍東上、隅田川において大接戦の末、ついに明大を降すに至ったのである。クルーはC酒井幸男S神田重太郎7樋口明6久木弥一郎5西尾孝二4河村3小牧2小島B清田博であった。主将神田重太郎は「同志社ボート中興の祖」として今も語り継がれる名キャプテンである。がっしりした体軀、剛毛、頭は丸刈りという外見、幼くして両親を失った苦勞人であったが、気はやさしく明朗、じつに人の面倒見がよく、まことに将たる器を備えた魅力ある人物であった。当時、京大には近藤勇と自称し、ユニフォームの背中に「寄らば斬る」と墨書して唐橋を闊歩する者がいたが、同志社も負けじと神田は「必勝」、樋口明は「オール諸共死なん」などを書いて対抗していたという。そのころのほほえましきパンカラ風がしのばれる。神田は卒業後満州国官吏として赴任、どういう経緯からかかの地の馬賊に慕われ、彼らと別れるときに泣いて見送られたという逸話を残している。

続く昭和6年の朗報として、念願の対神戸の外人クラブKR&AC定期戦初勝利を果たしている。その状況を坂野公夫の記録によって見る。

「

朗らかな同志社ボーイの一日

坂 野 公 夫

うらゝかな春の一日ノ

瀬田川の清朴な空気の中に育まれてゐる若き青年達には外国通ひの大船が巨体を横たへて、造船所のガンドリークレーンや黒煙を吐く煙突が林立してゐる港を控えた敏馬浜の沖の情景は都会に出て来た田舎の青年が感じる様な大きな驚きと、好奇心とを与へる。

× × ×

KR&ACのボートハウスは何時来ても金循環の悪い掘立小屋の艇庫しか持っていない吾々には実にすばらしい存在であり、羨望の的だ掃除と手入の行届いた美しい艇が大小二十隻ばかり上下の棚に並べられてある。

五たまりばかりに分けて行儀よく立てかけられ拭き込まれた曲線の美しいオアーノ

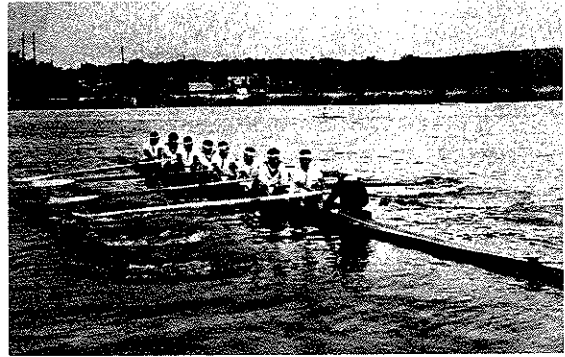
横の方には又細いスマートな艇姿とは別な朗らかなヨットが十隻ばかり貧困なボートの世界に育てられた若い青年達には血の湧き立つ存在だ。

吾々のクルーは未だ残念乍KR&ACのクルーに勝った歴史を持ってゐないのだ。唯彼等の徒らに豊かに設へられたボートハウスに向つて癩の虫を起してゐる許り。併し過日に於て幾ら負けても勝利を見るまでは止むことの出来ないのが吾々同志社端艇部の

精神であり亦強味なのだ。殊に相手は外国人、どうしても大和魂が承知して呉れない。

やがてはそれが同志社端艇部の精神なのだ。

国際的交歓の意味に於ても対KR&ACの春のフォアセルレースは年中行事として続けてゐるのであるが年変り人変れども吾々のクルーは過



昭和6年頃のクルー

去に於て負けてゐる数が多いければ多いだけ苦しんでおり苦勞をなめてゐるそれが研究になり絶えざる努力に依って吾々の向上になって来たのだ。

× × ×

四月二十六日！

昭和六年四月二十六日にこそ朗らかな気持でこの稿を草しそして校友諸兄諸先輩に歓びの一端をつたへることの出来る幸福を持ち得たのだ。

同志社のクルーは遂に勝ったのだ！ 而も敵は昨年日本フォア選手権を獲得した強豪クルーである。

簡単乍ら本日朗らかなニュースを左に略記します。

コンディション 快晴、波無く西南微風絶好のレース日和なり

コース 一哩

第一レース 午前十時

クルー

KR&AC

Bow. F.Moses

2. F.Lindenau

3. T.Lange

Stroke. T.L. filums

Cox. M.M Smith

(Outside Course)

DOSHISHA

Bow. 西尾 孝二
 2. 久木 彌一郎
 3. 樋口 明
 Stroke. 神田重太郎
 Cox. 酒井 幸男
 (Inside Course)

KR&ACは一九三〇年度日本フォア選手権保持クルー。スタートの三本KR&AC艇の迂り出し良く三シートばかりリードせしが同志社スタートヘビー二十本の間に完全に並行しよくKR&ACの艇速に随ひピッチを押へて力のリザーブをなし余裕を示す続く力漕によつて徐々リードし三分の一哩を過ぎる頃KR&ACの艇速落ち領水艇終に一艇身リードし勝ちに乗じて盛んに艇差を開く。

KR&AC盛員にスパートを追へども差は縮められず同志社リードして五艇身の大差を以てゴールに入る

第二レース

KR&AC
 Bow. H.Williams
 2. H.Wohbers
 3. A.Tayler
 Stroke. F.Sehirmer
 Cox. M.M Smith
 (Outside Course)

DOSHISHA
 Bow. 山辺正
 2. 井田通三郎
 3. 森田信雄
 Stroke. 宇高芳丸
 Cox. 北川寛一郎
 (Inside Course)



後援会誌第1号

同志社新人クルー

スタートにり出両艇並行KR&AC徐々にリードする氣勢を示せしも同志社整調よく調子を抑へてあはてずスタートより五十本許りにて遂に同志社リードする。

我艇のックス少々岸に舵を引き過ぎ迂回のコースをとりしも完全に押へてミドル前に盛んにスパートを以て一艇身をリードし益々差を開き一層實力を現して七艇身の差を以てゴールに入る。

遂にニクルーとも我々は勝利を得た。過去の屈辱は美しく精算されて吾々の努力は漕法の上に於ても或は進歩が見出された。右ニレース後同志社第三クルーとKR&A同志社ミックスクルーとの番外レースあり大いに両者間の交歓を温め愉快なる午餐の御馳走になり瀬田川の合宿所に引上げた」

7. 水難事故前後

この対KR&AC戦にも出漕しているクルーの一員西尾孝二は、その後同志社内的美術同好の組織「鞍馬会」に所属し、その色彩感覚をもってブレード色をはっきりと濃淡青色に決定、その後長くこの色に統一されることとなった。

対明大定期戦は昭和8年の競漕を最後に中止となった。

このレースは8月27日午後4時30分より隅田川向島東武鉄橋と水神間3000メートルのコースで行われたが、スタートでややリードを取っていた明大が言間橋を越えた500メートル地点のカーブで同志社コースを侵犯、同志社（東大より借艇）のオールが2本（一説には3本）折れるという強烈な接触をきたした。このため直ちにレースを中断、本来ならば明大失格となるべきであるが、同志社は他校のオールを借りて再レースを行い、ワンカンバスの差で惜敗した。当時のクルーの言葉に、「敵の汚さに激怒した」とあるが、結局再試合でも敗北した。このレースをもって以後対明大戦は行われなくなり、結局通算成績は同志社の一勝六敗となって終っている。このレースの同志社クルーはC北川寛一郎S宇高芳丸7樋口明6井田通三郎5山辺正4内藤謙二3円尾紀2花井重美B木村明であった。

このときの部長は予科教授林源三郎、主務理事は森田信男、コーチは瀬田修平氏推薦による東大医学部の畑医局員であった。合宿は向島の民家を借りて行ったが、森田は上京早々盲腸炎にかかり帰阪、代って上京した前年度主将の久木弥一郎が諸事万端

を指示した。なお東京にて世話を受けた先輩には渡辺勇、黒川俊夫、大町弘蔵、大崎艇介、大谷保、北村國次郎、鈴木淳蔵などがある。

この年、前記クルー以外の部員としては久木弥一郎、酒井幸男、市田隆、京谷祐弘、松川寿久、奥藤、松島誠、高橋宗らがあり、予科1年で退部した者としては吉川、加悦、和田、堀井、鈴木基夫、菊池などがある。

昭和初年の不振期には同志社は関西選手権からは遠ざかり、対明大戦に全エネルギーを傾注してきていたが、対明大戦が行われなかった昭和7年には関西に出漕、ただしこのときは関西大学と蛍谷カーブで接触、惜しくもオミットとなっている。

最後の対明大定期戦の翌月、同志社は昭和8年度の関西選手権に桑野造船所製の「クロガネ」を使用艇として出漕するが、準決勝で京大にカンバスの差をもって敗退した。昭和9年より春期練習の効果を上げるべく龍谷大学、同志社高商と語らって三校リーグ戦を発足させた。予科の学年末試験が3月10日に終了し、15日より合宿開始したが、4月5日、思いがけぬ事故が起きた。

練習は6人乗りのフィックスと2人乗りのタブボートを用いて行われていたが、この日のタブ乗艇者は山辺正と高橋宗、コックスはコーチの宇高芳丸で、午後3時浜大津に向け出発した。北風に季節外れの小雪さえ交る悪天候で、湖上には琵琶湖では要注意信号と言われる白波が立っており、フィックスは先行したがタブでは浸水も始まったため出発後まもなく引き返すことを決定。唐橋鉄橋の上流約500メートル付近に至ったとき突如襲った横波に吞まれ、一瞬にして沈没した。この事故で宇高芳丸が水死、同志社ボート史における唯一の水難犠牲者となってしまったのである。当時の乗員の1人であった現同志社艇友会会長の高橋宗は

「今治中学出身で水泳の上手な宇高さんが水没死するとは信じられず、これを救助し得なかった私は一生の怨念として今もなお、心の中に黒い影を残しています」

と、事故後半世紀以上も経た今日なお、その痛恨の心を語るのである。「残念ながら私の時代には宇高さんの霊に酬いることは出来ませんでした」と語る高橋であるが、この事故がボート部員に与えた衝撃は甚大なものがあり、あたかも宇高の霊が乗り移ったかのように、長期にわたる不振から、同志社及び同志社高商のボートは上昇に向かって行く。この辺りの心理的事情は

「私のように小柄で体力のない人間が最後までボートを続けられたのはこの事故が大きな自覚のようなものを与えてくれたからです」

という高橋の言葉によく表されているのではないだろうか。

事故の悲しみの未だ癒えぬ6月10日に開催された関西漕艇クラブ主催桜宮レガッタで大阪商大を破り優勝、さらに引き続き6月18日に行われた三校リーグ戦で同志社大は全勝優勝をおさめた。クルーは、C松川寿久S高橋宗7山辺正6内藤謙二5円尾紀4乾正治3山村剛一2村木B木村明であった。



右 宇高芳丸

7月末より再び合宿に入った同志社大は関選に備えて猛練習に励む。関選復帰後3年目の今年にクルー全員が同志社の真価をここで発揮せんものと意気込んだのであった。

関選予選で三高を5艇身差、準決勝で龍谷を8艇身差という大差で破った同志社は京大との決勝に臨む。蛭谷カーブまでややリードして同志社快調に進むが、ここで新人クルーに痛恨の切りこみあり、リードを奪われ、その後よく追漕するも僅かに及ばず、3分の1艇身差にてついに長蛇を逸した。クルーはC松川寿久S高橋宗7山辺正6内藤謙二5円尾紀4乾正治3山村剛一2村木B寺田英夫であった。この年高商がフォアの部で優勝。躍進の兆しを見せている。

昭和10年は、翌11年のベルリンオリンピックを控えて出漕クルーの選考大会が行われた年である。エイトの選考は6月初旬、フォアは11月初めであったが、関西からは同志社と京大がエイトの部にエントリーした。このため同志社は特に新入部員強化を目的として前年昭和9年の12月18日から10日間にわたり異例の合宿を敢行、参加者は主将内藤謙二、主務市田隆以下、松川寿久、乾正治、円尾紀、高橋宗、寺田英夫、山村剛一、市谷光之助、神谷仙吉郎、大西二三男、美馬武夫、橋井半次、格谷等がある。昭和10年の3月15日から例年通り合宿に入ったが、新人の養成の成果が上がらず、結局新入生からは中学時代に漕艇の経験があり、また体力のある平井弘一のみが加わることとなり、五輪予選対校クルーはC松川寿久S内藤謙二7山



モーターボート進水式

村剛一 6 乾正治 5 山辺正 4 平井弘一 3 円尾紀 2 高橋宗 B 寺田英夫と決定し、5月上旬勇躍上京した。関東遠征の際の使用艇は当地で借艇するのが通例であったが、このとき同志社は新艇「漣（さざなみ）」を、京大の新艇とともに東京汐留駅まで国鉄無蓋車にて輸送して隅田川に浮かべ、モーターボートにて向島まで曳航した。

当時の造艇技術の傾向として艇長をやや短めに取り横幅は若干広く安定度を増し、また軽量化の流行があったが、先鋭技術については関西はまだ立ち遅れがあり、難点をいくつか残した。しかしながらメーカーの自社製ボートへの打ち込みは熱心であり、桑野造船所は職人を一名同行させ最後まで艇の調整に当たった。

しかしこの五輪代表選考会における戦績は1回戦慶応に大差負け、2回戦も東京商大に大差負けと振わず、京大も拓殖大等に大敗を喫し、関東の壁を痛感させられ、関東の某選手から「上方野郎はだらしねえや！」との痛罵を浴びる結果となった。その選手が関西出身者であっただけにひときわその言葉がこたえたと当時のクルーの一員は語っている。

8. 同志社高商の成長と進撃

ただ捲土重来を期するしかないとの思いで帰洛した同志社クルーにさらに衝撃を与えたのは同志社高商の成長ぶりであった。

6月下旬に開かれた第2回3校リーグ戦において同志社大は龍大には完勝したものの、対高商戦ではスタートから思いがけぬ食い下がりにあい、東京帰りのプライドや余裕を投げ捨てての応戦も強いられた。苦戦の末に何とか面目を保って勝利したものの高商の急成長には目を見張らされたのである。

これは高商の新開明夫主将が打倒大学をめざし一念発起、四国及び京滋の中学等から有望な人材を集めるべく運動を開始した。その最初の成果の片鱗が示されたもので、クルーとして堀井礼三、渡辺隆弥、近藤憲司等が出漕していた。

この年大学は五輪予選遠征で関東選出漕の余力なく、代りに当時京大主催で毎年行われていた固定席の高専大会に予科クルーで出漕し、よく1回戦準決勝と勝ち抜いたが優勝戦で惜しくも横浜高工に敗退した。クルーはC小杉良平S高橋宗 5 山村剛一 4 千葉有明 3 平井弘一 2 神谷仙吉郎B柴田民部であった。

昭和6年満州事変、昭和7年上海事変と大陸への侵攻、軍国化への傾斜が年々強ま

る中、昭和11年2・26事件が勃発した。これにより軍部の二大急進派の一方であった皇道派が英米協調路線内閣の要人を殺害後壊滅したため、統制派が実権を握るに至り、日本はさらに急激に軍国の道を突き進んで行くこととなる。

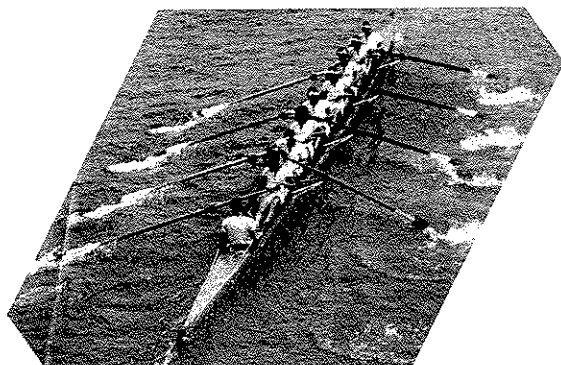
こうした背景を控え、関西漕艇クラブ主催の桜宮レガッタも海軍の後援レースとなり、名称も「海軍記念日競漕」と改められていた。

昭和9年、同レースに優勝した同志社は10年には不出漕のため優勝旗を返還させられていたが、11年、その奪回をめざしてこのレースに臨んだ。順調に勝ち進んだ決勝戦での対戦相手は、昭和7年の関選において接触トラブルからオミットとなり、無念の涙を吞まされた関大である。レースの模様を「同志社端艇部後援会誌」所載の高橋宗の記録に見る。

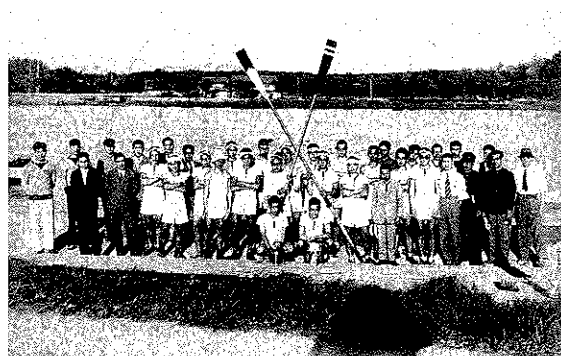
「第1コース関大 第2コース同大でスタート、同大スタートの滑出しよく、百米の鉄橋までに、逆に半艇身抜く。コンスタントピッチ（三五）に入った後も一本々と艇差を増し、三百米で早くも水入る。新入気をよくしてか、しきりに怒号して励し合ふ。八百米、淀川橋で二艇身、ゴールで三艇身と差開き、遂に昭和七年インターカレッジの恨をはらす。一同歓喜し互にその勝利を祝し握手を交す」

昭和8年度をもって最後となった対明大戦に代わるものとして、同志社は他の大学との定期戦を設定すべく検討していたが、最終的に大阪商大が候補となった。商大側に打診したところちょうど商大も相手を探していたとのことで交渉は円滑に進み、6月7日、第1回を瀬田川で行った。午前と午後の2回同一クルーで対戦し、1回戦は半艇身、2回戦は2艇身差で同志社の勝利となった。

ここまでは同志社大は五輪予選出漕東京遠征帰りの貫録を示していた



昭和10年のクルー



第1回大商大定期戦

と言えるのであろう。しかしこの年同志社大にとって最も大きなショックであったのは、三校リーグ戦における対高商戦で初の敗北を喫したことである。

レースは高商がスタートから飛び出して2艇身のリードを奪い、大学が自信満々の余裕を見せての追漕の形となる。

「実は高商が前半に全力を出すのは解っていたが、唐橋迄高商が余程頑張っても3〜5秒位早く来られるだけだ。3秒なら約1艇身、1艇身なら広梅後のスパート15本と蛍谷とスパート7本では逆にリード出来る」

との大学側の目論見に反し、荒削りの高商は「あの大きなブレードで水中をがむしゃらに強く早く」引き続け、技術的に洗練されている筈の大学クルーの追撃によく耐え、一尺の差で逃げ切ってしまったのである。

この敗北について当時のクルーの一員であった乾正治は次のような感想を述べている。

「高商は過去より大学をずっと目標とし、機会をねらって来た。其処に精神的技術的向上が認められるのは云ふ迄もない。一昨年は我々は楽勝した。然るに昨年は、東京遠征にも拘らず、高商の技術が向上したのか、又我々のそれが低下したのか、意外の接戦で唐橋まで殆んど水の開かなかったのを終盤の力漕でやうやく抜き、辛勝とは云えなかったけれども、とにかく苦戦だった。

高商は「勝」と云ふ一定の目標に向って次第に向上して来たのに対し、我々は少く共高商の向上と同等に、否、それ以上にやはり向上せねばならぬ事になる。

然るに我々の技術は果して前年より上ってゐたか？疑問である。大体に於て同一水準を上下してゐた様に思はれる。

其処に於て所謂「追はれる者の弱み、追ふ方の強み」と云ふ事がうなづけるのである。

前述せる如く我々は余り自信を持ち過ぎた。

レースに臨み、相手を恐れず、自己の力を信じて、それ相当の実力を正々堂々と戦ふならいゝ。然し此の場合はクルーの中に技術的に重大な欠陥があったに拘らず、むしろ相手をなめた油断的な自信ではなかったらうか？」

この頃日本は国際社会の中でますます孤立化を強め、国内的には滝川事件、天皇機関説問題、治安維持法の思想・運動への適用等言論統制の進む中、軍国化への方向づけが徐々に決定的なものになろうとしていた。

こうした空気の中、同志社内でも左右両派が生ずる等動揺が見られたが、当時の同

同志社総長湯浅八郎は昭和9年の就任時より新島襄の遺志を継いで飽くまで同志社教育の本領とする民主主義、自由主義、キリスト教主義の国家的国際的使命について説きつづけた。ために同志社は軍部より再三にわたり有形無形の弾圧を受けることになる。まず、湯浅就任直後、高商の武道場に神棚が学校の許可なく祀られ、学校側はキリスト教主義の学校に異神を祀ることの不合理からこれを撤去するということがあったが、これが軍部から反国体的であるとの理由により攻撃され第16師団の介入を受けるまでの大問題となった（神棚事件）。

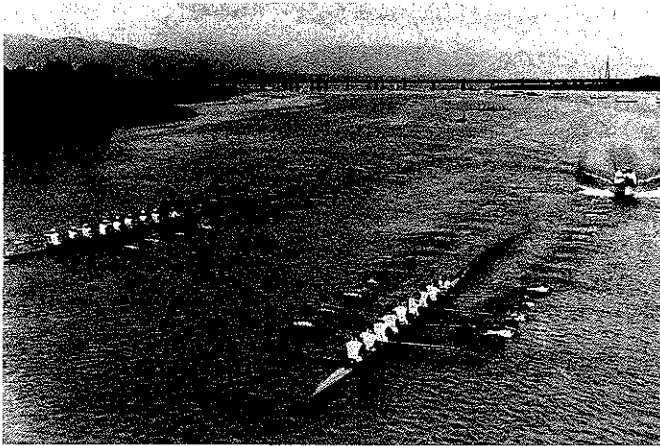
さらにはその後、天長節において強制されていた「教育勅語」朗読の際、これを読み慣れぬ湯浅が「御名御璽」を「オン名」と読んだことに対して攻撃を加えるなど弾圧が相次ぎ（勅語誤読事件）、国体明徴の右翼団体からの策動もたび重なって学内は未曾有の混乱期に入っていた。この年昭和11年の関西選手権大会において同志社が彦根高商と1回戦で対戦の際、京都の皇族の一家が来観、不敬にあたるので鉢巻きを取れとか唐橋上においても宮家乗艇のモーターボートのコース上にあたる位置からは観戦禁止など当局から種々の指示が出された。

しかし瀬田をわが心のふるさとと心得ており、また国体論者から学園に幾多の弾圧を加えられ続けている同志社大クルーは決然これを拒否、従来通り鉢巻子を締めて濃淡青色ブレードを湖上に存分に振り、宮家随伴の多数の護衛モーターボートの波に悩まされながらも堂々勝利を得た。

続く対京大戦については当時主務理事であると共にコーチ役もしていた市田隆が次のように述べている。

「京大とのレースはトータルで分の悪い我がクルーは前半抜けるだけ抜く策に出て、第3カーブをゴールと思え、スタートでは必ず3本目で抜ける、どれだけ抜けるか判らないが、抜いた差を何とか第3カーブまでもって来い、そして第3カーブ後スパート10本を入れて一か八か勝負しろと言っておいた。スタートでは予定より多く約1艇身近く抜いた。第1カーブで半艇身リード、私はシメたノと思ったが、ピッチが40で予定より2本高いので心配した。案の定唐橋では逆にリードされ、第3カーブではやや水が開いたようだった。第3カーブ後のスパート10本ですばらしい艇速を見せ挽回したが、その後疲労しきって、2艇身の差で矢尽き刀折れて敗退した。確かに実力で負けた。あのときこうしたらとかどうしたら良かったかなどという考えは全くない」

当時の同志社の実力の限界がはっきりと出たレースであった。あるOBは当時を振り返り、「学生数も少なく、ことに同志社大学という大学の性質上、学生の中にボート部



高商エイト関選制覇

に入部しようという者は少なく、入部しても病気、落第、退学、転学等の理由でやめて行く人が多く、有望な新人の発掘は困難だった。まして中学時代漕艇の経験を持った者の入部はまれだった」と語っている。

こうした同志社の状況に対し、長期計画のもとに精力的に有望新人の発掘に努

め、強力クルーを練成して虎視眈々覇権奪取をねらっていたのが同志社高商であった。昭和9年頃からひそかに進められたこの計画は、大学のようにコーチもなければモーターボートを使うこともない自治的でかつ地味な練習の中で、コックス近藤憲司を中心に着々と進められて来たのである。

昭和12年は、その成果を問われるべく機の熟した年であった。同志社大の方はクルーの食中毒事件があり、この年の関選にはフォアのみ出漕している。

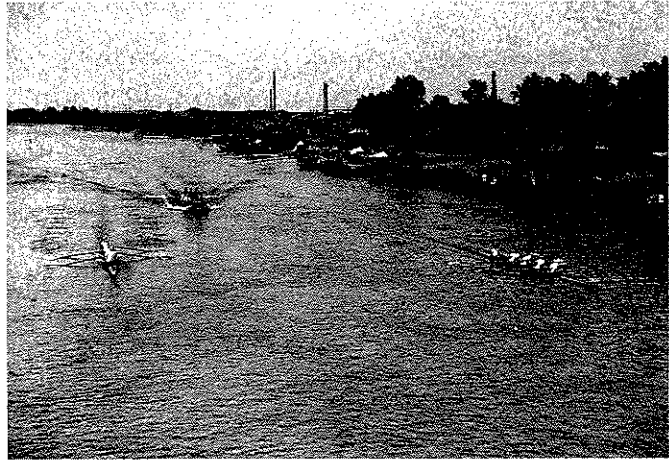
エイト準決勝で同志社高商は京大と対戦、当然ながら京大圧倒的に有利の前評判であったがタイム6分24秒2、5秒差で堂々これを降した。決勝の対戦相手は準決勝で6分11秒2を出している大商大であったが、クルーを奮起させることにかけては天才的であったコックス近藤を励ましてクルーを叱咤、猛烈な接戦の末ついに1尺の差をもって勝利を手中のものとした。クルーはC近藤憲司S堀井礼三7渡辺隆弥6吉益四郎5井上謙造4柏原博3水野2宮本清B永瀬(佐々田)正であった。フォアでは同志社大が優勝した。

高商エイトはこの年の全日本選手権に出漕、東大、早大と覇を争って一着東大から三艇身差で敗れたが、よく関西の力を東都に示している。同志社大もフォアの部にC大塩S平井弘一3円尾紀2青木喜三B山村剛一のクルーで臨んだが、関選に出漕した小杉良平が病気休部となっていたため勝算なく、東京商大に破れた。

東京帰りの高商は翌年、3校リーグで接触オミットとなった他は記念日レース等を連戦連勝、まさに関西における王者の座を占めたが、学校設立後の歴史の浅い同校にとってさらに校名を天下に認識せしめるには、過去において関大、京大が達成した関

選二連覇をもってこれをなすの要があった。

この年昭和13年の関東の準決勝で高商は兄貴分の大学に7秒4のタイム差で完勝、現時点における実力の逆転を示した後、京大を相手に決勝戦を戦うこととなった。



大学フォア関東制覇

レースは予想通りの大激戦となり、高商わずかにリ

ードして進むも前年の雪辱を期する京大の猛追ものすごく、高商危うしと見えた瞬間コックス近藤の満を持した大号令がかかる。

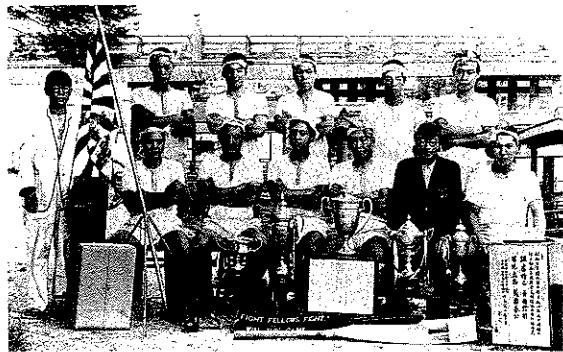
「ラストスパート50本！ 優勝だ、優勝だ！」

クルーの耳に終生残ったといわれるこの声に応じて全員最後の力をふりしぼった。タイム差1秒2、ついに同志社高商は輝く関東2連覇の偉業を達成した。

続いて高商は二年連続の全日本挑戦をするが、このときの模様を吉益は次のように記している。

「(敗れはしたが) 東京商大との艇差は僅かに四秒であった。しかもこの時はスタートで東京商大に猛烈なフライングをされ、300の一高前で既に水が空いていたのをミドル辺りで詰めだして殆ど並行にならんとしたのを敵のスパート良く利き逃げこまれたものである。勿論この時は相当なラフ・ウォーターであった。しかし荒川で練習して

いるクルーと瀬田のクルーとがラフ・ウォーターのレースをやれば、どちらが損か得かは素人にも判然としよう。この時私は六番を漕いでいて終始整調を追いまくった。ローアウトしても良いと思ったからである。しかして千メートルあたりで追いつき出したときコックスが『あれが関東選手権だ、大したことない大した



連戦連勝の高商エイト

ことないノ』と絶叫したのが未だ耳にこびりついている」

このレースの観戦記を東京商大OB遠山が東京朝日新聞に寄せている。

「商大は対同志社のレースで、600あたりで波に悩まされて軽い腹切り等あり調子は終始荒れ気味で苦戦の模様であった。同志社はハンザウエイとスライドアップの前半をきわめて敏速にした、特異ある漕法で41・5から42・5の急調で引き通し、関西クルーのレベルを一躍関東の第一級のクルーに近づけたことは画期的と言うべく、喜ぶべき現象である」

9. 戦雲下の光芒、そして学徒出陣

自らの未だ果たしえない関西制覇を2度まで高商になさしめ、同志社大の受けた衝撃は計り知れないものがあった。わずか2年ばかり前までは完全に優位であった立場が逆転したのである。さらには京大と並んで関西漕艇協会の立役者となった同志社が一度もエイト優勝を果たすことができずにいる現状は何としても耐えがたいものであった。この年の10月19日に新島会館で行われた座談会はOBと部員一同が会して相当に激しい反省会となっている。一部を抜すいする。

「塚本 試合も見ず、こんな事を云ふのはどうかと思ふが、敗れた時の話ばかりで、二十年間勝った時の話を聞かして頂いた事が無い。これには種々原因もあろうが、今は別として現役が先輩の考を如何に考へて居るかを聞かして頂きたい。それを聞いた上それに批評を加へたいと思ふ。

桜井 自分も瀬田へ行かず、レースも見えて居ないのであるから今語る言葉を持たないが、塚本先輩の前でも現役は遠慮せずに部のために忌憚なく考へを云った方がよい。たゞ自分として云ひたいのは、レース前まで好調だったクルーが、レース直前になって悪かったのは、レースカーブの持って行き方が悪かったのではなく、何かそれに対する原因があるのではなからうか。これに対する選手諸君の意見を聞かして貰ひ度い。森田 東辻先輩と相談しては、間に行って高橋、円尾に云ったが、その時思った様にも出来ず、二三週間後にも同様思った様にはなっていない。自分の方も定った考へもなく、聞く方のクルーも難しかったと思ふが、レース前の調子とレース当日とでは差が余り著しかった。

自分の思つて居た事は上の者にはよく理解されたらしかったが全部には行渡って居

なかった。以後下の者にもよく理解の行くよう説明した方がよい。

全体として馬力なく、精神上のマトマリがなく、凄味が欠けてゐた。

来年よりは充分種々と研究して先輩に相談に乗って頂きたい。

杉浦 自分も不心得組の一人で、先づ自分の云ふべき事は前の三人が云はれて、結局は自分も同じ事となるが、我々が最上のコンディションにある時、関東の最悪の場合とレースをなし、勝得る自信ありや？

クルーを見るのに別に体力が劣って居ると見えない。気魄がない様に思はれる。この気概さへあればどんな事でも出来る。(一一例を在郷軍人に取りて示さる一一)何事も此の気概があれば必ず出来ると云ふ信念を持ってボート部に一人のヒッター、ムッソリーニ出でよと云ひたい。来年々と云はず、此の気持で春の御奮闘を願ふ。山村 関東に7レースを見た結果、漕法は一高、帝大式に統一された様です。慶応、商大は持前の長所をよく伸して居た様に思われました。関東のクルーは近年低調であった様で高商も、二三艇身の所まで行つたので関西クルーももう一踏張りで相当な処まで行けると思ふ。来年は必ず全日本選手権大会に出る決心です。

平井 先輩の意見をまとめて統一して戴きたい。関東へ行って見た結果、来年全日本選手権大会に出場しても相当な成績が取れるという自信が持てる様になった。

杉浦 誠によい自信を得られた。それを失はない様にやって貰ひたい。

塚本 先輩の方も進むべき方針を定めるが、先輩の方へも、君等の進むべき事について適確なる問を持って相談に来る様にして貰ひ度い。又今年エイトに初めて乗った人の感想を聞きたい。

田中 日頃漕いで居る時、もっとコーチに来てモーターも多くつけて戴きたい。

塚本 その事は前々よりの懸案であつて、実現する様努力はして居るが、何分京都は地理的に悪い所にあり、それ故モーターも多く使用出来ず、先輩も度々行けない。コーチを置く事にも無理がある。これを補ふべき何物かを選手自からで考へて貰ひたい。

選手もコーチし得ない点は研究してコーチを超す程になれば幸である。

森田 財政的な事もあり、関東の如く出来ないのであり、コーチの人も少く充分な暇のある人が少い。

杉浦 モーターの事は当分その儘で、選手自身の気概で行つては如何、モーターのない事が敗けた原因としない様に。

森田 高商はモーターが無いのに勝つて居る。こちらはモーターが出来てよけいに

弱くなった様に思ふ。

（塚本氏、昔は大津まで歩いて行って、漕いで、成績の悪い時は又帰りも歩いて帰った等、オールを持って京津国道を歩いた等の苦しい昔話をされる。）

桜井 来年は、来年はと云はず、大なる革新を行っては如何。今までの無理であった理想を捨て、現実に応じた方法で行ってはどうか。自分等が初めてスライドを使ったときコーチなんてなかった。明大の黄金時代にもコーチが居なかった様に思ふ。自治的にやった方がよいであろう

塚本 コーチをあてにせず、各自研究して見ては如何。

桜井 クルーの各々の研究も必要なるも、キャプテンの方針に絶対服して行く等キャプテンの権限を増してはどうか。独裁を強化する必要があると思ふ。』

こうした真剣な反省を胸に抱いて翌昭和14年のシーズンに臨むボート部であったが、円尾、高橋、青木、寺田等を卒業により失い、志も新たに新クルーを結成する必要に迫られた。この年新入部員として予科より武田、鍵田を迎えると共に、当時異例であった同志社高商より吉益四郎の入部を見たことはその後同志社ボートに大きな影響を与える。

春季シーズン、吉益の家に不幸があり帰省したため急遽クルーを再編成して3校レースに出漕したが同志社高商に4分の1艇身惜敗した。

5月11日の商大定期戦は雨の中で行われた。レース前の練習中事故があり艇が破損、同志社高商よりの借艇でレースに臨む。

レースは商大まず先行して1艇身ほどのリードを保ったままに進行したがゴール前300メートルで同志社奮起、これを抜き返して2分の1艇身差で勝利を収めた。「未だ完成したクルーでなく荒削りであったが、しかし此处に力強い何物かがあった様に思った」とは主将平井弘一の感想であった。これら春季両レースのクルーはC上田敏S太田豊彦7 荒木茂治6 吉益四郎5 平井弘一4 宮川正夫3 武田喜蔵2 榎坂景次B田中羊一である。

秋季シーズンに備えて7月27日より合宿に入り、基礎練習期、長漕期、力漕期、完成期の4期に分けてトレーニングを積んだ。なお炎天無風の湖上に練習することは体力の徒らな消耗を招くとの考えから、練習時間を午前中は例年より1時間早め、午後には1時間遅らせるという工夫をしている。

関選出漕クルーはC吉年晃S太田豊彦7 荒木茂治6 吉益四郎5 平井弘一4 宮川正夫

3 武田喜蔵 2 榎坂景次 B 田中羊一、他に池田、徳茂がサブ、杉野寿男はスカール要員として出漕した。

エイト予選で長年の宿敵であった京大を破り大いに意気が上がった。続いて準決勝で彦根高商（現滋賀大経済）に快勝、決勝戦の相手は春に対戦して降している大商大となった。関選初制覇のお膳立てが揃った。

レースは春の定期戦の展開と一変して同志社リードの内に進行、ゴールに近づくに連れて商大猛反撃に出る。同志社必死にこれを凌いでゴール前まで持って来るが最後まで諦めぬ商大の追撃激しく、両艇平行した瞬間のゴールイン。結果は10分の6秒という微差で商大の勝ちであった。

男子3日会わざれば刮目してこれを見るべしという。決して敵を侮ったわけではなかった。だが春の定期戦の雪辱をここで果たされようとは……。大商大は関選2度目の制覇であった。

翌昭和15年、吉益四郎が主将となり、クルーの根底からの意識改革を図った。また高商から新たに宮本清が入学、部員となる。高商時代2度の関選優勝と全日出漕の経験を持つ彼等は全国制覇を夢見て同志社大に入学して来ており、主将吉益は就任当初より勝負にかける執念の必要性を強調する。

「私が入部して第一に驚いた事は部員のレースに対する無欲さであった。勿論我々は勝つためにのみレースをするのではない。だがレースをするからには勝たねばならぬと云ふ強い信念は必ず必要だと思ふ。以下述べる処は私の信念であって或ひは過激に過ぎる為に非難を聞くかも知れないけれども、その信念にのみ生きてボートを漕いで来たのであるから率直に述べさせて貰ふ。唯断って置きたいのは、この考へ方はスポーツマン・シップの中でフェアプレーが第一である事を決して忘れてゐるのではないと云ふ事である。

閑話休題 勝たなくても良いレースは、ラジオ体操と同じでしかあり得ない。一度スタートしたら、例へ接触しても相手の身体を掻いてでも先に出なければならない。瀬田川のやうなS字コースならば少々敵のコースへ入つても私はさして罪惡とは考へない。スポーツは必ず勝者と敗者を生む。戦争の縮図とまで云つても良いだろう。然るに正当の規約通りレースするからには今迄のボート部に一部残してゐた如き『同志社大学らしい綺麗なレースをすれば勝敗は問題外だ』と云ふが如き中途半端な解釈こそオアズマン・シップを冒瀆するも甚だしいと言はねばならない。

競漕規則でさへ昨年から出艇後の艇の故障は認めないではないか。反面之はスポー

ツのフェアプレーに反する如くである。例えば決闘の場合、敵方の刀の折れたのにつけこむが如き卑怯さを感じる。だがそうした不注意は自分で負ふのがスポーツマンの本領なのではあるまいか。

一人と一人の勝負なら相手が刀を拾ふのを待つのも良いだらう。だがボートは団体競技の萃とまで謳はれるスポーツである。さればこそ国家の戦の如く人道にもとらぬ限り必ず勝つのを必要とする。怪しげな博徒的仁義は『宋襄の仁』以上のユーモアであるとの非難は免れまい。

次に如何にすれば以上述べたファイトをレースに具現し得るかと言へば、陳腐ではあるが、日目の真面目なる練習に依るの外はない。レースは喧嘩ではない。如何に腕っぷしが強くとも真面目なる練習なくして最後まで完全なるブレードを有する事の困難なのは常識で判断出来やう。

昨年の合宿解散以来僅かに四ヶ月、部員一同見違へる程の確実な腰の据はりをバック台に見せて来た事は諸兄の斯道に対する精進の現はれとして泪ぐましい程嬉しい。問題はもう一息なのだ。誰でも夏の合宿は辛いものだが今頃になってその辛さから来る楽しさを味ったと思ふ。今年こそはもう一層苦しい目を皆一緒になめて今よりももう一層心地よい思ひ出話の花を来年の今頃は繰り返したいものだと切望して止まない。」

こうした吉益の「勝利主義」に、当時の同志社クルーはよく応え得た。例えば整調太田豊彦は一時膳所中学のコーチを務めた高橋宗の勧めにより同志社大に入学、ボート部員となったのであるが、その勝負に賭ける哲学は協和性に豊む同志社の伝統の中では異色の激しさをもっていた。かつ合理主義に徹し、先輩連に対しても己れの信ずるところを堂々と述べて憚らぬ狷介さは確かに同志社ボーイの中では異彩を放っていた。後援会誌の求めによって書いた彼の「ローイング雑感」は以下のようなものである。

「我々は競漕に於ては常に勝たねばならない。競技の本旨勝つことにあらずとなす者は弱い人間の言ふ事だ。勝つ過程に於てこそ、競技の本旨があり、且つ勝つ事によってのみ充分目的が達せられるのである。

競漕に於て、勝つためには我が艇を他の何れの艇よりも速く進めなければならぬ。如何にして早く進めるか根本を遡って考へるならば、艇を進めるものはブレードの水を圧する力である。決してブレードを水の中でスリップさすのではない。水の塊につかまって、これを圧するのである。そして艇をスリップさすのである。水を後方に圧

する為にブレードに加えられる力は我々の肉体より生ずる力と、精神より生ずる力である。所謂頑張りズムである。この両者の力が共に最も効果的に発揮されなければならない。漕手のこの力がユニフォームされた時に労なくして勝つ事が出来るのである。肉体より生ずる力を最も効果的にブレードに伝えるものは即ち我が同志社漕法であらう。然らば精神より生ずる力を有効に伝えるものは何か？ 之れ頑張りズムであると思ふ。

勝利を目指して何嘗と頑張って苦しさに耐へる気持が無ければブレードに伝える力が半減されるわけである。漕法が重要であるのは勿論であるが、余り之を過大視して頼り過ぎてはならない。漕法は飽くまで一の方法であり手段である。同志社漕法を研究し、自己のものとすると共に今一層精神力を練る必要がある。

その為には不断の練習の努力が必要である。練習によって全ゆる苦しみを求めて体力を練り、精神力を向上し克己心を養ひ、自我の完全を遂げ不知不識の間に真のオアズマンになるのである。この点に於てこの世界に於ける最も立派なスポーツである。そして人生の試練である……」

宮本武蔵の「五輪書」を彷彿させる、こうした妥協を許さぬ勝負哲学が、この年同志社大のクルーの間に浸透して行った。

紀元2600年と謳われた昭和15年、飽く迄も全日本制覇をねらう主将吉益は目標を9月におき、夏期合宿に至るまでの練習を比較的少量とした。その理由として吉益は

「選手の全部が旧選手なる事、春の短時間の練習に悪く固まる事を避けた事、能率的な練習によりローイングをエンジョイする気運を部内に養成したかった事、そして最後にこれが最大の理由であるが、だいたいこれぐらいの練習で必ず勝てる自信のあること、したがって必要以上の練習により選手に精神的に重圧を加えるの必要なく、かつ欣然として夏のインターカレッジに備えるのファイトを貯蓄したかったためである。由来同志社のクルーは、春強く夏に入るとマンネリズムに陥っていつのまにか他校に追い抜かれるの悪弊が多かったので、これに対する対策が必要だったのである」

と述べている。

春季は「だいたいこれぐらいで勝てる」との見込み通り5月19日の海軍記念日競漕エイトの部では1回戦関大に3艇身半、決勝では大商大に4艇身という完勝ぶりで優勝、この年度のもっとも通り「王者の貫録」を示した。

6月16日の対大商大定期戦の前夜、部員一同翌日のレースを何秒差で勝つか饅頭を賭けて予想をしたところ最低15秒から最高25秒差となった。

しかしながら実際のレースにおいては、同志社スタートからリードを奪って進んだものの豪雨の中、敵のしぶとい追撃にあい、最後の約 500メートルの直線コース手前で並ばれてしまう。最後の力漕によりこれを振り切りようやく勝を得たが、着差は2艇身半にとどまった。

この凡戦は部員に良き反省の機会となった。一同気を引き締めて夏季合宿に入ったのは7月25日であった。

数日間の基礎トレーニングの後上京、8月20日まで早稲田の横田コーチのもと荒川で合宿トレーニングを行ったのは新しい試みであったが、これも飽くまで全日本制覇を最終目標におく考え方によるものであったろう。ラフ・ウォーターのレースへの対応というテーマも、これまで二度全日を経験している主将吉益の頭にはあったに違いない。

荒川での練習中、同志社クルーは関東の猛者連に圧倒されることが多かった。ロングの最中に早稲田のシックスに抜かれかけたり、あるときは東京商大のフォアに本当に追い抜かれたり、の精神的重圧に耐えながらの練習は、同志社クルーに、より強い勝負根性と負けじ魂を植えつけたのである。この苦しい経験を太田豊彦は次のように述懐する。

「最も印象深く、今もなつかしく思い出すのは、昭和15年夏の東京遠征練習である。向島に合宿し、早大の艇庫を借用、毎日の練習は午前、午後の2回、隅田川の隅田公園にある船台を出て、堀切の水門を抜け荒川放水路へ入り、一路ロングパドルで赤羽まで、川を遡ること一時間余、火力発電所の4本煙突が漕げども漕げども視界から離れない、あの苦しかったことは良き思い出として忘れることは出来ない。赤羽から隅田川に入り、尾久を経て隅田公園の艇庫へ戻る。この反復練習であった。関東のクルーの練習がこのようなハードなものであることを認識し、大いに啓蒙、刺激されたものである」

8月21日に瀬田に帰着、関選をめざしての最後の練習に入るが、この第一日目に鉄橋から柳ヶ崎までロングを引いたとき、クルー全員、妙な感じを持った。即ち「何だ、これでは少しも練習にならないではないか」という感想であり、関東合宿の猛練習を乗り越えてクルーが大きく成長したことの証であった。

こうして万全の態勢で進めた関選への準備であったが、練習の完成期に入ってクルーの頭上に暗雲が垂れこめる。トライアルを引き始めたがタイムが出ない。オーバーワークの故か、レースコース2000メートルで、どうしても6分が切れない。そうする

内、レース3日前に同志社高商が5分57秒でレースコースを引いたのである。クルーは焦燥した。やはり今年もダメか、の思いが胸を痛めた。結局、レースまで、一度として6分以内のタイムを出すことはできなかった。

だが積み重ねた練習の成果は、本番でこそ底力となって現れるものである。

関西選手権競漕第1回戦は同志社独漕で5分57秒を出し、第2回戦は岡山医大に15秒差をつけて完勝、決勝の相手は関大と同志社高商を破って進出してきた多年にわたる宿敵京大と決まった。

スタートは互角に出たが、同志社は作戦どおりスパートは行わず、しばらくの後同志社艇庫前まで来たところでピッチを上げぬまま力漕を10本入れ1艇身のリードを取る。このピッチを上げぬ力漕によってリズムを強調し、完全なりズムに乗って行こうとの計算である。唐橋の手前で京大2度にわたるスパート、カンバス差まで詰め寄って両艇唐橋を抜けるが、このときコックス杉野「カンピで行こう！」と叫ぶ。これはスパートの暗号で、「官費」すなわち漕艇協会から旅費をもらって東京へ行こうとの意味であった。京大のスパートの合図はベルを鳴らすもので、こちらによく分かるのに対し、こちらは敵に知られぬままに艇速を出し、敵をして混乱に陥らしめようとの工夫を行ったものである。

満を持した同志社の猛然たるダブルスパートは胸のすくような艇足の伸びを見せ、見る見る内に敵艇に水を開けた。さらに力漕、スパートで2艇身のリードとなり、第4フラッグ手前で京大スパートするも艇差縮まらず、逆にラストでさらに差が開き、3艇身、9秒差をもってゴールイン。ついに関選初制覇をなした。

大学エイト関選制覇

全員、涙、涙、涙であった。ある者は関選創設以来エイト制覇のなかった屈辱の歴史を思った。ある者は高商に2度までも先んじられた悔しさを思った。またある者は、辛かった遠征合宿を思って泣いたのである。コーチ横田も「完成期間になって艇速がねばり出したときは、やはり関西のクル

ーはダメだとサジを投げて東京に逃げて帰らなかった」ことを思い出し、選手と手を取り合って涙にくれた。最終学年の主務吉年晃の感激もひとしおのものであった。

栄ある関西選手権初制覇の同志社大クルーはC杉野寿男S太田豊彦7 荒木茂治6 吉益四郎5 武田喜蔵4 宮川正夫3 宮本清2 榎坂景次B田中羊一であった。

全日本選手権に出漕した同志社は健闘したがやはり関東の壁は厚く、3艇身差で一気に破れた。しかしそのレースを見ていた元オリンピック選手であった東大OB根岸正から、翌年「今までの関西クルーで昨年の同志社のクルーだけのキャッチをしたクルーはなかった。あれでミドルから後半まで引き切れれば全日本制覇も至難ではあるまい」

との評を受け、またある慶応のOBをして

「同志社のクルーを3年見させてくれさえすれば必ず全日本制覇をさせてみせる」と言わしめている。

こうした状況の中、主将吉益四郎は大いなる期待を胸に、翌昭和16年、後援会報に次のように書き綴った。

「『関西のクルーで関東を破り得るは同志社のみ』との信念を有すればこそ、私は高商4年間の漕歴を全部踏み棄てて本学に新人として飛び込んで来たのであり、その信念も1年間に履行せずば遂に実行の機会を失いそうである。(中略)全日本制覇は必ず夢ではない。現実である。しかしながら幾多の困苦欠乏に打ち勝たねば到達するあたはざる彼岸である。願はくは今現在オールを握ってエイトに乗っている選手も新人も一致団結して『産みの苦しみ』を味ひ、イバラの道を歩んで、同志社大学端艇部史に輝く偉業を残して行きたいものと懇望する次第である。漕艇生活10年の最後の年に当たって、いささかの所感を述べさせて戴きました」

だが、吉益の悲願はついに達成されることがなかった。

日中戦争は既に4年に及び、また対米交渉の見通しも暗く、非常体制いよいよ強化され始めたこの年、海軍記念日競漕で同志社大が前年に続き優勝を収めた後、他府県への競技参加が禁止されるに至り、関西権手権も全日本選手権も事実上開催不能となったのである。こうして吉益はその悲願達成の最後のチャンスを戦雲に阻まれた。のみならず吉益はやがてその若い生命をも戦場に散らすことになるのである。

この年わずかに残る戦績は3校リーグ戦のものであり、これにも龍大の参加は既になく、同志社大、同志社高商2校で戦った。結果は大学が5秒差をもって勝利した。このときの大学側クルーは、C國友藤策S宮川正夫7 宮本清6 吉益四郎5 武田喜蔵4 榎

坂景次 3 平井忠 2 太田誠一郎 B 田中
羊一 補欠 杉野寿男、高商クルーは C
松本清 S 白井茂 7 中村年男 6 山崎恒
夫 5 吉川久雄 4 金小路芳正 3 田健次
郎 2 加藤勝彦 B 上田恒男 補欠 山本善
之助であった。

関選、全日という目標を奪われ、脾
肉の嘆と時局への不安とでシーズン
を空しく送ったこの年の12月8日、

日本軍の真珠湾奇襲によりついに太平洋戦争の開戦に至る。

昭和17年同志社大は先輩の出征も相次いで多くのOB、コーチを失いまた卒業の繰り
上げ等による混乱の中、わずかに対商大戦の伝統を守るべく、4月29日これを開催、
6艇身半の艇差で勝利する。クルーは C 國友藤策 S 太田誠一郎 7 太田豊彦 6 宮川正夫、
5 平井貞男 4 北島健一 3 坂邦男 2 桂喬 B 杉野寿男、補欠 平井忠、清原清二、山元博、田
村宏、マネージャー 渡橋透安、高橋明であった。使用艇は昭和12年6月デルタ造船所
建造の「イーグル」であった。

この年、終戦前最後の関選においては同志社高商が優勝した。その夜、各校が瀬田
川に屋形船を出してのパーティー中、高商の船からの挑発を受けて大学側上陸、高商
艇庫前の河川敷で大乱闘となる。妙なことにコックスはコックス同士、バウはバウ同
士と同じポジション同士の喧嘩となり、他の部員も合流、さらに無関係の京大部員も
加わって乱闘は拡大、唐橋交番の警官がサーベルを鳴らしての制止も意に関せず、華
やかに一大青春絵巻を展開した。終戦前最後の、若い情熱の爆発であった。

その後、戦火の急速に拡がる中、
日本漕艇協会は解散、スポーツの統
制機関として発足した大日本体育会
の漕艇部に編入されることとなった。
従来秋に行われていた全日本エイト
選手権もこの年はこの大日本体育会
のもとに6月初旬に全国大学高専競
漕大会と銘打って戸田コースで開催
され、関西からは同志社高商が出漕



高商合宿所風景



高商戦前最後の関選制覇

したが予選、敗者復活戦とも大差で敗退した。

昭和18年5月、海軍記念日競漕に出漕した同志社クルーはC國友藤策S桂喬7平井貞男6宮川正夫5坂邦夫4北島健一3杉野寿男2田島了B清原清二であった。

この年、全日本エイト選手権は「大日本学徒体育振興会」の主催で5月下旬に開催され、早大が優勝したが、関西からはもはや参加していない。

6月27日、終戦前最後の対大商大戦が行われた。レースは同志社がタイム11分4秒3、15秒差で勝ち、通算成績を7勝2敗とした。このレースに臨んだクルーはC國友藤策S桂喬7杉野寿男6北島健一5坂邦夫4平井忠3清原清二2湊修一B田村宏、コーチ兼マネージャー宮川正夫、他に高井正明、流郷吉勝、奥村重蔵らの部員がレース役員として参加している。

この年10月、学徒出陣となり、徴兵年齢に達している学生が同志社からも多数出征して行った。ボート部からも一時に多くの漕手が奪われ、新入部員を募る余力もなかった。戦争はもはや有無を言わせぬ形でボートも、青春も、そして幾多の貴重な生命をも奪い去り、終熄せしめたのである。

●同志社大学及び同志社高商ボート部戦没OB

東辻嘉三郎（大正13年大経卒）

桜井弥一郎（昭和2年大経卒）

神田重太郎（昭和7年大英卒）

森田 茂樹（昭和9年高商卒）

西尾 孝二（昭和10年大経卒）

青木 喜三（昭和14年大経卒）

円尾 紀（昭和14年大経卒）

佐々田 正（昭和15年高商卒）

長崎 英一（昭和16年高商卒）

榎 三郎（昭和16年高商卒）

吉益 四郎（昭和16年大経卒）

武田 喜藏（昭和17年大経卒）

加藤 勝彦（昭和17年高商卒）

ボートを愛し、漕友を愛し、母なる湖水を愛しつつ、彼らはついに戦火に散った。
真にその無念思うべく、我々はここに改めて同情と感謝を捧げて霊安からんことを祈り、その名を記念誌上に記して永遠ならしめるものである。

第4章 躍進——頂点への道

1. 高商ボート部の復活

太平洋戦争は日本の無条件降服に終わった。同時にこれは、満州事変、日中戦争と続いてきた、いわゆる15年戦争の終結でもあった。この間の日本人犠牲者は、戦死または戦病死した軍人・軍属約230万人、外地で死亡した民間人約30万人、内地の戦災死亡者約50万人、合計310万人にものぼった。日本軍国主義の犠牲にもなったアジア諸国の被害もあまりにも大きく、中でも中国では戦死者400万人、民間人死傷者は2,000万人にも達している。

敗戦国日本は、単に敗戦のみじめさのみならず、その侵略行動に対する世界の指弾を満身に浴び、物質的にも精神的にも完膚なきまでに打ちのめされた。焦土と化した都市には失業者と浮浪児があふれた。絶望的な食糧不足、物不足はいつ解決されとも見通しがつかず、飢えと欠乏と混乱にさらされ、国民は不安の内に日々を送るのみであった。

同志社高商（昭和19年に「経済専門学校」と改称したが、ここでは最後まで通称された「高商」を用いる）の松井（四方）久男が復員して来たのは昭和20年の10月であった。同月高商も授業再開され、翌月松井は2年生として復学する。

松井は前年の昭和19年入学と同時に端艇部に入部し、3年生荏田芳郎、松井一雄、土肥信一郎、鷺田平一郎、大林一、2年生田辺などの指導を受けたが、彼ら上級生は早くも1学期末には学徒動員または学徒出陣により戦列に参加して行った。松井、雨宮清之、藤井明雄の1年生にも9月には動員令が下り、枚方造兵廠に送られた後、それぞれ志願あるいは応召して兵役につき、学園はそのまま閉鎖されていたのである。再会を果たした旧1年生、松井、雨宮、藤井らの胸にボートへの情熱がよみがえっていく。敗戦後の混乱と価値観の転倒の中で、彼らにとってボートだけが確かなものであったのかもしれない。松井を主将として彼らは高商ボート部の再建に着手、精力的

に部員を募るとともに翌昭和21年3月には早くも瀬田川において練習を開始した。関西の学校としては戦後トップを切った復活であり、当時の沈滞した世相の中で、若者らしい希望と意気を世に示したものとして特筆すべき出来事である。

「終戦後初めての春の練習再開は、長い間艇庫に眠っていた艇の手入れから始められた。当時の艇は外板が薄い木板で、長期間使用しなかったり、手入れが不足すると、乾燥して細かい亀裂が入った。リガーなど金属部も錆びついていた。積もった埃を払い、磨きあげて水に浮かべると使用に耐えると判明した。居合わせた者は思わず歓声を発したものだ」

と、練習再会に参加した当時の部員の一人、嘉村義輝は語っている。

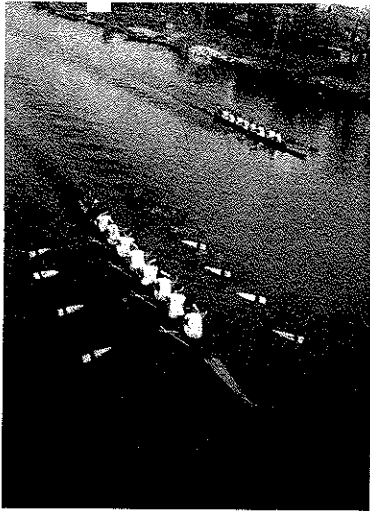
戦後の同志社ローイングのさきがけとなった、この記念すべき高商復活時のメンバーは、3年生松井久男(主将)、雨宮清之、丸井広次、野々垣明、藤井明雄、2年生に堀井要壮、山田善一、亀井量太、西川秋弥、水野義男、中川正生、そして新入1年生は山本信蔵、毛利匡之、中西寛、田中清、清水、嘉村義輝であった。

5月雨宮が学友会担当となり、藤井退部の後、エイト、フォアの対校クルーを編成、本格的な練習に入る。

戦中最後の昭和17年の関西選手権でも優勝している高商は悲願の日本一をめざし、驚田平一郎のコーチのもと、戦前から関西漕艇界に鳴り響いた高商流の荒稽古を続ける。「三角コース」と呼ばれる琵琶湖横断を含む超ロングを引いた時などは、着岸後クルー全員船台に這い上がることもできない状態であった。

しかし全日本選手権に過去3度出漕、いま一步のところで日本一の栄冠を取り逃がして来た高商は、各校の態勢が整わぬ今年こそ千載一遇の好機と見て必勝を期し、貨物列車にもぐり込むなどの練習通いの不便さと空腹に耐えつつ、猛練習をゆるめなかった。関西のボート界の今後がどうなるか不透明な状況ではあったが、必ずやこの年の秋には争覇戦が復活するであろうとの目算のもとに計画を立てたのである。関東では前年十一月十八日に関東選手権として大会が開かれたが、現役エイトの参加は東大と東京商大の二校のみであったため、正式の大会とせず、番外の「ボートレース復活祭」として取り扱われることになった。こうした経緯からみて、昭和21年度には選手権競漕が開催されるであろうことが十分予見されたのである。5月から伏見屋に合宿、8月の夏休みは自主トレ、9月は鳥居川の民家を一軒借りて合宿と、秋のシーズンをにらんで練習を進めた。

この間、関西漕艇界全体も少しずつ復活の様子を示し、まず5月に淀川で関大と大



高商琵琶湖レガッタで優勝

商大の定期戦、続いて瀬田川における3校（関大・大商大・立命大）対抗レガッタが行われた。全国的には、9月に東京府学務課主催で中等学校レース、10月初旬にはインターハイが復活している。

こうしてボート再興の気運が高まる中、10月13日に関西漕艇連盟が戦後改めて発足し、創立総会が開かれ、会長に大國寿吉を選出し、記念大会を10月20日瀬田川で開いた。これが「第1回琵琶湖レガッタ」である。春から着々と練習を重ねて来た高商は勇躍このレースに出漕、決勝に駒を進め、京大を準決勝で破った関大予科と対戦、2艇身差で勝利、堂々の優勝をおさめた。

この年、戦後初めての関西選手権大会は、第1回国民体育大会関西予選として、琵琶湖レガッタの一週間後の10月26日、27日、瀬田川で行われた。この大会でも高商は春以来の練習の成果を遺憾なく発揮、準決勝で京大、決勝で関大をくだして優勝、名実ともに関西の覇権をがっちりと手中におさめた。なお高商のフォアもこの大会2位と健闘している。

夢にまで見た日本一の座が目前に迫った。第一回国体を兼ねて行われた全日本選手権大会である。日本漕艇協会始まって以来20数年、同志社のみならず、初めて関西勢が優勝旗を握る好機が訪れたのである。レースの組合せは同志社経専（高商）対東大の勝者と、不戦勝の名大付属医専との間で決勝戦が行われることになっていたが、実力的にみて、高商―東大戦が事実上の決勝戦であることを、瀬田川堤防を埋めつくした観衆は心得ており、かたずを吞んでそのスタートを見学する。琵琶湖レガッタ以来3週連続となる高商クルーの疲労を気遣いつつ、多くの観客は関西が初めて栄冠を得る歴史的瞬間への期待に大きく胸をふくらませていた。スタートは切られた。瀬田川順航2000メートル。両者それぞれの面目をかけて、追いつ追われつの猛烈な争いとなった。互いに少しでも相手より前に出ようと息もつかせぬ激しい攻防となる。同志社高商連戦の疲れをものともせず、堂々と天下の東大と互角にレースを展開。強豪東大も譲らず、歯を食いしばって応戦。「高商魂」の気迫と、東大の底力ががっぷり四つに組んだ。ゴール前、東大わずかに出る。高商最後の力をふりしぼって猛然と反撃、耳を聳するばかりの歓声の中を両艇入線。肉眼では見分けがたいゴールの瞬間を、線

審用スリットは一尺差で東大の勝利を示していた。同志社の、そして関西の悲願は成らなかった。クルーは汗と水しぶきと涙にまみれた顔をくしゃくしゃにして泣きくずれた。

あまりにも無念な敗戦であった。2000メートルの力漕につぐ力漕の果てに、わずか一尺の差で栄冠に手が届かなかったのである。そしてこの一尺に手が届くまで、以後さらに20年以上もの時日を要することになろうとは、当時誰にも予想し得なかったのではないだろうか。

このレースの勝者東大は、予想通り名大付属医専に圧倒的な大差をつけて決勝戦に勝利、昭和21年第24回全日本選手権競漕優勝者として史上に名を残した。無念長蛇を逸した高商クルーはC丸井広次S野々垣明7松井久雄6山本信蔵5毛利匡元4清水3田中清2堀井要壮B水野義雄、マネージャーは亀井量太であった。関選2位と健闘したフォアクルーは山田、西川、中西、嘉村、中川であった。また、戦争のためオールを銃に持ち代えることを余儀なくされ、そのまま卒業させられてしまったOB、コーチ驚田をはじめ荻田芳郎、松井一雄、土肥信一郎らの母校ボート部に対する強力な支援が、この活躍の陰にあったことを忘れてはならない。特に食糧の調達面で彼らの協力がなかったなら活動は全く不可能であったと、当時のクルーはその頃をふりかえってつくづく語るのである。

2. 大学の戦列復帰と高商との合併

高商の復活が元部員の手によってなされたのに対し、同大ボート部再建は主として復員後予科1年へ編入学して来た予科練等出身の学生によって着手された。森島昭三、加藤克明、稲井丸人の3名である。まず、海軍で短艇を漕いだことからボートをやってみていた森島が加藤を介して戦前の部員であった坂邦夫と知り合い、稲井をも誘って坂を中心とした部の再建活動が始まる。坂はさらに戦前の部員田島了、流郷吉勝、湊修一、高井正明に声をかけ、予科練等出身の前記3名とともに、昭和20年の暮れ近く会合を持ち、ボート部再建について相談を行った。その後まず艇の状態確認のため一同で戦前艇を入庫していた京大の艇庫に出かけて、「八咫」と「イーグル」を検分、イーグルの方は使用可能であることを確認したが、オールも不足し、未経験者が多かったため乗艇するには至らなかった。

翌昭和21年、坂と田島が卒業し、海軍兵学校出身の下西辰男が入学、入部、また秋には松岡（西田）稔、松本捨男が入部して来る。これ以後、この時点で唯一の戦前から部員である高井を中心として活動が進められることになった。ここに至るまでに、艇の修理やオールの補充を超OBの塚本純一の資金援助を得て行い、再建の態勢は整ってきていた。部員獲得の運動も積極的に行われるようになった。授業中の教室を回り、教師の許可を得て入部勧誘演説をするというようなこともこのころ試みられている。部員のほとんどが初心者ということで細々と練習を続けていた同大が、戦後初めて試合らしい試合に出漕したのは昭和22年の大学予科大会であった。C松山S磯田7松本6下西5森島4稲井3松岡2佐原B高井というクルーで参加したこの大会で、同大は京都府立医大予科に勝ち、関大予科に敗れて一勝一敗の成績を残し、ともかくも戦列復帰を果たした。この大会に出漕するため、予科ドイツ語教授和田洋一を部長とし、またその頃復員して来た戦前全盛期のクルーの一人である太田豊彦に短期間ながら基本的な指導を受けている。さらに國友藤策も復学、新生クルーを指導した。

一方、同志社高商は、昭和23年の学制改革に向けてその改組が論議され始めた。単科の同志社商科大学にすべしとする案、新制大学の経済学部で商学科にせよとの主張などがあったが、結局商学部という一学部を作る案が多数となり、その方向で事態は推移して行く。

いずれもにせよ、大正11年同志社専門学校高等商業学部として発足以来、昭和5年同志社高等商業学校として独立、昭和19年同志社経済専門学校と改称するなどの経緯を経て、一貫して「高商」の通称で親しまれた25年の歴史はここに閉じられることとなったわけである。

部員数も減少したが、高商ボート部は最後の花を咲かせるべく松井久男コーチのもと精鋭主義によるフォアを編成してシーズンに臨む。8月末に開かれた第2回国体オープンレースに出漕した高商フォアは決勝で関大専門部を破り優勝。メンバーはC竹内孝三、S中川正生3嘉村良輝2西川秋弥B奥田であった。雨宮、野々垣らの指導と、堀井礼三、近藤憲司、松井一雄、鷲田平一郎、荏田芳郎、神野理策などのOBも戦後の不便な交通事情の中を激励に駆けつけ、高商最後のシーズンに花を添えた。高商フォアは9月の関選にも立命大、関大専門部をくだして優勝、全日本選手権に臨んだが1回戦惜しくも桜門艇友会に敗れ、これをもって戦前戦後の関西ボート界に新鮮な息吹きを送り込んだ高商ボート部はその花火のようにさわやかな歴史を閉じたのであった。記憶さるべき高商最後のボート部員は、3年生堀井要壮、山田善一、水野義男、亀井

量太、西川秋弥、2年生田中清、山本信蔵、毛利匡元、中西寛、嘉村良輝、1年生瀧口忠夫、竹内孝三、本間満秋、藤森慎次であった。

同大の方は、この年平井貞男の復帰入部、また高橋宗が復員し後援会組織である艇友会の再建に着手すべく精力的にOBへの呼びかけを開始し、いよいよ本格的な土台作りが始められる。平井は戦後ソ連での抑留生活を送り、シベリアでの強制労働作業中、たまたま同じく連行されて来ていた漕友田村宏と邂逅、涙の再会を果たして連れ立って復員し、当時合併問題を抱えていた主将高井正明の要請により再入部し、以後卒業まで部を指導していく。また高橋宗はフィリピン戦線で部隊3000人が90人を残してほぼ全滅という熾烈な戦いの中で、濃淡青色オールとの再会を強く心に期して九死に一生を得、瀬田に生還、母校ボート部の再建に情熱を傾けて行くのである。

昭和23年、新学制に移行後も同大ボート部と高商ボート部の合併は難航した。同一法人のものと兄弟校とはいえ、ことスポーツに関しては両校は互いに強烈な敵愾心を抱いていた。同大側から見れば弟分でありながら戦績の上では大学をしのいでしまった高商に対して複雑な思いがあり、高商側には兄貴分としてのプライドを保とうとする大学に対する微妙な反感があり、兄弟校であるが故の近親憎悪的な反目が生まれていた。もともと昭和11年頃からの高商の躍進も「打倒大学」の執念を原動力としていたし、昭和15年の大学の関選初制覇も高商の活躍に大きく刺激されての成果であった。このように結果として互いに切磋琢磨、ライバルの道を歩むことにより両者ともに進歩を見て来たのだったが、明らかに校風の相違も生じており、ボート部の合併は文字通り呉越同舟の困難が予想されるのであった。

ことに高商側の反発には根強いものがあり、最後まで独自のボート部で通そうと覚悟の臍を固めて飽くまで孤塁を守ろうとする部員が多かった。独力で築いてきた伝統と高商カラーを捨て、学園の事情により大学の軍門にくだることに、耐えがたい無念さがあったのであろう。

こうして旧高商のボート部は身動きのつかぬままレースに出漕することもなくメンバーは合宿所にとじこもっている状態であったが、そうした様子を心配して声をかけたのが、すでに高商卒業後大学ボート部に入っていたOBであった。旧高商のボート部の艇はもはや使用に耐える状態になく、OBの説得を入れてやっとのことで合併が成ったのはこの昭和23年の秋のことであった。また合併実現については、特に高商戦前のOB堀井礼三の名が関係者に記憶されている。

これに先立つ8月30日、同大は戦後初めて伝統ある対大商大定期戦を行い、勝利を



最後の対大商大定期戦

おさめていたが、このときのクルーはC山田善一S古川良一7松本捨男6山田昭児5松井久男4下西辰男3森島昭三2高井正明B長谷川和之であった。当初、コックスは高商出身者、漕手は大学と高商出身者がそれぞれ4人ずつになるよう配慮されたクルー構成であったが、その後高商出身者側に転学者と退部者が出たため、上記のような編成となった。

この後も高商出身者の大量退部等、苦渋にみちた迂余曲折を経て、ようやく同大ボート部が名実ともに新生なるのは翌昭和24年、高橋宗が監督となり、慶応出身の南部喜一がコーチに就任した頃からであった。南部の招聘は、前年の同立総合定期戦の漕艇の部で立命大と対戦してこれを破った際、立命のコーチに早稲田出身の北川貞二郎が就いていたことに触発され、本場東都のローイングを取り入れて将来の全国制覇に照準をあてようとしたものである。南部はこの後6年間にわたって同志社ボートを指導。再建を確固たるものとし、他校OBでありながら同志社OBに勝るとも劣らぬ深い理解と情熱を傾けて、その後の同志社ボート発展の確かな礎を築いた。

高橋は復員以来ボート部のバックアップ態勢をを再編することに全精力を注ぎ、安井義人、大宮隆等の古いOBや、久木弥一郎、山辺正、山村剛一、國友藤策等の協力、支援を得て艇友会組織を固めると同時に、監督として部との接点に立った。

こうして臨んだこの年の関東の準決勝で、同大は三高と対戦、互角以上のレース振りを示すが惜しくも接触トラブルがあり、失格負けを喫した。

しかし支援態勢も整い、実力もついて来たということで、この年同大クルーは艇友会の支援のもと、戦後初めて戸田へ遠征、対立教との定期戦及び全日本エイト選手権に出漕した。借用艇は重い練習艇であったが対立教戦には快勝、全日の予選では日大に敗れたものの敗復で見事に東工大を大差で破って復活。慶大に敗退したものの準決勝進出を果たし、とにかくも全国レベルの争覇戦列への復帰を天下に示した。

また、翌昭和25年よりOB塚本純一の息、塚本義夫が保健体育科を担当して教壇に立つこととなり（後教授）、同好子夫人（旧姓山下。陸上80メートル障害日本記録保持者。後助教授）ともども校内大会の振興・充実に尽力、また部員たちとの交流を通じ

て、同志社ボートの発展を以後長く支援した。

3. 「ワイルド・ローヴァー」号建造へ

昭和25年5月、同志社大は瀬田川で開催された第5回琵琶湖レガッタに出漕、着実に勝ち進み、決勝戦で京大に対した。京大のスタート少しまずく、もたつく間に同志社キャンバス程のリードを奪い、以後京大懸命に追うが同志社も奪ったリードを保つべく必死の力漕を見せ、キャンバスの差のままに1000メートルのゴールに入った。戦後初めて、エイトによる対京大戦勝利であった。クルーはC國富卓也S堀井要壮7松本欣二6加藤卓嗣5下西辰男4北尾元載3筒井弘2滝口忠男B西堀龍雄であった。

この年、京都と大阪の各大学で関西学生漕艇連盟が結成された。これはより多くの競争相手を得て互いに技術を向上させることを目的としたもので、その具体的方法として京都地区は京大、同大、龍大、立命大、府医大、大阪地区は阪大、神大、大商大、関学、関大でそれぞれリーグ戦をシーズン初めに行い、関西選手権前に両地区の第1位の学校間で優勝戦を行うというものであった。すなわち各シーズンの初めに腕試しの練習試合をやって互いのその時点での力を認識するとともに、その後の練習の重要な参考にしようとするもので、レースの勝敗そのものよりも全体のレベルアップのために大きな意義を持ち、現在もなお続けられているものである。この年同志社は6月11、12の両日にわたって行われた第1回リーグ戦京都地区大会において全勝の京大Aに次ぎ同大Aが4勝1敗で2位の成績をおさめている。

すでに関西での覇権を十分に狙い得るまでに立ち直った同志社は8月19、20日に行われた関西選手権大会に大きな希望を抱いてC國富S堀井7松本6下西5北尾4加藤3筒井2西堀B滝口のクルーで臨むが、第1日目の予選から京大に当たった。このレース経過を京大側資料に見る。

「(京大) スタートはまずかったが、ほぼ並行のまま第一カーブを曲がる。唐橋にかかる頃京大キャンバスをリードし、さらに唐橋下でスパートし三分の一艇身を引き離すも同大またスパートして一進一退のまま進む。蛍谷カーブでは京大まず舵を引きスパートして半艇身先んずも、蛍谷第二カーブにて京大2コースに寄り二十本程接触して京大の整調のブレイド飛ぶ。ただちに離れ以後京大じりじり出て一艇身の差にてゴールに入る。

審判艇はスタートにて故障し状況を判断し得ず、京大は再レースを主張し、同大は京大の失格、そうでないのなら京大の勝ちとすべきだと主張したが、ついに翌二十日再レースを行うこととなる」

そして翌日の再レースの様子は

「(京大) スタートで半艇身リードしたまま唐橋をくぐる。唐橋下(京大) スパートするも同大よくこれを追い、蜷谷では京大リードするとはいえどその差はわずか。以後同大は京大のハイピッチにつられへばりを見せ、ラストスパート京大ぐんぐん出てついに一艇身三分の一にて勝つ」

前年は対三高戦でコース侵害の故をもって失格とされたにもかかわらず、この年の大会では再レースということになって結局敗れた。三高は前年の優勝校となっており、京大はこの25年度に結局優勝しているのも、もし同志社に有利に事が処置されればどちらかの年に同志社の関選優勝があり得たかもしれない。けれども戦前から、実力を有しながらなかなか勝ち切れないのが同志社のボートであった。決して勝敗に恬淡としているつもりはクルーにはないにもかかわらず、結局はそういうことになってしまうのが究極的な同志社カラーなのかもしれなかった。練習は誠実、真剣にどこにも負けない質と量のものを行う。そしてその成果として実力をつける。しかしいざ勝負となると今一步執念が相手に及ばず勝利を譲ってしまう。

「執念が足りない」との評価を、クルーはもちろん認めなかった。しかし翌年、またしても同志社はそのイメージを定説化させることになってしまう。

昭和26年度関西選手権競漕の第1日目予選で、同志社はまたもや京大に当たる。同志社クルーはC國富卓也S北尾元載7松本欣二6加藤卓嗣5黒田方辰4浜田3竹村栄造2西堀龍雄B村井利康であった。再び京大側資料に見る。

「快晴、微順風絶好のレース日和。事実上の決勝戦と目されたレースである。

十時スタート。最初四十二。両艇並行のまま進んだが第二カーブを過ぎる頃、京大インカーブを利してややリードし始め、唐橋ではカンバスを先んず。しかし艇庫前のスパートきかず再び並行のまま蜷谷にかかる。この頃より京大のハイピッチにつられた同大に疲労の色見えはじめ、京大に一本一本おくれ第四カーブを曲がる頃にはその差一艇身となる。ラスト京大ピッチ34より37に上げ一艇身半にて悠々ゴールインす」

かくして同志社は緒戦で京大に敗れたが、気を取り直して復活戦に出漕、関大をくだして準々決勝に進んだ。

2日目、準々決勝では関学と対戦してこれを破り、準決勝では立命大に勝ってつい

に決勝に進出した。京大側資料を見る。

「スタート午後3時半。敗者復活により決勝に進出した同大と再び顔を合わす。再度のレースに同大は極度に疲労しており、唐橋では一艇身、艇庫前スパートで水が開き、後半は問題にならず、京大コンスタント33にてまずゴールに入る」

またしても京大に敗れた。確かに決勝戦に至るまでに、京大の2戦に対し倍の4戦を行い、当日は決勝が同志社にとって3試合目というハードな条件下ではあったが、負けは負けである。その口惜しさは誰よりも当のクルーの胸に最もこたえた。いかに執着心が乏しいと言われる同志社ボート部も、これだけ同じ学校に負ければ屈辱を感じる他なかった。

しかし、同志社が今一步のところで勝ち切れぬことには、もう一つ大きな理由があった。艇の老朽化である。戦前から使われていたイーグルにはすでに建造後10数年を経て耐用年数を過ぎたものであった。新艇建造の話が持ち上がって来たのは当然の成り行きで、主務赤井一夫を中心に、学生部員全員によるねばり強い募金活動が始まる。今日と違い、復興途上の昭和20年代の募金活動を学生が行う苦労は一通りのものではなかったが、艇友会組織を柱としてOB一人ひとりへの挨拶回りとカンパが実を結び、また有力OBの援助も得て、どうにか新艇建造にこぎつけることができた。この間マネージャー小野木伸は対学校の折衝に奔走、当時の体育会本部の小林事務局長の理解と激励、また未済金をめぐっての叱責と説諭など、同志社法人と部とのふれあいのさまは、別掲「私についての同志社ローイング」中の小野木の手記「WILD ROVERの想い出」に詳しく語られている。

さて、今日ではすでに同志社ボートの代名詞として定着したこの新艇の命名の詳しい経緯を、國富卓也が寄せている。

「 WILD ROVER 命名のいきさつ

28年卒 國 富 卓 也

戦後はじめて新艇が出来るという。昭和27年のことである。

当時の試合艇は『イーグル』。何時頃つくられた艇だったのだろうか。先輩達が、戦時中も守り抜いてくれた愛すべき艇ではあったが、とっくに寿命を過ぎていた。艇は捻れ、どこからともなく吹き出してくる水が、一漕ぎ毎にザザーッと後部に押し寄せ、コックスの尻は年中、水浸しであった。

『名前、考えな、あかんなあ。』

資金集めに奔走していた赤井君と、御所で話し合ったのは、もう若葉を過ぎた頃であった。

誰かに命名を依頼することは簡単である。しかし、おそらく、ネプチューンだとか、疾風（はやて）だとか、隼（はやぶさ）とかの類に落着くのに決まっている。

戦後はじめてつくってもらう艇なのである。ありふれた名前ではなく、何とか、同志社らしいものを、という気持ちが強くあった。どういう方法で決めてもらうにしてもそういう気持ちがあることを伝えたい。そのためには、参考になる事例を挙げようではないかということになり、あれこれ考え出した。

先ず、足元から『クローバー』が浮かび、次いで『栄光』が残った。

新島襄の『My Younger Days』に出てくる帆船を想い出したのは、二人の内どちらであったろうか。

とにかく「これや！」と思った。

しかし、考えてみると、採用される可能性は極めて薄いように思えた。

同志社にとっては、たしかに意義のある船であろう。が、由来を知らぬ人は、ふざけた名前とみるかもしれない。由来を知る人の中でも、あれは外国船籍の貨物船だ、日出ずる国からの堂々の船出ではない、芽出たい船名といえるかどうか、秒速を争うレース艇のイメージとしては如何であろうか、……等々、ケチをつける材料はいくつもあった。周囲には、まだまだ古い意識を引きずっている人が多くいたのである。

迂余曲折はあったが、結局、総長に命名をお願いすることになり、当時、体育会に出て同じように苦勞していた小野木君に行ってもらうことになった。

大塚節治総長は、三案をご覧になり、『どれもいいなあ』と、さんざん迷われた挙句、『WILD ROVER』に決められたという。

『やったあ』と心の中で快哉を叫んだ。が、その時には、すでに、どこでどうなっていたのか、『栄光』の船名を入れたエイトが、デルタ造船を出発していたのである。

到着と同時に船名を書き換え、関西選手権に臨んだ。

スタートからぶっちぎりの強さであった。

いま、12世であるという。感無量。WILD ROVER 号に栄光あれ。

ここに記されてあるように昭和27年の関西選手権大会において同志社は戦後初、通算、昭和15年以来12年ぶり2度目の覇権を握ったのであった。その陰には打倒京大の執念に燃えた部員たちの猛練習と、新艇の特徴を研究し、的確な漕法とクルーのシート配置を行ったコーチ南部の達見があった。



ワイルド・ローヴァー（1世）進水式

予選で関大、準決勝で阪大をくだし、3年連続となった京大との決勝において、京大資料では

「スタート後唐橋で半艇身、艇庫前で一艇身とリードされ、そのまま堂谷に至りズルズルと艇差を増し、ゴールでは実に2艇身半と惨敗。全く良いところなかった」

と記されている如く、一方的な勝利であった。

まさに部の再建に関わったすべてのOB、関係者を雀躍せしめた欣快事であった。校祖新島の事蹟にちなんだ「ワイルド・ローヴァー」はこうしてその誕生とともに勝利の艇名となり、以後の同名艇の長い歴史に栄光の起点をおいた。晴れのクルーはC國富卓也S北尾元哉7松本欣二6三竹（加藤）偉雄5竹村栄造4久下（原田）貴三3湯川長保2村井利康B勝山實であった。

関選戦後初優勝を果たした同志社クルーは高揚感を胸一杯に、9月6、7日の両日行われた全日本エイト選手権競漕に出漕した。戦後2度目の参加であったが、この頃になると国情もようやく一応の落ちつきをとり戻し始めていた。この年、



戦後初の関選優勝



関東優勝を果たした部員たち

戸田漕艇場には3万の観客が詰めかけたと記録されている。

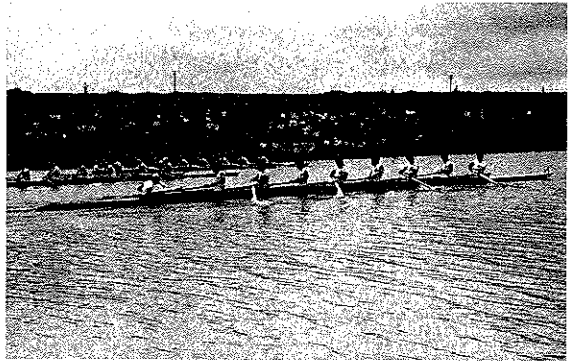
同志社クルー、この大舞台にぜひとも新艇ワイルド・ローヴァーで臨みたいところであったが、資金的に自艇搬送の余力なく、不利を承知の古い借用艇をもって挑むこととなった。

京大を倒したということで注目をあび、マスコミから「ダークホース」の評価を受けた同志社、借用艇の重さに苦しんで予選において立教大に惜敗した後、敗者復活戦で明大、東経大に快勝して見事に関西の面目を保った。

続く準決勝の相手は一橋大と慶大。関東第一線クルーとの対戦に同志社クルーの闘志は燃え上がった。会心のスタートを決め、トップに躍り出る。同志社のこの健闘に戸田の全観衆の目は釘付けとなった。だがそのとき、7番のクラッチが吹き飛ぶというアクシデントが発生。seven men での力漕むなく、1位一橋、2位慶応に次ぐ大差の3位を余儀なくされ無念の涙を吞んだ。だが新聞紙上ではその健闘に惜しみない賛辞が贈られた。

一方この昭和27年度の関東において同志社に完敗した京大側は敗北の責任問題をめぐって紛糾。関東を幾度も制覇しながらわずかにただ一度同志社に敗れたというだけで大問題となる。戦後黄金期の京大ボート部の自負は、それほどにも強いものであった。

昭和28年の関西選手権予選において京大と当たった同志社は、京大の対校クルーにまたもや完敗を喫した。スタートでリードを奪われ、京大セトルダウンに対してスパートを投入なんとしても京大艇に並行しようとしたが、これを抑えこまれ、唐橋において3分の2艇身、京大艇庫前の京大スパート20本で一举に水をあげられ、そのまま差が開いて結局2艇身差の敗北であった。



昭和27年全日本準決勝

この後同志社は敗復で大市大を破って復活、さらに準々決勝で阪大、準決勝で神大を破って今年もまた京大との間に決勝を争うこととなる。クルーはC園英明S北尾元載7三竹(加藤)偉雄6坂田良之助5竹村栄造4湯川長保3竹田和彦2久下貴三B筒井弘であった。

京大側資料に記されたレース経過は次の如くである。

「午後4時20分スタート。逆風強く鉄橋付近やや波ありて、スタートの出足非常に悪く4分の1艇身リードさる。その後調子を取り戻し少しずつ差をつめ唐橋前で並行、スパートして半艇身リードを奪ったが同大またスパートして再び並行、艇庫前に至る。ここで同大スパートしたが3本ほど遅れて京大またスパートして1艇身半と完全におさえる。その後徐々に差を増し2艇身半でゴールに入る」

予選、決勝とも、その内容は、当時の関西の王者京大に対し前半よく健闘、観衆の手に汗握らせる熱戦を演じながら、結局後半持久力の差を見せつけられての負けであった。

この時点での京大との実力差は明らかであった。関選は京大にとって全日本への予備レースという意味しか持っていなかったが、その京大もまたこの年の全日本では準決勝で敗退している。関西関東のボート界の間には、まさにはがねの如き強固な壁が立ちただかっていたのである。

4. ケンブリッジ大の来漕

昭和29年の全日本選手権はイギリスから150年の伝統と栄誉を誇る名門ケンブリッジ・ボート・クルーを迎えて行われた。終戦後9年、かつての敵対国との間にスポーツを通じて親善関係の回復を図るとともに、ローイング技術向上のために有意義な刺激を得ようと日本漕艇協会が企画、関係省庁や各団体の協力を得て実現したものであった。

同志社ボートはこの年、見るべき戦績もなく、関西選手権も予選で敗退していたが、本場英国のクルーと対戦できる機会を見逃すわけには行かず戸田へ遠征した。しかし予選、準決勝、順位決定戦ともケ大と対戦する組合せとならず、同志社は阪大に一勝のみの成績をもって帰洛する。

対戦の機会を得たのは9月下旬、瀬田川で開かれた「ケンブリッジ大学歓迎関西選抜レガッタ」においてであり、この大会には同志社の他京大、阪大、神大、関学が参加した。

予選で同志社は神大と対戦、この勝者が準決勝でケ大と当たることになっていたの両校の意気込みは高かったが、さすがに同志社実力の差を示して神大を3艇身半の差でくだす。昭和初期にKR&ACと戦って以来の外国人クルー、それも本場のケンブリッジ現役クルーとの対戦とあって同志社のクルーの胸は高鳴った。種々の理由により来日後不調をかこち全日本でも凡戦に終わっているケ大ではあったが、その伝統のローイングに触れることは同志社にとって大きな刺激となる。やっとなめぐって来たこのチャンスに、クルーは関選や全日とは一種異なる興奮を禁じえなかった。

ケ大OBの英国大阪総領事オールドハム氏が語ったように、ケンブリッジーオックスフォード戦が行なわれるキャム川と周辺風景がそっくりというこの瀬田川で、ケ大は来日以来初めてケ大らしいレースを展開した。四万という瀬田川空前の観衆が二手に分かれて両校に大声援を送る中、ケ大はその本領たる力強い勇壮なローイングを展開、同志社との間にまれに見る好戦を演じる。来日後故障で艇を下りていた整調マーシャルの復帰もあり、ピッチの上げ下げも巧みに艇を運び、同志社をリードする。ゴール前に至り同志社猛然と急追、ぐんぐんとケ大艇に迫りついにかわしたかと思えたとき、ケ大最後の数本をジョンプルの意地を賭けて力漕、半艇身差同志社を押さえ切った。

力の拮抗した両校の、互いに全力をふりしぼった熱戦は勝敗を超えた感動で瀬田川

を包んだ。スポーツを通じての親善の意味をありありと現出した好レースに観衆の拍手と声援は鳴り止まず、敗れたりとはいえ同志社クルーの胸にはさわやかな充実感が残った。同志社ボートをよく知る者には、どことなく同志社カラーが期せずして象徴されたレースであったような感を抱かせた。同志社クルーはC園英明S阪田良之助7岩波春喜6小野博善5伊藤竹美4内田順己3赤塚弘高2三竹偉雄B竹田和彦であった。

ケ大主将デニス・K・ヒルはその後

「瀬田川が一番きれいで気に入ったし、もっとも面白いレースだった」と語り、

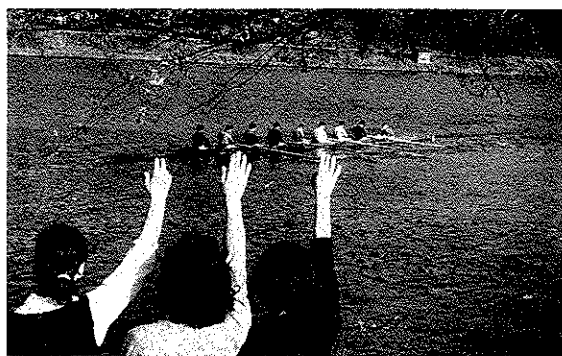
「われわれの大きな願いは、イギリスで日本のクルーを見ることだ。それは日本へ来てみて、日本のクルーの気質が、イギリスで最善のオアズマンシップと賞賛するクルーと、すこしも変わらないことを発見したからである」と日本のオアズメンへの賛辞を贈っている。

5. 対京大教養戦始まる

昭和30年より対京大教養ボートレース大会が始まった。これは両校のジュニアクルーの精進ぶりを競うとともに、そのことによって両校の潜在能力を高めていこうとする主旨によるものであったことはまちがいない、特に同志社側にとって大きな意義を持つものであったことはその後の経緯から明らかであると思われる。



ケンブリッジ大と対戦



春の合宿

記念すべき第1回大会は7月3日、瀬田川において鉄橋から平津までの2マイルコースで行われた。同大ジュニアクルーはC北村久弥S内田順己7浅井清治6矢野功5伊藤竹美4石田孝成3畑山純一2八田勇吉B市村敏昭、監督は高橋宗、コーチ太田豊彦、湯川長保。マネージャーは脇方勇、小野木利男、森口迪治であった。監督高橋は赤鬼、コーチ太田は青鬼と部員達から仇名され、当時の対抗クルーの一人岩波春喜により「合宿鬼ヶ島」という流行歌の替え歌が作られたという逸話が残っているが、京大の力に及ばず大差で敗れた。なお、このときの新人ナックルフォアはC南昌吾S八神弘雄3杉本茂雄2蒲善毅B鈴木史朗のメンバー、補欠に近藤光男、そしてマネージャーは森田勝美、庄山章信が務めた。

関選においてもこの頃独自の漕法を確立させた京大に敗れ準優勝に終わった。クルーはC田畑良夫S内田順己7竹田和彦6阪田良之助5伊藤竹美4矢野功3浅井清治2八田勇吉B三竹偉雄であった。この年関西学生リーグでは優勝、この時は三竹偉雄に代わり畑山純一が2番を漕いだ。この頃マネージャーとして加畑哲夫が活躍している。昭和31年の対京大教養戦にはC松尾武嗣S杉本茂雄7市村敏昭6龍村和憲5安藤学4山添敏雄3大西治2内貴康夫B榎本昌浩のメンバーで出漕したが、体力的、技術的な差が大きく大敗している。

この年はメルボルンオリンピックへの代表チーム決定の年であったが、その選考方法として前年の全日本選手権大会の三位までのチームと本年度の全日優勝チームでリーグ戦を行い、その優勝者をもって代表とすることが決定された。このためこの年の全日本選手権大会は例年より早い八月初旬に開催されたが、大魚を得んとする野心満々のクルーの出漕申込みが相次ぎ、出漕クルー数は空前の21に達した。

新艇「ポセイドン」をもって大会に臨んだ同志社クルーは予選で明大以下をくだし



第1回対京大教養戦メンバー

て準々決勝に進み、ここでは中大に敗れたが二艇上がりであったためさらに準決勝に進出、善戦したが、惜しくも東経大に敗れて決勝進出はなかった。

オリンピック代表権はこの大会に優勝した慶応と前年三位の京大の間で熾烈な戦いが展開され、慶大の劇的な逆転勝ちとなり、京大わずか一

尺の差で無念の涙を呑んだ。

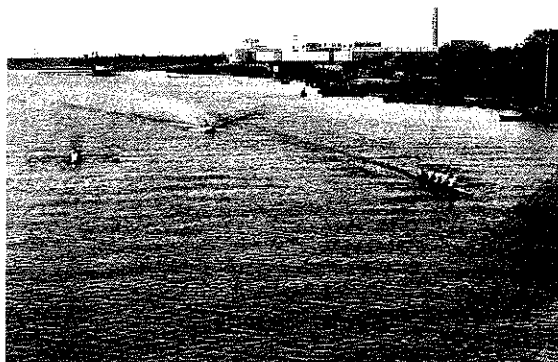
今一步の戦績に終わった全日本選手権大会であったが、この遠征において、同志社ローイング史上非常に重要な出来事が起こっている。当時の東大コーチ根岸正による直接指導である。

同志社コーチであった太田豊彦の、辞を低くしての懇請に根岸氏は快く応諾、長期にわたって東大漕法の基本理論に沿った指導を行った。その理論の真髄はただちに具現するには深すぎるものであったにせよ、この指導により以後の同志社ローイングに新しい方向が加えられたことは事実である。もともと同志社漕法の特徴は、岩波春喜などの説によれば「女の尻を撫でるような」軽いフォワードにあったが、根岸氏はさらに脚力のオールへの伝達に最大のポイントを置いて懇切に指導した。今日、同志社漕法は基本的には東大漕法であるといわれるが、それは元来こうした事情によるのである。

この指導がよい刺激になったものであろう、この年例外的に全日本選手権の後に行われた関選において、同志社久々に宿敵京大に快勝、戦後2度目の優勝を飾った。クルーはC田畑良夫S阪田良之助7内田順己6矢野功5伊藤竹美4江原祐明3小野博善2八田勇吉B浅井清治であった。主務は脇方勇が務めている。また本大会スカルの部で北村久弥が優勝した。

昭和31年度においてこの他に特記すべきこととしては「関西学生漕艇連盟」の結成が挙げられる。これは同志社と京大のマネージャーが発起して、まず同志社大学明徳館に関西各大学のマネージャーを招いて懇談会を開き、従来相互交流がはなはだ疎遠であったことを反省し、連盟結成によって親睦と向上を図っていかうとしたものである。これにより、以後全日本選手権大会のときの合宿所、アームなどを連盟を通じて一括交渉すること、また艇の輸送等も共同で行くことができるようになった。この「関西学生漕艇連盟」の初代会長には同志社主務の大塚亨が就いた。

対京大教養戦2連敗を喫して同志社は昭和32年、今度こそその意気込みをもって練習に専念するが、不運にもレース直前クルー全員がインフルエンザにかかるというアクシデントがあり、実力を発揮するにも至らず敗退した。これでこの定期戦三連敗となった。関西選手権大会にもC南昌吾S内田順己7市村敏昭6山添敏雄5伊藤竹美4畑山純一3伊藤章司2八田勇吉B浅井清治のクルーで出漕したが、またもや京大の前に敗れ準優勝に終わった。だがこの年、ひとり気を吐いて同志社ローイングの欲求不満を晴らしたのがジュニアによるナックルフォアであった。クルーはC小山隆治S丸山信吾



ナックルフォアで関選優勝

3 佐野潤一 2 岡原正幸 B 神原顕次、
コーチは3年生の杉本茂雄であった。

杉本は同じくコーチを務めたジュニアエイトが、先述した如く春の対京大戦の直前のインフルエンザ罹患により敗れた無念をこのナックルフォアで何としても晴らすべく、悲壮なる決意のもと、クルーに必勝態勢の猛練習を課す。「上へ行こうが下ろ

うがほとんど力漕の連続のようなもので、朝、昼、夕と繰り返した」と彼は語っているが、そのあまりにもがむしゃらで苛酷なメニューにクルーは耐えきれず悲鳴をあげた。本当に泣き出す者も出た。しかし「同志社ローイングがいつまでもB級にとどまることなく将来天下に覇を唱えるためにはこうした猛烈なしごきが必要」と考えた杉本は、最後まで猛練習をゆるめることなく、大会に臨んだのである。

第一次予選、第二次予選と勝ち進んだ後、同志社は準決勝で社会人の強豪東レと対戦、東レ有利の大方の予想を裏切って見事にこれをくだした。決勝は岡山大学、愛媛大学と争ったが、最右翼と見られた東レを破った今、すでに敵なく、大差をもって優勝を果たした。ジュニアメンバーによるナックルフォア関選優勝は、エイトの対校戦をメインイベントとするボート界にあって、あるいは地味な記録かも知れない。だがこの栄冠は同志社ローイングの歴史の上で大きな意味を持っている。なぜならこのジュニア強化の伝統が作られなかったならその後の同志社ボートの発展はなかっただろうからである。ちなみに、このナックルフォアの練習中、しごきの苦痛に耐えきれず泣いたのが、現在同志社艇友会きっての「ボート狂」として知られる佐野潤一である。

6. ボート新時代へ向けて

昭和29年のケンブリッジ大の来日当時、同志社ボートは朝日新聞紙上で「関西のB級」と評されたことがあったが、それは現実であった。ちなみに戦後、昭和32年まで12回の関西選手権の優勝回数を見ると、京大7回、同大2回、同志社高商1回、関大、三高各1回である。関西における第一人者はあくまで京大。同志社はそれに次ぐ者で

しかなかった。しかしながら戦前の状況と比較したとき、第2番目とはいえ確固たる地歩を築いたことは大きな前進でもあった。全くゼロに近い状況からの再建であったことを考えてみれば、土台作りとしては大きな成功をおさめたものと評価できる。この十年以上の長きにわたって監督を務めた高橋宗の功績は歴然としている。基礎固めは成ったと見て高橋は昭和32年、監督を辞すが、さらにこの後、新たな試練の時代が訪れるのである。

高橋から監督を引き継いだ内田順己は後に「同志社ボートにおける最大の理論家」と呼ばれるに至るが、クルーの基礎レベルの確保こそ先決要件であるとの認識のもと、そうした環境の整備と理論の確立を長期的計画のもとに進めていく。

この頃になると学内の他の運動部も再建あるいは新設が相次ぎ、人気を集めるクラブも他に多くできたため、入部者およびそのレベル確保は徐々に困難になっていく。このためボート部は部員勧誘活動の一環として学内でボートの写真展などを開き、相当数の入部者を得るが、自前の合宿所もないという受け入れ態勢の弱さで、一時的効果しかなかった。反面、それまでC級とされていた他校においてはさして人気のなかったボート部もそれなりの部員数を集めるようになり、進学率の向上もあいまって、一種の平均化が起こって来たと言えられる。大学ボートはこれから新しい時代への移行期に向かい、新たな地平における戦いが始まろうとしていた。

こうした2つの時代のはざまにあって、戦後一応の地位を得た同志社ボートも沈滞の様相を呈した。

昭和33年度の関西選手権大会においては同志社は二次予選で敗退し、京大も準決勝で姿を消した。同志社も京大も姿を見せぬ決勝戦というのは実に9年ぶり、甲南大が阪大をくだして初優勝を飾っている。

全日本においても予選第1日目の第1試合で東大、東経大に次ぐ3位で予選落ち、1位東大から19秒以上もの差がついた大敗であった。

翌昭和34年春の対京大教養戦で敗れ、ついにこの定期戦開始以来勝ち知らずの5連敗を喫した同志社は、関選では予選で大市大と対戦して失格負けとなり、また全日本にはついに不参加であった。この全日本で惜しくも2位となった遠来の名門オックスフォード大はその後瀬田に来漕、関西各大学と対戦した。同志社はC中田康夫S大西治7鏡俊光6山添俊雄5能勢啓4菊岡禎一3伊藤章司2寺田英三B日野義樹のクルーで好戦したが敗れた。オ大は瀬田では堂々の全勝であった。帰国に先立ち、オ大は日漕に記念盾を贈呈、これを記念して全日本二軍戦としてオックスフォード盾レースが創

設されたことは周知のとおりである。

同志社のこの沈滞期に刺激を与えようとして、この頃「艇友－復活準備号－」と題された小冊誌が制作された。各部員がそれぞれ小文を寄せているが、その中からいくつか拾ってみよう

「今年の反省、というか僕が同志社のボート部に入ってから以後全般的に感じたことを述べたいと思います。

一般に同志社はファイトがないと言われます。それは僕の此迄の経験からも確かに肯定せざるを得ない事実です。良い意味で言うならば洗練された落着きの有る大人らしさと言われるものでしょうし悪く言えば野性味を欠き力強さに欠けて居ると言われるもので有りましょう。

確かに中にはファイトを持って居る人も幾らかは居る。しかし全般的に見た時やはり其処にはファイトの欠如が如実に感ぜられます。この様なファイトの欠如に依って引き起される結果は練習のマネリズム、所謂練習の為の練習という様な事実となって表われ、試合となって勝利への意欲を持った所で所詮他力本願の結果の何ものでもあり得ないと思います。とりわけ強力な精神力を必要とするボートに於て常日頃のファイトこそ大切であり、その欠如こそ最も憂慮されるべき事と考えます。

この様な事は個々人の性格としてどうしようもない事かも知れませんが、此処で我々は全部が全部その様なファイトに欠けて居る人達が我ボート部に集って居るのではないという事に注目せねばならないと思います。その様な人達こそ己の持味を充分生かす事に意を用いそれを殺さぬ様にすべきです。同志社の持つファイトの欠如に巻込まれる事なく大いにそれへの反逆児たる者となるべきだと思います。そして更に今の良い意味での洗練さを無くする事なくファイトを（意地ともいうべきものか）培って行ったらそこには何らかの進歩の道が開かれ、漕法その他技術的問題と相まって一段一段勝利に近づく事と思います。

僕はこの機会に同志社ボート部全員に更にボートに対する情熱と勝つ事への飽くなき意欲を常に持たれる様望んで止みません。

同志社のボート部には長い歴史と輝かしき伝統があります。そしてそれが現在のボート部に及ぼして居る影響も良いにつけ悪しきにつけ多々あると思います。

しかし乍らその中で特に僕の残念に思う事はその伝統にこだわりすぎて己の力を過大評価する事です。こういえば中には反論なされる人もあるかも知れませんが確かに心の隅には此のような過信の観念が大なり小なり含まれていると見て取りました。

伝統はそれなりに大いに大切に尊重し無形の拠所とすべき事と思いますが余りにもそれを尊重し、それに頼りすぎでは害あって益なく安易さと自己過信の他何物も残らぬ事でしょう（この様な事は試合に多く見られるように考えます）伝統はあくまでもサムシング（something）であり勝敗は実力第一であり現実であり過去でも無ければ未来でもなくそして我々は常に勝敗の世界に居る事を忘れず又客観的自己認識、自己評価こそ勝利への道である事を銘じて忘れないで欲しい。」（田沢 明）

「同志社大学ボート部は皆が考えている様に最低の線に到着した。もうこれ以上心配する事はない。次にする事はこの曲線を上に向けて描くことだと思います。色々な曲線に見られるように曲線は2つの要素に分解して説明されます。今、同志社大学ボート部勝敗曲線単調増加を説明する要素1は艇速の向上にあります。要素2は練習にあると思います。何もここでいう練習とは肉体上のトレーニングのみではないと思います。何故なら肉体上の条件のみがレースに表われるのではないからです。ですからその結果がレースに表われる肉体的及び精神的鍛錬が必要なのではないでしょうか。

先輩各位の努力も今度のレースでは水泡に帰してしまいました。僕達全てが練習のどこかに欠点を認めていました。それは我々自身の内部にあるかも知れないとある人は思っていたでしょう。例えば体力的な事柄又は練習に対する熱意等です。又或る人の考えではコーチの方法や漕法の問題に疑問を感じた人もいたことでしょう。しかし要するに皆が少しでも同志社のクルーを強くしようと考え何らかの形でそれを考えて来ました。僕達は大学で勉強をしています。だからスポーツをやる事を考えてしようとしします。ですから欠点をボートから分析研究すればよいと思います。欠点を発見するには分析という方法が一番賢明な手段だと僕は思います。

たとえそれが1週間かかろうとも欠点を見つめそこをついた練習ならばたゞむやみに効果が上ったのか上らないのか分らないような練習を一年やるよりもずっとよいと思います。何故ならば前者はレースに勝つ可能性を持っているからです。僕の考えでは今の練習は後者をとっているように僕は感じます。」（中田 康夫）

「小生大学入学以来3年間ボートに関係して来ましたが小生ボート部に入って全く良かったと思って居ます。これは小生の本心です。

しかしボート部に入部当時は練習の激しさにおどろきました。中学、高校とサッカー部にいて相当しぼられて来たんですが、ボートの練習にはアツといいました。ボート部に入った動機ですが同志社のボートは強いらしいとの事で入ったのです。

事実関西ではその伝統を誇っています。がしかし、小生らの時代になりその名が消

えかかっています。それが小生にはくやしいのです。

「なんとか強くなりその名を全国にとどめたいと思います。」（榎本 昌浩）

「僕自身3年間のボート部生活を振り返って、大いに反省すると共に今後（わずかな期間ではあるが）後悔のなきように努力して行きたいと思っています。

確かに我部の成績は1年1年後退して来た事は事実であり、今此处で立て直さねばならぬということは誰もが感じ又考えられている事と思う。然れども、その方法は容易なものでないし、余りにもむずかし過ぎるので、今迄の感じたところを述べさせていただきます。

1、我がクルーと他校を比較した場合、優秀クルーは大型（重量クルー）であるという事実である。何もそれにこだわる必要はないと思いますが。

1、伝統の上に立った実力の過信

我々は余りに先入観の目で見過ぎるのではないだろうか？

1、計画の上に立った合理的練習の不足（少々無計画ではなかったであろうか。） 以上は少々簡単ではあるが、僕の反省すべき点であったと感じています。

今後の方法としては、あく迄自我を捨て虚心に改めなければならない。

僕は今後のために基盤になっても本望である。又そのように望んでいる故に今迄通りのクルー編成で過去以上の努力が必要であると思う。

我がクルーが弱くなったのではなく、他校が進歩したのであって、伸びがなかったということであると考えられる。それに追いつく困難は大きいと思うが、相手が同じ人間である以上、出来ぬことはないと思うから、なお一層のチーム・ワークを持って練習に努力しようではないか。」（大西 治）

それぞれ表現は違うが、同志社ボートが再建後最大の落ち込みに入ったという認識は部員の間に共通している。中でも注目すべきは「伝統の力を過信してはならない」という意見が述べられていることである。これはこれからの漕艇界がボート人口の増加や新進の参入によって戦国化するであろうとの予感を表明したものとも受け取ることができよう。

こうした危機的状態を打破するには、まず有望な新入生を他部に取りられないようにすることが必要である。そう考えた佐野ら主脳部員たちは、昭和34年の春にはキャンパスにボートを持ち込んで大デモンストレーションを行い、70名という空前の新入部員を得た。このため朝の体操ひとつ行うにしても二部に分かれて行うありさまであったが、この多数入部によって強力部員を得たことが、翌年の対京大教養戦に生きてく

ることになる。

ボート界の戦国化に対処し、また関西のレベルを関東のそれに近づけるには、同大対京大教養戦のレベルを上げるのが最も近道であるという理解が、この頃の両校の間で急速に進んでいた。特に5連敗を喫している同志社にとって、是が否でも一矢を報いることが必要となった。昭和35年度の対京大戦の1週間前になってコーチ山添敏雄はジュニアクルーを召集、すでに対校メンバーに入っていた1、2年生クルー数名をジュニアに下ろしたい意向を表明する。なりふりをかまわぬ勝利への決意に、ジュニアクルーの内数名は自身がおろされる無念さをこらえ、十分とかからぬ自主的な相談でシートを譲った。共通の名誉のために自己を犠牲にする行動は団体競争にはつきものであるが、同志社ボートにおいてこの後こうしたシーンは何度となく繰り返されるようになる。新しい状況へと脱皮、進化して行くために運命がしばしば強制するこの苦難事に耐える力も、同志社はさらに強く身につけて行かねばならぬことであった。このようにして編成された強力ジュニアクルーにより、同志社は激戦の末、対京大教養戦に一勝を得た。昭和35年6月19日であった。

7. 対京大教養戦に連勝

ジュニアから鍛えていくということが重要なテーマとして認識され始めた頃、同志社ではその徹底的な実践を対京大教養戦を通して行った。杉本茂雄監督の指揮のもと、3年生平田隆司が現役生コーチを務め、ジュニアクルーの強化にあたる。

しかしながらスピードの点において京大が同志社よりも一枚上であることは衆目の一致するところであった。京大クルーの一人後藤舜一は半ば冗談ながら「京大の勝利は確定的。勝利の確定しているレースをやるのはどうかと思うが、まあそれもいいだろう。定期戦だからな。とにかく同志社さんの善戦を望みたいね」なるコメントを残している。

スピードが劣るクルーをもってして、いかにして勝利を得るか。平田はまず、スタートではどうしても出負けすることを前提として練習方針を立て、スタートで敵にリードを与えた上で、徐々に挽回するという練習を続けた。すなわち湖上を航行する汽船などとまず並行し、それを先に行かせておいて、あとから追いかけて、追い抜くという練習を繰り返して行ったのである。言うまでもなくボートレースにおいては先行し

た側が、相手を見ながら漕げるといふ有利を得るが、その艇差をどこまで行ってもそれ以上開かせず、ペースを守ってぴったりとつけて行った場合の相手の心理の乱れをねらう作戦であった。

実際のレースにおいて、京大は予想通りスタートを決めて同志社をリードし、前半800メートルの唐橋のあたりでは2艇身半の差をつけた。ところがそれ以上に水は開かない。追う側の同志社は普通ならば敵の見えない不利な状況下にあるが、あとから追う練習ばかりを信じて繰り返して来たため、いささかの動揺も見せず、逆に唐橋を越えてからは少しずつ差が詰まり始めた。京大側あわてて猛然とピッチを40程度に上げる。同志社はスタートからまったく変わらない31のピッチのままずんずん進む。京大のスパートは空回りし、艇速はかえって落ち始めた。コンスタントの同志社ついに京大艇に並び、リズムの乱れた敵艇を無表情な牛の前進にも似たコンスタントピッチのままゆっくりと抜き去った。狼狽する京大艇を尻目に同志社さらにどんどん進み、ゴールインしたときは4艇身半という大差であった。クルーはC西田稔S赤川雅俊7岡美智雄6津崎晴功5加野豊司4伊藤善悟3広田恒夫2鷹野真臣B山路清であった。この翌月の7月にはさらに朗報が続いた。艇庫の竣工である。これによりそれまでお世話になった京大艇庫から出て、自前の艇庫に自艇を収納することができるようになったのである。竣工式の模様は当時の同志社タイムズに次のように記されている。「ボート部OBの大宮隆氏をはじめ艇友会一同の寄付にかかる瀬田新艇庫の竣工、贈呈式は、7月2日午後2時より現地において部員、OBをはじめ、大塚総長、秦理事長、上野大学長の諸氏参列の上、盛大に行われた。

式は、讃美歌にはじまり、聖書朗読、祈禱あって大宮氏代理、高橋OB代表の工事経過報告、安井艇友会長より秦理事長へ艇庫その他の寄贈目録を贈呈、大塚総長の献堂辞あって、秦理事長の謝辞あり、更に大塚総長新造艇を「快風」と命名。引続いて上野学長、吉川会長の挨拶、瀬田町長の祝辞、能勢主将の感謝あって式を終わった。なお校友会よりは磯川専務が出席して、OBの艇友会一同へ謝意を表した」

アマチュアスポーツには財政難がつきものであるが、昭和30年代当時のそれは現在の比ではなかった。その中で活動の拠点となるこの艇庫を贈呈されたことは部員にとってこの上ない喜びであった。と共に、世代から世代へと引き継がれる同志社ローイングの伝統が、それにかかわった者たちの熱意によってこそ支えられて行くものであることを目のあたりに示されたとき、伝統を担う者としての自覚は彼ら部員の胸の内に深く刻みこまれたに違いない。

ちなみに、当時の財政上のやりくりの一端を示すと次のようなものである。

部員の体力増進のための基本的要素はまず何といっても食事であるが、限られた予算でより良き食生活を追求するべく、マネージャー平田は唐橋近くの「よたけ」食料品店の番頭を箆絡、煙草一箱の謝礼をもって冷凍鯨肉を卸値で入手することに成功した。10数キロの大きなかたまりで買って来ては切りさばいて副食に当てると、冷凍品であるだけに冷蔵庫のない当時でも数日はもつのでまことに重宝したとのこと。ただ大きなものを切りさばくのが難事で、素足でふみつけて汗をかきながら鋸で挽いていると練習を早目に切り上げて帰宿したクルーに何をしているのかと不思議がられ、毛むくじらの素足で踏みつけているだけに食物であるとは説明できず、クルー環視の中で返答に窮したなどの逸話もある。昭和36年ごろはグラスファイバー製の艇、オールが出始めたころであるが、そうしたものを試みる余裕はなかった。マネージャーとなった西村泰夫も資金集めに走り回る生活であったが、造船所への借金がかさみ、パーツを買いに行っても売ってもらえず、やむなく他校のボート部員に頼んで購入してもらったことがあるという。粗食に耐えるクルーに試合前ということでビフテキを食べさせたところ胃が驚いたのか数名が腹をこわしてしまったことなども当時をしのぶ語り草となっている。

野菜類や卵は京都の中央卸売市場で購入したものを当時の大衆的軽トラックであった「ミゼット」で搬送、合宿所として借りている民家の土間に置いておいたが、その家の主婦などが分けてもらえまいかとよく来たそうで、その際はチャッカリと小売値で販売して差益をかせぐ等、万事に細かく一銭もおろそかにしない、あるいはできない状況であった。牛乳は南郷の牧場に毎朝買い出しに出かけ、主食である米、麦は瀬田の米穀店から購入したが、あちこちから借金だらけという状態が慢性化して、やりくりの苦労はひと通りではなかった。運動部のこととて打ち身やすり傷は毎度のことであったが、そのたびにお世話になった女医さんの診療所「中山医院」に対しても、治療費のカタとしてオールを置いてくるなどということが行われ、その診療所には何本も同志社のオールがたまったなどということもあったという。今日の感覚からすればどうかと思われるようなことが多かったのであるが、世間一般が経済的に決して豊かでなく、ある程度の融通のきかせ合いで社会が維持されていたことの一つの表れでもあったろうか。

翌昭和37年の対京大教養戦、同志社は前年以上の猛トレーニングでレースに臨む。
C西田稔S石本君夫7 広田恒夫6 津崎晴功5 池田宜郎4 内保忠勝3 岡美知雄2 稲垣謙

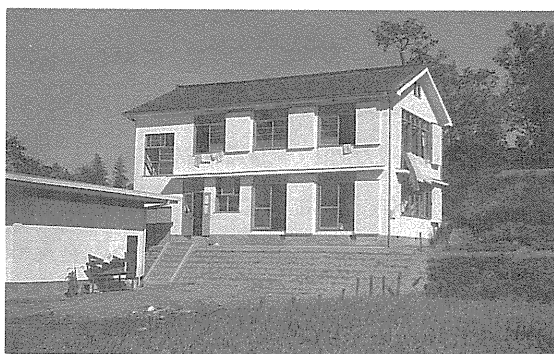
介B頼頼武司であった。作戦は前年同様、スピードに勝る京大を先に行かせ、食い下がろうというものであった。

当時対校よりも強いと言われた京大教養クルーのスタートのスピードはやはりすさまじく、800までに同志社艇に艇身のリードを奪う。しかしそれ以上に水は開かなかった。艇身差のまま同志社艇の艇先は京大艇の艇尾にびたりとつき、1000、1200、1400と通過、京大さらに艇差を奪おうとするも同志社離れず1600、1800、2000と追漕。どこまでも食いついて来る同志社艇に京大は幾度かスパートをかけるが差は開かず、かえって京大側に疲れが見え始め、逆に艇差が縮まり始めた。同志社艇のトップボールがじりじりと京大艇のックスシートから整調、7番の位置へと伸びて来る。柳屋カーブに至りついに両艇並行、京大側も焦りを見せて力漕を試みるが、すでにへばりが表れていた。同志社急漕して京大艇に初めてリードを奪う。残り数百を京大必死に反撃しようとするが同志社の余力が勝り、2艇身差をもつてのゴールであった。

この対京大教養戦は翌年僅差をもって京大が勝利したのち5年にわたって中断したのち再開され、昭和44年、45年、1年のブランクの後47年と行われ、同志社が連勝するが、その後再び中断されたまま今日に至っている。通算対戦成績は6勝6敗である。

8. 合宿所の完成

昭和36年に待望の艇庫が完成して以来、部員達の希望は一日も早く同志社大学ボート部の合宿所を持ちたいということであった。創設以来70年、合宿所に関しては常にジプシー生活を繰り返し、戦後だけでも約20軒の瀬田川付近の民家に、そのつど無理



艇庫、合宿所完成

を頼み込んでの合宿練習であった。

創設70周年というこの機会を生かし、当時の主務大西義則らを中心に同志社大学グリークラブのコンサートが企画、実行され、この益金と、艇友会、有力OBらの援助も得て、資金作りがなされ、合宿所建設が日程に上った。

部員達は毎朝の乗艇前に全員で基

礎用の土運びを続け、土台造りを完了。さらに建築用資材の足しにするため、岩倉の大成寮にあった廃材をトラックで運びこむなどの努力が重ねられ、昭和37年10月ついに竣工の日を迎えた。当時の部員の一人池田宜郎は日記に次のように書き記した。

「1962. 10. 21 Fine

合宿所竣工式。総長・学長・理事長他学校関係者とOB諸氏が参列。午後2時より、秋晴れの下、晴れやかに挙行。

総長よりこの合宿所を『同志社大学 瀬田寮』と命名される。

『この瀬田寮において、人生で最も大切な友人を得てほしい……』との総長辞。

又、総監督大宮さんの辞、『代々念願の合宿所が実現されたのだから、これからは決して後退しないで、這うてでも前へ進む様努力する事を』と、又、艇友会会長安井さんから、会を代表して、『来るオリンピックに於て、優勝はともかくとして、三位には入賞する』ことを注文された。

以上、種々の人々の祝辞を聞いていると、いかにも体育会の人間の使命というものを認識され、はじめて自分が体育会の人間であるという自覚を得た様に感じた」

昭和30年代、戦績的には今一つであったとはいえ、ボート界の新時代を控えて混乱の中に飛躍のための人的基礎作りを成功させ、また艇庫に引きつづき合宿所の設置という物的な環境作りまで事を運んで行った当時の監督、内田順己、下西辰夫、佐野閏一の、己れを無にした努力は、その後、今日までの同志社ローイングの屋台骨を形造ったものとしてここに明確に特筆しておかれなければならない。

その後、艇庫および合宿所は改修、改築が重ねられて現在に至り、今日も若き部員たちの青春の住み家として、瀬田川畔にその瀟洒なたたずまいを保っている。

9. 立て直しに総力を結集

対京大教養戦に三連勝を果たし、艇庫、合宿所を得て、大飛躍が期待された同志社ボート部であったが、前進にはさらに時日を要した。

昭和38年は2月より、静岡県佐鳴湖において約40日間の長期合宿を行って寒風の中を訓練に励んだが、春の朝日レガッタで今年から設けられたエイト部門に出漕したものの平凡な成績に終わった。

6月の第9回対京大教養戦においては4連勝が期待されたが、接戦の末一艇身差で

敗れた。またこの年は同時に対校エイト2000のレースも行われたが、これも一艇身の差で敗れている。

7月の関選では予選で甲南大学に大勝したものの、準々決勝では、この年結局優勝した阪大に3艇身差をつけられて敗退した。

この年の全日本選手権は戸田コースが翌年の東京五輪に備えて拡張工事中であったため相模湖で開催され、同志社は準決勝まで進んだが五輪出漕予定の日漕選抜に敗れた。

東京オリンピックを翌年にひかえ、各国スポーツ界の情報が多くもたらされるようになった。例えば、インターバル・トレーニング、レペティション・トレーニング、サーキット・トレーニングが盛んとなり、ボートにおいてはマコン型オールとか、エイトにおいてサイドを交互にせず一部サイドを連続させる変則サイドなどが試みられたりもしている。この年、同志社は関学OB富田をコーチに招聘、対校戦線復帰に向けて立て直しをはかった。

部員たちも現在の落ち込みを克服すべく、それぞれがボート部の将来を考えた行動をとる。例えば対校エイトの解体である。当時の主将石本君夫以下、池田宜郎、加野豊司、内保忠勝ら4年生は、同志社ボートの一からの出直しと、財政再建のため、エイトをおりて経済的に負担の少ないフォアを編成、中原克己はシングルスカルとし、エイトは2年生中心として練習を続けさせ、自分たちはアルバイトを続けた。自分たちよりもあとに続く者たちのためにとられた自己犠牲の行動であった。この頃、同じく4年生の広田恒夫は、重病に倒れた父親の余命の短いことを担当医師より告げられ、最後の日々を共に過ごすべく退部を決意していたが、名ばかりの対校で実質はジュニアにすぎないエイト育成のため、説得されて5番に入った。骨肉の情を自ら押し殺し

てのボート部残留であった。

後輩たちも先輩の愛部精神によく応え、広田の指導のもと、気合のこもった練習を続けた。また、このとき、同志社高商より大学へ進んだOB四方久男（旧姓松井）がこのクルーのコーチとなり、新艇よりも安定性で勝る旧艇「快風」の方がこのクルーには合っているなどの適切な指示



若年クルーで関選準優勝

を与えている。練習およびレースの模様を新美康則の手記に見る。

「四方さんから、『君達は2回生だが関西選手権では1軍の試合に出ることになる。そのつもりで練習しなさい』と言われましたが、先輩を見ているだけでもその差はあまりにもおおきく、勝てるという意識はありませんでした。ただただ練習あるのみで、夜遅くまでの練習と1時間、2時間パドル、そして四方さんの顔を見ると『行け行け』と言われ、いつまでたっても練習が終わらなかったことはよく覚えています。試合が近づき京大、阪大クルーのスタート練習などを見るにつれ、その速さにしばし艇を止めて見とれていました。我々はスタートで置いて行かれては終わりだということでスタートからコンスタントに移るまでを特に念入りに練習しました。1回戦、強豪といわれていた京大がいました。先輩は事実上の決勝戦??だと言って励ましてくれました。スタート直後気がついてみると京大に勝っています。漕げば漕ぐほど離れていきます、わが目を疑いつつも結局ゴールインしたときは水を開けて勝っていました。信じられませんでした。準決勝でまた京大とあたりました。しかしひょっとしたら勝てるかもしれないと思いつつも無心で漕いでいました。1回戦と同じように勝っていました。このときは本当に夢のようでした。観戦のOB、先輩方にもまったく思いがけないわれわれの勝利だったらしく、たいへんな喜ばれかたで、皆さんから何度も『よくやった』と言われ、本当にうれしかったことを覚えています。2回も京大に勝った、われわれは本当に京大よりも強いんだとうれしかったと同時に自信も持ちました。しかしこの自信が仇になったのかひょっとしたらという変な欲が出てしまい、それまで無心に漕いでいたものが少しばかりリズムが乱れ、結局決勝では、阪大に勝ったものの甲南に負け、準優勝に終わりました。しかし一軍の試合に出てここまでやれたのは上出来だと思っています。1964年高度成長の最中、日本中のスポーツマンがオリンピックを目指して戦った年、われわれもまた関西選手権に青春を燃やした年でもありました」

このように関西選手権大会ではこの弱年クルーをもって京大を敗る大番狂わせを2度にわたって演じ、堂々準優勝を飾るという感動的な活躍であった。クルーはC山口隆史S岸本勘也7長友毅嘉6松本洋5広田恒夫4桜田東士3大宮久2新美康則B赤尾正明。広田の他は、途中入部の大宮が3年生、他はすべて2年生であった。工学部に在籍する新美と桜田は実習への準備を欠かすことはできず、連日深夜におよぶ勉強を続けながらの練習だった。

全日には4回生によるフォアとシングルスカルで出漕、アルバイト疲れと練習不足

もありフォアは予選4位、敗復3位に終わったがよく健闘した。シングルスカルの中
原は予選1位、準決勝1位と奮起、決勝でも渾身の力をふりしぼったレースで2位に
入り、気を吐いた。

人情家のボート狂で鳴る監督佐野の胸をしめつけることの多かった、この1年の同
志社ボートであった。

またこの年、関選の約1週間前、夜の瀬田川で京大のジュニアクルーと同じく京大
の新人クルーの艇が衝突するという事故が発生している。重傷者が輸血を要するとの
報に同志社部員は病院に駆けつけたが、遭難者の血液型AB型に該当した大宮久の献
血も空しく、京大2年生竜村正君が死亡した。同志社クルーは翌朝の練習時、事故現
場において、雨の中、広田の指示のもとに全員黙禱を捧げ、同じ湖水を愛したライバ
ル校の漕友の冥福を祈った。

10. 躍進の開始

5連敗を喫していた対京大教養戦に昭和35年度から3連勝し、38年度も敗れたりとは
いえ接戦を演じたように、同志社ボートは水面下で徐々に上昇線を描き始めた。入
部者も、昭和38年来、富田の示唆により、東北や中国地方からのスカウト活動が始め
られており、躍進の機運は徐々に上昇しつつあった。同志社の将来の運命を賭けたこ
のスカウト活動に特に献身的に努力を捧げた部員として、森岡正宏の名が特筆される。
昭和39年の秋シーズンから四方久男が監督に就任、コーチには内田順己がついた。

もともと八方破れなところのあったこの昭和39年度の1年生部員たちであったが、
冬休みに有志うちそろってスキー旅行を行い、帰宿が遅れて陸上トレーニング開始の
日に全員遅刻。一列横隊に並ばされ、主将森岡正宏に強烈な鉄拳制裁を食らってのシ
ーズンスタートとなった。この遅刻組の一人であった高橋潔の手記をもとに、同志社
ボート躍進の足跡を見てみよう。

「昭和40年度の新対校クルーはC山口隆史（3年）S森岡正宏（4年）7高橋潔（2年）
6松本洋（3年）5武田正宏（2年）4田口長（2年）3大宮久（4年）2桜田東士
（3年）B長友毅嘉（3年）。

なぜか朝日レガッタをスキップし、関選、全日をめざしてロングロングのスケジ
ュールスタート。整調森岡主将の手抜きを知らない超マジメストロークと、6番松本先

輩の抜群のパワーストロークの間で地獄の日々を過ごす。

夕方の乗艇が一人欠けたときは必ず！回生の福益敏君が乗艇、バランスを取らせながら seven men の一時間ロング。当時の福益君は90kg超の大巨体。バランスがよいので手抜きもできず、重い負荷で一本一本しっかり掛かり、エイトではなくガレー船的感觉であった。

しかし、この期間でブレードワークはしっかり身につけられた。ただ朝も夕もロング、ロング、ロング、ロング。監督、コーチの意図がどういうことかもわからぬまま、コックス山口先輩の「イージー・オール」の声のみを楽しみにひたすら耐えた三ヶ月だったが、果たして7月の関選1週間前から突然艇が走り出した。これがエイトの艇速か！と大喜びしているうちに、いつのまにか決勝に進出。その年の大本命と見られていた立命館に水を開けての大勝で、9年ぶりの関西制覇。幸いにも入部2年目にしして勝利の美酒を味あわせてもらえた」

この関選優勝後、クルーは勇躍して全日本選手権に挑戦するが、全員戸田コースは初めてという緊張の故か予選3位、敗復2位のいわゆる「一コロ敗コロ」を喫した。くやしさを噛みしめながら秋のシーズンに先立ち新クルーを編成したが、すでにこの時点から打倒関東の意気は大いに高かったという。同志社ボート部最初的女子マネージャー川上也須子の入部も部員たちに活気を与えた。

「まず関西リーグ勝利をめざして秋から猛練習に入る。強くてうまいキャプテン松本、鬼のコーチ内田氏にガンガン引っ張られる。メニューは相変わらずのロング主体のスケジュール。しかしこれが、以後の大躍進のベースである柔らかな同志社漕法“dreaming forward”の原点になったと思う。しかし当時はそんな考えもなく、コックスに当初指示の時間をひき伸ばされないため、ピッチ33で一時間の指示なら $33 \times 60 = 1980$ 本を毎モーション一本一本数えて、予定本数に達したところでアピールするというような馬鹿なこともしたものだ。

しかしこの猛練習により関西リーグでは順調に勝ち進み、決勝では大工大と全勝同志の決戦となる。

両者一進一退の競り合いを続けるが、蛍谷カーブで山口氏の強気のラダーで見事に接触。両艇オールで叩き合いの様相を呈する中、S松本氏のブレードが相手コックスと整調を痛打、顔面血まみれになって激怒する相手方に対し6番田口はピンネジを外してレールの上に仁王立ち、源平壇ノ浦の戦いもかくやと思わせる修羅場を現出したが、冷静な桜田氏以下バウフォアの力漕でそのままスルスルと抜け出し、わが同志社の全

勝優勝となった。レース終了後大工大が殴り込みに来るという情報あり、こちらはオールとバーベルで応戦の構えを取ったが、結局大工大側の紳士的決断で事なきを得た」

ケンカ漕法という言葉は悪いが、ここに示された狂暴なまでの野性味は、従来の同志社ボートにはほとんど見られなかった、というより否定されていたものであった。しかしながら同志社ボートの歴史をふり返るとき、活躍の時期には幾度かそうした八方破れの激しい闘争心が表面に出ていたことも事実である。満々たる敵愾心、闘争を好む心、勝利への絶対的な執着と自負、こうしたものがこの頃の同志社ボートに再び芽生えだしたといえる。

昭和41年、シーズン開始を控えての陸上トレーニングは岡山県渋川海岸で行われたが、そのハードさに全員がグロッキーになる中、主将松本が驚異的な体力を示して部員を引っ張った。基礎体力を養成して、瀬田へ帰っての乗艇練習となる。

「練習メニューは相変わらずのロング主体。ロング練習も3年目になると快感にくる。特にLAST10分からの軽い艇速を全員が肌で感じ出し、艇首の水を切る音が聞こえ出す。そのLAST10分のみを楽しみに明けても暮れてもロング練習のみ繰り返し。

6月に入ると突然メニューが変更。ピッチ37で15分4セットがメインディッシュになる。矢橋一浜大津の横断練習。岸は見えず、すれ違う船はなし、視覚からの楽しみは全くない。整調は正確にピッチ37を確保。うしろの7人はただついて行くだけ。

約1ヶ月間のそのメニューの後、そのまま関選に出漕。決勝ではその当時一番走っていた京大と対戦。重い新艇ワイルド・ローヴァー三世で勝ち目はないと思っていたが、京大4番の腹切りで見事に快勝。関選二連覇をなしとげた。」

波に乗る同志社クルー、前年「一コロ敗コロ」に終わったくやしさを新たに噛みしめつつ、全日本に向けてさらに猛トレーニングに励む。

「この頃から内田コーチが本物の鬼になる。ピッチ40で200本、42で150本。漕げたものじゃない。コーチはモーターに乗って一言も発せずただにらみつけるだけ。『このオッサン何を考えてんねん』。そのうちに松本先輩プツンしてコーチにどなり出す。それでも鬼は知らん顔。『ホンマに鬼やでこのオッサン……』という日を過ごすうち、なぜかボートが走り出した。

不思議なもので走り出したならそれまでの不平不満はどこへやら、全員が走らすことに集中。ピッチ37で完全に泡一個以上開く素晴らしい艇速となる」

戸田では東京トヨベットの「チャレンジャー」号を借艇しての全日挑戦となる。

戦前は別として、予選から参加することになった戦後の同志社大学の全日における

エイト戦績を振り返ってみると、次のようになる。

昭和24年準決2位、25年不参加、26年不参加、27年準決3位、28年不参加、29年準決3位、30年不参加、31年準決2位、32年不参加、33年予選3位、34年不参加、35年予選3位、36年不参加、37年不参加、38年準決3位、39年不参加、40年予選3位。

8回挑戦して予選あるいは敗復活3回、準決勝での敗退は5回を数え、一度として決勝に進出していない。

毎年のように決勝に顔を出している東大をはじめ、慶応、一橋などの強豪に比べて1ランクも2ランクも劣る戦績であつたことは否めず、その意味で借艇の艇名「チャレンジャー号」は同志社にふさわしいものであったかもしれない。少し古い艇ではあったが、「快風」型の軽い艇で、瀬田での練習時以上の艇速にクルーは喜んだ。メンバーのほとんどが前年に引き続き二度目の戸田で、前年のように緊張過多に陥ることもなく、足が地についたしっかりとした練習を続けた。今年の同志社は速そうだとの下馬評に、コースの練習のときには他校の偵察係が約四十人ばかり自転車で追走、これを見てクルーはますます発奮した。

予選は防衛大を簡単にくだして勝ち上がり、二艇上がり二レースで行われた準決勝では早大には破れたものの、一橋大、明大、阪大に先着、ついに念願の決勝進出を果たした。

決勝ではスタートは五分に出たものの徐々に早慶に先行を許し、京大にも遅れて最後尾を進むが、途中からロング練習の成果が出て艇速が出始め、京大をかわして三位のゴールインであった。C山口俊郎S松本洋7 武田正宏 6 田口長 5 塚本 4 加藤忠正 3 清水正俊 2 桜田東士B高橋潔。同志社エイト史上最高の成績をおさめたクルーの誇らしい表情を見ながら、監督四方久男は全日制覇への可能性の到来を実感、新たな緊張に包まれた。コーチ内田は多年追求して来た同志社漕法の完成を確認、この漕法に磨きをかけることにより、今後の同志社が全日決勝の常連として定着して行くであろう手ごたえをはっきりと感じていた。

11. 頂点へ

戦後20年間の全日決勝における関西勢の戦績は、昭和30年京大3位、昭和35年京大2位、昭和36年関学3位である。昭和41年の同志社第3位はむしろ遅すぎた活躍とも

言える。しかし自校史上最高の実績に自信をつけた同志社は秋の新クルー結成後も関西リーグでは貫禄を示して他校に圧勝、完全優勝を果たした。

翌年はしばらく自重していた朝日レガッタに出漕のスケジュールを組み、陸トレ後すぐにハードな練習に入る。朝日レガッタをまず踏み台として自信を固める目算であった。

前年の全日本3位、関西リーグ完全優勝という実績に、同志社は朝日レガッタのエイト部門で他を大きく離しての優勝候補であった。予選、準決勝とも軽く勝ち上がったの決勝進出。誰もが同志社の優勝を信じて疑わない状況であった。

しかし、関西にすでに敵なしとの驕りが、いつのまにかクルーの胸に忍び込んでいたものであろうか、決勝ではまさかの最下位という敗北を喫する。

このショックと、ボートとは恐ろしいものだとの不安、前年度全日3位の成績から来る重圧が、クルーをじりじりと焦りに引きずり込んでいく。関選を控えて猛練習を積むが、スタートも走らず、コンスタントのリズムも出ず、前年の艇速には及びもつかぬ状況であった。

今年は、昨年よりも落ちるのではあるまいかという関係者や部員の不安が関選での中する。予選で阪大に敗れ敗者復活戦に回り、やっと勝ち上がって準決勝に進出、大市大に敗れたが二艇上がりで決勝に進む。しかしこの年の大市大は七月に戸田で行われた北米選手権派遣レースで慶応と僅差の接戦を演ずるという力を示しており、この関選決勝でもその強さを遺憾なく発揮したため、同志社は大きく水を開けられての2位と敗れた。

この状態で全日本選手権大会におもむき、前年度以上の成績をおさめることはとても見込めなかった。しかし前年度3位の実績、また翌年はメキシコ五輪代表選考の年でもあり、自信のないままの戸田遠征となった。

艇は新艇「ワイルド・ローヴァー四世」をデルタ造船所にて建造。自艇で、しかも新艇という好条件にもかかわらず艇は走らず、前年の快速はどうしても出ない。他校の偵察隊も最初は追走していたが、オックスフォード盾出漕のジュニアクルーと並漕しても見劣り、コンスタントを引いても泡が開かないありさまにあきれたように、二、三日で注目の対象から外れた。

予選は九大、法大との対戦であったがスタートで出遅れて1000メートルでは最後方、力漕して2位に食い込むが敗復回りとなる。関大、東工大との敗復でもまたスタートで遅れて1000メートルで最後方、1500でようやく先行する両艇に追いついた。あとは

脇目もふらぬがむしゃらな猛追、気がつくともっとでゴールインしており、やっとの思いで、翌日の準決勝への切符を手にした。

しかし、タイムも平凡であり、予選で最高タイムをマークした阪大、一昨年、昨年と連覇して史上最高の絶頂期を迎え三連覇をねらう早大との準決勝を勝ち上がれる可能性はきわめて低いと思われた。

だが、敗復最後尾から追走し、ラスト500から2位に約3秒の差をつけた走りを見た四方、内田は、そこにキラリと光る何かを見た。前年の実績に恥じぬ成績を残さねばならないとの重圧感が先行していたクルーが、土壇場でなりふりかまわぬ漕ぎを見せたことから、精神的なプレッシャーが艇速に影響していたことを見抜いた彼らは、その夜、クルーの一大気分転換を図る。

「驚いたことに、夕食のとき、四方監督、内田コーチから『おい、みんなビールでも呑め』ということになり、ビールが出された。誰も翌日の勝ち目などあると思っていないので、早くも残念会の宴の様相を呈し、みんな無礼講で呑んでぐっすり寝た。準決勝の日の早朝トレーニングはコースで軽く漕ぐということになり、何となく気の重いままに両艇、軽くライトパドルをやった後、突然、内田コーチが800メートルコンスタントピッチを指示。いつもの通りN・Wから入り、パドルに入ったとたん、

ウン、いつもと違う。オールが軽い。泡が開いている！

クルーも泡開きに気がつき、コックス山本突然興奮状態となる。足ケレ、足ケレと全員の声が出て、ここに来てこの年初初めての艇速を感じた。

去年のあの艇速がよみがえってくる。これが一度そうした経験を持った強みだろう。憶えていた速さを再びとり戻した同志社は強い。準決勝の相手は予選通過タイム1位の阪大、そして昨年の宿敵早大である」

スタート直前の異常な興奮の中、整調高橋は4番村井にオールさばきについて少し注意を与えたが、村井これに反発して大声を上げる。高橋もカッとなりどなりつけると村井の興奮はさらに高まって艇上どなり合いの大ゲンカとなり、その直後の号砲一発であった。両人の怒りのオールが全体の興奮を盛り上げたものか、同志社クルーのスタートは戸田の水を遠慮会釈なく打った。その結果

「それまでのもたつきぶりからは信じられないことだが、わが艇はスタートから飛び出し、1000メートルでは一艇身のリード、後半阪大に追い込まれ、抜かれるのではないかと不安があったが、隣の阪大5番鈴木君と目が合い、そのときの目線の弱さで「勝ち」を感じた。阪大の連中とは仲良くしていたが、常の鈴木君の強い目とは違っ

ていた。

結局阪大に3分の1艇身差でトップでゴール、昨年、一昨年の優勝校早大には一艇身の差をつけていた。

スタンドのOBは狂気乱舞の状態、誰一人として勝って来るなど考えておられず、1500メートルあたりで見え出したとき、1レーン（同志社）が大きく見えるのに驚き、思わずプログラムでレーンを確認したという話もあとで聞いた」

ここ一発に賭けた奇跡的な勝利であった。それだけにクルーは完全にグロッキーとなり、特に村井は壮絶なローアウト状態で、気を取り戻した後も歩くのがやっとであった。

決勝まで3時間。クルーは合宿所で氣息奄奄といった態でぶっ倒れたまま、体力の回復をはかった。もうこれ以上は戦えないという状態から、徐々に、決勝に出るからにはなんとか前年の3位以上の戦績をおさめたいという願望をクルー全員が抱き始める。

「3時間後には全員気合が入り出し、勇躍スタート地点へ。1コースの一橋大と4コースの東外大の間に名工大と同志社が入るが、スタート前、東外大から一橋に『一橋ガンバレ、関西に負けるな！』との声がかかる。その東外大のフライングでスタートやり直しとなる。我々は、ここまできたら一発狙ってやろうという気持ちになり思い切ってスタート。しかしやはり付け焼刃のスタートでは無理というもの、1000メートルではまたもや最後尾の位置であった。しかも一橋、東外大は一艇身以上前を行っている。山本君の足ケレ、足ケレが続くうち名工大を抜き始め、さらに1400メートルあたりで東外大をとらえ、スパート一発でこれも抜き去った。残るは1レーン一橋大のみ」

このときの模様を一橋大資料に見る。

「1000メートルを通過。前半飛ばして来た外語は、1000過ぎてから目に見えて落ちて行った。だが入れ替るように3コースがグングン艇足を伸ばしてきた。同志社だ。去年は準決勝に痛いところで負けたが、今年は簡単にはやられないぞ。しかしハイピッチでジリジリと追い上げてくる」

ラスト400、山本の「スパート！」の声とともに同志社猛追を開始、「手を伸ばせば届きそうなところにいる」一橋をとらえようとするすごい力漕を見せるが、一橋また必死の防戦。今一步のところで攻め込みの及ばぬまま、ゴールインであった。

「全日本初制覇は夢と散った。しかしシーズン初めから不調のどん底にあえぎ、時に

はジュニアより弱いと言われていたクルーが土壇場で息をふき返し、一勝もできないのではないかと危ぶまれた全日で連続決勝進出を果たせた喜びは大きかった。しかも前年の3位から2位へと一段階アップすることができ、レースが終わったあとは、一度も優勝の美酒に酔えなかったシーズンではあったが、満足感に浸ることができた」

同志社ボートの史上初めての連続決勝出場、全日第2位という史上最高戦績を残したこのクルーはC山本克美S高橋潔7清水正俊6武田正宏5加藤忠正4村井富雄3福益敏2塚本B宮城博であった。

なお、同志社としてはこの時点で意識もしていなかったことであるが、この全日2位という成績は日漕が提示していた翌年のメキシコ五輪への強化クルーとして指定される条件をとまっていた。これに気付いたクルーは大喜びであったが、後日、日漕の判断で、戸田で常時練習できないことを理由に指定から外されることとなった。あくまで関東主体の思想と取れるこの処置にクルーは屈辱を感じるが、この2年間好成績をおさめているとはいうものの、いまだ一度の全日優勝の実績もなく、ほんの三年ばかり前までは関西のB級との評が定着していた同志社ボートに中央がほとんど注意を払わなかったのも当然であったかもしれない。

昭和41年全日3位、42年2位のあと、43年に優勝と、そううまく行くものかどうか誰にもわからない。むろん全日を勝ちたいという気持ちは秋に編成された新クルーの誰もが持っていた。コーチが、同志社漕法を確立し植えつけた「スキルの内田」から若い石本にバトンタッチされたが、意気揚がるクルーは自主的に自らの苛酷なトレーニングを課し、「全日制覇」の夢に向かってわき目も振らぬ猛練習を続けていく。部員の「主体性」が確立されてきた時代ということができるかもしれない。「禁酒・禁煙・女人禁制」などという管理的徳目も、自然に消滅していった。監督の顔を見てあわてて煙草の火を消した部員などは監督から「人を見て消すのなら吸うな」と叱られたほどであった。前出した女子マネージャーの採用もこのころから始まっている。

部の運営、スケジュール作成はもとより、コーチ会議にも主将が参加するようになった。これによりコーチの狙いがクルーに十分浸透し、中身の濃い練習が導き出されるとともに、選手の指導陣に対する依存心が完全に払しょくされた。監督もクルーから助言を求められても結論は与えず、相談には応じながらも相手に時間をかけて納得できるまで自分で考えさせる態度に終始した。

この2年間の活躍に、OB達は色めき立ち、その支援を受けて同志社ボート部は昭和43年4月、戸田へ遠征合宿を敢行する。以後の道程を田中重次郎の手記を元にふり返

る。

「春の戸田へ初めて遠征。荒川で調整練習をするが、この時期関東クルーはすでにオリンピック強化合宿を続けており、強化レースを毎月くり返し実施している状況で、わがクルーとは気迫が違っており、完全に無視されている感が強かった。早・慶など強豪クルーは、艇を並べてもくれず、前年の全日本2位の実績など何の価値もないという関東クルーの扱いで、事実、我々もこの時点では艇を走らせる自信はまだ持ちえなかった」

これに先立つ3月23日、毎日新聞はメキシコ五輪へのJOCの選手団規模に関する結論をとり上げ、少数精鋭主義にもとづきボート、ヨット、水球についてはゼロ査定、すなわち基本的に不参加の方針であると報道した。これはJOCが2年前のグルノーブル冬季五輪に大選手団を送って惨敗、世間の強い非難を浴びたことから、ある程度の好成績をあげ得る競技に派遣の範囲をしぼろうとした結果である。3月31日のJOC総会で正式に決定されたこの方針に対して日漕は強く反発、その後討議を経て、JOC側はボートが今後選手団派遣までに精鋭主義の編成基準に達する記録を出すならば考え直すこともありうると言明した。こうした経緯の中での強化クルーたちの練習であってみれば、その真剣さに同志社クルーが驚かされたのも当然であったろう。

その後5月14日に至り、日漕は、五輪派遣条件の目標タイムを過去の統計から6位入賞のためには静水・無風のエイト2000メートルで6分05秒以内と算出した。JOCはそれを了承したわけではなかったが、ともかくもこれを目標に強化クルーの各校はしのぎを削って行くことになる。だがそうした五輪派遣をめぐる複雑な背景は、「全日初優勝」のみを悲願としている同志社クルーにとってはほとんど他人事感覚であった。

毎月行われていたタイム・トライアルには強化クルー以外のクルーも参加でき、好成績をおさめるとそれまでの強化クルーに入れかわることができるようになっていたが、6月同志社は比較的軽い気持ちでこれに参加した。この年対校としての初レースであったが、自分たち自身でも意外なほどのパワーを発揮して思いがけぬ1位の成績となり、日漕としてもやむなくこの時点で同志社を正式に強化クルーに指定する。しかしこのときは早・慶が衝突事故を起こしてレースに不参加、また続く7月のタイムトライアルでは前期試験中の練習不足で慶大に敗れ、目標タイムにも遠く及ばなかったため、同志社は五輪候補としては圏外に去ったとの印象を与え、「同志社タイムズ」においても「メキシコへの夢絶望か」と報じられている。

同志社としては五輪よりも「全日制覇」に照準を定め、7月末に行われた関選には京大に6秒もの差をつける圧勝ぶりで優勝、余勢を駆って戸田に乗り込んだ。田中の手記に見る。

「待望の全日本。予選はD組の出漕となる。A組に慶応が、メキシコ行きを決めているかのような自信ある態度でレースに向かう。日漕の条件では、6分05秒を切って優勝すれば切符が出るが、東京オリンピック以来戸田では出ていないタイムであるので、わがクルーは『日本一獲得』を唯一の目標に置いた。A組は慶応クルーが断然強く、6分06秒2のアナウンスに戸田が沸いた。本年初めての6分10秒以内の記録で、我等はこれを艇上にて聞く。2位の一橋も6分08秒4の好タイムであった。D組の我々の相手は東大と明大。関東の強豪ではあるが、本年は全く怖い相手とは思わなかった。スタートから飛び出し、記録をめざして力漕、大差でゴール。時間発表を待つ。6分02秒1。なんと強敵慶応に4秒差とは信じられない結果であった。2位東大は6分15秒2」

こうして予選において同志社はついに目標とされたタイムを上回るが、JOCは「日漕が目標タイムを6分05秒と言っても、JOCでは6分0秒を選手派遣のメドにしている」とコメントした。これにはぜひとも選手派遣を果たしたい日漕側が、何としても好記録を出したいため、各レースを追風のときを選んでスタートさせる、あるいは逆風の場合は反対の位置からスタートさせるという見栄も外聞もない手段に出たことに対する反感もあったかもしれない。しかし五輪のことなどよりも全日初制覇に燃える同志社クルーはそうしたコメントを少しも意に介さず2日目の準決勝に臨み、問題なく勝ち上がり、2位の一橋とともに決勝に進出、6月以来同じ顔ぶれでの全日決勝戦となった。

3年連続となった全日決勝への出漕。そして今度こそ勝つ可能性を十分に秘めての挑戦である。現役時代、後進育成のため自ら対校エイトを解体、アルバイトをしながら人材発掘と部の財政再建に尽くした苦勞人コーチ石本君夫は、勝利を願いつつ、このクルーの必勝パターンの指示を出す。

「スパートは1回だけ、勝負どころに来たときにやれ。1回だけやぞ！」

そして監督四方は興奮を抑えつつ、「オリンピックは忘れて、気楽にやれ」の言葉をクルーに与えた。

レースの模様を、再び田中重次郎の手記に見る。

「絶好のコンディションの中、わがクルー得意の、メインスタンド寄りの1コースである。早・慶・商互いに励まし合い、同志社だけには勝たせない、という雰囲気ガス

タートラインに漂い、わがクルー段々とファイトが沸き上がる。

スタートノ　ついに念願の全日本エイトの決勝レースを今、漕ぎ始めた。NHKのTV実況中継が放映されているのだと意識するが、わがクルー、スタートダッシュピッチ50で順調に飛び出した。コンスタントに落として500メートルを過ぎ、十分なリードを保つ。一橋、慶応の順である。両艇必死にくいさがり、700あたりではキャンパスの差まで詰めて来るが、スパートは1度だけと決めているわがクルー、コンスタントを一本一本がんばる。慶応は常とは違って必死のスパート攻勢で、1000では一橋をかわして追いつけて来る。1500メートル、まだリードを保つ。慶応もう何回目かのスパートで、1700付近でわが艇に並びかけ、互いに相手を真横ににらみながらの力漕、こちらもいよいよラストチャンスだ。『早くスパートを』と思うがコックスまだ号令しない。『早くピッチアップだノ』と思ううち、1800メートルをすぎて待ちに待った『スパートノ』がかかった。このとき慶応は並行、いや少しリードされていたかもしれない状況だった。この後は必死のスパート。ラスト200。わき目をふる余裕もない。戦況も見えぬままゴールイン。かなり良く走った感触があったが、接戦だった。『負けた』とは思わなかったが、『勝った』確信も持てないような状況だった。岸を見るとわがボート部員が『バンザイ』をしている。陸からの判断では有利な様子だ。これを見たとき、うれしさがこみ上げかけたが、正式発表までは気が気でなかった。そして

『1着、1コース……』

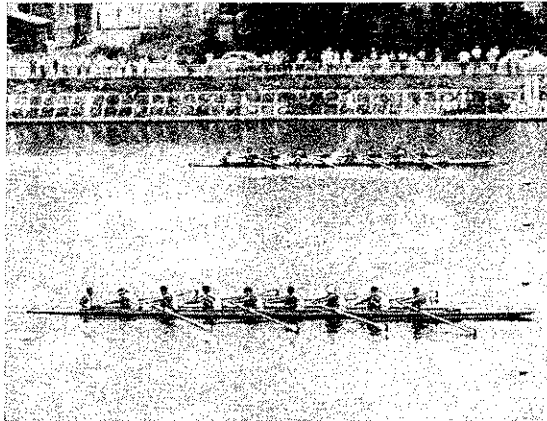
のアナウンスに、一挙に頭の中が興奮状態となった。

『6分01秒4——』

戸田のコース全体が大騒ぎである。慶応との差0.8秒。良い試合だった。敗れた慶応クルーも快く祝福してくれた。メキシコ行きは諦めていたので、十分な喜びだった」

歴史的瞬間は、このようにして訪れた。大正9年、全日本選手権大会創設以来、実に49年目にして、ボート界最高の栄誉「秩父宮杯」が関西に渡った。C山本克美S清水正俊7村井富雄6加藤忠正5宮川滋4中田二三男3田中重次郎2福益敏B新井喜範。同志社エイト史上、初めて頂点に立ったクルーである。影の立役者、主務は州浜祐一であった。

同大、76年目の初優勝



全日本エイト

目標記録上回る

五輪の追加派遣を申請へ

メキシコ・オリンピック代表選考を兼ねた全日本エイト選手権大会が、二十五日、群馬・戸田（エイト）で最終日を迎えた。

【全日本エイト】同大（向こう側）の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルー

大接戦、慶大を押える

初優勝を遂げたばかりの同大は、大接戦を演じた。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。

シングルスカル伊藤選手を派遣
シングルスカルで第一着の「一投」を奪った同大は、伊藤選手（戸田エイト）が、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。

ラストの力漕「一発」

「打倒関東」の宿願ついに

同大は、大接戦を演じた。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。



戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。

カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。戸田エイトは、同大の激しい逆上りを受け、カヌー選手でゴールインした同大社大クルーが、一着でゴールを切った。

第5章 充実——限りなき挑戦

1. メキシコ五輪へ

6分01秒4……。国内で史上第二位のこのタイムが、同志社クルーを大きな運命のいたずらに直面させることになる。8年前に東北大が記録した5分59秒6が日本最高タイムであったが、その時の追い風3メートルであったことを考えると、このタイムは日本記録にまさるものとも考えられた。

レース終了直後、日漕は緊急理事会を開き、満場一致でJOCに対しエイトの五輪派遣の申請を行うことを決定した。これまで幾度となく「エイト派遣は絶望的」とマスコミに報じられてきた末の、土壇場での目標タイム突破であり、今大会2度にわたってそれをなしとげて優勝した同志社クルーの力を、JOCとしても無視するわけにはいかない。ゼロ査定以来、エイト派遣に執念を燃やし続けてきた日漕原理事長は「この記録は立派なもの。世界レベルは5分40秒も出ているので、何位に入るとは言いきれないが、トップレベルは米・ソ・独の3国。その次くらいとは対等に戦える」と気炎を上げる。「JOCとの間で、好記録が出れば再検討すると話し合いがついている」という同理事長の強気な発言に対し、JOCから観戦に来場していた数名の委員は、好記録であることを認めつつも五輪派遣については明言を避けた。

悲願の全日制覇を果たした同志社クルーはほとんど予期しなかった五輪派遣問題に今やまともに巻き込まれ、中途半端なところに立たされて困惑するばかりだった。主将加藤は「五輪のことは余り考えず、ただ関西で初めての優勝を念じて、勝つことに努力しただけ」。主務州浜は「クラブは借金だらけで財源がないのでJOCの総会で決まったら考える」。そして監督四方は「メキシコよりも全日本に勝つことを目標とした。メキシコ行きとなればうれしいが、それはわれわれの決めることではない」との言葉を残して帰洛した。

結局翌9月2日のJOC総会でエイト派遣が決定。同志社クルーは戸田で約2週間の

調整の後メキシコへ向かう。

この五輪大会において、当初より懸念されていたことは、高地における大会ということであった。各競技の選手が早くから国内での高地トレーニングなど、馴化訓練を行っていたのに対し、ボートは最後までゼロ査定であったために、それを全く行っていなかった。もともと国内では



五輪へむけて練習

ボート訓練に適する高地がなかったが、派遣決定から出発までのわずかな期間では高地で陸上トレーニングのみを行うわけには行かなかった。

「勝敗は二の次、選手の健康面に配慮して悔いのないレースをしたい」と出発前に語っていた四方であったが、その不安は適中した。

レースコースのあるソチミルコのような二千メートル以上の高地では、酸素量は低地の3分の2となる。日常生活には影響はないが、運動競技の際にその影響は顕著となる。特に単位時間内のエネルギー消費が相撲について大きいといわれるボートには大きすぎる試練である。この大会、五輪クルーのコーチを務めた内田順己は次のようなコメントを残している。

「メキシコについて翌日、自転車で西独と豪州のエイトを追いかけていたときのことである。250メートルごとに自転車を止めてラップをとり、また追いかけるという動作をくり返しているうちに、頭が痛みだし、次いで足が重くなって、ペダルが踏みづらくなってきた。10分ほど芝生に横たわっている間になおったが、レース以前の問題として立ちはだかる目に見えない敵——『空気』をひしひしと感じた」

ここに記されている頭痛、足が重くなるというのが酸素欠乏の典型的症状である。大会前から、国内では、高地馴化には最低2週間が必要と言われていたが、少なくともボートにとってはそれは誤りであった。クルーの一人は「高地馴化には1ヶ月は最低必要だったと思う。西独その他のおもだったチームは6週間前から現地入りしてトレーニングをしていた。われわれのように、現地入り後2週間というのは、最も苦しいときのレースだった」と語っている。

予選一組に出場した同志社はよいスタートを決めたが、500あたりでペースが一気に落ち、6艇中の最後尾となる。通常1ストロークで一呼吸のところが、二呼吸必要と

なったため、クルーのリズムが乱れたのである。呼吸の困難のみならず、頭痛が襲ってくる、体が動かなくなり、足がけれない。そうした中で、何とか最下位を免れようと各員必死に前を行くメキシコ艇に迫り、死に者狂いでこれを抜く。しかし急激に余力を失い、ゴール前でメキシコのラストスパートに抜かれ、ゴールインするのがやっとという、最下位であった。タイム6分34秒79。1位西独とは30秒の差であった。

翌日、最後の望みをかけた敗者復活戦、最下位。6分44秒37。順位決定戦、最下位の12位。6分52秒02。

惨敗であった。汗と涙でボロきれのようにゴチャゴチャになりながら、クルーのだけれども、これが実力ではない、とのくやしさを噛みしめるばかりだった。

勝利者が華やかなスポットライトを浴びるのに対し、敗者はその負け方が惨めであればあるほどマスコミから無残に叩かれる。帰国後の記者会見では、矢継ぎ早なマスコミの残酷な質問に、出迎えの後輩部員が「あまり責めんでやってください。先輩たちは懸命にやったんやから」と抗議する場面もあった。高地訓練の不足や、真の実力が発揮されなかったことに理解を示す報道はほとんどなかった。

悲願の全日本エイトの優勝を関西にもたらした同志社ボート部の栄光は、わずか2ヶ月足らずの後に、こうして泥まみれにされてしまった感があった。

2. 汚名返上に燃える

帰国後まもなく翌年に備えて新クルー編成、C鈴木文治S清水正俊7村井富雄6中田二三雄5宮川滋4岡田一夫3新井善範2田中重次郎B佐々木譲、そして主務は高橋滋である。

ボート部に入部して、対校選手になりたくない者はない。ローヤーからマネージャーとなる者は、必ずや恋を失うにも似た悲哀のときを経験する。ボート部の歴史がある限り、必ずくり返される悲哀である。同志社ローイング史の数知れぬ「オールを持たないオアズマン」たちの心情を代表して、高橋は率直な手記を寄せている。

「176cm、62kgで入部したが、一年経っても66kgまでしか体重が増えず、バーベルが思うように上がらない。一年で新人KFのAクルー整調、関選、オッ盾は2番と、いいポジションを漕がせてもらったが、ついに対校には乗れなかった。

対校に乗りたかった。1ヶ月でもいい。誰かの穴埋めで1週間でもいいから、対校

に乗りたかった。同期で入った村井、清水は仕方ないが、新井、田中に負けたことがくやしかった。『俺は奴らより熱心に練習した。ウエイトは奴らに負けるが、長距離なら勝っている。200メートルインターバル走でも勝っている。ストロークは少々短い、水中スピードは速いはずだ』と自負心はあったが、監督とコーチの目からみて、対校に乗せるには貧弱だったのだろう。

一年先輩の対校のメンバーで手抜き練習をしている人を見ると無性に腹が立った。

『この人が盲腸で入院したら、俺が替わりに乗れるのに。そのときは、治って出て来ても絶対ポジションは譲らないぞ』などと当時の日記に書いたりもした。

艇を下りてからのみじめな気持ち。下りて1ヶ月ぐらい、瀬田川で練習するエイトを見られなかった。自転車で買い出しに行くときも、川岸を通らない道を走った。

監督にマネージャー業の重要性を説かれ、気持ちの切りかえができるまでに丸2ヶ月もかかった」

こうして「自分が主務になったときは必ず優勝して、自分たちの年代のマネージャー陣が称えられればよい」との目標を高橋は持った。汚名返上に燃えるクルーと監督・コーチ。そして「オールを持たないオアズマン」たちの情熱が、がっちりと同一の目標に向けられる。「全日本2連勝」。この至上目標に向かって、同志社ボート部は丸丸となって挑戦する。田中重次郎の語るように「朝日レガッタから全試合に出遭し、『全勝』を基本目標としてシーズンに臨むこととなり、新キャプテン清水を中心に全員勝ち抜くことを誓」ったのだった。

44年3月、高知遠征合宿。続いてデルタに発注していた新艇「ワイルド・ローヴァー6世」の進水式を兼ねて戸田へ遠征合宿する。関東クルーの同志社を見る目は冷たい。だが同志社無言でこれに耐える。4月、朝日レガッタ。メキシコ五輪惨敗以来初めてのこの大会で、同志社は予選から決勝まで2位以下を全く寄せつけず、他クルーを完全に蹴散らして優勝した。まさに「怒りの優勝」である。

6月、再び戸田合宿。この頃関東においては「もし慶応が出ていればメキシコであればどの惨敗はなかつただろう」という見方が一般的であった。やはり東都こそが日本のボートの中心であるという意識は、1度の優勝では改めようもなかつたのである。

「予測通りであるが、あまりに明確に関東の評価が伝わってきたため、わがクルーいっそうに2連勝の決意を固めた。同志社ボート部の名誉のため、また自分のボート人生のためにも、是が非でも全日を2連勝し、しかも大差で勝って同志社対校クルーの国内での強さを再確認させてやると決心」し、ひとまず瀬田へ帰って7月、関東に望

む。同志社エイトの強さ、日本代表クルーのレベルをここでも示すため、断然のトップを目指し、気合いを入れて参戦。まさに楽勝の連続で優勝、関西では確かな再評価を得た。

8月、この年3度目の戸田に入り、いよいよ全日直前の調整に入った。

8月12日、オーストラリア・メルボルン大学のクルーが、全日に参加すべく来日した。同志社にとって苦い思い出であるメキシコ五輪で0秒98の接戦を演じて2位となった強豪オーストラリア。そのナショナルチームに国内予選で僅差の惜敗を喫したが、この年の5月には全豪学生選手権で3連覇を達した強豪クルーである。同志社にとっては全日2連覇を阻もうとする巨大な壁となる。しかしメ大到着の報を聞いて逆に同志社クルーは身震いするほどの興奮を感じた。「去年の優勝はフロック」との風評を否定し、あの五輪惨敗が実力負けではなかったことを満天下に証明すべき、これは絶好の機会である。ここに2連覇のほかにももう一つの大目標を意識して、同志社クルーの闘志はいやが上にも高まるのだった

このころ、日漕により、一週間ごとに1000メートルの強化トライアルが行われていた。同志社も大会直前のそれに参加、他のクルーの記録を大きく上回るタイムを出し、メ大、及び関東クルーの心肝を寒からしめた。この時点でメ大監督ニコルソンは最大の強敵は同志社だと判断したという。

8月30日。全日第1日目。同志社は予選A組に出場した。対戦相手は慶応、北大、龍谷、金沢大。同志社はパワーあふれるスタートスパート、ピッチ50で20本を漕ぎ、300メートルですでに慶応以下に早くも一艇身以上のリードを取る。以後38のコンスタントピッチで進み、慶応が差を詰める度にミドルスパート10本を3度打って差を保つ。慶応がさらに半艇身差まで詰め1500までねばるが、余力を残す同志社、ラストスパー



レース前の緊張

トで簡単に水を開け、悠々とゴールイン。この強さを目のあたりにしたメ大監督と主将はショックを受け、「同志社はとても強いクルーだ。勝てないかも知れない」ともらす。五輪惨敗時のイメージしかなかった同志社の強さが予想以上であったことへの驚きの言葉だった。一方、同志社監督四方は予選C組を勝ったメ

大の漕ぎぶりを見て「腕力に頼りすぎている。決勝ではうちが1艇身以上の差をつけて勝つ」と報道関係者に予言する。

準決勝は名大、トヨタ自工という比較的軽い相手だった。同志社ほとんど力漕することなく6分20秒3。2位名大に30秒の差がついた。

そして3日目、いよいよ決勝の日を迎えた。

この年無敗の同志社。自信があった。勝てるだろう。全日2連覇ができるだろう。今こそ、堂々とソチミルコの屈辱を晴らせることだろう。同志社にとって、この大レースの前の緊張は、一抹の不安、大きな自信、言葉にならぬ感慨をともなって、一種独特なものであった。主務・高橋は言う。

「決勝戦へ出漕する対校クルーを送り出したとき、東大の前の船台で、泣けて泣けて仕方がなかった。メルボルン大学や慶応よりも数段力は上だったので、事故がない限り優勝するのはまちがいなしと思っていたが、なぜあのときあんなに涙が出たのかと、今も思う。マネージャーとしてやるべきことは全てやり、後は30分後の結果を待つのみという満足感なのか、あるいは6人乗っているメキシコ惨敗組の心のわだかまりが、これですっきり消えるという彼らへの想いなのか。遠ざかっていく対校クルーを見送りながら泣いている私の所へ、応援に来てくれていた親友の池田晃体育会委員長がやってきて、何も言わずに肩に手を置いてくれた」

昭和44年8月31日午後4時40分。戸田の水面に西陽の照り返しが眩しかった。2メートルの横風が岸の柳の枝をふるわせる。空には報道のヘリコプター数機。NHKは史上初のカラーでの移動実況中継の準備を整えた。1コースから同志社、東大、慶応、メ大、早稲田。

スタートが切られた。同志社ピッチ53の猛スパートでスルスルと他艇にリードを奪う。メ大半艇身差。400で慶応がメ大をかわして2番手に上がる。以下メ大、早大、東大。700で東大スパートして進出。慶・メ・東が激しく2番手を競り合う中、同志社1000でスパート、他艇に水を開けて再びコンスタントに落とし、余裕を持って進む。慶応しぶとく食い下がるが、1300あたりで同志社さらに差を広げる。慶応予定以上のスパートで追いつこうとするが、通じない。同志社まさに王者の貫禄を示すレース運びでゴールを目指す。最後は41のピッチで堂々たる力漕。他艇を全く寄せつけず、実力勝ちのゴールインであった。6分04秒3。2位慶応6分09秒2。3位メルボルン大6分10秒4であった。

勝つべくして勝った。そのこと自体の感激に、クルー全員が泣いた。前年優勝時「ま



ぐれ」と言われ、メキシコ派遣時は「もぐり」と言われた。そして五輪で最下位の12位に終わったとき、「それが実力だ」と言われた。それらすべての屈辱的評価を、白日のもとに、すべてはね返した。今、国内に同志社エイト以上のクルーはいない。関西はもう弱くない。関東だけのボートではない。

「早慶東商だけのボートではなくなったと言う実感が胸に強く残った」と田中は語っている。

同志社の「実力」についてはメ大監督のニ科尔ソンが次のように語り、メキシコでの屈辱を根底から晴らしてくれている。

「メキシコ五輪で日本が負けた理由の一つはこの点（現地での調整不十分）にある。まして、メキシコには高地条件があったのだから、少なくとも一ヶ月前に到着していなかったら、実力は発揮できなかった」

「(今大会において)気候の激変の影響をよく質問されるが、われわれクルーはベストコンディションで漕いだのだ。特に後半は今までにない艇速が出た。しかしわれわれの調子はベストでも、それ以上に同志社と慶応が速かった。同志社がオーストラリアへ来れば、たとえ全豪選手権には勝てなくても、学生選手権には勝てるだろう。なぜなら3連覇したわれわれを彼らは大差で負かしているのだから……」

3. 高レベルに安定

全日2連勝により関東中心の日本ボート史を一挙に書きかえた同志社であったが、その後の歩みは決して安穏なものではなかった。

この頃、高度経済成長の進展する中、学生達の気質が変化してきたことをその頃の状態を知るOBは指摘する。五輪出場がよいPRになるだろうとの予測に反し、「オリンピックに出るくらいだから練習がきついのだろう」とのイメージのためその後意外に部員獲得に苦労している。

宮田勝善は「ボート百年」の中で、「近年、大学ボートが苦しいスポーツからレジャー化し、合宿難、選手難もあろうが、大学クルーの低調ぶりは東京大会以来、タイムの上でもはっきりわかる」と語り、「大学選手は経験を積む期間に乏しくて将来性がないが、実業団は一つ工場で一年中、就業時間以外はいつも合宿しているようなものだ」と、実業団チームの将来性を予測しているが、そうした傾向が、昭和45年の関選で、一つの結果となって現れた。当然優勝候補と目された同志社は予選で東レ滋賀と対戦、敗北を喫した。東レはそのまま優勝、上記の宮田の言葉を裏付けるように、以後関西最強の社会人クルーとして躍進を始める。

同志社気を取り直しての全日本出漕、3連覇の期待がかかる。47回の歴史上唯一慶応のみがなしとげた3連覇を達成することができれば、もはや関東優位の定説は完全に粉碎できるのである。だがこの年、同志社は相次いで3名の故障者を出すという非運に見舞われた。予選北大と大接戦を演じた末、30センチの差で敗れて敗復回り、ここでも龍谷、大府大に追われて苦戦の末ようやくの思いで1位を得る。準決勝では慶応に遅れること10秒のゴールであったが2艇上がりであったためついに決勝進出を果たした。決勝ではもはや刀折れ矢尽きた状態で5位に終わったが、5年連続の全日決勝進出を度重なる不運を乗り越えて達成したクルーの精神力は称えられてよい。

昭和46年度においては、前述したメキシコ五輪後の入部者難もあって対校に2年生が5人も乗るという状態であった。しかしながら翌年のミュンヘン五輪を意識しての練習は決して妥協を許さぬ苛酷なものであった。対校クルー決定以前に行われた水俣合宿の苦しさは当時の部員のほとんどが最大の猛練習の記憶として上げるものである。また1時間ロングパドルの思い出をある者はこう語る。

「朝暗いうちから『パドル！』の号令とともに石山からスタートダッシュで飛び出す。鉄橋を越え暗い琵琶湖に出て、まだ眠っている鴨の群れに艇が突っ込むと、驚いた鴨たちが一斉にすさまじい羽音とともに舞い上がり湖面に火が燃え上がったようになる。そうやってどンドン漕いで行くとだんだん手がしびれてくる。耳なりがして、目がかすみ、なんだか分からないような精神状態になりよだれも出てくる。気が狂いそうに苦しい。それに耐えて漕いでいく。やっと1時間経ったころ、広い琵琶湖の水平線を見ると、地球の表面の形にカーブしているのが見て取れた」

こうして鍛えられた2年生たちにとって初めてのレースは4月の朝日レガッタであった。若年クルーのゆえにほとんど土手評で注目されることもなかったが、予選からレース毎にタイムを縮める快漕を見せ、決勝は3分05秒4で大府大以下をしりぞけて

見事に優勝を飾った。「勝つためには楽しいことなどない」との覚悟でさらにトレーニングに励み、夏の関選に臨む。予選で関学以下をくだし、準決勝で阪大以下に勝利。決勝での強敵は朝日レガッタで1度破っている大府大であるが全員気を引き締めてスタート、食い下がる大府大を押さえ切ってついに優勝を果たした。

勇躍東上した全日本選手権予選、同志社は2位の京大に4秒もの差をつける完勝で、この若年クルーに注目が集まった。準決勝、3番手を進んだ同志社、1700、最後のスパートにかかったところで2年生クルーの一人が足にけいれんを起こす。「足ケレ、足ケレ」のかけ声の中、激痛に耐えながらの必死のがんばりも空しく艇速落ち、第3位での入線であった。この年は現監督横山基嗣の現役最後の年であったため、その2年生部員は泣いて彼にわびたという。しかし今の横山は語る。

「私自身、4回生2人、3回生2人、2回生5人のこのクルーがどんなクルーであるかよく分かっていたつもりで、3回生、2回生が上級生になったときに日本一になってくれたらという気持ちでした」。そしてそうした長期計画的な考えから練習方法としては「基本練習、ロングと、とにかく漕ぎに漕ぎまくりました」とのことである。また、主務になり手がなく、喫茶店で泣きながら説得に応じた若菜英作、ボートへの情熱をマネージャー業に注ぎこんで成長期のクルーの精神的土台を力強く支えたことが、その後に大きな意味を持った。

またこの年、四方、内田の指導陣に同志社ボート最大の上昇期を経験した高橋潔がコーチとして参加、指導体制は鉄壁の構えを見せた。

翌47年、朝日レガッタ決勝で2位と敗れたものの2分59秒0の好タイムを記録し、また6月に行われた対京大教養戦でもジュニアが圧勝、前途への希望が見えた。しかしこの年は東レ滋賀の本格的躍進が始まった年であった。42年より全日舵手付フォアで5連勝を続けていた東レは再び関選にエイトで出漕。まだ完成までに今一步であった同志社クルーこれに敗れて2位に終わる。しかしシングルスカルの楠戸が堂々の優勝を飾り、瀬田川杯はジュニアが圧勝、伸びゆく同志社ボートの姿を湖面にはっきりと示した。

全日本選手権、完成途上の対抗クルーに対し関東の壁はさすがに厚く、予選で東大、中央大に先着を許した後、敗復でやっと勝ち上がり、準決勝では前半のリードも及ばず再び東大に敗退した。東レは予選より圧勝の連続で、決勝でも2位早大に5秒7もの差をつけて勝ち、全日史上50年目にして実業団が初優勝をおさめた。

対校の決勝進出はならなかったが、この年前評判の高かった同志社ジュニアの活躍

目覚ましく、オックスフォード盾レガッタにおいて予選、準決勝と危なげなく勝ち進み、決勝でも北大以下をねじふせて同レガッタ初優勝を果たした。クルーはC西村(花森)辰夫S湊良三7 梅田雅昌6 小松研一5 佐藤和弘4 畠敏3 宮地信行2 植野誠之B坂本雄二であった。

続く昭和48年、朝日レガッタは2位と出足は今一つであったが、6月の中日本レガッタで強豪日大をわずか5センチという大接戦の末破ってから躍進の気運を見せる。

この年の関選は琵琶湖の大渇水により水位がマイナス30数センチに減水、艇のキールが浅瀬をこするという悪条件となったため、急ぎコースを1500メートルの曲線コースに変更して行われた。この関選には韓国選手団が来漕。中でもエイト出漕の海軍士官学校クルーは体格もよく、洗練された強豪クルーであったが、同志社昭和45年以来の長期計画の成果を十二分に発揮、2位のこのクルーに9秒差をつけての圧勝で優勝した。

当時日漕はエイトにおいては世界とのレベルの差が大きすぎるため小艇主義を打ち出していたが、同志社は経済的な面からもこれに同調できず、ほぼエイト一本に打ち込んでいた。このためこの48年の全日本当時には「エイトの同志社」と呼ばれるに至っていたが、その完成度の高さにより、大会前よりすでに「実力ナンバーワン」の聲が高かった。おおかたの予想どおり予選はベストタイムで通過、だが続く準決勝で思わぬアクシデントが発生する。スタートの第1本目を引いた瞬間、整調湊の右肩に激痛が走る。肉ばなれであった。このため同志社辛うじて他艇をリードして進むが、明大の食い下がりにあい、苦しい展開となる。明大徐々に差を詰め、1000あたりでは危うく見える場面を迎えたが、ここで同志社必死に応戦、リードを守り抜き決勝進出を確保した。

決勝前になっても湊の肩はさほど良化せず勝敗の行方は予断をゆるさぬ状況となった。整調の故障を気遣いつつ不安な面持ちの対校クルーの前でオックスフォード盾レガッタ決勝が行われる。

予選、茨城艇友会に3秒1差、準決勝ではゴール前クルーの一人が腹切り落水のアクシデントがありながら明大に8秒7差と完勝の連続で決勝に駒を進めた同志社ジュニアクルー、決勝では早大理工Aにリードを許しての追漕の展開となる。1000を過ぎ、早大疲れを見せ始めたころから同志社急漕してトップに躍り出、ぐんぐんと他艇を引き離す。追いすがる強力クルーもなく楽勝のゴールインで、見事にオッ盾史上3度目の2連覇を決めた。

ジュニアクルーのこの活躍を目のあたりに見た同志社対校エイト、奮起一番、全日本決勝のスタートラインにつく。

だが整調の故障が影響して同志社出遅れ、逆に猛然たるダッシュで先頭を切ったのは公式参加の韓国海軍士官学校クルーであった。第2位の予選通過タイムをもつ海士クルーゆるめることなくトップを守り、続いて日大、同志社、北大の順のまますでにコース半ばまでに達したとき、関係者のだれもが同志社危うしを感じた。快調に逃げる海士クルー。だが日本の各艇がそれぞれ1000をめどにしていたかのようにミドルスパートに入ると、序盤からの猛スパートの疲れからか海士クルーの艇足伸びず、日、同、北、相前後して海士クルーを追い抜き、1500付近でついに3艇横一線の状態となった。俄然、緊迫感がコース全面にみなぎる。互いに1キャンバス以内での激しく長い競り合い。一漕ごとに湊の右肩を激痛が襲った。ともすれば崩れようとするペースをクルー全員で支えて、同志社ようやくわずかに出る。だが日大、北大落ちることなくしぶとくからむ。地獄のような戦いに同志社気力をふりしぼって耐えた。そのままゴールイン。

苦しみ抜いてハンディを克服した3度目の全日制覇は、ジュニアのオッ盾優勝と重なる輝かしいダブル優勝の達成でもあった。ダブル優勝は10年前に東大がなしとげて以来、史上2度目の快挙である。この大会、対校クルーはC長友清利S湊良三7山本晃弘6上田達彦5山形彰人4中村喜光3鎌田博2畠敏B梅田雅昌。ジュニアクルーはC中野貴夫S小松研一7坂本雄二6早川勝5佐藤和弘4山口忠博3矢島正恒2武尾豊B寄藤辰夫であった。

選手層の厚くなった同志社は翌昭和49年も好調を持続、活躍が期待された。新クルーは平均身長180センチ、平均体重80キロという、メキシコ五輪のとき（179センチ、

75キロ）よりも一回り大型となり、トレーニングも足腰の鍛練を徹底的に行って万全の態勢でシーズンに臨む。しかしながらこの年は、レース以前の問題で実力の発揮を妨げられる1年となった。

まず4月の朝日レガッタ。優勝候補と目されながら、準決勝スタート前、強風による波のため艇が浸水、



全日本ダブル優勝の快挙

沈没して大破、棄権を余儀なくされた。関選では決勝で京大以下をくだして前年に続き連続優勝を果たすが、注目された世界選手権大会への日本選抜クルーとの対戦は、同クルーの艇の浸水によるレース放棄のため実現しなかった。

またこの年より全日本選手権と別にもうけられた全日本大学選手権（インカレ）に出走した同志社は、優勝候補とされながら、準決勝で慶応以下をくだした後、台風によるコースの堤防崩壊により、大会そのものが中止ということになった。ジュニアもこの年健闘、オッ盾予選千葉大に敗れたが敗者復活戦中央大以下に勝ち復活。準決勝、暴風の中での戦いに福島大以下をくだして見事に決勝進出を決め、クルーの意気大いに上がったところでの中止決定であった。対校もジュニアもふっ切れぬままシーズン終わりとなったこの日の夜、ジュニアの一員荻野義明、マネージャーになるよう通告を受け、男泣きに泣いた。

11月行われた全日本選手権大会には新クルーで臨み、やっと満足のいく状態でレースを最後まで行うことができ、東レ滋賀、日大に次いで3位であったがよくその実力を示した。

昭和50年、前年全日3位のメンバーをそのまま残す同志社は朝日レガッタで抜群の優勝候補と目される。続いて遠来の東北大、鹿児島大という評価であったが、同志社予選において早くも3分0秒8の好タイムで鹿児島大を一蹴、準決勝でも龍谷大以下をくだし堂々決勝進出を決めた。しかし関西まで初遠征して来るほどに自信のあった東北大の充実ぶりもすばらしいものがあり、決勝ではスタートから両校のデッドヒートとなる。同志社闘志満々の力漕であったが、200付近より東北大じりじりと進出、同志社必死で追漕するも及ばず、1艇身の差で敗北を喫した。

くやしさを胸に、同志社クルー気を引き締めて関選への猛トレーニングを積むが、ここで東レ滋賀の堅い壁に突き当たる。予選、早くも東レとの顔合わせで1艇身差に葬られ、敗復で復活、準決勝京大以下を破って決勝に進出するが、再び東レに2艇身強の差で楽勝を許し準優勝にとどまった。

8月末のインカレ、同志社最大の敵は東北大との意識をもち勇躍出漕、予選で大市大以下、準決勝で東工大以下をくだして決勝に進出、予想どおり東北大との顔合わせとなりクルー全員雪辱の闘志を燃やして全力でぶつかるが、7秒もの差でしりぞけられ、また立命大にも先着を許して第3位に終わった。この年、決勝は京大、同志社、東北大、立命大の間で行われ、史上初めて関東勢が1校も加わらぬ決勝となっている。11月の全日本では準決勝で東レ滋賀、早大に敗れて決勝進出はならなかった。インカ

レ3位の好成績を残しながらまさに勝つことの難しさを知らされた1年であった。昭和51年度の同志社ボートはさらに落ち込みを見せる。朝日レガッタ予選5位、関選では決勝に進出したものの東レ滋賀、およびこの年充実の立命大に次ぐ3位であった。救いは瀬田川杯においてC永坂隆明S藤井浩7高橋正樹6城生清孝5水野正成4木村俊雄3桑田郁男2幸田龍一B村田市郎の新人クルーがよく健闘、優勝を果たしたことであった。インカレでは準決勝で4位と敗退。この大会では関東の強豪をしりぞけて立命大が優勝を飾り、関西の意気を示した。この昭和51年をもって四方久男は監督を引退、後任に杉本茂雄が就いた。

52年はコーチに州浜祐一も加わり、新監督のもと、落ち込みからの脱出がはかられた。部員はキャプテン桶田英俊のもとに自主的な努力と創意、工夫を重ねていく。例えばこのころ、だれもが何かで「一番」になることが課せられた。短距離走でもよい。ウエイトリフティングでもよい。その他ボートと直接関係のないことでもおよそ有意義なことであれば何でもよいから部内で自分が一番といえるものを全員が持とうということであった。まず全員が自信を取り戻すことから始め、個性と主体性を尊重する空気を互いに作っていこうという狙いであった。

第30回の記念大会となった朝日レガッタには関東から早大と慶大が招待され、春先の早慶レガッタで勝っている早大が優勝候補として注目されるとともに、関西では前年のインカレ優勝校立命大が有望と予想された。こうした中、本来リズム漕法のため風雨を苦手とする同志社クルー、悪天候に悩まされながらどうにか決勝に勝ち上がる。その最終日、天候は快晴、微風であった。その静かな湖面を見て、クルーはこれなら勝てる、と感じた。決勝の相手は予想どおりの早大を含む5クルーである。

スタートは関学と同志社、早大の3艇が素早く飛び出したが、200からは同志社と



昭和52年朝日レガッタ優勝

早大が抜け出し、早くも一騎打ちの様相を呈する。両艇ほぼ同じペースで進むが、コースを知り尽くしている同志社、700過ぎでいちはやくスパート。キャンパス差のリードを奪うとそのままゆるむことなく一気に逃げ切ってゴールイン、頭脳的なレースで早大をおさえ、見事に優勝を飾った。クルーはC永坂隆明S石鍋寿寛

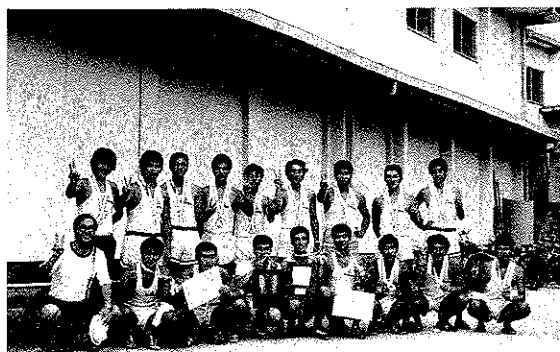
7 石鍋寿明 6 小笠原司 5 城生清孝 4 小関隆一 3 桑田郁男 2 藤井浩 B 桶田英俊であった。

ダークホース的な評価から電撃プレーで幸先よいシーズンスタートを切った同志社、さらに結束を強めながら6月中日本レガッタに出漕。これは関東の今年の力を見る意味もあった。決勝で一橋大、中央大に次ぐ3位に終わったが、中央大とはコンマ差であった。

主将桶田によると、この年は前年インカレ優勝の立命大だけをマークして練習計画を立てていけばよいので、その点では楽であったという。同志社その立命大と関東決勝で対戦、大接戦の末0秒2の僅差でこれをおさえきり、3年ぶりの関東制覇となった。クルーはC永坂隆明S石鍋寿寛7城生清孝6小笠原司5石鍋寿明4吉川義弘3水野正成2木村俊雄B桶田英俊であった。同志社ジュニア・クルーもよく健闘し、若々しい力漕ぶりを示して見事に瀬田川杯優勝、ダブル優勝となった。同志社クルーこの後戸田に遠征、インカレに出漕し決勝進出を果たしたが、1位東大のほか、6月の中日本レガッタと同様中央大、一橋大に先着されて4位の成績であった。

昭和53年は再び不振の年となり、朝日レガッタ4位、関東3位、全日は予選で4位敗退するという不本意な戦績に終わる。ただジュニアがオックスフォード盾レガッタで2位と健闘したのが翌年への期待を抱かせた。

その54年、朝日レガッタは日大に惜敗して2位となり、関東においてはまたもや東レ滋賀に10秒近い大差をもって敗れ準優勝に甘んじるが、それから徐々に調子を上げてのインカレ出漕となった。予選で京大以下を破って進出した準決勝で、同志社6分04秒81の好タイムで鳥取大以下をくだし一挙に注目を浴びる。期待された決勝、スタートで飛び出した東北大を追う展開となり、東北大のスピードに徐々に離されて1500付近では水を開けられるが、同志社ここから猛追、やや疲れを見せる東北大にぐんぐん迫る。しかし東北大のがんばりも素晴らしく、同志社3分の2艇身まで迫ったところでゴールであった。6分04秒26というタイムを記録したが、東北大に6分02秒フラットで漕がれてはいかんともしようがなかった。



関東ダブル優勝

翌日の全日本、同志社東レを押さえきる力強さをみせるが、東大、東

北大に続いての3位であった。インカレ2位、全日3位の好成績をおさめたこの年のクルーC坂井俊夫S城生清孝7根木寛明6池谷晋5石鍋寿明4杉木英男3細見博2小関隆一B水野正成であった。

4. 「断絶」との戦い

昭和55年のクルーは、前年の強力なクルーなどと比較すると明らかに非力と思われた。自己をアピールする力も弱く、不安を抱かせるものであったが、ボートへの情熱と自尊心は強く、このため指導陣との間にさまざまな軋轢を生じた。コーチを見返してやろうとの意気込みで臨んだ朝日レガッタで惨敗の後、関選へ向けての練習中、クルー編成に関しても指導陣との間にトラブルがあり、曲折を経てレースに出漕するが、準決勝で京大に10数秒もの差をつけられる大敗ぶりであった。

このままじめな形でボートにかけた4年間を終わることには耐えられない。部員のだれもがそう思ったが、現実はそのまでの戦績が示すとおりのものであった。ここから抜け出せる可能性は結局練習以外に求められない。伝統の1時間パドルをこえる「100分間パドル」、10キロ走後のスリージャンプ300回など、およそ考えられる最大の苦痛を求めてクレイジーなトレーニングを敢行した後、最後のチャンスにかけて例年より早く戸田に入り、ここでも必死の猛練習を積み重ねる。前年に比べて見劣る対校で勝てる見込みは薄いかもしれないが、夢中で最大限の努力を行ったという記憶によってしか、救われる道がないという思いであった。

予選、対戦相手は早大、立命大、関学。立命大と関学には関選のときのタイムで負けているが、手の内を知り尽くしていることでは気が楽であった。少なくとも予選から優勝候補の東北大や東大と当たらなかったことは幸運としなければならない。

波の高かった関選とちがい、戸田で、しかも全国レベルの戦いとなれば他の関西勢には負けられないという気持ちも強かった。いずれにせよ、あとがないとの切羽詰まった気持ちに追い立てられるように無我夢中でクルーは漕いだ。1位だった。

そして準決勝、相手は一橋大、東北大、北大、京大。決勝へは2艇上がりだが、どの1校にも勝つことは容易でない。一橋大は名門、東北大は優勝候補、京大には関選で10数秒も負けている。北大も強豪である。

だが、決勝に進出したい、インカレ決勝に出たという思い出を最後に作りたいとい

う願望が悲観を凌駕した。好スタートから一気にトップに立つ。東北大が並んでくる。京大、北大も飛ばす。予選とはさすがに全く違うハイペースだが、同志社このときだけは何かが乗りうつったような今期最高の走りを見せた。落ちるところか東北大を終始苦しみ、6分15秒88、わずか0.9秒差の2着で決勝進出を果たしたのだった。決勝では6分23秒86と力尽き、東北大から10秒近く遅れる4位だったが、それだけこの準決勝の好漕はメンタルなものが大きく作用した結果として特筆されるべきである。クルーはC坂井俊夫S吉田寛伸7池谷晋6目片雅喜5杉木英男4武田泰一3荒山元秀2阿部和久B林田尚之であった。

「優勝」の2文字には無縁かと思われたこの年、土壇場でジュニアが大活躍を見せた。オックスフォード盾のくじ運よく予選準決勝と快調に勝ち進んだ同志社、決勝では連覇をねらう東大、その年ピークを迎えた京大などとの対戦となった。当時のクルーはレースの模様をふりかえる。

「『よーい、ローノ』の合図とともに入った、スタート3本からのスタートスパートで、私たちのクルーは見事なほどトップスピードに乗ることができた。東大クルーも京大クルーも止まって見えた。300付近でコンスタントピッチにセトルダウンしたとき、東大クルーのミドルペアの背中が視界に入るようになっていた。京大クルーは遠くに、その紺色のユニフォームを確認できた。……1000付近から東大はピッチを上げ始めた。彼らの艇からスピード感は感じられなかったが、確実なストロークで追い上げ始めてきた。しかし私たちは私たちのクルーを信じていた。あわてず、1本1本ていねいなオールを引いた。1200付近から、私たちのクルーもCOXの声で要所要所に足蹴りを入れた。クィノクィノと艇が確実に伸びた。東大クルーのCOXも必死に声を発していた。1800付近から私たちクルーはラストスパートに入った。あとは夢中だった」

6分31秒26。東大に半艇身差をつけての優勝だった。クルーはC和田学S野瀬正治7久保智之6林圭介5河毛樹4前谷浩3永野巖2小森進治B細見博であった。

指導人とのトラブルを経て、どん底の精神状態から最後にはいあがることができたとき、すでにこだわりはなかった。ある部員はこのオッ盾優勝のとき、「コーチが泣いてくれたのがうれしかった」と語る。

しかしこの年にその予兆が見られたように、高度成長のさなか、世代間の断絶は徐々に顕著になっていく。互いに勝ちたい一心で邁進しながら、指導者と「共通一次世代」の部員との間の感覚のズレはやがて決定的な局面を迎えることになる。昭和46年以来コーチを努め、昭和56監督となった高橋潔は、その長い指導歴をふりかえり、「このあ

たりから、学生のもの考え方がはっきりと変わってきた」と語る。

昭和56、57年と同志社ボートは見るべき戦績もなく終わる。戦績のはかばかしくなるとき部員がコーチを批判することは、昔からこの大学でも繰り返されてきたことであるが、このときの一部同志社ボート部員と指導陣との間の問題はさらに複雑化した。このため監督高橋、コーチ城生、いさぎよく辞任。

「昔はコーチや監督と意見が合わなくて大量退部ということがあったが、いつのまにか時代が変わって立場が逆転していたんですね」と高橋は当時を振り返って苦笑する。だが指導陣が退陣するとまでは予期しなかった部員たちは混乱、折あしく練習中の部員のけが、また部員家族の不幸などが相次ぎ、事態はさらに悪化した。指導陣退陣に反対の部員もあり、新監督、コーチの招請された後、彼らの大量退部の事態に至る。

「一艇ありて一人なし」のボート部において、ひと度統一を欠いたことの影響は大きかった。新指導陣、監督新井喜範、対校コーチ坂本雄二、二軍コーチ荻野義明らが心血をそそぐ中、再建には予想外の時日を要し、王者同志社にふさわしい戦績を出すには至らず、その間、昭和61年、20年近くもの長期にわたって部長として瀬田の若者に慈愛をそそいできた出石邦保の逝去をみた。新部長には岡本博公が就任した。

5. 新生なる

戦績的には見るべきものを残せなかった部員たちも、この苦しい再建期に立派な同志社オアズメンとしての努力の足跡を残した。「無念の5位」「惨敗」「またも準決敗退」などの見出しで埋めつくされた当時の「力漕」誌上には、同時にこの間猛トレに耐えた経験、アルバイトの奮戦記、新人勧誘の無差別電話攻撃での失敗談などが明るく綴られ、復活への希望が常に色濃くただよっている。昭和60年創設の関々同立レガッタにも積極的に対応しつつ、戦力も徐々に回復。昭和62年には関選決勝においてほぼ勝利の確信を持てるレース展開となるが、シートがはずれるアクシデントで敗退した。しかし63年瀬田川杯をC功力英俊S畠山尚弥⑦吉田拓生⑥乾健治⑤大竹宏④重松健一③田中隆一②榊原雅也B前田崇のクルーで優勝するなど、どうにか再建なったとの認識を得るにいたった監督新井は年号改まった平成元年、新監督横山基嗣へバトンタッチ。コーチには中村俊裕がついた。この機会に艇とオールを新調、復活への条件はついに整った。

シーズン開幕の朝日レガッタ決勝で漁船の波をかぶって艇が止まるというアクシデントを克服しての3位入賞。くやしさを胸に閑選へと駒を進める。

閑選予選。やや硬さの見られた同志社クルー、閑大にリードを許し、コンスタントも思うように伸びない苦しい展開から足蹴りの連発とラスト300のスパートで閑大を抜き、半艇身差で勝ち上がる。

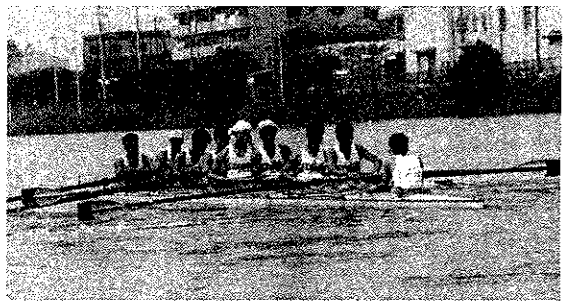
準決勝。追い込み型のクルーには不慣れな先頭を切る展開となり、とまどう。コンスタントが伸びず他艇に追いつかれるが、苦しみながらリードを守り抜いた。

そして2時間後の決勝。飛び出したのは京大だった。同志社これに半艇身差でつけ、コンスタントで必死に追い上げるが差が縮まらない。ラスト300でスパート、ゴール近くなってやっと並ぶが京大も必死で応戦。同志社夢にまで見た「優勝」の2文字への執念でまさに渾身の力をふりしぼったダブルスパート、ついにリードを奪いそのままゴール。実に12年ぶりの閑選制覇。C功力英俊S田中隆一7 吉田拓生6 坂本龍一5 佐藤将人4 宮崎寿春3 西田利彦2 榊原雅也B三上和彦。待ちに待った復活のクルーであった。

インカレでは予選、準決勝と順調に勝ち進んで9年ぶりの決勝進出。決勝では4位ながら6分1秒の高水準のタイムを出し、東都にも同志社復活を印象づけた。翌日の全日本出漕は10年ぶりであったが、同志社臆することなく挑戦。台風による荒天の中で4位と健闘した。

翌平成2年、閑選で東レに次いで2位の後、インカレ準決勝、閑選では先着した京大に逆転され、決勝を目前にして進出をはばまれた。

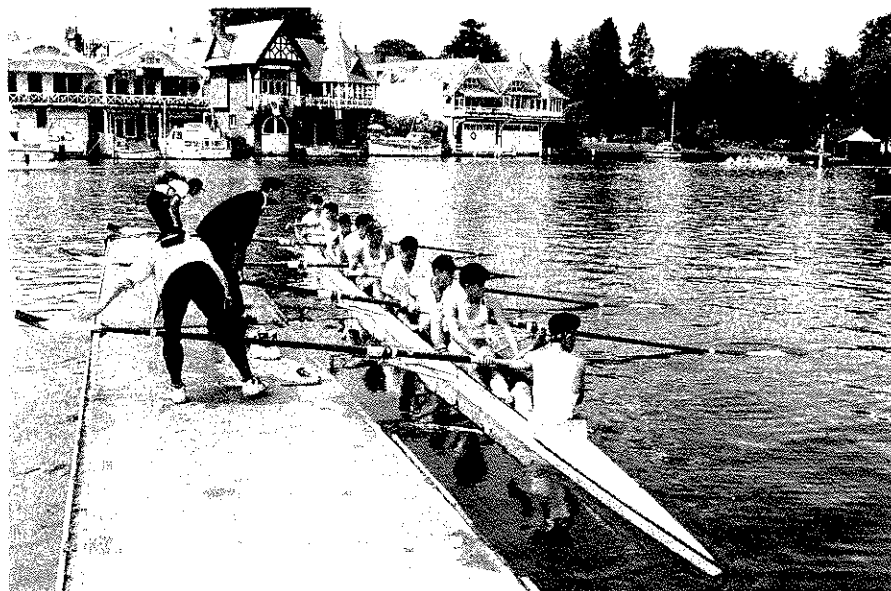
平成3年7月、100周年を記念して同志社大学ボート部は英国ヘンリー・レガッタに出漕した。ロンドンの名門クラブチーム「ロンドン・ローイング・クラブ」と対戦。果敢に先行したが、本場の迫力あるローイングに逆転され、2艇身3分の2差で屈した。創部100年にして初めてテ



閑選優勝のクルー

ームズの水に舞った濃淡青色。いつの日か最強のオールとすることを、このときすべての同志社オアズメンが心に誓った。200年へ再スタートの第1 ページは、こうして世界への闘志で彩られている。

(通史了)



ヘンリー・レガッタに初遠征

OB寄稿

「私にとっての同志社ローイング」

S2 荒木節郎

○「鳩の歌」

天津風・時津風の2新艇が琵琶湖上にスマートな姿を浮べたのは大正11年4月。秋の慶応大との第1回定期戦に正式なコーチもなく我武者羅な超猛訓練が続いた。大丸書肆で買った『コンプリート・オアズマン』と首っ引き、各々の分坦ページを翻訳しそれをつなぎ合せオールさばきを会得しようという涙ぐましい努力は長くは続かなかった。合宿から烏丸キャンパスの通学生活もやがて盛夏を迎え決戦の日がだんだん迫ってくる。そして全学の熱い応援と期待に応えんものと必死の猛練習を続ける中、ついに強敵慶応の西下軍は瀬田に至った。

当日天気晴朗、両艇軽い交歓のあと揃って鉄橋下に艇を並べ石山下迄4マイルの瀬田コースを矢のように滑り出した。必勝の覚悟の我クルーは2コースの敵を横目に漕ぎに漕いだ。力のあらん限り力漕して全力を尽したが、結果は一日の長ある慶応に勝ちを譲り、大方の声援に報い得ず万斛の涙を吞んだ。この定期戦は翌12年の関東大震災のため1回限りで中絶した。

追加

歴史的なこの一戦に出場せし選手9名の内生存者は5、大町、6、市田、5、荒木の3名に留る。(平成元年12月)

この写真は、大町、荒木、市田の手許に保存。

鳩の歌 (にほの秋)

艇は出てゆく旗高く

クロバの影が長く曳く

クロバの影が長く曳く……

○初めて隅田川にクロバの艇旗を掲げた思い出。大正13年(震災翌年)5月、漕艇界復興のため举行された漕艇大会に舵手付フォア戦に出漕し、1日目2度の予選を通過し第2日目決勝に一橋漕艇クラブと相見え、力漕せしも準優勝に終わる。この東京遠征は前々年対京大戦に来漕し同志社の対慶応戦を観戦、その後我々と交流をもった東大がしきりに声をかけてくれたため、さして自信もないままに参加したもので、それにしては上出来の戦績であったと思う。決勝戦後一橋クルーが我々を艇庫に誘うので一同赴くと、優勝カップにビールをなみなみと注ぎ、まず同志社からこの杯を干し給えとのこと。全員感激して回し吞んだことは忘れられない。また卒業後、勤務地の天津で当時の一橋コックス鶴飼氏と邂逅、楽しく一夕を過ごすという奇遇もあった。70年の昔、思い出は夢のように煙る。

○部歌「恋をかこつ」の作詞者は淡路周航時の主将渡辺勇氏、作曲者はおそらく顔の広かった同氏の知己であつたろうと思われる大中寅雄という方です。

S3 坂野公夫

○同志社のボート史と同志社大学のボート史

同志社のボートの歴史は古い。明治24年頃から発足し、当時は大学は無かった。同志社中学には大正年代に入って固定席の6人漕のボートを6艇常備して春の水上大会は全同志社を挙げて毎年举行されていた。

同志社大学漕艇部は大正になって発足したので当初は中学の艇を共用していた。同志社

大学漕艇部として初めて大正11年にスライディング式のエイト2艇、ペアー2艇、スカール1艇を持ってスタートしたのである。

○スライディングの始まり

大正11年

エイト 天津風、時津風 2艇

カジ付ペアー 2艇

スカール 1艇

従来はフィックス6艇をオール同志社で使用

(参考)

○大正8年夏休暇に同志社大学ボート部は固定席6人漕の艇(クリンカービルト)にて淡路島一周に成功し、当時の新聞紙上を賑わした。琵琶湖より乗艇し、三井寺下より疎水に入り京都岡崎にあるインクラインより市内の疎水に移り、伏見より淀川を下り大阪湾に出るのである。コースは明石海峡より島の瀬戸内海側に出、鳴戸の渦を漕ぎ抜け大阪湾に入った。

当時としては初めての企画であり冒険的に見られていたが、見事大成功で同志社大学ボートの存在を世に知らしめたのである。

○成績

大正13年の全日本レガッタで一橋クルーに敗れたが、フォアで準優勝、大正15年に明治神宮レースで日大クルーと競いフォアの優勝をなした。関西では朝日レガッタ(大阪堂島川コース。固定席)で優勝し大学漕艇部スライディング式の艇へ移行の黎明期を飾った。以後は徹底したエイト中心主義……。

S3 愛敬元成

○大正14年高商入学。同年スカーリングクラブの瀬戸内海縦断が安井先輩や大町先輩たちによって成功されたのに刺激されて、大正15年ごろ同クラブに入会しました。卒業後は勤務地が門司から横浜に変わったので同志社関東艇友会に入会しました。

S6 増本茂

○全国同志社瀬田川大会で6人乗りのフィックスでバウをこいだのがボート愛好のスタートです。全同志社のスカール瀬戸内海コース出漕の時代で、大阪造幣局前の淀川コースは自分の活動時代です。明治神宮大会で猿丸兄弟や室原君らと雪をユニフォームの背中に受けての活動でした。かの陸上の人見絹枝さん等とダブルに乗り当時のオリンピックに出場した女子選手等と活動しました。

最近は大毎を母体とするKRC(関西ローイング)の赤いバッヂをなつかしく手に触れて居ます。昭和2年に北アルプスにテントをかついで槍にのぼり「日本山岳会」会員として60有余年、こんな小生も86年に心筋梗塞で倒れ9ヶ月間入院で目下通院中です。諸兄の御活躍を祈ります。

S7 片岡与三郎

○練習は長く

勝負は一瞬で決る
練習中自然の中で
浩然の気を養ふ事が
出来る

S10 樋口明

○神田重太郎主将の時代。昭和3年より昭和6年。

神田さんは人見さん（コーチ）の誘いで入部。翌年入部した小生とストロークペアを組み、インターカレッジ・フォア優勝。C志賀S神田3樋口2小島B清田。人見コーチは大正15年明治神宮大会で全国優勝したフォアのコックス。このフォアを私は同中の瀬田ボートレースのときに見た。鮎川整調のリズムのよさ、コックスの美声は後日私をエイトに駆り立てて行った。この人見コーチに神田さんはローイング精神と選手養成、必勝の精神を学んだと思う。翌年神戸外人団とのレースにはC酒井S神田3樋口2久木B西尾で臨んで勝利。翌年隅田川での対明大定期戦、C酒井S神田7樋口6久木5西尾4河村3小牧2小島B清田のわがクルーは東大の東氏のコーチを受け、商大の艇を借りて臨み、大接戦の末カンパス差で勝利した。この頃が神田主将の最も輝かしいときであり、有終館の前で全校生徒の祝福を受けた。

神田さんはよく太った金太郎。毛深く、頭は丸刈り。気は優しく力持ちで、腰の強いことは抜群であった。当時京大には近藤勇と自称しユニフォームの背中に「寄らば斬る」と墨書して唐橋を闊歩する者があり、私たちペアも神田さんは「必勝」、私は「オール諸共死なん」と背中に書いたものだった。これも精神集中の一方法だったのかもしれない。

神田さんは人の世話をよくした。外見は明朗そのもので人に好感を与えたが、実際は両親を早く失い、兄の手で育った苦勞人。両親のいるお前がうらやましいと私に一言ボツリともらしたことがあった。フォアの練習を終え、オールを休めて肩越しに見る比叡の落日は真っ赤で、神秘そのものだった。その夕日に誘われたかのように神田さんは英文科卒業後渡満。その地で没されたとのことである。

ブレードデザインをツートンカラーにしたのは私の発案。次の明大戦より実施した。

S12 内藤謙二

○私にとって最も思い出深いのは昭和8年の隈田川東武鉄橋、白髪橋上流3,000メートルの対明大戦である。途中カーブで敵が我が方コースを侵犯、ブレードが敵艇に入り込み交錯し、3本折れてしまった。オールを他校から借りて再レースに臨んだがワンカンパスの僅差で惜敗、敵の汚さに激怒した。関東勢のたくましさ、関西のひ弱さを痛感させられた。夜の懇親会で山辺キャプテン「敗軍の将は兵を語らず」の一言の挨拶だけ。当時の漕友高橋君が艇友会長であるのは最高、心強い限りと思う。

S13 乾正治

○私の部屋の壁に一枚のエイト練習の写真が掛けてある。縦290ミリ横240ミリに伸ばした白黒のものだが、なにぶん半世紀余り経っているので隅の方は薄茶色に変色している。しかし、私にとっては青春の思い出にあふれた貴重な一枚である。

考えてみるとこの写真は私から一度も離れたことがなかった。学生時代の下宿から同居

が始まり、卒業後就職して川崎や東京、また転勤で遠く北九州や福岡のアパートや下宿でもずっと一緒だった。戦争中静岡での空襲による火災にも幸いにして難を免れ、その後富士や郷里などをしばらく転々として今、手元に安住している次第である。

昭和何年かはっきりしないが、クルーはC松川、S高橋宗、7円尾（故人）、6小生（主）5平井、4千葉、3神谷、2柴田、B山村（故人）（敬称略）で艇は『くろがね』場所は瀬田川である。ちょうどキャッチの直後でSのブレードが2番の残した泡の外輪をつかんでいるので艇速はよく出ていると思う。

この写真を眺めながら当時のことを思いつくままに綴ってみよう。

○艇について

使用艇の『くろがね』はその名の通り外側の塗装はマホガニーで黒っぽく最近の艇より長さ重さ共にひとまわり大きく重くその名の由来は「守るも攻めるもくろがねの」といったかつての軍艦マーチの一節からとったのではないかと自分なりに考えている。

底部はV型に近く安定に欠けると言われていたが、慣れればバランスはとりにくいほどでもなかった。重いので向い風に有利で、惰力がつけば艇速は伸びる。ストレッチャーはかかとの当る部分が金属製なのでバックスキンの特注の短靴を履いた。

○艇庫について

場所は唐橋東詰を川に沿って100メートルほど上った地点で木造平屋建てであった。隣に旧制同志社高商艇庫、その手前に京都ローイングクラブのスカールの艇庫があった。ところで、昭和9年の例の室戸台風の猛威は東海道線瀬田川鉄橋を通過中の貨物列車を鉄橋上に横転させ、前年新築した艇庫はひとたまりもなく倒壊し、全部員で後片付けに何日か費した。

旧制京都帝大と三高・龍谷大、遅れて立命館大の艇庫は共に唐橋西詰の下流にあったが、後に帝大が鉄筋で屋上に観覧席を設けた瀬田川随一の艇庫を建てたのを羨望の眼で眺めたものだった。

○合宿所について

艇庫に付属していないのでその近所で網定所有の空いている旅館をよく借りた。現在東レの艇庫辺にあった旅館の二階は川の眺めもよく、なかなか快適だった。風呂は町の銭湯で土地の漁師の子供達と仲良くはいった。合宿所の所在地は当時、栗太郡瀬田町橋本と呼んだ。

○コースについて

東海道線瀬田川鉄橋がスタート、唐橋をくぐり蛭谷まで2000メートル。カーブは唐橋までに一カ所、ゴール前にもう一つあったと思う。2艇レースで瀬田サイドの方がカーレントの関係でいく分有利のように言われていたと記憶している。

唐橋で約800メートル、ここまでで勝負のめどをつけるよう頑張ったものだった。当然戸田オリンピックコースは無い時で、大阪桜の宮・東の隅田川・尾久・荒川放水路等には比べ格段に水もきれいで風景も優れ最良のコースである。ただ、専用のボートコースではないので渡しの汽船、遊覧の屋形舟、しじみ舟など多くて、レース前にこれらにコースから出てもらうため主催者側にさぞご苦勞があったと思う。

あれこれ思い出は尽きないが、戦前のボート部の一端を知ってもらうことができたなら幸いである。

この写真が今後も私の良き伴侶として末永く共にあることを願っている。

S13 松川寿久

○昭和7年4月大学予科に入学したその年、大学予科は3年制であった。翌8年から一部（3年制）と2部（2年制）となった。入部した時、同期の新入部員は5、6名居ったが、1、2年足らずの間に退学して故郷に帰った者や転校した者が出て、残ったのは私一人となってしまった。

昭和7年当時の部員は学部1年の樋口明、久木弥一郎、酒井幸男（高商昭和9年卒の今村大三氏の兄）予科3年の山辺正、森田信雄、井上信吾、大橋（井田）通三郎、宇高芳丸、花井、予科2年には内藤謙二、大宮（市田）隆、北川寛一郎（コックス）、京谷祐弘の諸先輩がおられた。コックス酒井幸男さんは卒業前に夭折された。

○この頃の艇庫

唐橋は欄干橋桁、地面は全て木材で瀬田側畔の旧「網定」前は水際まで広場になっていて屋形舟や漁舟の繋留場であった。その広場の横に当校の艇庫があり、大学高商の艇が同居していた。艇庫の建物は横板を張り合わせ隙間を作って内部の採光を採っていたと思われる堀立小屋を長くした感でお粗末なものだった。

昭和9年大学の新しい艇庫がその川上に竣工した。屋根（トタン）はダーク・ブルー、側はライト・ブルーのツー・トーン・カラーでブレード・カラーと同じであり。屋根には部旗が翻いていた。高商艇庫は隣に並んで建てられた。が、竣工後間もない9月に瞬間風速60メートルという室戸台風が関西を襲い京阪神各地に甚大な風水害をもたらした。丁度その朝授業中の窓からみると神学館の塔頭が瓦や木の枝と共に吹き飛ばされて行った。下校の途中出町柳の橋の上に行くと加茂川の増水した濁流が大木などを押し流し橋桁にぶつかりせき止められていた。

その日の夕刊紙には五条橋他1、2が一部流出とか瀬田川鉄橋で貨物列車が転覆、川に落下したニュースがのっていたので、艇庫は如何かと心配になり翌日部員一同で瀬田へ駆けつけた。

艇庫は果然ベシャンコに壊れていた。早速倒れた屋根柱などを取片付け、下から現われたエイトもフォアも破損していた。鉄橋には列車が倒れ川に幾輦かが転落していて、被害の物すごさを身を感じた。

その後、マネージャーの森田先輩が奔走して艇庫を建てた大工が艇庫の近くに住んでいたので早速復旧に取掛り再建された。その後、木材代の支払で森田先輩が木材店に追い廻わされていた。

○瀬田川コース

鉄橋の橋桁がスタート点で唐橋まで800メートル、2ヶ所フラッグがあり、蛍谷にフラッグ1ヶ所、石山寺手前汽船乗場付近が2000メートルコースのゴールであった。フラッグの設置は網定の当時息子さんの定さんがやって呉れた。京大艇庫前がレース本部席であった。

○合宿所

昭和8年合宿所は唐橋汽船乗場の下手、魚徳料理店跡の二階建を借りた。料理店向の建物で二階は大部屋3と小部屋1で階下は食堂に使った。一階横の土間はバック台練習場に

適していた。春、桜の頃から初夏にかけて昼も夜も屋形舟が幾艘も川をゆっくり上下して絃歌さんざめき瀬田川に遊びの風物詩を彩っていたが、合宿のボートマンは世間の俗事に没交渉の無関心であった。工事の春からの合宿は網定の上手の、同別館と称するには名ばかりの古い家を借りた。

○鼠小僧次郎吉撮影余話

昭和9年8月、松竹下加茂撮影隊が唐橋上で高田浩吉主演鼠小僧次郎吉の捕物場面夜間撮影を行った。合宿の就寝時間を過ぎて彼等御用提灯を振りかざした捕手役人の喧噪が合宿まで聞えて来てとても眠れるどころでなかった。遂に怒った或る部員（名は秘す）は二階手すりに乗り出して橋に向かって「河原乞食喧しいぞ」と幾度か怒鳴りつけた。それを聞きつけた十手捕手は一斉に合宿所へ押寄せて来た。その数は5、60人以上はいたと感じられ、我々も直ちに白布の腹巻に浴衣をはだけオールをもって玄関に立ちはだかった。ところが、合宿所の10メートル程手前で真暗闇の中に彼等の先頭集団が折重なって転倒、後続の連中が押されて更に倒れ込む始末。我々はそれを見て家の中に入り二階からその混乱振りを見物していた。彼等は川へ流れ込む下水路に気付かず足をとられて落ち込みその上に後続の連中が折り重って倒れたのだった。そしてその俣橋上に引返して行ったのだった。翌朝の新聞にトンダ捕物帖と書かれていた。

○昭和15、6年頃、私は東京に勤めておったので、赤羽（工兵）連隊に入隊していた青木喜三君（昭14年卒）が休日の外出の度に後樂園のアパートの私のところへ遊びに来てくれた。富士の裾野に2、3日演習に行くと言っていたが、それから暫くして戦地へ出ていった。又楠（円尾）紀君、寺田英夫君（昭14年卒）も卒業後東京に出て来た。円尾君は京橋のキリンビールに勤めていた。当時段々に物資不足の状況になりつつあったが、円尾君からウイスキーの角瓶を廻してもらった。私が召集で東京を去る時、3人で神楽坂で送別の宴をばった。彼等とはこの時の別れが永遠となった。

○琵琶湖周航

昭和9年同志社中学のボート部が廃部となり、大津市尾花川に在ったその艇庫、ボート（フィックス艇2隻）を大学ボート部が譲り受けた。この2隻に乗って琵琶湖周航に出掛けたのは7月、予科試験終了後。メンバーは山辺主将以下、木村明、内藤、乾、松川、円尾、高橋、寺田、村木、山村、市谷等々。他に一般学生よりの希望者、主としてアーモスト館在寮の方々（海老原、猿丸さん他、）の諸君だったと思っている。森田さんは大溝迄同行、途中帰宿。記憶違いのことがあるかもしれないがだいたいそんなことだった。毛布を帆にして順風を受けて第1回は大溝泊り、第2日は竹生島を経て湖北の入江に入った町（塩津か？）泊り。旅館の看板も出ていない、今でいう民宿というような家で、庭先で遊んでいた鶏をしめてスキヤキの夕食だった。

翌朝出発のとき、村の子供達の見送りの中、艇上の故宇高さん遺品の蓄音器に軍艦マーチをかけて元気よく次の目的地彦根へ出漕した。彦根は城の南側の武家屋敷風の家に泊った。第4日目は瀬田を目指して漕いだが、逆風で帆はきかず仲々進まず、日は暮れ暗闇で方向も判らず手間取り、合宿前の岸辺で残留の森田さんらが焚いた火を目標に帰り着いた。

○モータボート

尾花川艇庫はその後、ボート造船屋に2隻のモータボートと引き換えに貸していた。こ

のモータボートはコーチ用として大宮（市田）さんが乗ってエイトを督励、コーチを受けた。

○当時の後援会と先輩方

当時の後援会は会則はあったが、ボート建造費やら遠征費やらの必要経費に対する部費は校友会割当額では到底賄いきれず、先輩方にその都度、マネージャーがお願いに足を運んでいた。先輩方の総数も60名位であった。特に我々の時代にお世話になったのは、塚本純一先生で多額の寄付をその都度お願いしたもので、後援会誌の費用は全額出して頂いた。コーチとして東辻嘉三郎先輩も忘れることは出来ない。鉄道局に奉職されていたので、隔日毎に瀬田川に來られ指導を受けた。当時鉄道はSLの汽車で電化工事を進めていた時代で、須磨辺りの電化工事現場の事務所にマネージャーの青木喜三君と訪問したこともあった。桜井弥一郎先輩には財務関係の指導を受け、五条辺りのお米屋さんの自宅を訪問したこともあった。東辻、桜井両先輩共応召されて戦死された。東京遠征時には在京の大町弘蔵、坂野公夫、渡辺勇、北村國治郎の各先輩方の後援を受けた。

○戦後の後援会

私が大阪に勤めていた昭和23、4年頃、マネージャーの山田昭児君が來られ、ボート部の現状を聞いてボート部の復興、再建の為には先ず後援会を健全化する必要を感じ、山辺、森田両先輩をはじめ高橋、太田、榎坂君等と相計り大阪に於いて会則を改めて作り直した。

一、名称を艇友会とする。

二、多数の先輩方に積極的に参加してもらう為に、幹事が各年度の前後の人達と連絡を取り、その人達の代弁者として幹事会に出席することとする。

三、会費と寄付をもって部への援助とする。

を主眼として作成した。OBとしてレースに参加してもらうのにそのクラブ名も決める必要があり、艇友会と決めた。

○艇友会クルーの出遭

艇友会OBクルーとしてはじめてレースに出たのは、昭和25年桜宮レースが朝日レガッタとなり、大阪中の島公園前で開催された全国社会人実業団レガッタであった。C松川、太田、榎坂、田村、森島。応援に來られたのは関目、山辺、森田の諸先輩方であった。又、淡路島由良ボートレースに出場、由良要塞地は戦後開放され、淡路選出の代議士が力を入れて高松宮、同妃両殿下の台臨の下、地元警察、消防、漁業組合等総動員で全町あげて盛大に行われた。我々は関目先輩以下南海電鉄加太から定期船で由良に渡って指定のお寺に泊って翌日舟で湾内のレースを見下せる丘の会場へ渡った。第1回戦は現役の慶応と対戦したが波浪激しく、とても漕げる状態ではなく負けてしまった。その後のレースも沈没する艇が続出してレースは中止となった。この由良港のレースもこの回事で取止めとなったらしい。

○関目先輩について。昭和23、4年頃、部員の山田昭児君が大阪の私の家によく來られていたころ、英国から引き上げて來られていた関目さんも見えられ、森田、山辺両先輩など大阪のOBのみなさんとよく話し合っていました。淡路由良レガッタにも同行して下さったものです。突然の訃報を受けてお通夜にでかけ、大阪新聞に訃報を載せてもらい

ました。

S13 松島誠

○昭和9年4月ごろからボート部にお世話になったように記憶しております。この年の春、大暴風雨があり、瀬田の鉄橋で下り急行列車が脱線、宙吊りとなった。このとき同志社艇庫も倒壊、その後片付けを行った。またその夏、琵琶湖周航を行い、彦根の槍屋旅館からの帰航途上三角波をしきりに食って、真夜中やっとの思いで金波楼岸壁にたどりついたこともある。その後原爆の惨状を目の当たりにしたときも、ボートで培った「忍」の一字で永らえることができ、いまはありがたい思いにかられています。

S14 高橋宗

○昭和8年4月、チャペルで新入生の新人勧誘があったとき、わがボート部は50年の歴史を誇ると聞いて以来、あの濃淡青2色の鮮やかなブレードの彩色が、今日まで私から離れない私の夢であり、生きがいでした。北満の極寒にあっても、ルソン島での米軍との戦闘下でも、苦しいとき、心に浮かぶ青2色のオールで、生き残った気がします。戦後瀬田川畔に住みついて40年余。墓地も川畔に定めました。母校ボート部が強くて弱くても、青2色のオールが、150年も200年も、永遠に瀬田川に輝けば、それでいいのです。

S16 増子惣一

○昭和12年入学と同時に入部。16年12月、米英との戦争のため繰上げ卒業。翌年、軍人として中国大陆を転戦。20年8月、ソ連軍と戦闘、敗戦。捕虜としてシベリアでの強制労働3年間の後、帰国した。

くたびりかけると、想い出すのはダークとペールブルーのオールの色。こんな所で死んでたまるか。もう一度瀬田の水や京洛の灯をと、自分を支えてくれました。お世話になった数多くの先輩方のご冥福と、ボート部の活躍を、心より祈ります。

○昭和10年3月旧制兵庫県立工業学校を卒業、日本レーヨン株式会社（現ユニチカ）に入社。宇治工場や愛知県岡崎工場に勤務。もう少し勉強したいと考え、昭和12年4月、同志社に入学。当時は予科2、3年、大学3年の制度でした。入学のとき、入部を勧誘され、氏名を告げるとすぐ、京都一石山間の国鉄の定期券を渡され、部員にしてもらいました。運動神経の鈍い男で、ボートをふいたり、磨いて油を塗ったり、橋の上でストップウォッチを持ってタイムを計ったりしておりました。もうそのころは戦争の時代で、入学の年の7月、中国との不幸な戦争が始まりました。昭和16年12月、アメリカとの戦争が始まったのが丁度大学3年のときで、その年12月27日繰り上げ卒業。世にこれを学徒出陣と申します。OBの名簿、昭和16年度のところに平井弘一、吉年晃両氏のあとに私の名前がありますが、両氏は1年先輩になります。17年2月軍隊へ、すぐ中国へ転戦、20年8月敗戦のすぐ前にソ連との戦闘、その後3年間の強制労働。中国やシベリアでの苦しいときに自分を支えたのは、ボートで鍛えてもらった精神力と、もう一度瀬田の水や加茂川の水を飲んで死にたい、という執念のみでした。思えば私の時代、随分良い先生方、良い先輩方に恵まれたものです。亡くなられた林、速水両部長先生、高橋先輩（現艇友会会長）の同時代の円尾、青木（戦死）、乾氏、さらに大先輩の塚本純一氏、喜多一二郎氏……。

今も幸いに思うことは、5年足らずの一時期ですが、若い時代を京都で、瀬田で送れたことです。OBになってもOBらしいことは何ひとつできず心苦しく存じております。ボート部の益々のご活躍をお願い申し上げるとともに、ご逝去された方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

S16 吉年 晃

○機 comes のは遅く去るは速し。大学在学中、やっとチャンスがめぐり来て昭和15年9月8日、第13回関西選手権競漕大会でエイト優勝の有終の美を飾り得たこと。

九死に一生を得て南方から復員し、先ず唐橋に立ち瀬田川の水模様と風の香から、生きている喜びを感じたこと。

色褪せた日記帳の一頁。高橋宗先輩の満州中央銀行赴任を祝し昭和14年3月24日21時23分京都発の特急「櫻」を部員全員で見送り、カレッジソングを歌い感激したこと。

○編集委員会よりおたずねのあった「八咫」という艇について説明します。昭和14年東京のデルタ造船所製造。進水式は8月20日午後1時より、瀬田の艇庫前で当時部長の速水藤助教授、東辻嘉三郎先輩、森田信雄先輩、山辺正先輩のご臨席のもとに挙行されました。この艇は当時の東大艇とだいたい同じ設計になっており、V字型の断面で、クルーは慣れるまでバランスがとりにくくかなり苦勞したようです。しかしその甲斐あって翌昭和15年関西選エイト初優勝を飾ることができ、われわれにとって忘れられない艇となりました。ちなみに、八咫の前にできたのが「イーグル」、その前が「漣（さざなみ）」、その前が「くろがね」ではなかったかと思えます。

S16 平井弘一

○私がオアズマンとしての第一歩を踏み出したのは、旧制膳所中学校3年生の時である。当時、吾々のご指導を賜ったのは現在宝酒造株式会社取締役会長である大宮隆様である。同先輩より「いくたびか辛酸をへて志初めて堅し」、この心をモットーとして、厳しい鍛練を課せられた。スポーツは楽しむものであり、遊び心のあるものだと言う人もいるが、ボートにはその考え方は通じない。膳所中全国制覇をし優勝の栄冠を獲得出来たのは大宮先輩のご熱心なるコーチによるものであり、私達クルーが一体となって過酷なる練習に耐えたからである。

その結果、勝つ喜びを与えてもらった。私は現在も大宮隆様には社会人として絶えず御指導ご鞭撻を賜わっております。

私にとってローイングとは何か、それは畏敬する大宮隆様にめぐりあえたことの喜びである。

○私は、昭和16年3月卒業すると同時に東洋紡績（株）に入社。以来50年、今日もなお現役として勤務することが出来るのは、死線を越え野戦より無事帰還しえたこと、並びに健康に恵まれたことによるものであります。

それにも増して幸運なことは、中学(旧制)、大学そして社会人として、大宮隆先輩の知遇を得、実弟の如く親しく薫陶を賜ったこと。及び苦楽を共にし喪心より信頼出来る社友を得たことであります。

後輩諸君にお願いしたいことは、ボート部在籍中にボートを学ぶことも必要でありまし

ようが、それより必要なことは、ボートを通じて人生を学ぶということであり、師と仰ぐ先輩、一生の良き友を得る良きチャンスとして活かすことを考えるべきではないでしょうか。

恋の命をたずぬれば
 名を惜しむかな男ゆえ
 友の情けを求むれば
 義のあるところ火を踏む (与謝野鉄幹)

S16 山崎恒夫

○先ず同志社漕艇部発足100周年を祝します。ボートの花形エイトに、そして琵琶湖、京都を憧れて上京したのが昭和13年である。湖を囲んだ山々から吹きおろす風が瀬田川に吹きこみ、川畔の柳がゆれている光景！ やさしい訛の石山弁が右も左も判らない私の心に余裕を与えてくださった。宇和島の百合実、山口県大島安下ノ庄の山本浩と一緒に入部したのも心強かった。新入生歓迎会に先輩の吉益さん（京都一中）が「松山と宇和島には古くから歌い合ったボートの歌があると聞いている。2人で歌え」と言われ、百合君と一緒に音痴声をはりあげた記憶がある。

一、思へば過ぎし夏の末
 伊予の小富士の眺めある
 高浜沖にもよおせる
 松山宇和島西条の
 二、ボートレースのその折りに
 いとも名譽の光ある
 チャンピオンフラグは松山に
 あはれふたゞびうばはれたり——以下略。

尚、松山中学の垂示も言えと言われ得意満面に披露し意を強くしたものだ。

「垂示

我が此の漕艇は生死脱得の修業なれば衷心失命を避けず一漕一漕まさに吐血の思いをなして漕破すべしい苟も左顧右眄徒らに惰気慢心を弄して精進の誠を汚すこと勿れ 至囑至囑」

この垂示は東京でも一部で言われている様ですが、オールを握る者すべてに通用するものであり、又、言葉に表わさなくても、夫々が知らず知らずのうちに体得しているものだと思います。ボートの魅力である。

○校内ボートレースも学校行事の大事な一つであった。石山寺の方より唐橋に向って逆流のコースで3艇レース、教師も2クルー編成、今井、岡本先生（コレポン）などもオールを握っていた。審判は毎年主将が担当するので私も務めたことがある。一般の学生は自由行動で2隻の汽船に分乗して支給された弁当をもらって瀬田川下り、石山寺に参詣する者が多く、その日は学生で川辺は満ちあふれた。ここでボートに興味を感じ入部する学生も居た。

○関西権手権大会（8月の終り）優勝戦、京大と競う（120ページ写真参照）。下馬評甲乙なし。東海道線の鉄橋がスタート、手前同志社、C近藤憲司、S井上、7渡辺、6山崎、5水野……。スタート直前の緊張したシーン。追いつ追われつ唐橋をくぐる。「ラストスパート50本優勝だ／＼」と叫んだ近藤コックスの声！ 同志社のたくましく、そしてスマートな漕法は評判がよかった。ゴールインの後ゆっくりと応援の小舟に礼をのべた時、感激にむせび泣いているサブちゃんの姿、お針子さんの泣き顔、尼さんが太鼓をたたいて喜んでいる姿、納艇してボートを拭きながら泣いているコックス。勝って感激にむせび泣くのは若者だけでなく、スポーツを理解している者の常道である。その涙が一生を通じて大変大切なものであることを悟ったのは私だけではあるまい。ボートマン共通のある何ものかである。

猛練習で南郷まで4000メートルのロングコースを2本続けたことがあった。疲れて唐橋にそのまゝ倒れ込み、日焼けのコンクリートに汗がにじんでゆくのをじっと見つめた記憶がある。それでも渡辺さんはレースには最高のコンディションになる様に巧みに調整していたし、近藤コックスは漕手を賞めたり叱ったりコントロールしていた。「いいオール、さすがは山崎」「さすがは6番」

○1年間連戦連勝、戦に勝ち、集めたカップ・旗である（121ページ写真〔下〕参照）。旗は5月海軍記念日に海軍省主催のレースが大阪桜宮にて行われ優勝旗とビールをもらった。ビールは帰ってからと言っていたが、待ち切れず帰りに飲んでしまった。

○遠漕は楽しいが、フィックス艇が廃止され、出来なくなった。私達が終りを飾った様だ。近江舞子までテント、鍋、釜を積んで出発、テント村は湖の方から海賊の如く真っ黒でグロテスクな面々が上陸したのは初めてということで、陸路の入口ばかり管理していた事務員も吃驚、返事もシドロモドロだったのを憶えている。副食が足らないと全員湖底にもぐってしじみとり、歌を歌えばどら声、それでも三日目にはうちとけてキャンプファイアに加入したり、女性や子供を乗せて近くを漕いだり、楽しい思い出として未だに心に残っている。重いフィックスのオールを握ったおかげで帰ってからエイトに乗った時軽くさばけるようになった。フィニッシュの後、水中からもりあがってくる小粒の泡を次々と作りあげて会心のオールさばきをしてゆくのは楽しかった。

○戦前の東京オリンピックは戦雲急をつけ幻に終り、ボートの生活も終りを告げたが、瀬田川を去り難く一人だけ残り卒業まで草庵生活を始めた。尼寺である。小生も老いし尼僧の信用を受けたのは感激であったが、用心棒と言う大役であった。時々京都に引っ越したボートマンが空腹をかかえてとびこんで来る。金を使い果し昨日より何も食べてない。江州米に目を丸くしてよろこんでいた。すでに京の学生食堂では外米、粟であった。

卒業、入社、そしてゆっくりする間もなく軍隊生活が始まる。入隊前に石山で送別会をしていた。二次会で勢いよくおでん屋に入り込む。いさましい軍歌を歌う。その時隅の方で中年の夫婦が子供をかゝえて酒を酌み交しているのを見かける。召集令状を受けた様子。私達は独身者の気軽さではあったが、未だにあの家族はどうしているかと気がかりになっている。戦争の悲劇である。

九死に一生を得て終戦後、映画「舞踏会の手帖」の真似ごとで京、石山を訪問したことがあった。京の榎三郎（戦死）の宅を訪れたり、吉川久雄、白井茂に逢ったり、石山の女性応援団、商店街では「瀬田川の主」を自認してから5、6年あとのこととて大歓迎では

あったが、今度年老いて唐橋に佇んだ時、何人の人が迎えてくれるだろうか。自分の子供の様に大事にしていた老庵主さんは既に逝かれ、商店街の人々は息子の代になっている。それでも瀬田川は、そして柳、ボートは昔と同じように私を快く迎えてくれると思っている。そして読書三昧にふけた草庵も私を待っていると思っている。老庵主の跡を継いだ尼僧も既に70歳、私を快く迎えてくれるであろう。

石山は第二の故郷である。

まだまだ書きたいことは沢山ありますが、次回に何かの折にゆっくりと。

急いで書きました乱文失礼。体をこわしていますが石山へ行きたい。必ず行こう。

S17 太田豊彦

○「ボートのタイムの疑問」

ボートは、ハイテクの進歩と造船技術の向上により飛躍的に軽量化された。即ち、材質は木材からグラスファイバー、カーボンを経てアラミドなる強化繊維へと変わり、艇の重量は95キロ前後と軽量になっている。50数年前に私が乗ったイーグル号は115～120キロの木材の艇であった。オール又然りである。木材からカーボンヘブレードの形状も変化した。然るにエイトの2000メートルのタイムはトップクラスのクルーが現在でも6分前後で飛躍的な好タイムは記録されていない。

私が漕いでいた昭和15年頃でも全日本選手権優勝クルーは6分前後であったと記憶する。第一高等学校が尾久コースの静水に近い状態で5分55秒を記録している。もっともボートのタイムは風波のコンディションに左右されるので戸田コースの静水でも相当のバラツキが有ることは当然の事である。

昭和15年（1940）から18年後の昭和33年（1958）、10年後の昭和43年（1968）、21年後の平成元年（1989）の記録を見ても、この半世紀の各年のトップクラスのクルーの静水無風状態の好コンディションにおいてのタイムが何れも6分前後であるということだ。

年度	全日本選手権優勝クルー	コース条件の良い時のタイム
1958	慶応大	6' 06" 09
1968	同志社大	6' 01" 04
1989	中央大	5' 53" 06

他のスポーツのスピードを競う競技では、戦前と戦後では大幅な記録更新がなされている。例えば水泳を例にとれば1500メートルの自由形では昭和7年（1932）に北村久寿雄選手がロスアンゼルス・オリンピックで19分12秒4の日本新記録で優勝しているが、半世紀後の日本新記録は昭和60年（1985）に水本良幸選手により15分44秒80が記録された。何と3分30秒程の大幅なタイムの縮小となっている。

単純にボートと水泳とを比較するのは冒険で誤りかも知れないが、何はともあれエイト

のタイムが時速20キロの範囲の壁からぬけ出せないのは、どう考えても私には理解出来ない不思議な不思議なことなのである。

エイト2000メートル静水無風での5分30秒は果して平成何年に達成出来るのであろうか？ そしてそのクルーの名は？

○私は昭和13年4月、大学予科に入学と同時に中学時代固定席艇（フィックス）を漕いでいた経験者の為、対校エイトの5番漕手としてボート部の一員となった。

爾来半世紀に亘り、何らかの形で今日までボートとか、わって来たのである。

現役時代は漕艇学部に在籍しているような感じで、ボート漬の毎日であった。

最も印象深く、今もなつかしく思い出すのは、昭和15年夏の東京遠征練習である。向島に合宿し、早大の艇庫を借用、毎日の練習は午前、午後の2回、隅田川の隅田公園にある船台を出て、堀切りの水門を抜け荒川放水路へ入り、一路ロングパドルで赤羽まで、川を遡ること1時間余、火力発電所の4本煙突が漕げども漕げども視界から離れない、あの苦しかったことは良き思い出として忘れることは出来ない。赤羽から隅田川に入り、尾久を経て隅田公園の艇庫へ戻る。この反復練習であった。関東のクルーの練習がこのようなハードなものであることを認識し、大いに啓蒙、刺激されたものである。

その結果、クルーは関西選手権では京都帝大を破り、エイトの初優勝を飾ったが、第24回全日本選手権は、東京尾久コースにおいて、9月23日、関東選手権優勝校、第一高等学校と対戦し敗退したのである。

（この年10月27日、戸田ボートコースが完成、コースに注水された。）

私の現役時代のひと駒である。

レースで勝利者となるには

ハードな練習を行う以外に途はない。

S17 榎坂景次

○昭和13年4月、同志社の予科に入学、すぐボート部に入部、早速瀬田川の合宿所に入り、予科2年生からレギュラーとして試合に出た次第ですが、対大阪商大定期戦、関西選手権、日本選手権等々に出場して、スタートにつき相手方と相対峙して並び、これからスタートしようとする直前の緊張感……全神経が一本のバネになって張りつめる瞬間の気持。そして不断の練習により鍛えられた強靱な体力と不屈の精神力……これこそが私にとっての同志社ローイングです。

S17 田中羊一

○和船を漕ぐにも、石を挺子で動かすにも肩が重要な役割を果たして居る。ボートを漕ぐによく足腰腕を一気にと言うが、それ丈でボートは走り出すのだろうか。ソウルオリンピックで舵なしペアスカールに優勝のイタリア兄弟、又女子エイトに入賞の中国を見るに足腰腕丈であの成績を得たのであろうか。一秒先んずるに腕の弱い日本人は男女共肩の一層の活用なくしてレベルアップが期待出来るとは思われない。腕でなく肩で水をキャッチ、肩でリズムを生み出せば夢はもっと200年目を目指し走り出すと思うが…。

S18 山元博

○思い出として、昭和15年から17年にかけて食事もままならぬ時代、よく合宿のめんどうをみて戴いた老夫婦や夏練習から帰ってきた時によく合宿の隣の家の宇野さん（高橋先輩夫人）の家の人々による麦茶の冷やした一杯の味、本当に今でも忘れ得ぬ味でした。当時宇野さん家族がよくしてくださった事が今でも心に残って居ります。

S19 嘉村良輝

○「ボート」に親しんだのは経専の3年間だけだが「ローイング」に対する思いは途絶えなかった。敗戦の廃墟の中で目標を見失った学生が、教室でつかめぬものを得られるかもしれないと思って、ボートに取り組んだ。ボートはすばらしい魅力を秘めたスポーツだった。40年を経て有り難く思うことは、甘ったれ学生を温かい包容力で見守ってくださった瀬田川近辺の方々の御厚情である。100年史の一隅ではあるが、感謝の意を特記する。

○1947<昭22>第2回国体（8月30、31日 瀬田川東海道本線鉄橋―蛍谷2000メートルコース）オープンレース（天皇杯得点の対象外）フォア。一回戦六高（現岡山大）、準決勝同経専OB（天宮清之、野々垣明、松井久男先輩ら）、決勝関大専門部を破り優勝。メンバーはC竹内孝三、S中川正生、3 嘉村良輝、2 西川秋弥、B奥田。竹内以外漕歴ゼロという陣容だが、雨宮、松井久男先輩らの好指導と光彩を放つエイトクルーの刺激を受けて、予期以上の好成績を収めた。

堀井礼、近藤、松井一、鷺田、刈谷、神野先輩らが厳しい社会事情をおして激励にみえ、発奮させられた。同年の日本選手権（隅田川2000メートルコース）フォア。一回戦、桜門艇友会に敗退。メンバーC山田善一、S堀井要壮、3 水野義男、2 中川正生、B嘉村良輝。夜行列車で上京、午後のレースは日漕が準備した借り物の艇で出漕、満潮で隅田川は逆に流れ、苦しいレースだった。

1948年（昭23）朝日レガッタ（大阪堂島川）。関漕で準備できる艇の都合で、フォア1クルーのみ参加を認められ、新3年生（C嘉村良輝、S山本信蔵、3 毛利匡之、2 中西寛、B田中清）だけでメンバーを組んだが、1 回戦三高紅撓会に敗退。夏、関選（瀬田川）にフォア3 番で出漕したが、1 回戦関学に敗退。

○1946年（昭21）終戦後初めての春の練習再開は、長いあいだ、艇庫に眠っていた艇の手入れから始められた。当時の艇は外板が薄い木板で、長時間使用しなかったり、手入れが不足すると乾燥して細かい亀裂が入った。リガーなど金属部も錆びついていて、積もった埃を払い、磨きあげて、水に浮かべると使用にたえたと判明した。居合わせた者は思わず歓声を発したものだ。

通学、練習の往復、街には食料品を売る店など一軒もなかった。石山へ練習に通うのも大変で、'46年は国鉄（現JR）を利用したが、京都駅で列車は超満員の積み残し、しかたなく蒸気機関車の石炭の上にこっそり腹ばいになったことが一度ある。東山、逢坂山のトンネルに入ると、暗闇で機関車の吐きだす煙は見えなくなるが、火の粉が無数に飛んできたのが恐ろしかった。

'47年（昭22）は車輛も増えたというので京阪電車を利用した。しかし休日に三条駅に延々と行列ができ、行列の最後尾に並んだとき浜大津へ向かった電車が戻ってきても、まだ乗れなかったことがある。

こうした時世、京大の艇庫番をしながら『蜆とり』を稼業とする老夫婦がいた。金額は覚えていないが、安い値段で手拭で作った袋いっぱい蜆を譲ってくれた。汁の実になった蜆は大きくてふっくら輝いていた。いまあのような立派な蜆は見られない。

練習中、行く手を横切る汽船、和船にコックスが「早くどけ!」と大声を張りあげる。しかし相手は怒らず、さっとよけて、笑顔で「がんばれよ!」とってくれたこともしばしばあった。石山の人々には随分お世話になった。現在はモーターボートなどが増え、湖上は様相がまるで変わった。練習中事故のないよう希望する。

S24 高井正明

○ある回想

昭和18年秋、学徒出陣する上級生達を送った。乏しい酒を酌み交し、灯火もまばらな河原町をそぞろ歩いて訣別した。それから2年、自らも敗戦の苦渋を経て生還し、再び瀬田の河畔に立った時、あたり一面は寂寥として荒廃の気を漂わせていたが、川の流れは変ることなく岸辺の柳やもみじを昔日の如く映していた。暫し身をすくめて立ち尽し、冬ざれの無人の川面に響くコックスの声を幻聴のように聞いた。

S25 山田昭児

○他大学ノ予科デボートヲ漕イデ居リマシタガ、当時21年瀬田川デ同志社高商ノボート部トハレースヲシタモノデス。其ノ后同志社学部ヘ進ミマシタガ、ソコデ高商時代ノボート部ノ方ヤト再会シ、私モボートヲ再ビ始メマシタ。

思ヒ出トシテ、合宿所ニテ当時整調ノ私トベアノ松井氏（四方）ト同ジ夢ヲ見タラシク寝言デ話シ合ッテ皆ニ笑ハレタコトガアリマス。

S25 森島昭三

○昭和21年、戦後ボート部復活にかけた予科2年間の忍耐と辛抱のボートライフは、栄光への道を拓いた大学2年間よりも忘れられない青春の1ページでした。食糧難、部員不足、激しい部員の入退部、集まらない部員を唯一の艇「イーグル」と共にじっと待った苦しさは、今では私の糧となってイーグルへの愛着と共に生きています。合宿を共にした稲井君、松本君は逝きましたが、高井先輩、下西君は、本当に一つ釜の飯を食った仲間として忘れることはできません。

S26 本間満秋

○平成元年もあと余日少なくなって来たが、私にとってこの年頭は感慨が多かった。1月7日、奇しくも広島へ出張の途中新幹線の車中で昭和天皇崩御の報を聞いた。昭和26年第6回国体夏季大会に同志社艇友会としてフォア競技に出漕した時の事と、開会式に昭和天皇を極く身近にお迎えした時の事が思い出され、「時の流れ」を今更ながら感じた。あの物のない不自由な時代をよく結束してあそこまでやれたと、思い出すことの多い年であった。

S28 村山幹夫

○たしか関選だったと思いますが、フォアの整調で出漕した記憶があります。大学2、3年ごろ、コックス国富君、松岡君、鷹羽さん、清水さんなどのメンバーでした。成績はあまりよくなかったのでしょうか。相手の艇は見えませんでした。それでもゴールまで懸命に漕いだはずで。上ってくると先輩からひやかしかげに「整調はラクそうにスイスイ漕いでいたなあ」と言われ、ちょっとくやしい思いをしたような気がします。

合宿は唐橋たもとの保井さん宅（保井さんという家はたくさんありました）小生などかけ出しの1、2年生でも先輩からコキ使われたりはしませんでした。食事でも分大きな顔をして食べていたのでしょうか。これは、キャプテンだった平井さん（シベリア帰りで、当時の小生からみればえらいオッサンでした）の人柄もさることながら、当時から同志社運動部のよき伝統だったのではないのでしょうか。3年のころ「破防法粉碎」のデモンランに参加したらいっしょに漕いだ人の何人かが参加していて、いっしょに腕を組んだのも遠い思い出です。

S29 北尾元載

○ボートを始めたのは郷里島根県の母校松江中学2年生のときの敗戦後、校名が「県立第一高校」となり、さらに「松江高校」と変わった直後のこと。宍道湖で猛練習をして全国高校琵琶湖レガッタとか国体に出場したがタマネギとキュウリばかりの食事で栄養が足らずカッケーになったりしながらの合宿生活だった。初めての琵琶湖遠征のときは監督と黒田方辰君（やはり艇友会員で現県漕艇理事長）が京都から買って来た栄養剤を飲まされ、あとでマムシの粉末と聞いて吐きそうになったこともある。その後ボートの花形エイトにあこがれ、同志社入学。4年間瀬田川で漕ぎに漕いだ。そして3年のときの昭和27年、関選に戦後初優勝を飾る。このときはすき焼きとサイダー割りの焼酎で酔いまくり、ふんどし一枚になって宿敵京大の部員たちと唐橋の上で大騒ぎした。4年生で主将となり、8人の選手をリードすることとなったが、ときにはもろもろのつらさに耐えかね、夕暮れの湖畔に立ち、比叡山を眺め、はるか故郷を思い、胸中にこみあげるものを感じたときもあった。県漕の審判長として10余年を経たが、6年前から始まった松江市民レガッタではかつての艇友たちとともに再びオールを握る喜びを味わっている。

S29 小野木伸

○「WILD ROVERの思い出」

私の父も若い頃、ボートの選手であった為、幼い頃から堂島川で練習するフィックスボートに乗せてもらったり、親子レースに参加したりして育ったので、人一倍ボートに対して興味を持っていた。中学ではフィックスを漕ぎ、第3回の国体で準決勝まで進むことができた。堀川高校では元女学校であったため、われわれでボート部をつくり全国制覇をするまでに育てることができた。

そして昭和25年春同志社に入り、大望のエイトに乗ることができたが、2年で体力の限界を知り、マネージャーの仕事を受け、それも体育会本部の会計をすることになった。戦前の艇は老朽化し、いよいよ新艇建造の話が持ち上がり、その募金活動も開始された。ボートを漕ぐことのできなくなった自分もボート部の為になることは、マネージャーとし

て選手が強くなる為、ボートを漕ぐよい条件づくりの為に協力することで、当面は艇をつくる為の募金活動に専念し、体育会本部に入り側面的に応援することになった。

特に募金活動は、名簿をたよりに全員で手分けして一人一人の先輩に挨拶してお願いするのだが、慣れない仕事だけに担当した者それぞれにたいへん苦勞したと思う。その結果、大宮隆先輩をはじめ諸先輩のご協力を得て、約100万円位は集まったと思う。しかし新艇が完成した際には支払う金額が不足しており、約15万円を同志社本部の小林事務局長に事情を説明し、借用の形で出していただいた。幸いにもワイルド・ローヴァーは賑々しく進水式を終え、早速関西選手権を獲得するなど成果をあげたが、私が卒業して一年程してから同志社大学本部小林事務局長の名前で、借金15万円の催促の呼出しを受けた。

私の書いた借用証を示され返済を求められたので、これはボートの建造費で補助金の性格のもので、そのまま済まされるのが常ですと説明した。

小林事務局長は大変お叱りになり、借用の形で引き出したものは当然返済すべきものである、学生の甘えであいまいに終わらせず、卒業までにどんな形ででも返済するのが当然ではないか、将来ある君の為にも、と諭された。私は処理のまずさ、考え違いを詫び、先生も気持ちよく許してくださった。

私は体育会本部の仕事をしたことにより小林事務局長には在学中からお亡くなりになるまで、公私共に指導を戴くとともに常におやじのように励まして戴き、いつも心から尊敬していた人であった。この艇の建造については、従来の発想を変え、当時最も造船技術の高かったデルタ造船所に発注する為、國富先輩と上京し、ベルリンで活躍した東大の朝日の設計図をモデルにし、艇の型を決めたのをよく記憶している。

今一つは、WILD ROVERというネーミングについては、当時の関係者で誰に命名して頂くか相談し、当時の総長秘書園部望氏のご尽力を得て大塚節治総長につけて戴くことになり、私がお願いに上がった（園部氏には以降も施設建設などお世話になった学内関係者のお一人です）。

新島先生が上海から渡米された際に乗られた船の名前で、同志社との縁（えに）し）やアメリカへの当時の大航海で難関を乗りこえ、目的を果たした、いわゆる、未来に望みをかける最もふさわしい良い名前だといって決めていただいた。

私が卒業以来今まで、同志社のボート部の人達と話す時、よくワイルド・ローヴァーの話が出ます。メキシコオリンピックで活躍したのをはじめ、全日本選手権等で優秀な成績をあげたことなど、年を経るごとに新しいワイルド・ローヴァーが誕生し、若い選手達に引き継がれていく様子を聴かされ、最初に命名に関係した者として喜びを感じています。ボート部が体育会の多くの運動部に先がけて、100周年を迎える事は大変めでたく心より喜ぶ次第です。

今後益々練習に励まれ、再び世界の桧舞台で健闘される日の近い事を望んで止みません。

S29 村井利康

○舵手として入部したのですが、急激に大きくなり、と申しましても漕手としてはかなり小柄でしたが、私が漕手として採用される様になると同時に漕手として入部した同期の小野木氏が体育会本部に入れマネージャーとして並々な腕を發揮。新艇ワイルド・ローヴァーが建造され、その年（昭27）関西選手権優勝、続いて全日本選手権出漕が何よ

りの思い出です。

それにつけても新艇ワイルド・ローヴァー建造について艇友会よりの寄付集め、大学及びデルタ造船所との交渉と漕手として入部し乍ら途中で体育会本部に入りマネージャーとして活躍された小野木氏の努力と功績を称えたいと思います。

S30 赤塚弘高

○山城高校漕艇部から同志社大学短期大学部（夜間）に入学させて戴き、又漕艇部に入部させて戴きました事大変感謝して居ります。2年生の時はバウを漕がせて戴き一生の思い出になると思います。有り難う。

S31 岩波春喜

○滋賀県栗太郡瀬田町は小さな町だった。唐橋を渡ると僕達の瀬田があった。僕達はここへ来てボートを漕ぎ巣立って行った。瀬田川の流れは限りなく、石山の風物は美しく、琵琶湖上に陽がゆれて、僕達はおおらかさに包まれながら汗を流してボートを漕いだ。思えばあれが青春だったのだ。さまざまな思いを胸に、もう一度瀬田に帰ってボートを漕ぎたいと思う時がある。今は大津市の一部に変わったが、僕達の頃は、滋賀県栗太郡瀬田町だった。

S32 小野博善

○—同志社ローイングの思い出—

レースの思い出は沢山ある。

1954年、2年生の4月、関西選手権で対校エイトで初出漕、神戸大に勝ち帝助に負けたこと。その年の9月、ケンブリッジ大学歓迎関西選抜レガッタでは僅少一尺の差でジョンプル（英国人）に破れたこと。

3年生では当時皇太子であられた天皇陛下をお迎えしての全日本選手権に参加し、北大、一橋大が強かったこと。

勝ち負けよりも漕友との連帯生活を思い出し、コーチの声より静寂な瀬田川にこだまするコックスのエールのみが耳に残るのは私だけであろうか？

S33 畑山純一

○「ボクはボートマン同志社のホープだよ とかなんとかおだてられて 終いにゃ落第よ……」有名な岩波春喜先輩の変え唄に浮き浮きだった2回生の小生は、何故か読売学生リーグの2番手に抜テキされていた。当時のキャプテンは竹田和彦先輩。6月のドシャブリの雨の日に、瀬田の艇庫内トレーニングに参加したのは、なぜかキャプテンと小生だけだった。柔軟体操、バック台は、いつもより多かったが疲れない。「ハト、ヨウガンバンノ」無口な先輩が口を開かれた。体は小さい。力はない。安曇川町で疎開児童だった時、琵琶湖哀歌を知り、ボートに憧れていた小生は、大学合格よりボート部入部の方が嬉しかったと言った。

「ボートが好きで好きでかなん奴も居るんや」。クルーの中で、一番足手まといの小生も、竹田先輩やクルーに存在価値があるんや、ガンバラニャーと思った。

幸い関西学生リーグに優勝、先逝したルームメイトの勇さんに肩を釣り上げられた写真がある。ロマンチストの小生をふるい立たせてくださった竹田先輩は自動車業界でご活躍と聞く。以後小生はポート大学同志社学部卒と名乗る。

S33 伊藤竹美

○高校でフィクスを漕ぎ、入学してすぐ対校エイトに乗り、スピードについてゆけず、苦労したのが昨日の様に思われます。以後4年間5番を漕ぎ通したのも数少ないオアズマンの一人と自負しております。漕友諸兄には我侭だった自分に恥入るばかりです。

最近漕友と酌み交す機会が良くありますが、何10年振りに会っても、すぐ昔の仲間に返って昔話に花が咲くのは何物にも代えがたい楽しみの一つである。同志社でポートを漕ぎ、かけがえのない友を得た事を感謝している。

S33 庄山章信

○私は高校時代に、生徒会活動や新聞部など文化関係のことをやっていたので、大学では何かスポーツをやりたいと思っていた。たまたま学部学科が同じで、下宿の近くに住む同級の大塚君と相談し、2人で入部させてもらったのがポート部である。

琵琶湖や瀬田川でスイスイと漕いでいるクルーが、あんなにハードな練習をやらなければならんとは正直なところ入部するまで思ってもいなかった。バック台はいいとして御所を数回まわり上加茂神社や大文字山までのランニングは厳しかった。

何度か顎を出して脱落しながら、ポートぐらい漕ぐのに何故こんなに走らなければならぬのか、と思ったけれども、せめて瀬田で乗艇練習するまでは頑張ってみようという軽い気持ちもあって毎日の練習を続けていた。

ところが入部して暫く過ぎると決定的な事情に左右された。自分の体重の中途半端さである。当時は身長172センチ、体重56キロ、視力両眼とも1.5、既往症なし、きわめて健康、足も長く自分でもスラッとしたいい男だと思っていた。現在の体重88キロ、近眼メガネ、毛髪薄く白く、顔面しみそばかす、の私とは別人のような男振りだった。

それはともかく、56キロの体重では漕ぎ手にしては軽量すぎ、舵手にしては重くポート選手としては不適確だということが分かってきた。それなら最初から私の入部申込みを断ってくれば良かったのにと気分を害したが、あとの祭りである。

選手になれないのなら長居は無用と退部しようと思った。それに高校時代からポートをやっていた内田順己君ら何人かの期待させるレギュラー候補もいたし、4回生になってもとても選手になれそうにない、やめるのに未練はなかった。

しかし退部せずに私は先輩の脇坂・森口氏らの勧めもあってマネージャーとなった。

「籠に乗る人、担ぐ人、そのまた——」という言葉があるけれど、当時はそんな殊勝な気持ちでマネージャーになったわけではない。上記のとおり落ちこぼれである。

それから「体育会漕艇部副務」の名刺を貰い、卒業された先輩の勤務先を訪ね、練習や試合の結果を報告し、特別寄付や艇友会会費を集金してくるのが私の仕事だった。忙しいときには嫌な顔をされるがご機嫌がいいと食事を御馳走してもらえた。

ポート部の名刺が私の生まれて初めての名刺である。その名刺のおかげで先輩諸兄から親しくして頂き、私なりに同志社ローイングの心意気に少し触れた思いがしている。

S33 矢野功

○主将伊藤君に詫げる

昭和31年のシーズンを最後に、私は最終学年の1年を残して全く個人的な理由で対校クルーから降りました。以降30余年、当時の私の行動が伊藤主将はじめ皆さんにどんなに失望と迷惑をかけたかを、その後の社会生活での経験と重ね合わせて知りました。現役の諸君、4年間をボート部で初志貫徹して下さい。その価値は100年の歴史を持つボート部のOBとなられてから、生涯あなたの誇りとなり、あなたの人生を支える事でしょう。

S35 丸山信吾

○「私にとっての同志社ローイング」

私にとって水と船は青春だった。高校を卒業して商船大学に入学するのが夢だったが、夢やぶれ同志社に入学。真っ先にボート部の部員募集に飛びついた。小さな体（173センチ、62キロ）で必死にトレーニング。2年生の時ナックルフォアで関選に優勝、それも天下の東レを破っての勝ち。やった！ と言うのはこの事か。3年になって対校となり全日本が最後だった。青春時代ははるか遠く。だが水と船と汗が大好きだ。有難う同志社。

S35 小山隆治

○昭和33年関西選手権のナックルフォアの部に出場する事になり、そのメンバーに選ばれましたが、何分1回生2人と2回生3人というメンバーで漕歴も浅く、杉本茂雄コーチ大変苦労されたと思います。

他のクルーも同じでしょうが、我々初めての試合なので練習も私達にとっては非常にハードでクルーも非常に苦しんでいたのも、私も杉本コーチからのメニューを減らそうと何度も思った事があったが、心を鬼にしてその日その日のメニューを消化しました。

試合当日の新聞に3チーム程優勝候補が載っていましたが、その中に我々のクルーが入っていたので、驚きと嬉しさに初レースも緊張気味でしたが、小差で2回戦に進むことが出来、その後はレースごとに調子が上がり優勝出来ました。その夜は遅くまで、あの練習の苦しさ、レースの事を語り合ったのが、30数年たった今日でも思い出されます。

S36 友高敏夫

○私は、昭和35年対校クルーのコックスとして、瀬田川で合宿して居りました。当時、部は貧乏で、合宿所も艇庫も無く借家住いで、毎日肩身の狭い思いで練習をしていたものです。その頃、対校エイトは、艇名ボセイドン（これはギリシャ神話に出て来る海神の名）と言う軽量でV型の極端に短い非常にバランスの悪い艇であった。

しかもかなり古くて、他の大学は、どんどん新艇を建造していたが、我が同志社は極端な資金難で、アルバイトをしては、大津市の桑野造船に借金を返すという状態であった。それでも昭和35年夏の関選の直前になって、先輩諸君の協力で新艇がデルタ造船所で完成、艇名もつけずに出艇しました。

結果は、準決勝で負け3位。それもそのはずで、考えれば、負けるべくして負けたと言うことです。今までボセイドン号とは正反対のU型の艇で幅も広く、それまでの漕法では乗りこなせないものを二日目決勝日になって、一年間、それも初日予選まではクルーが乗っ

ていたものを変更して、新艇にしたのだから、当然と言えば当然の結果でした。ボセイドン号に乗っての予選では楽に予選最高タイムを出していたのに、新艇新艇と長年心に期待していたあまり、セオリーを忘れて、コーチもクルーも若気の至りで、新艇に飛び乗ってスタートについた時には、時すでに遅しでありました。

そんな事もあってその後も新艇に命名もせずに我々4回生は卒業してしまいました。卒業してから1年位で、現在の合宿所も完成し、私は時々瀬田へ遊びに出掛けていた。何年か経ったある時、合宿所へ遊びに行ったら、その艇に「快風」というネームが付いていた。しかし、その艇では、何の入賞もなかった様に記憶している。その後、瀬田へもあまり行く機会がなく、時々、マネージャーと会う位だったと思うが、ある時、実は今度、新艇が出来ますが、まだ、艇名を決定しておりませんと言うことで、それならワイルド・ローヴァー2世にしては、と提案したのです。

何故かと言うと、ワイルド・ローヴァーは最も同志社に縁のある名前だからです。それは、同志社マンなら誰でも知っていることですが、あの明德館の塔に3本柱の帆船の彫刻があるでしょう。あの貨物船に乗って新島襄先生が渡米し、そして帰朝後、史話にある如く、多大の困難の末、京都に同志社を創立したという歴史的な船なのです。いろいろその間の事柄を話した訳ですが、従って対校クルーの乗るエイトは、今後ワイルド・ローヴァー号に統一して、新艇のできるごとに、2世、3世、4世……と続けて欲しいとお願いした訳です。又、ボート部OBになっても、同じワイルド・ローヴァー号に乗ったという共通の気持というか、運命的なものというか、そういう卒業して何年もたっても、共通のボートに対する若き日のロマンを共有出来ることが楽しい思い出になると考えました。

そして、私は何世号に乗ったとか、おれは何世号だったとかいう各世代の共感とか、時代の流れみたいなものも互いに持てるのではないか、という気がしたのです。幸いにも、私の提案を入れて下さいまして、今日では既に11世号が誕生して居ると知り、今更ながら、あの日、あの時の情景を思い出して、何故か、ほろにがい青春の感情におそわれて居ります。出来れば、今後共、このワイルド・ローヴァー号の名前が、同志社ボート部の代名詞の如く永久に続くことを願うものです。因みに私が新人の時には、ワイルド・ローヴァー号の初代号を練習艇として使用して居りました。それは、もう老朽化して駄目だったのですが、当時の新技術プラスチックでボディを固めて何とか、艇不足をカバーして練習にはげんだものです。尚、当時、これは先輩に聞かされていたのですが、この初代号が新艇の頃に、関選に優勝したそうです。なかなか縁起の良い名前の様です。もっとも、その後は、関選はもとより、全日本で連続優勝を果たしたのも、メキシコオリンピックに日本代表で出場したのも、このワイルド・ローヴァー号であったのです。

同志社は100年にして成らず、200年にして成ると新島先生は言葉を残されました。やっと100年です。次の100年の大いなる同志社ボート部の発展を心からお祈り致します。その時はワイルド・ローヴァーは何世号になっているのか、神のみぞ知る。

S37 松村晴夫

○「私とボート」

私の高校生活は特に勉強するわけでもなく、又、スポーツその他クラブ活動に熱中するわけでもなく、いわゆる中途半端なぬるま湯的な生活でした。

丁度その頃、土佐高校の英語の教師であり、現在土佐高校校長の松浦先生よりご自分の学生時代のボートの経験のお話をうかがい面白そうだなと考えておりました。大学入学と同時にとにかく体を使いきるスポーツで自分を思いっきり鍛えておきたいと思い、経験がなくても出来るボートというスポーツにとび込みました。それは思った通りきびしいけれど味のある団体競技でした。まさに青春そのものでした。一時期ではありましたが、本当にある力を全部出しきり、自分の能力を100パーセント使うという経験をさせて頂きました。

ボートを漕いだ時間は短かったですけど、その短い時間に、又、瀬田川に心より感謝しております。色々にご迷惑をかけた諸先輩や同時期の方々にもおわびとお礼を申し上げます。

どうもありがとうございました。

S38 増谷昭夫

○対京大教養戦は勝った事がなかったが、昭和35年やっとなとジュニア、新人共に勝ち、喜んだ事を覚えています。練習中に麦ワラ帽をかぶって練習して怒られたし、結構しつけの面も厳しかったです。

1年後輩の池畑君が合宿中の洗濯で、当時洗濯機がなく手洗いでやっていたのですが、何度洗っても泡が出ないと言ってくるので見に行くと、何んと石鹼の代わりに小麦粉を使っていたという事があり大笑いしたのを覚えています。

牛乳を毎朝交代で牧場まで買いに行き、毎日1リットル以上飲んで、茶漬けも牛乳でやったものです。今牧場はどうなっているでしょう？ 南郷よりも少し北の瀬田川の東側にありました。

S39 中原克己

○京大とのジュニア対校戦、1年の時対校よりジュニアに乗り替え、ジュニアエイト6番にて初めて京大に勝った。

3年の時、関西選手権決勝に於いて積水化学と同着再レースとなり負けた事。3年次よりオリンピック（東京）強化選手となり、関東の選手と共に陸トレを御殿場、伊豆大島で行った。

4～5年にかけて、シングルスカルで東京オリンピックを目指す。

昭和39年全国選手権レガッタ決勝

1 笠木（東教大）、2 中原（同大）、3 与謝野（東大）

代表決定レガッタ

予選 1 笠木(7'40"10)、2 中原(7'46"34)、3 与謝野(8'03"73)

敗復 1 中原(7'39"77)、2 与謝野(7'58"77)

決勝 1 笠木(7'35"30)、2 中原(7'40"79)

決勝は1900メートルまで先行していたが、ラストで負ける

S39 池畑勇

○合宿所の早朝、セミの声。あみ舟の油のにおい。定期汽船のひき波。オールにつけたグ

リースの香り、スライディングシートの堅い感触。炎天無風の湖上でのロングパドリング。レースをスタートする時の緊張。手のひらのタコ。そして比叡おろしの寒風の中の陸上トレーニングが私のローイングのすべてでした。今では求めても手にはいらない汗と涙、そして仲間と笑いあった青春です。HAPPY ROWING FOREVER！

S40 池田宜郎

○あの細長い船体を中心に、左右に整然と並ぶ8本の長いオールが、水面をリズミカルにキャッチし、8個の渦を等間隔に残しスイスイと進んで行く。あの華麗なボートの魅力に誘われオールを握った。見かけの華麗さとは程遠い、過酷なスポーツであった。体の丈夫でなかった私を鍛え、勝つ事への努力を教え、数多くの知人・友人を作ってくれた。これらが皆、実社会に出て自分を支えてくれている。同志社でボートをやれて良かった！

S40 山田義弘

○同志社大学に入学して、さてこれから何をしようかと思っていたとき、ボート部から勧誘、何も判らなく入部した。そして現在までボートとは何か、おぼろげにしか解らない。ただ青春時代を同志社に入ったこと、ボート部で過したこと、ボート部での友人を得たことをこの上もなく幸せに思う。「青春が輝いていたとき」、我々はそれを取りもどすことは出来ないが、決してそれを忘れないでおう！

S40 丸山英敏

○私にとっての同志社ローイングとは、19、20歳の正に青春です。京大との教養戦の合宿中盲腸になり入院した。1週間の入院生活により、このままボートを続けるか、それとも司法試験をめざして弁護士になるかと考える機会が与えられた。当時監督をされていた内田先輩に決意を表明して退部させていただいた。それから苦しい時もあったが、同じ釜の飯を食べて合宿した皆に合わせる顔がないと頑張った。青春とは、夢多くほろ苦い。

S41 鷺北東

○創部100年を迎え、OBの一人として心よりお慶び申し上げます。

卒業以来早や23年という月日が流れましたが、ボート部会報を見たり、先輩や校輩との会話の度に、ついこの間迄ボート部の活動をしていた様に感じます。

OBの一人として校輩や部の為に何の役にも立てず、誠に申し訳なく思っています。この機を借りましてお詫び致します。

今回、佐野先輩より、部設100年を祝し、何か一言というお話を戴き起稿させて戴きました。数多いボート部経験者の中に、そんな奴も居たんだよ、という気持ちで書かせて戴きます。

私のボート部への入部の動機はマネージャー不足の状況下、私の友人阪本章が声を掛けてくれたのがきっかけでした。漕ぎ屋でなくマネージャー、それも「メシタキマネージャー」として、入部したのです。ウエイト52キロでは当然かも知れません。中学より高校迄バスケット選手としてスポーツ活動をしていた私にとってメシタキマネージャーとして入部することは、少なからず迷いがあったのも事実です。

しかし、マネージャーとして入部しても、スポーツ活動をすることに変わりがない、俺もスポーツマンだという自負さえあればいいのだという一つの開き直りの気持ちが決断の要因といえました。卒業する迄の丸3年間メシタキマネージャーとして、瀬田合宿所でメシ作りに専念し、朝も夜も毎日が食事を作ることの明け暮れでした。

私が何故メシタキマネージャーに専念し続けられたのか、それは先ず第1に素晴らしい先輩達に出会えたことです。集団の中で自分は期待され、感謝され、またあてにされている、そして喜んでもらえ、親しくして頂ける、これは何としても期待に応えることが、使命の様に感じたからです。そして第2に同じメシを作るなら、安く美味しく、ボリュームがあって栄養価があり、且つ見た目が良いという、料理の理想を目標に1回1回の料理に一生懸命という気持ちが常に潜在化していたこと、この2点であったと言えます。今にして思えば、予算もなく借金状態の献立で作りが、結果として、工夫し、人から教えられ、努力出来たともいえます。選手達はハングリーでは駄目ですが、私としては台所事情が悪かったことが、逆に良かったといえます。「窮すれば通ず」でした。

先輩よりの肉の差し入れ、どれ程嬉しく助かったことか、自分にもらったのでなく選手達に美味しいものが食べさせてやれる、唯、この一心であったのです。この様な3年間というボート生活の中で、戦績的には、栄光をつかむという経験は一度もありませんでした。長い合宿生活のピリオドは戦果で評価されます。負ける度に先輩一人一人が私に「すまなかったなあ、一生懸命メシを作ってくれたのに」。そして我々マネージャーは、選手達の苦しい練習に比べたら自分たちの仕事など月とスッポンに思っていましたから、残念会での酒は互いに泣き合う素晴らしい美酒であったと、社会人となりいつも回想にふけています。

思い出の光景。ある真冬の雪の降る早朝、牛乳と朝食用の買物帰り、瀬田唐橋の上から、我が同志社ボート部のワイルド・ローヴァーが力漕ぎして唐橋を通りすぎるのを見た時、何か心に熱く感じたことを今でも覚えています。

私の人生の中で、ボート部生活の青春は、忘れ得ぬ大きな一ページでした。現役の諸君達よ、何事にも一生懸命であれ！ そうすれば何かをつかむことが出来る！ 私も人生の航路を、栄光のゴール目指していつもボートを漕いでいる。休むことなく、一生懸命に…。

S41 森岡正宏

○瀬田川のにおい、合宿所の生活、同志社のボートマンに対するあの地域の人達の温かい人情などが私の学生生活を実りあるものにしたことに感謝している。苦しい遠征合宿や関西選手権で優勝できたときの思い出なども私の人間形成に大きな役割を果たしてくれたと思うが、OBになって離れていてもいつも心が通い合う同志社オアズメンがいるという喜びは何にも代えがたい財産である。私はいつも同志社のオアズマンであったことを誇りに生きている。

○昭和37年、私が入部したときは、まだ合宿所艇庫がなく東洋軒の裏の方の民家を借りて合宿していた。先輩達の合宿しているところへ私は瀬田で買ってきた原乳を自転車で届けるのが日課であった。寺西コックスがそれを温める役目をつとめていた。漕艇部は貧しく、借金だらけだったようだ。合宿の食事今では考えられない程粗末なものだったが、皆よ

くがんばっていた。しかし、艇は走らないし、部の財政は悪いし、どうにもならない状況だった。石本先輩が主将になられたとき、私は主務になった。これまでエイトに乗っていたのに、石本さん達は主として財政上の理由と一から出直すため、シェルフォアに乗られた。

あえて乗りたいエイトをやめて、財政建て直しのためアルバイトを続けられた石本さんや同期の人達には申し訳ない気持ちであった。私も資金集めのため全国のOBをたずね廻って協力をお願いした。又、強くするためには優秀な新人を確保することだといわれ、富田コーチのご指導などもあって、秋田高校、会津高校、米子東高校などから優秀な選手をとることができた。ほとんどが東京の大学を目指していた彼らであったが、あとで考えるとこれらを同志社に入れたことは、後のメキシコオリンピック代表になったことや全日本選手権をとってくれた原動力の一つだったと思う。私達が4年のときは関西選手権優勝だけだったが、後の黄金期を迎えたのは石本さんの同期の人達の団結力と苦労があったからだということを忘れては申し訳ないことだと考えている。

S42 新美康則

○ボートが好きで入り、もっともっと好きになって卒業しました。漕ぎ屋、飯炊き、2軍のコーチといろいろ経験する事が出来ました。それぞれが楽しい思い出ですが1時間、2時間パドルは今思い出してもぞっとします。2回生クルーの時、関西権手権で京大に勝てた事は嬉しい思い出です。来る日も来る日もオールを握り飯を炊く、努力なしではなにも始まらないと教わった気がします。合宿所を、皆んなの顔を思い出し、懐かしく、勇気づけられています。

S45 新井喜範

○「ワイルド・ローヴァー号の夢」

1864年、新島先生は大いなる希望を胸にワイルド・ローヴァー号に乗り太平洋を越えアメリカへ渡られました。

それから100年余り、1968年我々ボート部は先生と同じく愛艇ワイルド・ローヴァー号を駆って太平洋を渡り、メキシコオリンピックにチャレンジしました。運よく当時のクルーに乗り合わせた者として正に身に余る光栄、感激の極みでありましたが、それは、オリンピック参加という光栄だけでなく同志社に学ぶ者として新島先生の志の何分の一かを共有できたという感激でもあったからなのです。

ワイルド・ローヴァー号で世界に挑戦するというのは我がボート部の持ち続けるべきテーマですが、それは競技レベルの次元だけでなく同志社大学生として必要な志の次元をも併せて持っていなければならないはずです。

○歴代ワイルド・ローヴァーの消息

ワイルド・ローヴァー二世 現存（合宿所）
（デルタ造船所製造）

- ワイルド・ローヴァー三世 鳥取県漕艇協会へ寄贈 漁船と衝突 大破
(桑野造船所製造S41年進水)
- ワイルド・ローヴァー四世 メキシコオリンピック使用艇 メキシコ漕艇協会へ寄贈
(デルタ製S43年進水)
- ワイルド・ローヴァー五世 S63年5月岡大へ30万円で売却
(デルタ製S43年進水) H元年淀川で橋桁に衝突 大破
- ワイルド・ローヴァー六世 現存 (合宿所)
(KENJI号 デルタ製 近藤憲司氏寄贈
S44年進水)
- ワイルド・ローヴァー七世 S61年鳥取県漕艇協会へ寄贈
(デルタ製) 代わりにS.F、S.Sいただく
- ワイルド・ローヴァー八世 S60年島根県漕艇協会へ寄贈
(デルタ製 S56年進水) 代わりにS.F、S.Sいただく
- ワイルド・ローヴァー九世 現存 第3エイト使用
(デルタ製 S56年秋進水)

S45 小林 徹

○「悔恨の退部」

留年かボート部かの選択に迫られ、2年次で去った私に、翌年TVで見た同僚達の全日本での優勝、そしてメキシコオリンピック出場は、誇らしげであり且つチャンスを逸した悔しさで、その後夢でオールをよく漕いだものでした。

青春時代の最大の挫折感と言うものを与えてくれた思い出と、短くとも思いつきりかいた汗のさわやかさが、人生の大きな1ページとして残るでしょう。

S47 横山基嗣

1回生初めてのエイトのレースが入部してすぐの春のリーグ戦でした。そのときラダーのひもが切れてコックスの鈴木さんがラダーなしでクルーを誘導、見事に唐橋をくぐったことが印象に残っています。

2回生、セレクションで入部しながら対校に乘れなかつたくやしき。その年、私がジュニアエイトのクルーリーダーになり、同学年7人1回生2人のクルーでオックスフォード盾で2位になったときのうれしかったこと。

3回生、対校エイトに乗り、全日本の決勝に出られました。結果最下位になりましたが、そのスタートのときの「もしこれに勝ったら日本一になれる！」と思った緊張感、喜びは忘れることができません。

4回生、対校のクルーリーダーになりましたが4回生2人、3回生2人、2回生5人というしろうと集団でありました。でも高橋潔コーチのもと練習につぐ練習をやりました。私自身どんなクルーであるか分かっていたつもりで、3回生、2回生が上級生になったときに日本一になってくれたらと思い、基本練習、ロングと、とにかく漕ぎに漕ぎまくりました。その結果朝レ、関選と勝ち、全日本に臨み、同志社、東大が優勝候補に上がり、結果東大が勝ち、我々は負けました。しかしその2年後、そのときの2回生だった者たちが見事全日本優勝をなしとげてくれました。また私がコーチをしていたジュニアもオッ盾優勝とダブル優勝をやってくれました。本当にうれしかったです。

現役時代、もちろんいろいろありました。苦しい練習、長い合宿……。

今でも申し訳なかったと思うこと。

我々の同学年の者がたくさんやめて行き、残ったのが3人。その中でチーフマネージャーをやる者がおらず、1学年下の若菜君を神戸の喫茶店に呼んでチーフを引き受けてもらったこと。あのときのあいつの涙は忘れられません。

監督をやらせてもらっている中で、またいろんなことがあるでしょうが、学生スポーツでも、やるからには勝つことを目指してやらなくてはならないと思います。学生スポーツは勝つことが第一ではないという人がいますが、私は、学生スポーツは厳しい練習を行い、そして勝つ。これが第一だと考えてやっていきたいです。

S49 小松研一

○昭和47年・48年のオックスフォード楯杯クルーメンバー47年、コーチ桜田、COX西村、整調湊、7番梅田、6番小松、5番佐藤、4番畠、3番宮地、2番植野、BOW坂本。48年、コーチ横山、COX中野、整調小松、7番坂本、6番早川、5番佐藤、4番山口、3番矢島、2番武尾、BOW寄藤。

47年のオックスフォード盾クルーは「リズム」、48年のクルーは「力」で漕ぐ対照的なクルーで、1年生が3人、出戻りが2人。「悪漕は良漕を駆逐する」というか「短所は見ず長所を伸ばす」クルーと言うべきか。準決勝1900メートルで5番が落水するハプニングなど、今となっては大変思い出深いクルーである。

S49 山形彰人

○・私が3年のとき対校エイトはジュニアエイトにいつも負けていた。

- ・4年生のときのジュニアエイトは、9人でゴールするところ8人でゴール、ダントツのオッ盾優勝だった。某新聞で「真夏の怪」と記してあった。
- ・四方、内田、高橋さんのコンビは名コンビであった。鬼・技術・情の理想的なミックス。そして高橋のおやじさん。とてもなつかしい。
- ・私が4年生のとき、全日本で勝ったら海外遠征との約束をコーチ、監督としたはず。ところが勝ってもなんの音沙汰もなし、あの約束の行方は!! ヘンレーレガッタに出場もよいが、あの約束を守ってもらえればうれしい。
- ・2年生のとき、ある米屋に米を買いにいったら、売ってもらえなかった。あの米屋の借金は返したのか。

○舟を止めないキャッチ、8枚のブレードが舟を止める力の怖さを知るべきです。この力

を計測してみても？ 良いキャッチとは艇速に合った毒にも薬にもならないブレードの入水です。私はこれを0（ゼロ）キャッチと名付けます。そしてスピード×体重、次にピッチングしないフォワードでの体重移動です。脱力、蹴り出しのスピード、加速、ハンズアウェイ、そして仲間です。勝つ事によって生れる「ゆとり」が私が得た同志社ローイングです。

S49 長友清利

○『一艇ありて一人なし』

私は4年間COXでした。全員ボート未経験の新人エイトのCOXからスタートして、対校エイトのCOXで卒業しました。その後、出身地宮崎で就職してからもボート競技を続け、第44回北海道国体にも現役COXで参加しました。標記の言葉は在学中に知りましたが、社会人として組織の中で働くようになって、又結婚して家族をもつようになって、なお一層その意味を考えさせてくれます。

これが私の同志社ローイングだったのでしょうか？

S50 植野誠之

○協調・継続・忍耐・歓喜。入部以来、3年生の末に腰痛で艇を降りるまで、オックスフォード・中日本初優勝等戦績にも恵まれた。何事も努力すれば報われるという実感。更には、この腰痛が原因で28歳の時の大手術。健康の大切さの実感。又、4年間身体は使うだけ使ったという自信と、その反動による卒業後の学習。いいことづくめのようだが、実はそうでもない。但し、大学を想う時、何か自分には帰る所があるといった気持ちが妙に嬉しい。

S52 荻野義明

○私は今日までにボートで3回泣いている。二回生のオックスフォード盾レガッタ準決勝。台風の中のレースで敗復上がりの一着。翌日、オッ盾三連覇のかかった決勝は台風のため中止。その夜、マネージャーになることを通告され大泣きした。

四回生の戸田。インカレは準決勝敗退。優勝は立命館。国立艇庫のベランダで一人泣いた。

卒業した年の朝日レガッタ。早稲田との一騎打ち。キャンパス差で優勝。大酒飲んで泣いた。

壁にかかっている現役時代のパネルを眺めると、たった一枚でもこれだけのことが昨日の事のように思い出される。その時の悔しき、感激を思い起こすだけで身体が熱くなる。このことは私の生活の大きなエネルギーになっている。だから他のOBがそうであるように私もまた、ボート部に感謝している。

三回の泣きが私を亡霊にしている。もう一度戸田で勝つまで成仏できないでいる。この無念の思いが、私を金集めにレースの応援に駆り立てる。早く成仏させて欲しい。戸田で勝った翌日から、金集めにも力が入らなくなると思う。その時私は、大酒飲んで四回目を泣きながら成仏する。

S52 河畑宜伸

○1回生。はじめて乗った艇がナックルフォア。艇名は“さんたすにはごう”すなわち3+2=5。3回生の宮地さんに熱心に指導してもらいました。瀬田の夕日が美しく、「4年間ボートをやろう」と自分に誓いました。

2回生の秋、対校3番全日本選手権準決勝。スタートから東レ滋賀が先行し、同志社が追漕。1500メートル付近で半艇身までつめより、“足けり”の連発であったが、最後はラストパートでかわされた。(2艇あがりで、決勝は1位東レ、2位日大、3位同志社、4位明治)

1500メートル付近で「同志社ガンバレ」という岸からの声が聞こえた。勇気100倍、全力で足けりをし、自分のもっている力を全部出した。全力を出しきった満足感のあるレースだった。

○「初漕ぎ」

比良の山並が遠く、うっすらと雪化粧。1年に1回、年の始めにオールを握る。先輩・後輩達9人とたった1回だけのクルーを組む。「サイドはどっちだったかな?」。卒業後何年経っても、それぞれ自分の得意のサイドにこだわる。

どこの放送局か、ヘリコプターが青空にパタパタと舞う。“グイッ”と一升瓶をラッパ飲みする。なんとも心地良く自然の中で味わう、最高のぜいたくである。「スタート用意」、ピリッと神経が張りつめる。「用意、ロー」、スタートすると今までの余裕はどこへやら、皆どこよりも早くと願いながらゴールを目指す。腕が張り、息が切れる。過激な運動に正月ボケした体もびっくり。「足けりー」とコックスが叫ぶ。「ボートはやはりハードだなあ」と改めて思う。

やがてゴール。そして、それぞれの1年がスタートする。「今年もよい年でありますように……」学窓を巣立ち10年余、いつまでも大切にしたいボートとのかかわりである。

S52 山口忠博

○私にとってのボート部での4年間は、まさに青春そのものであったと思えます。クラブ生活(合宿生活)を思えば、当時の自分にとっては、怖い先輩、やさしい先輩、そして同期の仲間との考えの相違等々で、思い悩んだことが今から思うとなつかしく、又可愛らしく思い出されます。そして、今、今日、ここに自分があるのは、本当に同志社ボート部のおかげであると思えるのです。本当に感謝しております。

S54 藤井 浩

○174.5センチ、66キログラム。部内で最も軽量・非力・瘦身の私だったが、3回生の春から対校クルーを経験させてもらった。

デビュー戦となったのは5月の朝日レガッタ。30回記念大会という事で出艇も大会史上最多となり、殊に精鋭早慶を迎え打つ大会だった。

シートは2番、前日の準決勝まで一着で上がったものの連日の風雨で思う様に走らず、緊張と不安の中で臨んだ決勝レースだった。

夢中の1000メートル、終わってみれば早稲田に一艇身を明け、3分1秒9での優勝だった。艱難の下積みの末に最高の勝利の喜びを味わうことができた。

あれから10余年、今でもエイトを見るたび、あの時の感動が蘇り胸に鼓動を覚える。

S54 木村俊雄

○私がボート部に入部したのは、ボートは大学生になってからでも始められるスポーツのひとつであり、また同大ボート部は体育会のクラブの中で“日本一を狙えるクラブ”のひとつでもあって、自分自身、大学生活の中で、大きな目標として“日本一”にチャレンジしてみようと考えたからでした。そして2年生のとき瀬田川杯で優勝の喜びを味わい、翌年には関選優勝、インカレ決勝進出、最終学年ではオッ盾2位と充実した戦績を残すことができ、ひとつのことに打ち込む体験を持つことができました。ここで自分の中に形成されたものを生かし、目標に向かって邁進する人生を送りたいと考えています。

○昭和50年4月、好奇心に胸弾ませて入った学生生活であったが、講師の顔がかすむほどの大教室での講義やマージャン・パチンコ・バイトに明け暮れる周りの友人達に空しさと物足りなさを感じていた。そんな時、新聞で「学生NO.1の同志社に東北大が挑む」という朝日レガッタの記事を目にした。学生ナンバーワンという言葉に魅力を感じ、日本一を狙えるこのクラブに入部した。

練習は厳しく、入部以前には想像もつかない程の質量ともに充実したものであった。だが、そうした練習で培われた体力や精神力、毎日の規則正しい生活のリズム、レースをめざしての計画的な活動、ボート部という組織の中で育まれる協調性などは、私の現在の生活の基礎となり生活信条となっている。ボート部は、私の学生生活を、人に自信と誇りをもって語れる最高に充実したものにしてくれた、と今感じている。

S54 高橋正樹

○朝日新聞で朝レでの同志社クルー紹介記事を見たのがきっかけで入部し、1、2年生、ジュニアでレースに情熱を燃やし、3年生からは主務として充実した生活を送ることができました。創部100年を迎え、さらに200年を目指そうという同志社ローイングの歴史の1ページを担えたことを誇りに思います。後輩の諸君、がんばってください。

S56 野瀬正治

○昭和55年の第20回オックスフォード盾レガッタの決勝は、今でも快く思い出される。その時私は、整調のシートにCOXと向かい合ってスタートを待っていた。右のレーンには東大がいた。当時の東大は、全日本とオックスフォードを2連覇し、全盛期を迎えていた。左のレーンには京大がいた。京大もその年はピークを迎えていた。当時私達のクルーは、6月頃から良く走るようになった。特にグッシュ3本からの30本インターバル練習は、良く走った。その時の艇が水を切る音、水面を飛んで行く様が、やがて再現される。“よい、ロー！”の合図とともに入った。スタート3本からのスタートスパートで私達のクルーは見事なほどトップスピードに乗る事が出来た。東大クルーも、京大クルーも止まって見えた。300付近でコンスタントピッチにセトルダウンした時、東大クルーのミドルペアの背中が視界に入るようになっていた。京大クルーは遠くに、その紺色のユニフォームを確認できた。

私達はコンスタントピッチ34から35だった。通常のピッチより一枚は高かった。東大は

前と後ろに大きく漕ぐ漕法であった。ピッチは私達クルーより数枚低かった。

1000付近から東大クルーはピッチを上げ始めた。彼らの艇からスピード感は感じられなかったが、確実なストロークで追いつけ始めてきた。しかし私たちは私たちのクルーを信じていた。あわてず1本1本でいいなオールを引いた。1200付近から、私達のクルーもCOXの声で要所要所に足けりを入れた。クィ！クィ！と艇が確実に伸びた。東大クルーのCOXも必死に声を発していた。1800メートル付近から、私達クルーはラストスパートに入った。あとは無中だった。"パアフ!!" という、ゴールを告げる審判の出す音が耳に入った。私達のクルーは戸田コースの決勝でトップでゴールを切ったのだった。東大クルーの熱気と迫力はもうなかった。何人かの東大クルーメンバーが私達クルーの方を振り向いていた。

この時の勝利は、私の人生に大きな影響を与えた。自分のボート観を確かめたくなり、もう一度オールを東レで握る事になった。そして現在は、オールこそ握らないが、"集団の生産性とは何か"を問い続ける仕事に就いてしまった。ボート万歳!!

○今でもいろんな事が思い出される。オアズメン、そしてワイルド・ローヴァー5世との出会い(漕げば漕ぐだけ走る頼もしい奴だった)。冬のオリオン星座。トップでゴールしたオッ盾決勝。艇が水面を切る音。朝霧の石山寺。南郷一周ランニング。艇に寄せるさざ波。インターレーケン。真夏の太陽。キラメク水面。サーキットにウエイトトレ、綱のぼり。シーズン初めの手のマメ。スタートスパートそしてラストスパート。等々、今でも懐かしい……。

S56 中住慎一

○3回生のときのジュニアエイト、オッ盾決勝まで進出しましたがあえなく6位。しかしその時同じクルーに居た下級生たちが、次の年オッ盾を制してくれました。また4回生のマネージャー時代はちょうど新合宿所への建て替え時期。中辻君、石田君、内海君らと金策に走り回っていました。

S57 林 圭介

○同志社ボート部において、様々な経験をさせていただいた事に厚く感謝します。

新人、第3クルー、Jrクルー、オッ盾優勝、対校クルー、マネージャー、学連、飯たき、金集めetc.私にとってかけがえのない4年間でした。

現在、体力の少々な衰えは感じますが、ボート部で得たものは私の心のよりどころ、突破口を開く努力の姿勢、目標への挑戦意識となって生き続けています。

体育会ボート部にいて本当に良かった。

S57 河毛 樹

○私にとって同志社ローイングとは何か。

自分を見詰めさせてくれた所。

S58 貝賀俊之

○ボート部での4年間は非常に苦しい4年間だった。しかし、今振り返ると私にとってな

くてはならない4年間だった。

優勝したわけでもなく、又主力選手であったわけでもないが、今生きていく上で何か自信のようなものを与えてくれている。

S58 武田泰一

○小生2浪の末の入学ということもあり、全く無軌道な知識欲、体力欲のなすがままボート部に入部。まずセレクションの多さに驚く。彼らとまともに勝負はできぬと感ずる。が、幸い2年生時に対校メンバーとしてインカレ4位。以来勝ち知らず。4年間ほとんどもうろうとしており、思い出すことは、いつも息切れをしていたこと。いつも雨を望んでいたこと。今、漕いでおります。ローイングは28歳から！

○入学以前より、強いクラブへの入部を望んでおり、さっそくボート部入部を決意しました。その当時、セレクションメンバー（杉木、吉田、小森、阿部）が早々と練習をしており、とても彼らといっしょに競争し勝てるとは思ひ辛かった。幸い、入部当時のキャプテン小関さんへの憧憬、2年生時Jrクルーのクルーリーダー荒山さんのリーグシップに支えられ、厳しくも楽しい4年間を過ごせたと思っております。今でも（当年32才）ボートを漕ぎつづけ、国体にも出場しています。2年生の夏に偶然にも対校エイトメンバーに選ばれ、インカレ4位を経験したことは大変印象深く覚えておりますが、それ以降強力メンバーと言われながらずっと勝てずじまいであったことに非常に責任を感じております。

また近年までの同志社の弱体化も我々の代からと考えております。

S58 高山一也

○過去の話をしてても現役には昔話としか聞こえませんが、現在の話をしてします。3月12日に石川県でエルゴ大会がありました。先日大津で行われたのと同様のものだと思います。これに参加した私は2500メートルを9'3"9、1000メートルを3'22"7で漕ぎました。県内の最高成績は高校生が出しました。使用機器はコンセプト2エルゴメーターです。昨年のオリンピックでは選手の選抜にこの機器が使用されたと聞いています。

さて、同志社にはこのエルゴが何台あるのでしょうか。石川県には平成3年の国体を控え、14台あります。当日関西でのエルゴ大会の成績も貼り出されておりました。残念ながら同志社の名は上位には見当たらず、世界のレベルからもまだ遠い所にあるようです。創部100年という節目を迎え、記念誌を編集するのもよいことでしょう。しかし数年ぶりに参加した追コンでのお祭り騒ぎ、現役の「軽さ」を見ると、今年も期待はできません。

私自身、本年も、ボートに、自転車に、選手として参戦する所存です。

○私にとってボートはライフスポーツだ。戦績は3回生のオッ盾3位が最高だが、未だにスタートの緊張感と勝利の瞬間が忘れられずに漕いでいる。同大での4年は13年のボート人生中、最も高密度だったが無駄も多かった。私にはスピード、持久力と身長が不足で、結局、対校には乗れなかったが、今思えば随分と不要な練習もした。必要な事は何故ボートを漕ぐのか、どうしたら勝てるかを考え漕ぎ続ける事である。

S59 谷口幸一

○昭和58年新春、新4回生と監督コーチの間で練習内容や練習指導のありかたについて何

回か合議の場をもったが、途中双方で感情的に決裂、監督高橋潔氏と対校コーチ城生清孝氏、ジュニア・コーチ吉田寛伸氏が辞任された。

当時、自分を含め、入学以来一度も全日本のタイトルとは縁がなかった。わがボート部には毎年秀れた人材が集まるのにことごとく素質をつぶしている気がしていた。また当時、東大、一橋大、東北大らの時代であったが、中央大がまったく新しい発想から完全に科学的な理論に基づく練習方法を開発、実践し、その年初めて全日本のタイトルを奪った（その後も連覇）。そういう新しい時代の流れの中で新4回生となったとき、「8月になって後悔するROWINGではいけない」というただ1点のみに固執し、たとえそれがどんなに困難であっても全日本のタイトルへの最短距離であるならば、監督コーチと対立しようと、頭の固いOBからなんと言われようと、クルーとクラブでまとまって信念を貫き通すしかない日々努力した。結果、インカレで準決勝敗退であったが、わが同期生は全力でやれるまでやった自負と満足感が残った。これは今でも社会人として小生の大きな糧となっている。ただ残念だったのはクルーの中からも、クラブの後輩の方にも焦りと不安と不信から脱落していく者が出てしまったことと、シーズン後半は完全に自分を見失っていてゆとりがなかったことである。前部長であった故出石教授には大変ご苦勞をおかけしたが、我々現役の相談相手となっていただき本当に有り難かった。OBの中には叱咤激励して応援してくれる方もあり、心を支えていただいた。今も深く感謝している。

○当時のオールと艇について

私が1、2年生のときはすべて木製オールで、ライトブルーの色は少し緑がかった。大学3年春（S57年）、他大学がカーボンオール（ブラックシャフト）を導入し、実績をあげているのを機に部として対校エイト用にアメリカよりCONCEPT 2というオールを10本輸入。ブレードが大きすぎ対校には使えず、後にブレードを独自に削るが失敗。その年このオールはジュニア・エイトが使用。対校は木製オールにカーボンを貼り付けたタイプのもを使用したが、さして効果的でなく、皮肉にもジュニアのほうが速かった。昭和58年春より対校は全面的に新しいCONCEPT 2を導入し使用（ただし翌年は木製オールにカーボンを貼り付けたタイプのものに変更したらしい）。ブレードカラーはCONCEPT 2の導入とともに一般的な濃紺とライトブルーへ。また艇は、インカレ決勝レベルのクルーのみケブラー等の複合材使用艇を使用していた。わがクルーは依然として木製艇であった。○オールを置いた今、立派な社会人となる事がボート部への恩返しであると思う。たとえば仕事上でどんな逆風、嵐に遭っても決して逃げない事、正面から立ち向う気概と体力は誰にも負けないと自負する。

同志社での4年間は、日々の練習の中に埋没してしまっていて、チームワークとか信頼とかでは言い表せない「勝てる」という確かな自信が、結局当時の自分にもクルーにも育たなかったのは今でも残念。

当時の苦勞は自分にとって一生の心の糧となり、今の自分を支えている。

S60 岸本伸司

○人生の縮図ともいえる世界で過ごした4年間でまるで一生のように長くも、また、走馬灯のように短くも感じられるが、ボート部という母胎の中で培った産物は確実に私のバックボーンを形成している。

ボート部での4年間が在るからこそ現在の自分が在るといっても過言ではないほどだ。

S61 川崎五代嗣

○練習中のナックルフォア（膳所高時代）から見た、同志社エイトの華麗さと力強さに憧れ、入学試験を受けてからもう10年にもなる。諸先輩の『瀬田川の霸王たれ』との激励が重荷だった頃がいまや懐かしい。運よく対校に乗ることはできたが、「なぜもっと純粋に、食欲に、勝利を追い求めなかったのか？」の問いに、いまだ満足な答えを出し得ないでいる。

S61 田中義力

○残念ながら、レースでは良い思いをできずに終わってしまったことが悔やまれる。

4年間のボート部生活そのものが楽しい思い出として深く心に残っている。

季節毎の瀬田の風景、宮崎での合宿等々、次々と思い出がよみがえってくる。

S61 中村俊裕

○己のことを己で管理するのは当然である

自己管理は誰でも出来る。ボート部とは、他人の管理も自分の事以上に行わなくては行けない。

目的は一つである。しかし、達成する過程は各々違う。

何もかも仲間意識で助けあってはだめだ。

管理とは、自分のレベルで考えては出来ない。それは単なる干渉にしかすぎない。

管理とは、目的を達成するための水先案内である。

S62 樋口健一郎

○私にとって同志社ボート部はまさに青春そのものでした。2浪して同志社に入学した私はベトナム帰りの米兵の様に精神的に疲れていました。一枚の試乗会のポスターが私の人生を変えたと言っても過言ではないでしょう。一人っ子だった私はそこで一生の友人を得ることができ、合宿生活はまさにつらくも楽しい4年間でした。世間では上品とされる同志社人ですが、その伝統のイメージを守りながらも力強く生きてゆきたいと思います。

フレフレ同志社！

S62 森川博有

○入部当時、運動不足のため体重が88キログラムもあった私ですが、あまりにもハードな練習を繰り返すうちに、8月の全日本の頃には68キログラムに落ちていました。

あんな短期間のうちに20キログラムも体重が落ちたことが今でも信じられず、あの苦しかった日々は私のボート部在籍時代の最も大きな思い出となっています。

S62 佐藤亘

○ボートとは高校時代からのつきあいである。インターハイで2位に終わったくやしさを同志社で晴らそうという、巳年特有の執念深さとしつこさが入部の理由だった。……4年

の夏、合宿所入り口の「同志社大学艇庫」と書かれたロゴの「志」という字の一部が欠けていることに気付いた。思えば自分の大学4年間は、その気合とは裏腹に、沖縄国体を除きすべて負け続けた4年間であった。まるで「志」という欠けたロゴのように……。

唐突だが、負けつづけた理由を今考えるに、キャッチ前にフォワードのリラックスを強調するあまり、腕がしっかり伸びてなく、キャッチ直前にクイッと大きな動作とともに腕が伸び、キャッチしていたためである。これが、漕手の3～5人、キャッチのたびに行われていたのだからたまらない。キャッチ前の動作がピッタリと合うはずもなく、エルゴ測定では全日本クラスの体力があったにもかかわらず艇は走らない。

要するに、ファインナルの後、しっかりとキャッチ姿勢ができていなかったのである。あの当時のフォワード前期の写真を見ると、皆腕が曲がっている。たまたまそのキャッチ前の動作が合うときには艇が走るが、当然合わないときのほうが多い。キャッチ前に腕が伸びていなければ（張りがなければ）水中頭からのストレートなかり出しさえも出ないわけであるから、一層艇速を落とすことになる。蹴った足の力も、たるんだ腕を通せばすべて殺されてしまう。

なぜ、こんな基本的なことに気付かなかったのか。ちくしょう、あのとき気付いていれば、という気持ちの反面、気付かなかったのは勉強不足とボートに対する知識がまちがっていたからだと思えてならない。

勉強不足。まちがった知識。これは、何事によらずボートに第一順位を付する……勉強から私生活にいたるまでこの原則に従うという一見理不尽な、しかしわれわれが自らに課していた要求に十分応え得なかった結果だという反省に尽きる。もちろん当時は（現役4年間）一心不乱になってボートに賭けているつもりでいた。しかしアマチュアスポーツといえども結果がすべてというこの世界で、結果が出せなかったということは、やはり慚愧の至りである。ともあれ、この負けた原因である基本的なひとつの技術的欠陥に今になってはつきりと気付いたということがやりきれない。そのままボートから離れていれば気付くこともなくくやしがることもなかったものを、卒業後も現役としてがんばって練習し、勉強している中で気付いてしまったのだから。

「勝つまでは」「勝つためには」そんな気持ちと追いつ追われつ、自分は今、高校生などを指導しながら選手としても頑張っている。

○「勝ちぐせ」というものは「運」でもあるが、やはり大切なことだと思う。クルーの実力というのは、個人の實力ではないので（個人のエルゴメーターなどのスコアが良くてもレースで勝ったためしかなかった）そこがまたやっかいで、それでいておもしろいところでもあるが、一度勝ちだすと今までの實力のある個人々々の力がおもしろいようにかみあって艇の走ること走ること。レース中でも内心「おーらCOX、いつでも足蹴り来いや。いくらでも蹴れるぞ」そんな愉快的気分させてくれる。

ところが、實力があるにもかかわらず、どうしても勝てない（これはまだ實力とは言わないのだろうが）そんな暗闇で風船をつかむような状況の中ではいてもたってもいられない。自分達は強いのか弱いのか。何をどう練習すればよいのか、弱いのなら1からやり直し、強いのなら今やっていることを大切に積み重ねる。自分達がどちらなのかよくわからないから、どちらを選択すればいいのかもわからない。「まず練習でよく漕ぐ」とことと気持ちの上でふんざりをつかせてやってみた積もりでも、くやしいぐらいに心はあせっていた。

そんな4年のキャプテン時代だった。“勝ちぐせ”。こいつはくせ者である。こいつをつかむのに本当にいろんなことにチャレンジした。こいつがあれば多少しくじっても勝ってしまう。しかし、こいつがなければなかなか勝てない。もちろん絶対なる練習の量と質は前提として、そして実力のあるクルーでも勝てないのだ。果たして自分達は実力があったのか、なかったのか。

アマチュアスポーツといえども、勝たなければ話にならない。「勝ってからものを言え」と言われるOBの方々には、返す言葉もございませんが、勝つために頑張っている同志社のことを思うと、何ひとつとして協力（会費未納!）できていない自分が情けなく思います。○今でこそ、合宿所の前の道路には歩道もあり整備されているが、かつてその道路の整備工事中、夕方練習が終わりミーティングを行おうとして、当時の新井監督さんをお呼びのため「監督さーん」と桟橋に向かって叫ぶと、工事の現場監督が「おっ何か用か?」とぶちかましてくれた。

S62 奥谷勇人

○——諸先輩方へ——

貴重なアドバイスありがとうございました。

充実した時を過ごすことができました。

——同期の諸君へ——

主務の力不足でした。申し訳ない。ただボートに対する想いは誰にも負けなかったつもりです。

——後輩諸君へ——

・失敗は繰り返さない。・集中力・信頼・気合・努力・勉強を怠らない。（もちろんボート）

——最後に一言——

同志社大学ボート部よ永遠なれ!!

S62 高橋良明

○「どうして自分は毎日早寝早起きをし、きつい練習に耐え、ひたすらオールを手に漕ぎつづけるのだろうか」という疑問を現役時代によく感じたものだった。OBの方々は、みな4年間漕ぎ続けて、引退してはじめて同志社ローイングの意義、価値が解るとおっしゃったが、私が実際に部を引退し社会人として過去を振りかえってみると、確かに充実感、満足感があるが、現役時代にもっとボートを好きになり優勝したかったという悔いが残っている。今、私は学生時代よりもはるかにボートに引かれている。

S63 平松靖之

○「私にとっての同志社ローイング」——だれもがそうであろうが、様々な思いがあり、とてもこれだけのスペースでは書きつくすことはできない。ただ、多感なる大学4年間を、同志社大学ボート部で過ごしたという貴重な経験が、私のボート観に、そして、私の人生に大きな影響を及ぼしていることだけは間違いない。

H1 関谷晴彦

○勝つためにという目標に向け、試行錯誤しながら行った合宿生活、成果を発揮すべく立ち向かった試合、これらのすべては私にとって忘れる事の出来ないものである。特に大学4年間で得られた先輩、同輩、後輩、部長先生、学校関係者の方々、他のクラブや他大学の友人等は、私の貴重な財産である。人生の中では厳しい試練が幾つもあると思うが、ローアウトの精神とクルー一丸でのパワーの創出ということを肝に銘じて頑張りたいと思う。後輩諸君にはすばらしい学生生活を送り、声高らかにカレッジソングを瀬田、戸田で歌って欲しいと思う。

H1 西田智明

○2回生になったとき、自分を鍛えようと思い立ち、入部しました。私が幹部のときの監督は新井喜範、コーチは坂本雄二、藤井浩、林圭介の三氏、主将石田政隆、主務関谷晴彦、副将小生、会計井上周一でした。

H1 石田政隆

○8人のオールと気持ちが一つになった瞬間、キャッチとフィニッシュの音だけがあたりに響き、艇はまさに滑る様にして湖面を走った。何分間この状態が続いたのか分からないが、我にかえったとき、今まさに無心のローイングに酔いしれていたのだと自覚する。4年間漕ぎ続けて、この様な経験は数回だけである。しかし私は「同志社ローイング」から得た数々のすばらしいものの一つにこの一瞬を加えたい。

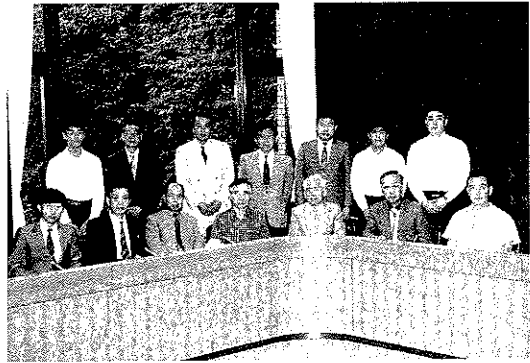
H3 内藤正樹

○私はボート部に入部する以前は、同志社のボート部が強く、伝統があるということを全く知らなかった。いざ入部しても、ボート部の伝統や強い時期があったということは記録でしか見ることができない。であるから私が思うには、ボート部の歴史や伝統も大切であるが、現役の部員は、いかに4年間で自分達が同志社のボート部にすばらしい記録を残すかが大切だと思う。

座 談 会

「同志社ローイング 過去・現在・未来」

出席者 同志社大学ボート部部长 岡本博公
同志社船友会会長 高橋 宗
同志社大学ボート部OB 太田豊彦
同志社大学ボート部OB 高井正明
同志社大学ボート部OB 森島昭三
同志社大学ボート部OB 下西辰男
同志社大学船友会幹事 池田宜郎
同志社大学船友会幹事 石本君夫
同志社大学ボート部監督 横山基嗣
記念誌編集委員 杉本茂雄



司 会 記念誌編集委員長 佐野関一

●100年史への熱い思い

岡本 本日はお集まりいただきましてありがとうございます。同志社ローイングは明治24年の「水上大運動会」に始まるとされます。その記録はちょっと手元に見つからなかったんですが、明治25年5月の「同志社文学165号」というのに「端艇競漕記」という、傍観生なる人の第2回水上運動会観戦記が出ておりまして、それによりますとこの年は同志社校内からは21クルー、各クルー5人ですから105人が参加して盛大な催しだったようで、さらに加えて泰西学館および三高との対校戦をやっています。いずれもぶっちぎりで勝ったと出ています。同志社は早くから関西のリー

ダーとして飛び出して行ったわけです。もちろん今日お集まりの皆さんでその頃の記憶をお持ちの方はいらっしゃいませんし、そういうこともあまり伝わっていないかも知れませんが、今日はこの百年の歴史をふり返りながら、おおいに語っていただきたいと思います。



岡本博公氏

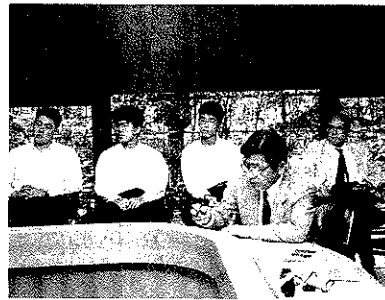
座談会に入ります前に、本年は校祖新島襄先生の没後100周年であります。また100年の伝統を築いてくださった先輩方のご冥福をもお祈りしまして、黙禱を捧げたいと思います。

(一同黙禱)

佐野 それでは進行役を務めさせていただきます。最初に艇友会の高橋会長に、何を願い、何を期し、どういうことを言葉に残すためにこの100年史を刊行するのか、その趣旨を語っていただきたいと思います。

高橋 分かりました。同志社ローイングもついに100年目を迎えるということになった訳ですが、この大きな歴史の節目で何か後世に残る記念事業をしようという話が前々からありまして、特に戦後の卒業生の方々からそうした声が大きく上がって来ておった訳なのであります。しかしまあ、これを本当に盛大にやるためには膨大な資金が必要であります、わたしが艇友会の会長になりましたから、あまりそうした才能がありませんので、そういう資金集めの方に自信をもつことができませんでした。それでもうすこし小規模のものでいいんじゃないかとも考えたりしておった訳ですが、若い人の熱意というものはとどまることを知りません。ただ100年だけではなくて、さらに200年に向かう出発点という意味でもここで精一杯のことをしておきたいという熱心な声が高まりまして、記念事業実行委員会も組織され、大いに盛大にやろうということになった訳であります。その記念事業の中で、記念誌の発行は、これだけはぜひ、どんなことがあってもやってほしいと私からお願いしたものであります。それは、何と申しましてもこの100年の伝統を営々として築いて来られた過去の幾多の先輩たちの事蹟を、今ここで記録にとどめておかなかつたら、もうだれも覚えておる者がいなくなってしまう

んじゃないかという思いからであります。例えば私が昭和8年に同志社大学のボート部に入りましたのは、その年の4月、今は記念物になっております今出川校地のチャペルで、英文科の酒井幸男さんという先輩で、当時名コックスといわれた方の入部勧誘の演説を聞いて感動したからであります。そのときの先輩の「今や50年になんなんとする幾多先輩の血と汗と涙で築かれたこの歴史を君たちがひきついでやってくれ」という言葉とその姿は今でも私の脳裏に刻み込まれております。また翌年昭和9年の4月5日、鉄橋の上流で練習中、タブボートが波に吞まれた事故があり、そのときに不幸にして亡くなられた四国の今治中学出身の宇高芳丸さんというコーチ



の方のことは一生忘れることができません。そして私が予科、大学と6年間にいろいろとお世話になった先輩の皆さん方、入部前の方々は故人となられておりますが、私がお目にかかり記憶に残る古い先輩では、第一に塚本純一さん、喜多一二郎さん、渡辺勇さん、関目成通さん、大谷保さん、黒川俊夫さん、元持勝一さん、特にご指導を受けた東辻嘉三郎さん、桜井弥一郎さん、杉浦良太郎さん、人見健造さん、戦後長い間、同志社艇友会会長をやっていただいた安井義人さん、横浜に在住され、艇友会の総会には必ず出席され、ボート部歌を愛唱され、全日本に出漕のときは必ず戸田に来ていただいた愛敬元成さん、現在もご健在の方では大町弘蔵さん、荒木節郎さん、そして戸田には必ず来られていろい

ろとその年のクルーのことをアドバイスしてくださる坂野公夫さん、先年まで艇友会会長であり、現在名誉会長をさせていただいている市田勇さん、比較的新しい先輩では、故人となられた方では同志社大学ボート部中興の祖といわれる神田重太郎さん、前述の名コックス酒井さん、やはりご指導を受けた久木弥一郎さん、そして私が入部したときの主将山辺正さん、理事森田信雄さん、ご健在の方では樋口明さん、戦後ボート部復興に最も物心両面にお世話になった大宮隆さん、一緒にクルーで漕ぎ固定席でご指導を受けた内藤謙二さん、1年先輩の松川寿久さん、乾正治さん、同学年では戦死した主将の円尾紀、青木喜三、病死した寺田英夫の三氏、1年下では復興に協力してくれた名BOWの山村剛一君は故人となり、小杉良平君は所在不明、2年下の平井弘一、吉年晃の両君は健在ですが、荒木茂治君は故人となりました。高商から進学してきた吉益四郎君は戦死し、同君と仲のよかった増子惣一君は年一度たずねて来てくれます。私の学部3年の年に入部した太田豊彦、田中羊一、榎坂景次、宮川正夫（故人）君、そして途中早稲田に転学した深井料一君（故人）等、数多くの先輩や後輩たちのことを私たちが今書き残しておかなければ、そうしたお名前が永久に忘れ去られてしまうのではないかと思います。私やここに出席の太田君は戦争に行き、幸運にも生還できました。殊に比島戦線で生き残った私はその感を深くいたします。また、戦前は大学と高商に分かれておりまして、お互いに敵愾心を燃やしてしのぎを削っておった訳ですが、その中でも新開明夫さん、堀井礼三さん、近藤憲司さんあたりは四国および京一中、京一商から優秀な漕手を集めて強力な高商クルーを育成され、ついに関西選手権を三度制覇されるという快挙を達成されております。こういうような歴史を今後とも後世に残したい、記録の中に止めて永久に忘れ去られることのないようにしておき

たいという願いを、私はこの100年史に強く託しておるような次第です。

佐野 どうもありがとうございました。高橋会長のお気持ちに感動しまして、私も至らぬながら一所懸命やらせていただいております。なことでございます。

高橋 戦後の方とか現役の方たちは、宇高芳丸さんという方が遭難死されたことは恐らくごぞんじないんじゃないかと思うんですよ。前の艇庫には太田君も知っておられますが、宇高さんの写真がかかっていました。いまはもうありませんから、だれももうそのようなことは知らないんじゃないかと思います。私にとっては予科2年のときにあったその事故が何か一つの大きなきっかけとなって、この小さい身体で最後まであのしんどいボートをやりとげることができたという気がして、忘れられないものになっているのです。

●戦前、戦中の状況

佐野 ありがとうございます。それではただ今の高橋会長のお話の時代からその後にかけてのころのことを、まず太田先輩からお聞かせいただきたいと思います。

太田 はい。私が同志社に入ったのは、昭和13年なんです。私が膳所中学でボート漕いだったもんだから、高橋さんがたまたまその時に膳所中学のコーチをしておられてそれで同志社へ来いというようなことで、同志社へ入ったわけです。そんな関係で予科の1年からボートを漕がされたわけです。当時ははっきり言って大学はあまり強くなかったですよね。高商の全盛時代だったですから。それで私も高商からも来いというふうなことを言われておったんですけど、まあ、高橋さんとかご縁で来たわけです。

それで、昭和15年に同志社大学のエイトとしては初めて関西選手権で優勝をしたわけで

す。その昭和15年には、予科からずっと進んで来た者、荒木茂治、武田喜蔵、榎坂景次、田中羊一、太田豊彦、宮川正夫、杉野寿男の

司会・佐野閣一



ほかに、まあ助っ人みたいなような感じでですね、高商から吉益四郎さんという人と、それから宮本清君というお2人ボート部に入ってきたわけです。吉益四郎さんというのは、京都一中出身で、それから宮本清君というのは徳島中学出身です。共にフィックスを漕いだ経験をもって同志社高商でずっと3連覇に貢献した人たちなんです。その2人が入って来て、それで昭和15年に関西選手権で優勝したわけです。次に昭和16年になりますとね、我々まあその昭和15年のときからもうそうだったんですけども、非常に東京志向が強くなりました。夏は東京で合宿しようということで、もう相手は全日本だというふうな感じでね、向島に合宿をして隅田川で早稲田の船台を借りて、練習したわけです。そういうことから刺激も受けておったし、艇の構造についても、ストレッチャーボードを立てて、少し上げようとか、レールを少し前に出すとか、いろんなことをやり始めたわけです。そうしましたら、私は腰に負担が非常に強く来て、腰をやられてしまったわけです。で、昭和16年は私は降りたわけです。それと少しボート部の中で意見の合わなかったようなこともありまして、まあ降りるということに私はしたわけです。1年休んで、そして昭和17年に再び私はまたボートに乗ったわけです。そのときはキャプテンとして乗ったんですが、そ

のときにはもう、昭和15年の優勝した当時のメンバーというのはほとんど降りておりましたので、杉野君だとか宮川君というふうな私よりも1年下の連中に新しく入った人を加えて、エイトのメンバーを作ったようなことでした。そのときの関西選手権は、あれは確か高商に負けたんだと思いますが、まあ、何にせよ、今から思えば古き良き時代だったという、全体的な印象です。

私はいまここに、……これ何十年ぶり、40数年ぶりぐらいじゃないかなあ。高井君と会ったわけだけれども、彼は私がちょうど昭和17年にキャプテンをしたときに、その年に新入部員として入って来たんですね。で、そのころの部員だった坂邦夫君だとか、國友藤策君だとか、そういう人たちが戦後に卒業してらるんですね。私は昭和17年の10月に入営していますので、それから終戦までは軍隊に行っただけで全然、その間の事情はわからないわけです。そのへんは高井君がよく知っておられるんでね、高井君に説明をしてもらえばいいと思うんですが。大体終戦前は、何年ぐらいまでボート部というものはあったんですか。

高井 ええと、学徒出陣が18年でしたか。

太田 そうですね。

高井 その後はもうほとんどありませんね。

太田 ああ、そうですか。

高井 ええ、そりゃもう学内もすべて灯が消えたようになりましてね。だんだん人数が減って来るし、もう新入部員は入って来ないし。もうほとんどそれで部活動というのは終熄したようなもんでしたね。

私が覚えている戦中の話を少ししますと、ちょうど私が入ったときは太田先輩がキャプテンでして、17年10月に御卒業でした。するとその次が18年で、これが今言った学徒出陣というので、確か4、5人の方が一度に姿を消されて、あの頃もう何もなくてわずかな酒を酌み合って薄暗い河原町をぶらぶら

歩いて、それでまあお別れしたというような形で、もうその後はこれといった記憶が私はありません。大阪商大との定期戦、これは宮川さんが確かキャプテンで、一度ありました



高橋宗・艇友会会長

けれども、宮川さんも学徒出陣で出られて、もうその後は次第に部活動というのは自然に終熄して行ったというような形ですね。

太田 解散式とかそういうのは……

高井 そういうものは一切やりませんでしたね。もう自然に息を引き取って行ったというような格好でした。私は19年に軍隊に入りましたので、私の後、まだ残った人がいたかどうかはわかりませんが、部活動というのはもうすっかりなかったわけです。もうあとは戦後ということになるわけです。

●戦後復興期の思い出

高橋 戦後でね、初めてボートを始めたのは、ここにおられる森島君と下西君です。龍大の昔の合宿所で合宿しておったんです。そこへ私が下駄ばきでとことこ出掛けて行って、俺が先輩やと名乗りを上げて、それが最初の出会いです。5月か6月だったと思うが。

佐野 では、森島さん、その戦後のスタートの頃のいろいろと難儀されたお話などお聞かせ願えませんか。

森島 はい。私は昭和20年11月に大学予科に入学しました。当時は予科練とか少年兵出身者、あるいは兵学校や陸士に入っすぐ終戦

になったという人達が多く、そういう人達のための復員兵の編入学という制度がありまして、そういった人たちの多くは運動部に入ったもので、私は中学時代は柔道部におりましたがボートは海軍の短艇しか知らなかったのですが、ボートをやりたいと思い、滋賀県からの通学の汽車の中で、いまはもう故人となりました坂邦夫さんを知り、それがボートをやるきっかけとなりました。坂さんの他、ここにおられる高井正明先輩、流郷吉勝さん、それから確か田島さんという方、それに私と同じく予科練から編入の稲井丸人君、かれももう故人ですが、そうしたみんなで河原町丸田町のある喫茶店でボート部復活の打ち合わせの会合をもちましたが、当時のことで別に何のごちそうもなく、水ばかり飲んでおった記憶があります。(笑) それからみんなで瀬



太田豊彦氏

田へ行きました。京大の艇庫に艇がありました。八咫とイーグルと、エイトが2艇ありました。八咫は穴も空いておりますし、リガーも外れてもう使いものにならなくなっていましたが、イーグルの方は今すぐにも使える状態でした。それでまあとりあえず艇を出そうということでやったわけなんです。私などは何しろどうやって艇を持ったらいいかも知らないというようなことで、ただ見ているだけでした。そして翌21年には下西辰男君が予科に入り、ボート部に入って来た。それからもう一人、内田君も入って来ました。そして田島さん、坂さんが卒業して行かれ、そうしますともうボートを知っている人は高井さ

んだけということになり、高井さんを筆頭に、私、稲井君、下西君、内田君、松岡稔君、そういった連中で、高井さん、あれ、石山の「鳥金」で集まりましたねえ。

高井 ああ、あの角っこだったかな。

森島 はい、まあいわゆる宿屋なんです。そこで一週間ほど泊まって練習しました。そして最初はレースに出るというようなことでなく、まず艇に親しみ、水に親しもうというところからスタートしたような訳です。まあほとんど予科の、艇を知らない者ばかりでやり出したというのが、終戦直後の昭和21年のことです。

しかし、食べる物がもうほとんどない時代で、空き腹をかかえての通い練習ではなかなか人が集まらない。部員の勧誘もしましたが、1日2日来てはもう来ない。だから、エイトを出してもシックスで乗るとか、フォアで乗るとかで、3番、4番、5番、6番、それとコックスで艇を出すとかいうような状況だったです。

昭和22年、関西の予科大会というのがありまして、いろんな体育競技について各大学の予科の試合がある。ボートもやはりあるということで、クルーの編成にかかり、そこで入って来たのが、これは中学時代の経験者であります磯田君とか、松山君。それから朝鮮から引揚げてきた佐原君などが入って来ました。で、磯田君が整調、それとやはり予科練から復員して来たもう亡くなられた松本捨男君、それから下西君、内田君、私、稲井君、松岡君、佐原君、コックスに松山君、そういう連中でエイトのクルーができて練習をしていたときに、唐橋の上から「コラー、同志社のボート！」って大きな声がしまして、誰か怒鳴っとるんかいなと思ったのが、太田さんなんです。

そこで初めてコーチという人が付いたわけなんです。で、太田さんにコーチを願って、予科大会に出ました。どうにか艇のバランス

が取れてエイトを鉄橋の下から蛍谷の所まで運べるという程度だったので戦績というほどのものではありません。どこの学校も大体そんなもので、当時コーチが付いて一人前にボートを漕げたのが同志社高商と三高、それから関大の予科だけ。大阪商大（現大阪市大）もコーチなしで私たちと同じようなことでした。立命館とか関学あたりにはボート部はなかったわけなんです。龍大はフォアで出てました。我々は京都府立医大の予科に勝って、そして関大に負けました。大阪商大と関大と京都府立医大と同志社の出漕だったと思います。

で、その当時の合宿は、高橋先輩もおっしゃった龍大の艇庫の二階を借りて、米やその他をみんなが家から持ち寄ったり、買出ししたりして自炊の合宿をしておりました。まあ合宿というよりも本当に青春を楽しんでいるというような風景だったんですが、そこへ高橋先輩が復員して来られたのです。

それから、先輩の皆さんが、ぼちぼち瀬田川へみえるようになりました。まあ記憶にありますのは、久木弥一郎さん、それから山辺正さん、森田信雄さん、皆亡くなられましたけど。それから山村剛一さん、非常に熱心だったです。そしてそのときひょろっと瀬田の唐橋、大抵顔を合わせるのは唐橋の所なんですけど、唐橋に平井貞男君が復員して来て姿を見せられ、同志社に復学して来ました。年齢的にちょっとわれわれと差がありましたので、彼も随分迷ったらしいんですが、やはり根っからのオアズマンで、ボートを漕ぐと言ってくれ、エイトに乗ってくれました。

そして本格的なボート部と艇友会の前身ができて、合宿所も唐橋の東角の「大橋屋」という、茶碗とか荒物のお店ですが、その二階に合宿しました。これが本格的な合宿の第一歩です。でも、その当時でもやはり食糧不足ですから、なかなか部員が練習に集まらない。だから部員を待つという、まあ辛抱と

いうんですか、平井君、下西君なんかとも一緒に随分辛抱して、部員の集まりを待ったものです。

そういうような形で徐々にボート部らしい、また艇友会らしいものができてきました。大宮先輩を担ぎ出したり、あるいは大宮先輩が、安井義人さんを担ぎ出して会長をお願いしたり、そうしたことで高橋さんに随分骨を折ってもらったわけです。その翌23年に高商との合併話が出て来ました。これは本当に高橋先輩に骨を折っていただきました。当時、いまから考えれば何なんですが、予科と高商との間でのライバル意識が強かったもので、なかなかスナナリとはいきませんでした。部をやめて行った者もありますし、エイト2クルーを選抜して、一つのクルーにすることについても下西君なんかバリバリの6番であったにもかかわらず下ろされたとか、いろいろあり、随分高橋先輩にお骨折いただいたことを記憶しております。

そしてできあがったクルーは、松井久男君、山田昭児君、平井貞男君、私、山本信蔵君、毛利匡之君、田中清君、高井先輩などで、体力的にも技術的にも絶対であるはずの選抜クルーが、インカレで一発で負けてしまった。私はここでボートというもののその怖さを、つくづくと思ったわけなんです。その後高商で卒業して行った人、また大学に入ってもボート部に入らなかった人もありますが、翌24年には新制大学となって平井君、下西君、私の他に山田善一君、堀井要壮君、加藤君、松本欣二君、西堀龍雄君、本間満秋君のクルーができ、やっと同志社大学のボート部ができ、今でも当時最強のクルーだったと自負しています。

そして、慶応出身だったんですが、京都一商OBの南部喜一さんを招き、コーチをお願いしました。高橋先輩を監督、南部さんをコーチとして新しいクルーが出来上がりました。下西 関選で三高と接触したのがこのときで



杉本茂雄氏

すね。

森島 そうそう、レースには私ら勝ったのですけれども、接触でコース侵害ということで負け。先輩の方にいろいろ心を煩わしてもらって、初めて戸田へ遠征させてもらったのもこの年でした。で、戸田で立教との定期戦、これに勝ったのが新聞に載ったので久木先輩なんかは慌てて戸田まで応援に来ていただいたというようなこともありました。全日本選手権へ初めての出漕でした。

そういうことでボート部の復活が昭和21年の春に始まって昭和24年の秋に形が固まりました。同志社艇友会、同志社大学ボート部の戦後復活は、こういように記憶しております。まあそのほかにも國友藤策さんという、こりゃもう名コックスですが実に口の悪い人で、復員して来て艇に乗ってコーチをしてくれました。

佐野 戦後初期のコーチをされて、太田先輩はどのような感じをもたれましたか。

太田 いや、私はね、いま森島君がいろいろ話をされたその時点においてはねえ、私も会社勤めをしておって、名古屋におってね、余り指導するというふうなこともできてないんですよ。で、ああ、なるほどなあと思って、今、話をいろいろ聞いて懐かしく思い起こしてるんですけども、その時点では私は余り本格的にコーチとかお世話をしたことはないわね。

森島 まあ、何といいますが、インスタントといいますが、予科大会に出る前に、どうい

うようにしてその艇のバランスを取るのかもわからん我々のような連中を、まがりなりにも大会に出られるようにコーチしていただいたわけです。戦後復活時最初のコーチということが言えると思います。期間は長くはありませんでしたが。

太田 森島君、戦後にね、大阪商大との定期戦は再開したんですか。

森島 ええ、やりました。

太田 いつごろまでやったんですか。今はもう消えていますでしょう。

森島 あのねえ、22年ごろだったと思うんですよ。1回やりました。21年か22年だったと思います。

太田 あれはねえ、僕が昭和13年に入学したとき、もう既に大阪商大との定期戦というのをやっていたからね。そしてずっと私が卒業するまで続いたわけで、さきほどの高井君の話で18年にもやったことは分かりましたが、それからあとの経過は知らないものですから。それはそうと、今、艇の話が出ましたねえ、八咫という……。

森島 はい。

太田 この艇はねえ、昭和15年に我々同志社大学のエイトのクルーが初めて関西選手権を取ったときの艇なんです。確か関西選手権の前だったと思うんですけども、東京で、隅田川で合宿しましてね、向島で合宿して隅田川で練習したときに、デルタ造船所で造った艇だと思えますね。で、イーグルは、私が昭和13年に入学したその時点においても既にありましたからね。高橋さんはそのへんはよくご存じだと思うんです。

高橋 確か昭和12年にできた……。

太田 私が入学したときはもうイーグルはありましたから。私は1年から本チャンの5番で漕いどったんですが、そのイーグルに乗っていた訳です。

森島 艇の話ですが、イーグルはこう、何とていうかU字型の……

太田 そうです、そうです。

森島 八咫はこう……

太田 V字型に……

森島 V字型になってた。

太田 バランスが非常に取りにくい。

森島 取りにくいですね。

太田 相当、その八咫は慣れた漕手じゃないとちょっと漕げませんよね、あの艇はね。

森島 重かったんですね。

太田 多少重かったかなあ。

森島 ええ。

太田 あれねえ、当時の東大の艇と大体同じ設計のものをデルタで造らせたわけですが、非常にバランスは悪かったですね。V字型ですから。まあ、そんなことを思い出しますね。

高井 結局八咫は乗らなかったんだよねえ？

森島 乗らなかったです。

高橋 八咫は壊れていた。

森島 イーグルのほうを直したんですよ。直してオールの足りないのを補ったりしましたね。

高橋 あのねえ、僕が昭和21年の8月にフィリピンから引き揚げて来て、そして昭和21年のもう11月頃にボート界は復活して、あそこで同志社高商が関西選手権を取ったのと違うのかな。同志社高商のほうが早く復活していたよ。

森島 21年です。

高橋 大学のほうはそういう調子やったけれども、高商のほうは割合にまとまりがよかったのと違う？

森島 それはねえ、やはり、いま高井さんが言われた、コーチなどやかましく言うような人がいたからです。われわれの所にはそういう人たちがいなかったですね。それで國友さんにしても、先ほどの太田さんにしても怖い先輩でしたがアツという間にどこかへ行かれた。一週間か10日、予科大会のときも10日ほどコーチしてもらったというように記憶しておりますがね。

高橋 終戦直後にすぐ、高商のボート部は復活したんですよ。

森島 そうですね。高商と関大の予科ですね。

高橋 それで四方久男君やら野々垣明君やら整調ペアで関西選手権取って、そして東大がこちらへ遠征して来て、東大とやってキャンパスかの差で負けたのは……

森島 21年です。

高橋 21年の秋だったね。

佐野 その高商ですけれども、鷺田平一郎さ



森島昭三氏

んという方がコーチされておったと聞いております。

森島 それは私の商業学校時代の先輩なんですけども。まあその当時僕が予科のボート部におるということで、鷺田さんと列車の中で話したことがあるんですけどね。まああの鷺田さんあたりは相当ライバル意識強かったですよ。当時大学予科と高商は本当にライバル意識がありましたね。

高橋 大学といっても、あのころは予科が主体だったからね。学部はまだなかったんだから。

森島 そうです。高井さんだけが学部です。

高橋 それで結局そのときに高商から入ってきた人と一緒になって、結局4人4人で漕いだのが、あれが何年になるの？ 24、5年になるの？

森島 あれは23年ですね。

高橋 24年ぐらいだよ？

森島 いや、24年の時には、毛利匡元君とか、山本信蔵君とかはもういなかったですか

らね。24年には堀井要壮君とか山田善一君とかでエイトが固まったんです。

高橋 うん、いやいや、その前にさ、高井君がコックスで……

森島 あれは23年でした。

高橋 24年だよ。高商出身者が4人と大学出身者が4人で、予科が4人でエイト組んだことがあるだろう。

森島 23年ですよ。25年には私は大学出ているんですよ。で、24年は戸田へ行っただす。

高橋 そうか。

森島 そのときにはコックスが山田善一君で、整調が堀井要壮君、私が7番。で平井貞男君、下西辰男君。

高橋 それで、あのときに三高と接触して……

下西 そうです。そうです。

高橋 ケンカしたと。(笑い)

森島 だから、23年にですね。高井さんコックスですって、山田のじいやんと松井君と平井君と私が乗って、後ろに毛利君、山本君、田中君など高商組が乗ったんです。

高橋 山本、それから彼、何とかいうの、大阪の人で。あの田中やら……

森島 ええ、田中清ね。

高橋 もう亡くなったね、それから何とかいうのおったよな。

森島 いやもう1人分からんのですよ。

高橋 いやいやおるねん。ちょっと名簿貸して、高商の……

森島 山本、毛利、田中清までは分かるんだけど、もう1人……

高橋 いやいや、もう1人、こりゃ、なんで私が覚えとるかという、うちで一杯やったから。(笑い) うん、なけなしのウイスキー出して。中西寛か……。

高商が優勝した21年の関選のときにね、同志社大学のオールが出ていた。それで見に行ったら同志社大学じゃなく、関大が乗ってんだよなあ。それで、どうして同志社大学のボ

ートに乗ってるんだと言ったら、同志社大学へ行って許可を得ましたと偉そうなこと言うてねえ。

森島 いやあ、あの当時はね、艇にしろオールにしろね、もう空いてるものをお互いに貸し合いしないかね。イーグルは京大の艇庫の中に無傷でありましたが、オールなんてのはまあ、満足に使えるものはなんぼもなかったわけなんです。で、桑野造船所へ持って行ってですね、ブレードだけちょっと張り替えてくれとかね。そんな応急修理をして使ったんですけれども、練習のときなんかは、いわゆる赤に白線の入っている商大のオールとか、うちのオールとか、高商のオールを交ぜて使うとかいうようなやり方をしないとですね、それぞれが間に合わなかった……。

高橋 いや、しかしともかく関大がうちのボートに乗とったよ。それで文句を言いに行った。そしたら大学へ行って許可を得ておりますんで乗ってますなんて言ってた。

僕が引揚げて来て、昔のうちの艇庫が残ってるから見に行ったら、戦時中あそこに鉄橋守備隊がいたんだよな。それが中をむちゃくちゃにしていた。ただ艇だけは、エイトの八咫とイーグルだけは京大の艇庫にあった。もう最後の人が……、高井君らが持って行ってきてたのと違うのかなあ。

高井 あそこへ全部入れちゃってね。で、そのまま戦争になって、そのままでした。

森島 琵琶湖スカーリングクラブの艇庫のところだったんでしょ。終戦直後の艇庫ってのは、記憶にあるんですが、もうあの中に入ろうにも、近寄れんような状態だったですね。

高橋 そして高商の艇庫が向かいにあったんだけど、高商の艇庫は工場になってましたなあ、町工場に。

高井 そりゃそうと、我々のころ、部費ってのはあったのかな？

森島 なかったです。

高井 なかったね。だからねえ、その金をど

うしようかというんでね。今森島君が言ったイーグルに破損もある。オールの新調も必要である。だが学校から部費というものは出ない。どうしようっていうんで、それで私より一年先輩に先程お話に出ました坂邦夫さんという方がいましてね、彦根の。

太田 彦根中学から来たんですね。

高井 ええ、そうそう。戦時中エイトのレギュラーでしたね。

太田 昭和17年に、ええとね、彼に3番漕がしとったんです。

高井 そうでしたね。あの方が、じゃあ塚本さんのとこへ行こうじゃないかと言い出した。要するにあの人が、私より1年先輩で、その戦時中というか、戦前のことを多少知ってるもんですから、こういう金のないときはあそこへ行けばいいんだと言う。(笑い) つまり先輩の見よう見真似で、いきなり塚本さんのお宅へ行ったわけです。

高橋 塚本純一さんだな。

高井 ええ。そしたら、「お前らなんだ」と、言うことはわかるけども、こういうときのルールというものは、趣意書を書いて、奉加帳というものを作って回ると。(笑い) ルールを説明されたんですけども、さて、回るってね、とにかく終戦直後でしょう、先輩方の住所なんてまるっきりわかりやしませんですねえ。第一、生死もわからんわけなんです。だから、言われたけども、結局何もやらなかったね。で、結局金は塚本さんが出してくれたのだろうか。

森島 塚本さんが出してくれた。桑野造船所の支払い分全部出してくれました。

高井 そういうことがありました。あの方個人で全部、修繕費いくらかかったかよくわかりませんけどもね。

高橋 塚本さんには随分お世話になったなあ。

高井 しかしまあ、終戦直後のころは、部費というものはない。食糧というものはない。決まて行われるようなレガッタもない。し

たがって優勝の栄誉というものもない。といって、これ誰に頼まれたわけでもなし、強制されたわけでもなし、うるさく監督する人がいたわけでもなし、それでもまあ実際よくあれだけやったと思うんですがね。何もかもなしなしの状態、あれだけ朗らかにみんなでワイワイ言ってやった。かなりハードな練習もしたように記憶してますがね。どうしてあんなことができたかというのは結局、いま考えてみれば、まあ、あれが青春というものだったのかというふうにはかえりませんね。

森島 確かに部員の出入りは激しかったですね。食糧の問題だと思うんですけども、入ってくる、人が足りないからすぐ艇に乗せる。集まらない、いつの間にかやめてしまう。こういう部員の出入りが、21年、22年ごろは特に激しかったですね。だからその時代でまあ結局まともに残っているのは高井さんと私と下西君と松岡稔君と、まあ大体4人ぐらいです。

太田 そりゃあ終戦直後の食糧事情なんていうのは、今の学生には想像がつかないだろうね。

高井 みんな配給を持って来てね。配給ってのは若い方はご存じないでしょうが、わずかな配給ではボートを漕ぐにも腹がへって困りました。いろいろ苦労しましたが、とにかくロクなものは食べていません。

太田 あの平井貞男君なんか農家に米を買いに行ったと言ったねえ。森島君の郷里の方からも持って来たんじゃない。

森島 ええ、持って来ましたねえ。

太田 運んだんだね。

高橋 米はフィックスで買いに行ったやろ。

森島 農家に米を買いに行こうかって言って、一週ぐらい行ったかなあ、フィックスに乗って。

高橋 何か山田のほうへ……

森島 ええ、山田のほうまで。

下西 当時高橋さんがまだ小さかった潔君を

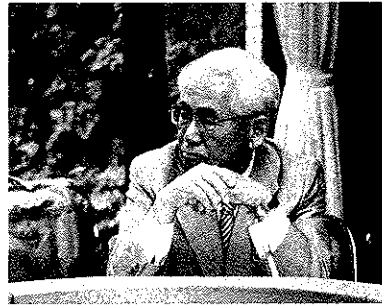
連れて練習を見に来ておられたのを思い出しますね。

太田 それで先ほどの塚本さんのお話なんですけれど、あそこの鉄橋のしもにありました昔の艇庫は、塚本さんがかなりご尽力されて……

高橋 塚本さんが相当お金を出された。また他の先輩もある程度出してくださったんだ。僕が予科1年のとき、昭和8年にあれ建てたんだね。

太田 ああ、そうですか。その前はどこに艇庫があったんですか。

高橋 あの、古い網定の前に掘っ立て小屋みたいなものがあったそうだ。



太田 ああ、そうですか。私はそれは知らないんです。

高橋 私も知らないが、僕が入ったときは、その新しい艇庫を建てるために府立大学の艇庫に、クロガネというボートを入れたんだよ。フォアは隼という名前だね。それとタブとを入れていた。それで三高の船台から出していたんだ。

太田 あのクロガネというのはクリンカーじゃなかったですか。

高橋 違います。シェルでね、桑野で初めて造ったんです。

森島 クロガネいうのはね、私らも見に行きました。府立医大の艇庫にあったんやね。あれ、全然使いものにならない。

太田 われわれのときも乗らなかったですよ、あの船台の上にもう入れてね。リガーもみんな

な外しちゃってた。

高橋 初代のね、桑野の造船所の艇だからね。もう古くなってた。

佐野 そのクロガネってというのは最初に造った二杯のエイト？ そうじゃないんですか。

高橋 いや、桑野で造った初代のエイトですよ。

佐野 少し脱線しますが、坂野公夫先輩から、おはがきの中で、最初に二杯エイトを造った

下西辰男氏



ときに非常に青山彦五郎さんたちにお世話になったので、そのことを……

高橋 青山さんはもう亡くなられたですね。

佐野 はい、明記しておいて欲しいと、このように書いて来ておられます。

高橋 初めて造ったのは時津風と天津風ですね、大正時代に造ったのは。

太田 その艇はどこに入れてあったんですかねえ。

高橋 もうなかったね。そのころには。

太田 艇庫は三保ヶ崎にあったんでしょう？

高橋 いや、尾花川にあったんだ。

太田 あれは三保ヶ崎じゃなかったですか。

高橋 いや、尾花川の、いまの競艇場のところにあったんだ。

●OBに支えられて復活

佐野 それでは塚本先輩のことがちょっと中断しておりますので続けたいと思います。私が聞いておりますのは、戦前、戦後と非常に

部報とか、それから合宿費の援助とかいろいろとお世話を願った方とのことでありますが、その点をもう少し、何かご発言ありましたらお願いしたいと思いますのですがどうでしょうか。

高橋 塚本さんはね、日本電池に勤められて、会計課長をしておられたんですけども、とにかくお金持ちなんですよ。いわゆる素封家ですね、二条のほうで、家業は一応は計量器を売っておられたということです。

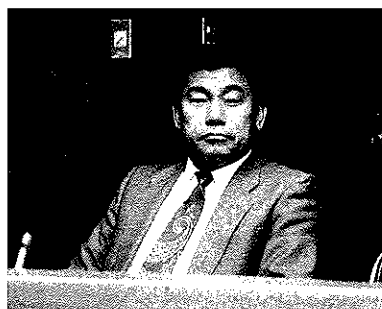
森島 寺町二条の、いわゆるハカリ屋さんですね。

高橋 別宅は下鴨にありましてね。とにかく素封家で、いろいろあらゆる面で、まあ、例えばね、ボート部の宴会とかそういうときにはね、塚本さんが主催で、「菊水」で必ずやってましたわ。塚本さんが全部金出してくれて、太田君のときもそうやなかったか？

太田 ええ、私のときもね、塚本さんに四条の菊水でいつも宴会をさせていただきましたしね。そのほか、あそこの、四条の橋のたもとの東華菜館というんですかな、あそこいまから考えれば、50年ぐらい前のことなんですけれども、そのころからあそこにありましてね。ああいう所で送別会等を塚本さんにやっていただいた憶えがありますね。

高橋 ああ塚本さんという人は、そりゃもう

石本君夫氏



なんでもお世話になってるのと違いますが、もう代々のマネージャーは。森島君あたりが世話になつとるぐらいやからね。戦前はもう全部世話になっていますよ。これほど経済的にボート部の世話をしてくれた人はおらんで

すよ。もうほとんどあの方に頼ってボート部は維持されたような、というとまたほかの先輩に語弊があるから言えないけれど。

太田 塚本さんはボート部で何をしておられたんですか、学生の頃には。

高橋 コックス。

太田 コックスをやっておられたんですか。

高橋 うん。

太田 はあ、その頃のことは話はあまり聞きませんねえ。

森島 終戦後すぐは艇友会の組織っていうか、OBの組織がなかったものですから、まああの塚本さんに、艇造るところまではいきませんでしたけれども、オールの修理などをお願いしたと。で、昭和23年ごろだと思いますが、大橋屋での合宿時代からOBの方が高橋先輩の呼び掛けで集まって来られ、で、OBの寄付っていいですか、そういったものをボート部に貰えるようになったというように記憶しておりますけど。で、高井さんの卒業されたときには別に送別会なかったですね。

高井 何もありません。

森島 私らが出るときが恐らく送別会戦後初めてだったと思うんです。確か、高橋さん、あれスター食堂かなんかで、焼酎飲みましたですよ。

高橋 ああ、そうだったかなあ。

森島 僕は2杯ほど飲んでもうトイレへ走って行きました。

高橋 ラッパ吹いたか。(笑い)

森島 ええ、それが戦後初めての送別会で、昭和25年でした。艇友会という名前で艇も出しましたですよ。高橋さんらと一緒に行了きましたけど、24年だと思うんですが、淡路島の由良に行きましたですね。それから私卒業してからですけども、同志社艇友会で社会人大会というのが瀬田川であって、下西君なんかと一緒に出て優勝したことがあります。それから艇友会では京都代表で広島国体へもナックル・フォアで行きました。だから、艇

友会のボート活動というのは、戦後は24年からですね。まだ高橋さん漕いでおられたと思いますが、淡路島では。

高井 森島君の頃の卒業から正規の卒業だから、送別会とか、そういうのがあったんだ。

(笑い) 結局私らの卒業はね、復員復学の時期に応じてばらばらで、一定しておりません。私の場合はもう卒業したって当時ろくな就職口もありませんね。まあゆっくり大学にいてやろうというんで、英文科へ変わった。英文科は戦争中になくなっちゃった。だから、英文科ならお前、もう一回1年からやり直しだぞという。ああ、結構ですと。(笑い)それでまた4年間やった。そういうような状態ですね。私がもし法経だったら21年の卒業なんです。

森島 ちょうど高井さんが旧制の最後だったと思うんですよね。私が新制の最初なんですよ。で、そのまま行けば旧制も新制も同じ年の3月に卒業で、確か旧制が繰り上げて前年の9月に卒業だったと思うんですよね。

太田 いや、われわれでもね、昭和17年の9月の終わりに私は卒業したんだけど、実際はね、昭和18年の3月に卒業すべきものを半年繰り上げて卒業させたんですよ。

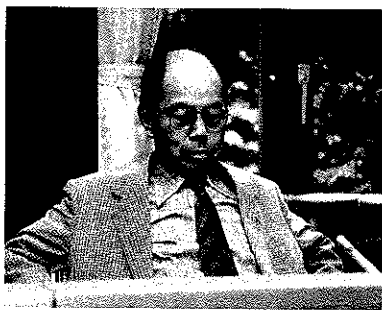
森島 ああ、そうでした。

太田 兵隊に取らなきゃならんから、まあそうなったわけですけども。で、9月の終わりに卒業ですから。学校はもう8月の終わりでしまいですよね。それからどこかの会社に実習か何かに行ってたかな。それで10月1日に入営です。

●同志社ローイングの現在

佐野 それでは同志社ローイングの過去・現在・未来の内、今度は現在と言うことで、横山基嗣監督に少し、「今」についてお話をお願いします。

横山 私が監督を引き受けまして今年で2年目なんです。それで最初に『力漕』にも書いたんですけど、常に勝つ可能性のあるクルーを作りたいと。そのためにはどうしたらいいか、まず日本一の練習をしなけりゃやっぱり日本一にはなれないやろうと。これは基本でいまもやっております。これは、これだけのことを、つまりやっぱり最低日本一の練習をやらんことには、いまの同志社が勝つ可能性



高井正明氏

はないということで始めたんで、これを続けたら近い将来、同志社は日本一になれると思います。これはいつも佐野先輩がおっしゃるように、相手のあつてのことなんで、勝負はどうなるかはわかりませんが、最大勝つための努力だけは毎日やってるつもりです。学生も一生懸命、ほんまに一生懸命やっていると、思っています。近い将来には、勝つチャンスは必ず来ると、われわれはやっております。以上です。

佐野 ありがとうございます。高橋さん、いつも練習を見ていらっしゃると思うんですけど、昔に比べていまの練習量っていいですか、そのへんはどうでしょうか。

高橋 比較にならんほどようやっています。それはもう、私ら戦前のOBで偉そうなこと言いますけれども、それはもう頭が下がります。よくやってくれています。

佐野 ありがとうございます。

高橋 だから私はね、そりゃ勝ち負けはね、やはり時の運ですよ。それからまたクルーの編成によってね、体力によって違いますよ。

しかし最高限度にいまの若い連中はやっています。横山基嗣君を中心にしてね、コーチの中村俊裕君、それから山口忠博君、それを中心にして、いまここにいるキャプテン三上和彦、それからマネージャーの杉山伸君から各人みな、一生懸命、一心同体になってやっています。

もうだから、私はねえ、思うんですが、そりゃ勝っても負けても別にやいやい言うことではないですよ、これだけやって来たら。しかし、私はまだ三上には要求はしょっちゅうしてますけどね、陰ながら。まあ横山君を通して言わにやいかんのやけど、横山君は神戸やから、まあ内緒で言うてますけどね。(笑い) 太田 私はね、監督に望むことはね、同志社のクルーがね、毎年全日本の決勝に残るようなクルーに育ててもらいたいと思うんです。優勝というのはともかくとしてね。優勝なんていうものは時の運ですよ。ですから常に決勝に残るようなクルーを作ってもらいたいというのが希望ですね。

横山 あの、私は監督を引き受けたときに、要するに、学生には全日本の決勝の雰囲気は味わせたいなということを思った訳です。これを勝ったら、この一レースに勝ったら日本一やぞと。それを味わせたいなと思うてやってるつもりなんです。

太田 だから、その決勝に残るようなクルーに仕上がってくればね、例えばコース順だとか、風の状態だとか、いろんなそのファクターがありますけれども、そういったものによってね、決勝に残っておれば優勝することも可能だと、私はそういうふうにとるんですけどね。

高橋 ちょっと申し遅れましたけど、もう現在のクルーもようやってますけどね。それはもっと前の年代から、監督が四方久男君で内田順己君とか石本君夫君がコーチしてオリンピックに行ったこのあのころの時代にずっと遡って、例えばうちの息子あたりが漕いで



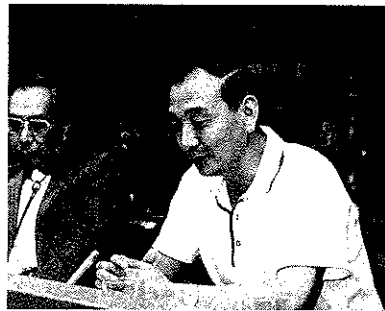
横山基嗣氏

るところからもう練習量というのは、もう私らでも、もう戦前の練習量とははるかに違いますわ。はっきり言うて、私らが関東に勝てなかったのはもう練習不足ですよ。ただそれだけです。そりゃもう今の学生は十分やっています。第一、佐野君が監督当時の、大学から合宿所を建設してもらったところから、今のようないハードな練習をやっていたのちがいますか。

●200年に向かって

佐野 では次に未来の構想を、企画委員会の池田宜郎君に、語っていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

池田 今まで諸先輩のお話を聞きながら、100年のスローガンの「ローイング100年、それぞれの青春」というのは、コピーとしてよく表現してるなあと思っておりました。何か日本の経済復興が進んで行くその時代時代に、そうした社会状況がボートのほうにも影響してきておると、それが現在に至っておるといふうに感じました。その次に「200年へ今」ということですが、いままで1年1年100回積み重なって来た諸先輩のいろんなご苦労が、それぞれの青春のつながりの中で、大きな伝統になってきていると思うんです。それをさらに次の200年へ引き継いで行くということ、企画委員ということでやらせていただいておりますが、ちょっとテーマが大きいも



池田宜郎氏

んですから、まだ現在のところそんなに進んでいないような状況です。なぜOBの方がこれほどボートのことを一生懸命やられ、また後輩のことをいろいろ心配されるのかというのを考えますと、やはり現役が勝って初めて、そのときに、昔自分たちが感じた、経験したその青春を呼び戻すというんですかね。そういう興奮を味わいに来られているんじゃないかなあと、(笑い) いうふうな気がいたします。

で、われわれ企画委員会のほうで、何を目指すのかという目的をよく考えてみました。そしてやはり強い同志社クルー、これを目指そうと、それも瞬間的に勝つんじゃないに、いま太田先輩がおっしゃられたようにやっぱり常に勝つと。つまり常に強いということを目指に考えて行こうということになったわけです。強いレベルとはどこだと問題もあるんですが、まあそういう議論もふまえて、とにかく常に強い同志社ボートにしたいなあと思っています。で、いま横山監督がお話されたけども、やはり現場では、いまある素材で頑張っていただくということなんですが、やはり、OBとしてですね、同志社艇友会としてやはり組織的に構造的に打ち込んでいかないと駄目じゃないかなあとということを考えます。

そこで、前回の集まりで、強くするための展開表というものを作ってみました。組織的にきっちりとクラブないしは艇友会、これを運営していかないと、常に強いクルー、強い

同志社というものは望めないだろうというのが基本的な考え方としてあるからです。それで強くするための要因を挙げてみますと、人、もの、金、情報、こういった大きな項目に分かれるんじゃないかということになりました。「人」についてはいまは毎年毎年新人を勧誘して、それを鍛えて、それでチームを作っておるということなんですが、これではやはり年ごとに非常にバラつきがあり、常に強いということを目指せない。

やはり、コンスタントにいい選手が集まり、数も集まるというような方法を考えたい。まずセレクションですね、これも、例えば各高校のいい選手の情報がすぐに入るような組織を作っておくとか、それからできればその瞬間瞬間の人材確保じゃなくて、安定的に確保できるようにするために、もう少し底辺を広げていくというような方法。たびたびその委員会でも出ているんですが、同志社高校のクルーを作って、そこからの供給を受けるとかいうように、組織的に打ち込んでいくようなことがなされないと人の確保というのも難しいんじゃないだろうかと思うんです。

次に確保した現役部員の強化、育成。これは毎年毎年現場の監督がやってくれるわけですが、そのトレーニングの方法、教育の方法、こういったものもだんだん変わって来ておりまして、先ほどの時代の流れで言いますと、やはり国際化とか情報化とか、高級化とか、多様化とか、で、女性の進出とか、まあいろいろ時代の様相がそのまま現在のクラブにも出て来ておりまして、やはりそういう方向に向かって強化育成の方向もいろいろ考えていかないと駄目だと思います。特に最近、関東勢は海外交流というようなことも盛んにやっております。そういった国際化というんですか、日本国内のレベルだけじゃなくてですね、やはり海外にも目を開いて行こうというようなことも構想の中に織り込んでいく必要があるということを考えます。それから人を縦に

つないでいくというんですか、底辺を広げることとか、それから現在は4年卒業しますと、もうすぐボートをやめてしまい、一番仕上がった状態の現役が残念ながらクルーから離れて行く。そのへんのOBのクルーというものを作って見たらどうかとか、これは一つの案でございますが、そんなことをも考えております。

次に「もの」。これは艇、それから艇庫、それからトレーニング設備、そして合宿所の設備、こういったものですが、現状、他校に比べ、さらに強くしていくために十分なものといたしますと、まだ十分ではない面がある。だから、これも将来に向けて、いかにあるべきかというようなことを考え、計画を練って、きっちりと設備を確保できるという方法を考



えて計画的にやっていく必要があります。こういうようなことを組織立った形でやっていきたいと考えております。それと、そういったものを十分に確保していくためには、必ず「資金」というものが必要になってまいります。で、現在のところはOB会費主体に運営されておるわけですが、寄付だとか、イベントだとかそういった資金の集め方、こういったものももう少し何か工夫が要るんじゃないかなということで、そのものの、プランに合わせて、その資金の調達方法も組織的に運営できるというような形を考えていきたいと思っております。

それと「情報」ですが、例えば新人勧誘の情報だとか、それから技術の情報ですね。こ

れなんかも、私はあまり技術的なことはよくわからないんですが、例えば造船技術、これは海外に比べると30年遅れておるといふうに言われております。また潜艇技術ですが、これが海外に遅れておること20年というふうなことを言われておまして、やはりそういった進んだ情報を常に入れられるネットワークづくりというものがが必要です。こういったものを次の200年に向けてきっちりと計画的に組織的に運営できるというような形を、OBとして準備していきたい。現役が常に強いクルーを作れるためのバックボーンをしっかりと作っていきたくと念願しておまして、まずはそのためにいろんな企画をこれから打ち出していこうとしているのが現状でございます。まだプランの第一歩に入ったという段階でございます。

佐野 そのプランづくり、相当前から温めていただいて、また2回、3回とこれからずっと継続して行ってもらえると思いますが、どうぞよろしくお願いします。学生はどこにも負けない練習をということで努力しておりますし、OBもどこにも負けない努力をこれからも尽くしていこうと決意しているということで、このローイング100周年が意義ある節目となることを期待したいと思います。非常に貴重なお時間、座談会ならではの貴重なお話をいただきまして、誠にありがとうございました。それでは最後に、岡本部長からお話をお願いします。

岡本 貴重なお話どうもありがとうございました。同志社ローイングの100年が幾多の曲折があったということは、承知はしておりますが、改めて皆さんのお話をお聞きしながら、現在が多くの先輩の苦闘と汗の積み重ねであった。そしてまた、OBになられてからもさまざまなご尽力に支えられて来たということを感じております。改めて歴史の重みということを感じざるを得ません。

本日のお話は主として戦中、あるいは戦後

あたりが中心になったかと思いますが、あの苦難の時代にボートに叩き込んだエネルギーは何だったのか。それは恐らく青春の情熱だとしか言いようがないというお話がありました。全く同じように感じております。こういう貴重な青春を持たれたこと、それは私どもにとっても大変羨ましいことですし、貴重なことだったろうと思います。時代が変わっても同志社ローイングというのはやはり青春を燃焼させる場に変わりはないだろうと思います。

現在の学生諸君、あるいは同志社ローイングの伝統を引き継いでくれる諸君が歴史の重みをバネにして一層の飛躍を期していただくことを願って止みません。本日の座談会、以上をもちまして閉会ということにさせていただきます。ありがとうございました。

付記：この座談会后、さらに戦後の再建期について、土肥信一郎、四方久男、山田善一、本間満秋、瀧口忠夫、村井利康の各氏にお集まりいただき、特に同志社高商の当時の状況について詳しくお話を聞かせていただきました。(編集委員会)



戦績簿 名簿

同志社ローイング100年の対外戦績と名簿

明治25.	水上大会対泰西学館対校戦		フォア	1位	
26.5.6	水上大会対泰西学館対校戦	三保ヶ崎	フォア	1位	
26.5.6	水上大会対三高対校戦	三保ヶ崎	フォア	1位	
27.3.3	対三高対校戦	三保ヶ崎	フォア	2位	
30.4	本願寺文学寮大会来賓競漕		シックス	1位	滋賀師範に勝利
30.4	本願寺文学寮大会来賓競漕		シックス	1位	滋賀尋常中学に勝利
30.7.18	琵琶湖連合競漕会	打出浜	シックス 1000	1位	5'03" 慶応赤クラブに勝利
31.8.7	琵琶湖連合競漕会	三保ヶ崎	シックス 1000	1位	大阪商業に勝利
32.8.6	琵琶湖連合競漕会優勝旗競漕	三保ヶ崎	シックス 1000	1位	4'51" 新潟中学・高知中学に勝利
34.8.4	武徳会競漕会普通競漕	三保ヶ崎	シックス 1100	1位	6'15" 耶志摩クラブに勝利
35.8.4	武徳会競漕会普通競漕	三保ヶ崎	シックス 1100	2位	2L差 1位島根第一中学
37.5.8	真宗中学競漕会来賓競漕			2位	1位滋賀師範
37.5.15	対滋賀師範等対校戦			1位	滋賀師範に勝利
39.8.4	武徳会競漕会普通競漕	三保ヶ崎	シックス 1100	2位	1シート差 1位愛知第一中学
40.8.4	武徳会競漕会普通競漕	三保ヶ崎	シックス 1100	1位	5'07" 御影師範に勝利
43.4.10	帝大会来賓競漕		シックス	1位	京都五中に勝利
44.4	三高大会来賓競漕		シックス	2位	1位京都二中
44.4	帝大会来賓競漕		シックス	2位	1位京都二中

明治期に活躍した人々

福井大三郎 林源三郎 加藤太郎松 岡本桜 二宮峯夫 小林峯三 郡淳 大石七郎 塩沢隆次郎 大原隆男 浅野源二郎 加藤小太郎 牧野虎次 三宅謙一 近藤賢二 梅沢武一郎
 古谷久綱 高橋彦三郎 八田常吉 田島虎衛 初田利三郎 塩津誠作 森光太郎 清水和二郎 都留信郎 山川均 石川弘 卜部八右衛門 鈴木岡造 小野寺寿雄 松井万緑
 山本兵一 沢田実 渡辺節二郎 東勝熊 卜部京三郎 大塚英雄 北脇作次郎 大西猪之助 井上竹治 鈴木吉満 榊原哲文 石井虎太郎 磯田留三郎 町田進一郎 中島兼次
 町田甚太郎 吉田清吉 松岡一男 大林政雄 芝貞光 池本甚平 山口実 遠藤英二郎 稲岡三郎 小来栖六郎 河上英彦 小谷益次郎 大原隆美 八木由三郎 蛸崎敏雄 北脇春吉
 弘中慶一 柏木邦太郎 山根基 森口潔 山野良吉 白井季吉 鴨脚憲 小林修亮 大橋宗四郎 小路虎三郎 神明万次郎 山田庄太郎 児島重太郎 山中平次 木安望 杉本正男
 麦生陸郎 明田重義 松島寛三郎 津下紋太郎 服部祐一 平田留造

大正7.6	対御影師範対校戦		シックス	1位	
7.9.28	京都二大会来賓競漕		シックス	1位	京都医専に勝利
7.10.2	京都市立第一商業大会来賓競漕	石場浜	シックス	1位	5'28" 京都医専に勝利
7.10.27	大阪高等工業大会来賓競漕		シックス	1位	4'36" 大阪高等商業に勝利

大正期滑席艇導入以前に活躍した人々

塚本純一 京口謙一郎 亀甲金次郎 山本宅三 西村伍一 林孝一 大場冷 安川鐵藏 北脇末吉 山本寅太郎 亀山克一 松尾一男 日下部純吉 山本民三郎 近藤誠三 笠松辰造
 荒尾信太郎 石田米一郎 服部祐一 中西順三郎 西沢弥太郎 関目成通 綱島信一 喜多一二郎 松井七郎 青山彦五郎 小林芳郎 北脇鴻造 渡辺勇 小谷 北村 平瀬四郎
 山中 今井 林孝一 八木重兵衛 寺田 中川 森田 東辻嘉三郎 佐藤 堀野喜七 黒川俊夫 村井藤一郎 西村伍一郎 中川孝史 大崎艇介 西條信之 酒井猛夫 梅村数之助
 八木市造 松本敬之助 米谷部長 永田部長 木島部長 河原政勝

◆大11.9	対慶応定期戦	エイト	2位
--------	--------	-----	----

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

東辻嘉三郎 大町弘藏 桜井弥一郎 武津賀佐太 荒木節郎 元持勝一 東田多喜男 市田勇 南本虎一 平瀬四郎 人見健造 池尾孝正 伊藤虎雄 黒川俊夫 村井藤一郎
 中川孝史 大崎艇介 西條信之 酒井猛夫 渡辺勇 遠藤重順 安井義人 若村直三 八木重兵衛

◆大13.5.11	震災復興レース決勝	墨田川	フォア 1600	2位	4L差	1位一橋漕艇クラブ6'07" 0
13.11.1	明治神宮大会高専固定席決勝	墨田川	1300	2位	1/2L差	1位慶応ドラゴン8'07"

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

大町弘藏 桜井弥一郎 武津真佐太 荒木節郎 元持勝一 東田多喜男 市田勇 南本虎一 人見健造 池尾孝正 伊藤虎雄 黒川俊夫 村井藤一郎 西條信之
酒井猛夫 遠藤重順 安井義人 若村直三 杉浦良太郎 坂野公夫 西村昌二 保土田憲吉 北野耕藏 武口公一 舟橋伝四郎 小池勝

◆大14.5.24	村明治定期戦	瀬田川	エイト 2000	2位	27秒差
-----------	--------	-----	----------	----	------

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

大町弘藏 桜井弥一郎 武津真佐太 荒木節郎 元持勝一 東田多喜男 市田勇 南本虎一 池尾孝正 伊藤虎雄 遠藤重順 安井義人 若村直三 杉浦良太郎
坂野公夫 西村昌二 保土田憲吉 北野耕藏 武口公一 鮎川弘 人見健造 北村國次郎 大谷保 太田博 猿丸源太郎(元) 西郷省三 太田博 舟橋伝四郎
小池勝 愛敬元成

◆大15.5.23	村明治定期戦	瀬田川	エイト 2000	2位	47秒差	
15.9.19	関西選手権大会予選	瀬田川	フォア	1位		2位同志社高商
15.9.19	関西選手権大会決勝	瀬田川	フォア	1位		大阪高商
15.10.31	明治神宮大会準決勝	墨田川	フォア 2000	1位	8'50"	日大Bに勝利
15.10.31	明治神宮大会決勝	墨田川	フォア 2000	1位	8'40"	日大Aに勝利 SW微風

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

大町弘藏 桜井弥一郎 武津真佐太 荒木節郎 元持勝一 東田多喜男 市田勇 南本虎一 杉浦良太郎 坂野公夫 西村昌二 保土田憲吉 北野耕藏 武口公一
鮎川弘 人見健造 北村國治郎 大谷保 太田博 猿丸源太郎(元) 西郷省三 榎原忠一 松居清 鈴木淳藏 津田礼作 田伏徳次 愛敬元成

◆昭25.	村明治定期戦	瀬田川	エイト 2000	2位		
2.9.4	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト 2000	1位		大阪高商に勝利
2.9.4	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	2位	3L差	1位京大

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

元持勝一 東田多喜男 市田勇 坂野公夫 保土田憲吉 北野耕藏 武口公一 鮎川弘 人見健造 北村國次郎 大谷保 太田博 猿丸源太郎(元) 西郷省三
榎原忠一 松居清 鈴木淳藏 津田礼作 田伏徳次 松岡秀三 増本茂 松下勇 壇上春清 寺田耕吉 愛敬元成 神谷重義

◆昭35	村明治定期戦	瀬田川	エイト 2000	2位		
3.10.28	京都インターカレッジ大会決勝	瀬田川	フォア 1600	1位		2位同志社高商

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

鮎川弘 人見健造 北村國次郎 大谷保 太田博 猿丸源太郎(元) 西郷省三 榎原忠一 松居清 鈴木淳藏 津田礼作 田伏徳次 松岡秀三 増本茂 松下勇
壇上春清 寺田耕吉 神田重太郎 辻(村上)武夫 神谷重義

◆昭4.5	対明治定期戦	瀬田川	エイト	2000	2位
-------	--------	-----	-----	------	----

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

榎原忠一 松居清 鈴木淳蔵 津田礼作 田伏徳次 松岡秀三 増本茂 松下勇 壇上春清 寺田耕吉 神田重太郎 辻(村上)武夫 片岡与三郎 川本見悦
神谷重義 楠本雅章 樋口明 清田博 小島 志賀

◆昭5.5	対明治定期戦	墨田川	エイト	2000	1位
-------	--------	-----	-----	------	----

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

松岡秀三 増本茂 松下勇 壇上春清 寺田耕吉 神田重太郎 辻(村上)武夫 清田博 松見孝一郎 福元清輝 片岡与三郎 川本見悦 飯田正充 楠本雅章 今村大三

◆昭6.4.26	対KR&AC戦第1試合	敏馬浜	フォア	1600	1位	
6.4.26	対KR&AC戦第2試合	敏馬浜	フォア	1600	1位	
6.5.24	対明治定期戦	瀬田川	エイト	3200	2位	3L1/2差
6.9.12	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	2位	1位京大

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

神田重太郎 辻(村上)武夫 清田博 松見孝一郎 福元清輝 樋口明 久木弥一郎 西尾孝二 酒井幸男 片岡与三郎 川本見悦 飯田正充 岩武利邦 楠本雅章
今村大三 河原幸男

◆昭7.9.17	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	失格	
7.9.17	関西選手権大会準決勝	瀬田川	フォア	2000	2位	1位大商大

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

清田博 松見孝一郎 福元清輝 樋口明 久木弥一郎 西尾孝二 酒井幸男 山辺正 森田信雄 北川寛一郎 川口勝 宇高芳丸 水谷伴治 井上金吾 井田(大橋)通三郎
村上敏道 川口勝 飯田正充 岩武利邦 今村大三 河原幸男 三村茂 蜂須賀文人

◆昭8.8.27	対明治定期戦	墨田川	エイト	3200	2位	キャンパス差
8.9.10	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト	2000	2位	6'11" 4 1位京大6'08" 6
8.9.9	関西選手権大会予選(高商)	瀬田川	フォア	2000	1位	7'22" 4 龍谷大藤紫會に勝利
8.9.10	関西選手権大会決勝(高商)	瀬田川	フォア	2000	1位	7'02" 4 龍谷大失格

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

北川寛一郎 宇高芳丸 樋口明 井田(大橋)通三郎 山辺正 内藤謙二 円尾紀 花井重美 木村明 久樹彌一郎 酒井幸男 市田隆 京谷裕弘 松川寿久 奥藤
松島誠 高橋宗 吉川 加悦 和田 堀井 鈴木基夫 菊地 大西二三男 井上金吾 村上敏道 川口勝 三村茂 蜂須賀文人 新開明夫 上田昭三
水谷伴治

◆昭9.	京大学内レガッタ		フォア	2000	1位	三高に勝利
9.	海軍記念日競漕決勝	堂島川	エイト		1位	
9.	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位	三高に勝利
9.	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト	2000	1位	龍谷に勝利
9.	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト	2000	2位	1位京大
9.	関西選手権大会決勝(高商)	瀬田川	フォア	2000	1位	

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

(主将/山辺正 主務/森田信男)

松川寿久 高橋宗 山辺正 内藤謙二 円尾紀 乾正治 山村剛一 村木 木村明 宇高芳丸 鈴木 菊地 堀井 大西二三男 京谷祐弘 松島誠
橋井半次 井上金吾 村上敏道 川口勝 三村茂 蜂須賀文人 新聞明夫 上田詔三 永谷祥治

◆昭10.	三校レース	瀬田川	エイト	2000	1位	高商に勝利
10.7	高専大会専門学校の部1回戦	瀬田川	シックス	1300	1位	京城医専に勝利
10.7	高専大会専門学校の部準決勝	瀬田川	シックス	1300	1位	大商大専門部に勝利
10.7	高専大会専門学校の部決勝	瀬田川	シックス	1300	2位	3L差 横浜高工に勝利
10.6	五輪代表選考会1回戦	尾久コース	エイト	2000	2位	大差 1位慶応
10.6	五輪代表選考会2回戦	尾久コース	エイト	2000	2位	大差 1位東京商大

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

松川寿久 山村剛一 乾正治 山辺正 平井弘一 円尾紀 高橋宗 寺田英夫 市川光之助 神谷仙吉郎 大西二三男 美島武夫 橋井半治 村谷 小杉良平
千葉有明 柴田民部 京谷祐弘 松島誠 井上金吾 村上敏道 川口勝 寺田英夫 堀井礼三 新聞明夫 上田詔三 初田勤太郎

◆昭11.	三校レース	瀬田川	エイト	2000	2位	30cm	1位高商
11.	海軍記念日競漕決勝	堂島川	エイト		1位		
11.6.7	対大商大定期戦(第1レース)	瀬田川	エイト		1位		
11.6.7	対大商大定期戦(第2レース)	瀬田川	エイト		1位		
11.	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位		彦根高商に勝利
11.	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト	2000	2位	2L	1位京大

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

松川寿久 高橋宗 円尾紀 平井弘一 千葉有明 神谷仙吉郎 小杉良平 山村剛一 柴田民部 近藤憲司 幸田博人 寺田英夫 堀井礼三 市谷光之助
久世一三 水野 永島(佐々田)正 吉益四郎

◆昭12.	三校レース	瀬田川	エイト	2000	2位		
12.6.20	対大商大定期戦	瀬田川	エイト	2000	2位	1.5L差	
12.6.20	対大商大定期戦	瀬田川	エイト	2000	2位	2L差	
12.	関西選手権大会準決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位	6'24" 2	京大に勝利
12	関西選手権大会決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位		大商大に勝利
12	全日本選手権大会(高商)	墨田川	エイト	2000	3位	3L	
12	関西選手権大会決勝	瀬田川	フォア		1位		
12	全日本選手権大会決勝	墨田川	フォア		2位		

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

武村 円尾紀 平井弘一 千葉有明 小杉良平 山村剛一 青木喜三 林田 神谷仙一郎 大橋 大塩 近藤憲司 幸田博人 増子惣一 八木茂 吉津孝甫
西田正大 寺田英夫 堀井礼三 市谷光之助 久世一三 水野 永島(佐々田)正 荒木茂治 百合実 山本善之助 吉川久雄 井上謙蔵 吉益四郎

◆昭13.	三校レース	瀬田川	エイト	2000	2位	
13.	対大商大定期戦	瀬田川	エイト	3200	1位	
13.	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	2位	2L差 1位高商
13	関西選手権大会準決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位	同大に勝利
13	関西選手権大会決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位	京大に勝利
13	全日本選手権大会決勝(高商)	墨田川	エイト	2000	2位	1位東商大

本年度部長 林源三郎(大学)

部員

高橋宗 円尾紀 平井弘一 吉年晃 太田豊彦 深井科一 荒木茂治 青木喜三 山村剛 近藤憲司 幸田博人 増子惣一 渡辺隆弥 萩徳太郎 山崎恒夫
八木茂 吉津孝甫 西田正大 辻昇 中野靖夫 寺田英夫 堀井礼三 市谷光之助 久世一三 水野 永島(佐々田)正 荒木茂治 百合実 山本善之助 吉川久雄
井上謙蔵 吉益四郎

◆昭14 5.28	三校レース(高商)		エイト		1位	同大に勝利
14.5.11	対大商大定期戦	瀬田川	エイト	3200	1位	
14.9.2	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位	京大に勝利
14.	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト	2000	1位	彦根高商に勝利
14	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト	2000	2位	0.6秒差 1位大商大

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

上田敏 吉益四郎 荒木茂治 太田豊彦 宮川正夫 武田喜蔵 榎坂景次 田中羊一 幸田博人 平井弘一 増子惣一 柏原博 渡橋透安 八木茂 吉津孝甫
西田正大 辻昇 中野靖夫 高橋明 市谷光之助 久世一三 荒木茂治 吉川久雄 加藤勝彦 水野誠士 永島(佐々田)正 井上謙蔵 百合実 山本善之助
宮本清 渡辺隆弥 萩徳太郎 山崎恒夫 池見清 吉年晃 杉野寿男 徳茂 小杉

◆昭15.6.15	対大商大定期戦		エイト	3200	1位	
15.9.7	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位	岡山医大に勝利
15.9.8	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト	2000	1位	京大に勝利
15.	全日本選手権大会決勝	尾久コース	エイト	2000	2位	3L 1位一高

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

杉野寿男 太田豊彦 荒木茂治 武田喜蔵 宮川正夫 加藤勝彦 榎坂景次 田中羊一 増子惣一 柏原博 渡橋透安 佐野新吾 平井忠 西田正大 辻昇 高橋明
小山隆 山本浩 水野誠士 山崎恒夫 榎三郎 中野靖夫 宮本清 渡辺隆弥 萩徳太郎 池見清 白井茂 山元博 金小路芳正 穴田健次郎 百合実 山本善之助
吉川久雄 井上謙蔵 神野理策 寺本不二雄 吉益四郎 吉年晃

◆昭16	三校レース	瀬田川	エイト	2000	1位	554° 2位高商
------	-------	-----	-----	------	----	-----------

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

太田豊彦 國友藤策 太田誠一郎 宮川正夫 平井貞夫 北島健一 坂邦夫 桂喬 杉野寿男 佐野新吾 平井忠 流郷吉勝 湊修一 加藤勝彦 池見清 柏原博
渡橋透安 白井茂 山元博 高橋明 中村年男 宮本清 金小路芳正 穴田健次郎 鷺田平一郎 松井一雄 小山隆 荻田芳郎 神野理策 寺本不二雄 山本善之助
山崎恒夫 吉川久雄 田村健次郎 加藤金雄 上田恒夫

◆昭17.4.29	対大高大定期戦	瀬田川	エイト	3200	1位		
17.6.6	全国大学高専競漕大会予選(高商)	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	14" 5差	1位明治
17.6.6	全国大学高専競漕大会敗復(高商)	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	13" 8差	1位日大
17.9.6	関西選手権大会決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位		京大に勝利

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

國友藤策 太田誠一郎 太田豊彦 宮川正夫 平井貞男 北島健一 坂邦夫 桂喬 杉野寿男 山元博 佐野新吾 平井忠 湊修一 清原清二 流郷吉勝 榎坂景次
宮本清 武田喜蔵 田中羊一 田村宏 加藤勝彦 柏原博 渡橋透安 白井茂 金小路芳正 穴田健次郎 松井一雄 鷺田平一郎 高橋明 小山隆 荻田芳郎
神野理策 寺本不二雄 大林一

◆昭18.5	海軍記念日競漕						
18.6.27	対大高大定期戦	瀬田川	エイト	3200	1位	11'04" 3	

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

宮川正夫 佐野新吾 國友藤策 桂喬 杉野寿男 北島健一 坂邦男 平井忠 清原清二 湊修一 田村宏 流郷吉勝 高井正明 奥村重蔵 松井一雄 鷺田平一郎
刈谷芳郎 神野理策 寺本不二雄 大林一

◆昭19.

本年度部長 速水藤助(大学)

部員

佐野新吾 平井忠 坂邦夫 北島健一 流郷吉勝 湊修一 國友藤策 高井正明 平井貞男 桂喬 田島 清原清次 刈谷芳郎 松井一雄 土肥信一郎 鷺田平一郎
大林一 田辺 雨宮清之 藤井明雄 松井(四方)久男

◆昭21.10.20	琵琶湖レガッタ決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位		関大予科
21.10.26	関西(国体予選)予選(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位	7'22" 3	三高に勝利
21.10.27	関西(国体予選)準決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位	6'57" 4	京大に勝利
21.10.27	関西(国体予選)決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	1位		関大に勝利
21.10.27	関西(国体予選)決勝(高商)	瀬田川	フォア		2位		
21.11.12	全日(国体)準決勝(高商)	瀬田川	エイト	2000	2位	30cm	1位東大

本年度部長 黒川芳造(大学) 平山玄(高商)

部員

高井正明 松本裕男 森島昭三 稲井九人 下西辰男 坂邦夫 田島了 流郷吉勝 湊修一 加藤克明 松岡稔 丸井広次 野々垣明 松井(四方)久男
山本信蔵 毛利匡之 清水 田中清 堀井要社 水野義男 山田善一 西川秋弥 中西寛 嘉村養輝 雨宮清之 藤井明雄 中川正生 亀井量太

◆昭22.	予科大会		エイト		1位		京府医大予科に勝利
22.	予科大会		エイト		2位		1位関大予科

22.8.31	団体オープンレース決勝(高商)	瀬田川	フォア 2000?	1位	7'36" 8	関大専門部に勝利
22.9.13	関西選手権大会準決勝(高商)	瀬田川	フォア	1位	7'53" 0	立命に勝利
22.9.14	関西選手権大会決勝(高商)	瀬田川	フォア	1位	4L差	関大専門部に勝利
22.9.14	関西選手権大会決勝(同大)	瀬田川	エイト 2000	2位		1位京大7'50" 0
22.9.27	全日本選手権大会予選(高商)	瀬田川	フォア 2000	2位	9'40" 0	1位桜門艇友会9'12" 0

本年度部長 黒川芳造 和田洋一(大学) 平山玄(高商)

部員

松山 磯田 松本雄男 下西辰男 森島昭三 稲井丸人 松岡稔 佐原 高井正明 山田善一 堀井要壮 水野義男 西川秋弥 嘉村良輝 竹内孝三 中川正生
嘉村良輝 松井(四方)久男 奥田 田中清 山本信藏 毛利匡之 中西寛 瀧口忠夫 本間満秋 藤森慎治 亀井量太

◆昭23.4.29	朝日レガッタ1次予選(高商)	堂島川	フォア 1000	2位	1L差	1位三高正誠会A2'9" 5
23.4.29	朝日レガッタ1次予選(同大)	堂島川	フォア 1000	1位	2'16" 5	阪大に勝利
23.4.29	朝日レガッタ2次予選(同大)	堂島川	フォア 1000	2位	1.5L差	1位三高正誠会A2'13" 5
23.8.30	対大商大定期戦		エイト	1位		
23.	同立総合定期戦漕艇の部		エイト	1位		
23.9.25	関西選手権大会予選	瀬田川	フォア 2000	2位	1L差	1位関学7'21" 8

本年度部長 黒川芳造

部員

平井貞男(主将) 高井正明 森島昭三 下西辰男 山田昭児 加藤卓嗣 松本欣一 國富卓也 寺本元 赤井一夫 長谷川和之 西田誠 古川良一 梅香家太郎
広沢英夫 岩井 西堀龍雄 松井久男 雨宮清之 山田善一 堀井要壮 亀井量太 松岡稔 嘉村良輝 山本信藏 毛利匡之 中西寛 田中清 瀧口忠夫 竹内孝三
本間満秋 藤森慎治 船本重徳

◆昭24.	対立教定期戦	戸田漕艇場	エイト	1位		
24.9.4	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト 2000	失格		1位三高
24.9.17	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	1L3/4差	1位日大7'00"
24.9.17	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	7'10"	東工大以下に勝利
24.9.18	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	5L	1位慶大7'20" 6

本年度部長 黒川芳造

部員

平井貞男(主将) 森島昭三 山田善一 鷹羽昭 山田昭児 下西辰男 松岡稔 堀井要壮 水野義男 清水裕 本間満秋 竹内孝三 中西寛 瀧口忠夫 藤森慎治
加藤卓嗣 松本欣二 國富卓也 寺元弘 赤井一夫 長谷川和之 古川良一 西堀龍雄 村山幹夫

◆昭25.4.29	朝日レガッタ2回戦	堂島川	フォア 1000	1位	2'44"	京大に勝利
25.4.29	朝日レガッタ準決勝	堂島川	フォア 1000	1位	2'50"	立命大に勝利
25.4.29	朝日レガッタ準決勝	堂島川	フォア 1000	2位	1.5L差	1位電大2'33"
25.5.28	琵琶湖レガッタ決勝	瀬田川	エイト 1000	1位	2'43" 2	京大に勝利
25.8.19	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト 2000	無勝負		
25.8.20	関選予選再レース	瀬田川	エイト 2000	2位	1L1/3	1位京大

本年度部長 黒川芳造

部員

堀井要壮 下西辰男 松岡稔 清水裕 中西寛 本間満秋 竹内孝三 瀧口忠夫 加藤卓嗣 松本欣二 國富卓也 寺元弘 赤井一夫 長谷川和之 古川良一 西堀龍雄
村山幹夫 北尾元哉 筒井弘 勝山貴 小野木伸 村井利康

◆昭26.8.11	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト 2000	2位	1.5L差	1位京大6'03" 4
26.8.11	関西選手権大会敗復	瀬田川	エイト 2000	1位	6'20"	関学に勝利
26.8.12	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト 2000	1位	6'07" 2	立命に勝利
26.8.12	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	2位	2L1/3差	1位京大6'04"

本年度部長 黒川芳造

部員

加藤卓嗣 松本欣二 國富卓也 寺本元 赤井一夫 長谷川和之 西堀龍雄 村山幹夫 北尾元毅 筒井弘 勝山實 小野木伸 村井利康 浜田 竹村栄造 湯川長保
園英明 内田文章 黒田方辰 赤塚弘高

◆昭27.5.3	朝日レガッタ予選	堂島川	フォア 1000	1位		名古屋大に勝利
27.5.4	朝日レガッタ準決勝	堂島川	フォア 1000	2位	1/3L差	1位立命大2'19"
27.8.16	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト 2000	1位		関大に勝利
27.8.17	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト 2000	1位		阪大に勝利
27.8.17	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	1位	6'12" 00	京大に勝利
27.9.6	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	1L4/1差	1位立教6'28" 0
27.9.6	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'45"	明治以下に勝利
27.9.7	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	3位	大差	1位一橋6'27" 4

本年度部長 黒川芳造

部員

加藤卓嗣 松本欣二 國富卓也 寺元弘 赤井一夫 長谷川和之 西堀龍雄 村山幹夫 富田潤 北尾元毅 筒井弘 勝山實 小野木伸 村井利康 竹村栄造 湯川長保
園英明 内田文章 黒田方辰 浅田孝 三竹(加藤)偉雄 加畑哲夫 久下(原田)貴三

◆昭28.5.2	朝日レガッタ1回戦	尾花川	Kフォア 800	2位	2L差	1位滋賀県庁3'07" 5
28.8.16	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト 2000	2位	2L差	1位京大6'03" 2
28.8.16	関西選手権大会敗復	瀬田川	エイト 2000	1位	6'25" 5	大市大に勝利
28.8.16	関西選手権大会準々決勝	瀬田川	エイト 2000	1位	6'20" 7	阪大に勝利
28.8.17	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト 2000	1位	6'30" 2	神大に勝利
28.8.17	関西選手権大会決勝	瀬田川	フォア 2000?	2位	4.5L差	1位立命7'47"
28.8.17	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	2位	2.5L差	1位京大6'12" 8

本年度部長 黒川芳造

部員

北尾元毅 筒井弘 勝山實 小野木伸 村井利康 竹村栄造 湯川長保 園英明 内田文章 黒田方辰 赤塚弘高 浅田孝 竹田和彦 松崎雄一 三竹(加藤)偉雄
加畑哲夫 久下(原田)貴三 岩波春喜 小野博善 脇方勇 飯田良之助 田畑良夫 森口達治 六嶋博司 辻井耕三郎

◆昭29.4.28	朝日レガッタ1回戦	尾花川	Kフォア 800	1位	3'19" 2	播磨造船に勝利
29.4.28	朝日レガッタ1回戦	尾花川	Kフォア 800	2位	2.5L差	1位関大
29.4.29	朝日レガッタ準決勝	尾花川	Kフォア 800	2位	1尺差	1位洛陽OB3'6" 0
29.8.14	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト 2000	2位	3L1/3差	1位京大6'21" 0
29.9.11	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'45" 0	阪大に勝利
29.9.12	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	3位	5L差	1位東大6'35" 3
29.9.12	全日本選手権大会順位	戸田漕艇場	エイト 2000	3位	4L2/3差	1位慶応6'56" 9
29.9.23	ヶ大歓迎関西選抜予選	瀬田川	エイト 2000	1位	5'46" 0	神大に勝利
29.9.23	ヶ大歓迎関西選抜準決勝	瀬田川	エイト 2000	2位	2/1L差	1位ケンブリッジ大5'38" 6

本年度部長 黒川芳造

部員

竹村栄造 湯川長保 園英明 内田文章 黒田方辰 赤塚弘高 浅田孝 竹田和彦 松崎雄一 三竹(加藤)偉雄 加畑哲夫 久下(原田)貴三 岩波春喜 小野博善
脇方勇 阪田良之助 田畑良夫 森口通治 六嶋博司 浅井青仁 南昌吾 内田順己 畑山純一 大塚亨 庄山章信 矢野功 伊藤竹美
北村久弥 八田勇吉 奥野茂

◆昭30.	学生リーグ		エイト	1位		
30.7.3	対京大教養戦	瀬田川	エイト 3200	2位	大差	
30.8.13	関西選手権大会1回戦	瀬田川	エイト 2000	1位	6'30" 3	大市大失格
30.8.13	関西選手権大会2回戦	瀬田川	エイト 2000	1位	6'09" 3	阪大に勝利
30.8.14	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト 2000	1位	6'15"	甲南大に勝利
30.8.14	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	2位	6'12" 3	1位京大6'12" 3
30.8.14	関西選手権大会	瀬田川	Sフォア	3位		

本年度部長 黒川芳造

部員

浅田孝 竹田和彦 松崎雄一 加藤(三竹)偉雄 加畑哲夫 原田(久下)貴三 岩波春喜 小野博善 脇方勇 阪田良之助 田畑良夫 森口通治 六嶋博司
浅井青仁 南昌吾 内田順己 畑山純一 大塚亨 庄山章信 矢野功 加藤(倉野)智 江原祐明 伊藤竹美 北村久弥 八田勇吉 難波孝也 木村恵司 八神弘雄
市村敏昭 杉本茂雄 龍村和恵 中島俊一郎 岡田光雄 安藤孝 川田泰久 薄善毅 鈴木史朗 近藤光男 小野木利男

◆昭31.6.17	対京大教養戦	瀬田川	エイト 3200	2位	大差	
31.8.4	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'26" 1	明治以下に勝利
31.8.4	全日本選手権大会準々決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	1L3/4差	1位中大
31.8.5	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	1L3/4差	1位東経大
31.9.9	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	1位		京大に勝利
31.9.9	関西選手権大会決勝	瀬田川	Sスカル	1位		
31.9.9	関西選手権大会決勝	瀬田川	Sフォア	2位		

本年度部長 黒川芳蔵

部員

小野博善 脇方勇 阪田良之助 田畑良夫 森口通治 六嶋博司 浅井青仁 南昌吾 内田順己 畑山純一 大塚亨 庄山章信 矢野功 加藤(倉野)智
江原祐明 伊藤竹美 北村久弥 八田勇吉 難波孝也 木村恵司 市村敏昭 杉本茂雄 龍村和恵 中島俊一郎 岡田光雄 安藤孝 大野準一郎 川田泰久
小野木利男 伊藤章司 内貴康夫 松尾武嗣 岩崎匡利 和田久雄 山添敏雄 榎本昌浩 丸山信吾 佐野閑一 小山隆治 大西治 牧 佐々木

◆昭32.6.23	対京大教養戦	瀬田川	エイト 3200	2位		
32.8.3	関西選手権大会1次予選	瀬田川	Kフォア	1位		
32.8.3	関西選手権大会2次予選	瀬田川	Kフォア	1位		
32.8.4	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト 2000	2位		1位京大
32.8.4	関西選手権大会準決勝	瀬田川	Kフォア	1位		東レに勝利
32.8.4	関西選手権大会決勝	瀬田川	Kフォア	1位		岡大以下に勝利

本年度部長 黒川芳蔵

部員

浅井青仁 南昌吾 内田順己 畑山純一 大塚亨 庄山章信 矢野功 加藤(倉野)智 江原祐明 伊藤竹美 北村久弥 八田勇吉 難波孝也 木村恵司 市村敏昭
杉本茂雄 龍村和恵 中島俊一郎 岡田光雄 安藤孝 川田泰久 伊藤章司 内貴康夫 松尾武嗣 岩崎匡利 和田久雄 山添敏雄 榎本昌浩 丸山信吾 佐野閑一
小山隆治 大西治 田沢明 梅岡克次 北野進 森景経世 菊岡嶺一 友高敏夫 神原顕次 上野洋一 岡原正幸 有本豊 村瀬宗一 杉本勝義

◆昭33.6.15	対京大教養戦	瀬田川	エイト 3200	2位		
-----------	--------	-----	----------	----	--	--

33.8.2	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位	6'22" 5	立命大に勝利
33.8.2	関西選手権大会2次予選	瀬田川	エイト	2000	2位	2L差	1位関学6'02"
33.8.23	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	19秒差	1位東大6'21" 4

本年度部長 黒川芳蔵

部員

市村敏昭 杉本茂雄 龍村和憲 中島俊一郎 岡田光雄 安藤孝 川田泰久 伊藤章司 内貴康夫 松尾武嗣 岩崎匡利 和田久雄 山添敏雄 榎本昌浩 丸山信吾
佐野潤一 小山隆治 大西治 田沢明 梅岡克次 北野進 森景経世 菊岡慎一 友高敏夫 神原颯次 本莊崇郎 阪本厚 中山俊彦 中田康夫 三方茂 漆原英定
普門洋一 能勢啓 中川雅夫 松村晴夫 鉄谷高久 野田義男 金城栄太郎 清水治

◆昭34.6.21	対京大教養戦	瀬田川	エイト	3200	2位		
34.8.1	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	失格		1位大市大
34.	オ大歓迎レガッタ	瀬田川	エイト		2位		1位オ大

本年度部長 黒川芳蔵

部員

伊藤章司 内貴康夫 松尾武嗣 岩崎匡利 和田久雄 山添敏雄 榎本昌浩 丸山信吾 佐野潤一 小山隆治 大西治 田沢明 梅岡克次 北野進 森景経世
菊岡慎一 友高敏夫 神原颯次 本莊崇郎 阪本厚 中山俊彦 中田康夫 三方茂 漆原英定 普門洋一 能勢啓 中川雅夫 松村晴夫
鉄谷高久 野田義男 金城栄太郎 清水治 路次二郎 大西義則 西村泰夫 鏡敏光 寺田英三 入江豊 中村泰博 増谷昭夫 平田隆司 日野義樹 前田和男

◆昭35.6.19	対京大教養戦	瀬田川	エイト	3200	1位		
35.8.20	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'39" 5	1位東北大6'36" 8
35.8.20	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	7'01" 0	1位名古屋大6'59" 1

本年度部長 黒川芳蔵

部員

田沢明 梅岡克次 北野進 森景経世 菊岡慎一 友高敏夫 神原颯次 本莊崇郎 阪本厚 中山俊彦 中田康夫 三方茂 漆原英定
普門洋一 能勢啓 中川雅夫 松村晴夫 鉄谷高久 野田義男 金城栄太郎 清水治 広瀬恒善 路次二郎 大西義則 西村泰夫 鏡敏光 寺田英三 入江豊 中村泰博
増谷昭夫 平田隆司 日野義樹 前田和男 池畑勇 加野豊司 伊藤善悟 鷹野真臣 峰尾元庸 中原克巳 赤川雅俊

◆昭36.6.18	対京大教養戦	瀬田川	エイト	3200	1位		
-----------	--------	-----	-----	------	----	--	--

本年度部長 黒川芳蔵

部員

岡原政幸 本莊崇郎 阪本厚 中山俊彦 中田康夫 三方茂 漆原英定 普門洋一 能勢啓 中川雅夫 松村晴夫 鉄谷高久 野田義男 金城栄太郎 清水治
路次二郎 大西義則 西村泰夫 鏡敏光 寺田英三 入江豊 中村泰博 増谷昭夫 平田隆司 日野義樹 前田和男 池畑勇 加野豊司 伊藤善悟 鷹野真臣
峰尾元庸 中原克巳 赤川雅俊 山路清 広田恒夫 石本君夫 岡美智雄 山田義弘 内保忠勝 津崎晴功 木村正 池田宜郎 西田稔 稲垣謙介 村田典彰
丸山英敏

◆昭37.4.27	朝日レガッタオープンレース(A)	尾花川	エイト	1000	
37.4.27	朝日レガッタオープンレース(B)	尾花川	エイト	1000	
37.6.10	対京大教養戦	瀬田川	エイト	3200	1位

本年度部長 黒川芳蔵

部員

路次二郎 大西義則 西村泰夫 鏡敏光 寺田英三 入江豊 広瀬恒善 中村泰博 増谷昭夫 平田隆司 日野乾樹 前田和男 池畑勇 加野豊司 伊藤晋悟 鷹野真臣
峰尾元庸 中原克巳 赤川雅俊 山路清 広田恒夫 石本君夫 岡美智雄 山田義弘 内保忠勝 津崎晴功 木村正 池田宜郎 西田稔 稲垣謙介 村田典彬 丸山英敏
坂本弘 佐藤慶樹 額綱武司

◆昭38.5.12	対京大教養戦	瀬田川	舵フォア	2000	1位	6'42" 2	
38.5.12	対京大教養戦	瀬田川	Sスカル	1000	1位	3'57" 0	
38.5.12	対京大教養戦	瀬田川	エイト	3200	2位	1L差	1位京大9'18" 0
38.5.12	対京大対校戦	瀬田川	エイト	2000	2位	1L差	1位京大5'46" 4
38.7.27	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位		甲南大に勝利
38.7.28	関西選手権大会準々決勝	瀬田川	エイト	2000	2位	3L差	1位阪大
38.8.31	全日本選手権大会予選	相模湖	エイト	2000	2位	6'36" 32	1位慶応6'35" 37
38.9.1	全日本選手権大会準決勝	相模湖	エイト	2000	3位	6'31" 65	1位早大6'20" 76
38.10	全日本選手権大会予選	相模湖?	Sスカル	2000	2位	8'21" 22	1位法政大8'12" 61
38.10	全日本選手権大会敗復	相模湖?	Sスカル	2000	2位	8'25" 04	1位恵那高8'11" 85

本年度部長 黒川芳蔵

部員

池畑勇 加野豊司 伊藤晋悟 鷹野真臣 峰尾元庸 中原克巳 赤川雅俊 広田恒夫 石本君夫 内保忠勝 池田宜郎 西田稔 稲垣謙介 村田典彬 丸山英敏 阪本章
鷺北東 森岡正宏 堀内正一 大宮久 寺西勲 長友毅嘉 新美康則 桜田東士 赤尾正明 松本洋 岸本勘也 平井秀彦

◆昭39.8.1	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	舵フォア	2000	4位		1位関学7'08" 38
39.8.1	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	舵フォア	2000	3位		1位静岡大7'13" 91
39.8.1	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	Sスカル	2000	1位		N2
39.8.2	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	Sスカル	2000	1位	8'03" 03	SSW2.5
39.8.2	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	Sスカル	2000	2位	7'52" 38	WNW2
39.8.29	関西選手権大会予選	瀬田川	エイト	2000	1位		京大に勝利
39.8.30	関西選手権大会準決勝	瀬田川	エイト	2000	1位		京大に勝利
39.8.30	関西選手権大会決勝	瀬田川	エイト	2000	2位		1位甲南

本年度部長 黒川芳蔵

部員

加野豊司 広田恒夫 石本君夫 内保忠勝 池田宜郎 西田稔 阪本章 森岡正宏 鷺北東 堀内正一 大宮久 寺西勲 長友毅嘉 新美康則 桜田東士 赤尾正明 松本洋
平井秀彦 山口隆史 岸本勘也 柴崎崎 高橋潔 富田孝治 武田正宏 江花継夫 村上和也 田口長 中島靖之

◆昭40.8.1	関西選手権大会決勝	瀬田浦	エイト	1600	1位	5'05" 3	立命以下に勝利
40.8.29	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'20" 8	1位立教大6'18" 0 N0.8
40.8.29	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'49" 2	1位商船大6'46" 7

本年度部長 黒川芳蔵

部員

阪本章 鷺北東 森岡正宏 堀内正一 大宮久 寺西勲 長友毅嘉 新美康則 桜田東士 赤尾正明 松本洋 平井秀彦 柴崎崎 高橋潔 富田孝治 田口長
武田正宏 江花継夫 村上和也 中島靖之 川上也須子 浜崎潔 山本克美 宮城博 松平忠正 州浜祐一 藤野章 福益敏 塚本

◆昭41.4.29	朝日レガッタ決勝	瀬田浦	エイト 1000	4位		1位京大3'10" 2
41.8.6	関西選手権大会予選	瀬田浦	エイト 1600	1位		
41.8.6	関西選手権大会予選(同大A)	瀬田浦	Kフォア	3位		1位金沢大
41.8.6	関西選手権大会予選(同大B)	瀬田浦	Kフォア	1位		
41.8.6	瀬田川杯予選	瀬田浦	エイト 1600	2位		1位金沢大
41.8.7	関西選手権大会決勝	瀬田浦	エイト 1600	1位	6'41" 6	京大以下に勝利
41.8.7	瀬田川杯決勝	瀬田浦	エイト 1600	2位		1位金沢大7'03" 0
41.8.27	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'28" 8	防衛大以下に勝利
41.8.28	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	6'09" 8	1位早稲田6'05" 7
41.8.28	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	3位	6'15" 1	1位早稲田6'08" 2

本年度部長 吉川秀造

部員

長友毅嘉 新美康則 桜田東士 糸尾正明 松本洋 平井秀彦 柴崎嶋 高橋潔 富田孝治 武田正宏 江花難夫 村上和也 中島靖之 川上也須子 田口長 塚本
浜崎深 山本克美 宮城博 松平忠正 州浜祐一 森野章 福益敏 村井富雄 金沢重光 清水正俊 新井嘉範 田中重次郎 高橋滋 荒井英之 服部周三
小林徹 太田 植村 大場 永瀬 小川 友金 土田 境野 宮永

◆昭42.4.28	朝日レガッタ予選	瀬田浦	エイト 1000	1位		広島大以下に勝利
42.4.28	朝日レガッタ予選	瀬田浦	フォア	3位		1位大工大
42.4.29	朝日レガッタ準決勝	瀬田浦	エイト 1000	1位		大工大以下に勝利
42.4.29	朝日レガッタ決勝	瀬田浦	エイト 1000	4位	3'13" 2	1位阪大3'05" 2
42.7.29	関西選手権大会予選(同大A)	瀬田浦	エイト 1600	2位	6'10" 0	1位阪大6'07" 4
42.7.29	関西選手権大会予選(同大B)	瀬田浦	エイト 2000	3位	6'14" 5	1位大工大6'02" 5
42.7.29	関西選手権大会敗復(同大B)	瀬田浦	エイト 2000	1位	6'15" 6	岡山大以下に勝利
42.7.30	関西選手権大会準決勝(同大A)	瀬田浦	エイト 2000	2位	5'58" 4	1位大工大5'55" 2
42.7.30	関西選手権大会準決勝(同大B)	瀬田浦	エイト 2000	3位	6'05" 8	1位関大6'03" 0
42.7.30	関西選手権大会決勝(同大A)	瀬田浦	エイト 2000	2位	6'01" 4	1位大工大5'55" 2
42.9.2	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	6'24" 3	1位法政6'21" 8
42.9.2	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'31" 1	東工大以下に勝利
42.9.2	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'24" 6	東大に勝利
42.9.3	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'24" 4	大工大以下に勝利
42.9.3	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	2位	6'28" 4	1位一橋6'24" 5
42.9.3	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	3位	6'31" 1	1位日大6'26" 5

本年度部長 吉川秀造

部員

柴崎嶋 高橋潔 富田孝治 武田正宏 江花難夫 田口長 村上和也 中島靖之 川上也須子 浜崎深 山本克美 宮城博 松平忠正 州浜祐一 森野章 福益敏
塚本 村井富雄 金沢重光 清水正俊 新井嘉範 田中重次郎 高橋滋 荒井英之 服部周三 小林徹 稲垣茂春 大橋行正 佐々本鏡 鈴木文治 中田二三男
宮川滋

◆昭43.7.28	関西選手権大会決勝	瀬田浦	エイト 1600	1位	5'25" 0	京大以下に勝利
43.8.23	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'02" 1	東大以下に勝利
43.8.24	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'15" 0	一橋以下に勝利
43.8.25	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト 2000	1位	6'01" 4	慶応以下に勝利
43.10.13	メキシコ五輪大会予選	ソチミルコ	エイト 2000	6位	6'34" 79	1位西ドイツ6'04" 66
43.10.15	メキシコ五輪大会敗復	ソチミルコ	エイト 2000	5位	6'44" 37	1位オーストラリア6'10" 80

本年度部長 出石邦保

部員

浜崎潔 山本克美 宮城博 松平正志 州浜祐一 藤野章 福益敏 村井富雄 金沢重光 清水正俊 新井嘉範 田中重次郎 高橋滋 荒井英之 服部周三
小林徹 稲垣茂春 大橋行正 佐々木謙 鈴木文治 中田二三男 宮川滋 岡田一夫 山岸進 横山基嗣 宇田 勇 下津 片岡

◆昭44.4.28	朝日レガッタ予選	瀬田浦	エイト	1000	1位	3'04" 7	関大以下に勝利
44.4.29	朝日レガッタ準決勝	瀬田浦	エイト	1000	1位	3'08" 4	龍谷大以下に勝利
44.4.29	朝日レガッタ決勝	瀬田浦	エイト	1000	1位	3'10" 2	龍谷大以下に勝利
44.8.3	関西選手権大会決勝	瀬田浦	エイト	1600	1位		
44.8.30	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'13" 2	慶応以下に勝利 NNW0.7
44.8.30	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'20" 3	名大以下に勝利 E2
44.8.30	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'37" 8	1位早大6'35" 7 0
44.8.30	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'45" 6	1位早大6'40" 5E1.5
44.8.31	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'04" 3	慶応以下に勝利 SW2
44.8.31	オックスフォード盾決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'38" 0	1位早大6'35" 1SE2

本年度部長 出石邦保

部員

村井富雄 金沢重光 清水正俊 新井嘉範 田中重次郎 高橋滋 荒井英之 服部周三 小林徹 稲垣茂春 大橋行正 佐々木謙 鈴木文治 中田二三男
宮川滋 岡田一夫 山岸進 横山基嗣 宇田 勇 下津 片岡 小島康正 山口俊郎 若菜英作

◆昭45.7.25	関西選手権大会予選	瀬田浦	エイト	1600	3位		
45.8.29	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'46" 8	1位北大6'46" 6NNE2
45.8.29	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'28" 5	竜大以下に勝利WNW1.5
45.8.30	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	7'04" 5	1位慶応6'54" 5E3.5~4
45.8.30	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	5位	7'02" 2	1位慶応6'42" 5E4.8~ENE3.4

本年度部長 出石邦保

部員

稲垣茂春 大橋行正 佐々木謙 鈴木文治 中田二三男 宮川滋 岡田一夫 山岸進 横山基嗣 小島康正 山口俊郎 若菜英作 中村喜光 五*嵐純也 小松新一
植西信子 太田実 長友清利 山形彰人 山本晃弘 楠戸俊宣 寄藤辰夫 花森節夫 山森英枝

◆昭46.4.29	朝日レガッタ準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'09" 4	1位大市大3'08" 9
46.4.29	朝日レガッタ決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'05" 4	大府大以下に勝利
46.4.29	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	5位	4'30" 7	1位東レ滋賀4'00" 7
46.7.3	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	Sスカル	2000	4位	9'10" 0	1位戸田市役所
46.7.3	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	Sスカル	2000	4位	8'20" 0	1位東大和田
46.7.31	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1600	1位	5'23" 3	関学以下に勝利
46.7.31	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア		4位	4'36" 7	1位滋賀大(教)3'56" 8
46.7.31	関西選手権大会敗復	琵琶湖漕艇場	Kフォア		4位	4'31" 1	1位龍谷4'10" 2
46.7.31	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル		5位		1位東レ滋賀
46.7.31	関西選手権大会敗復	琵琶湖漕艇場	Sスカル		3位		1位京府医
46.7.31	瀬田川杯予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1600	2位	5'36" 7	1位岡山大5'33" 7
46.8.1	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1600	1位	5'11" 6	阪大以下に勝利
46.8.1	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1600	1位	5'12" 7	大府大以下に勝利
46.8.1	瀬田川杯準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1600	1位	5'19" 9	名大以下に勝利
46.8.1	瀬田川杯決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1600	4位	5'43" 7	1位島根大5'34" 4
46.8.28	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'22" 7	京大以下に勝利W0.5
46.8.28	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'48" 0	1位早大6'42" 4E2.2

46.8.28	オックスフォード盾予選	戸田漣艇場	エイト	2000	2位	6'40" 3	1位北大6'33" 3S2
46.8.28	オックスフォード盾敗復	戸田漣艇場	エイト	2000	2位	6'42" 8	1位静岡大SW2.5
46.8.28	オックスフォード盾準決勝	戸田漣艇場	エイト	2000	4位	6'51" 1	1位大府大6'51" 1SW2.5

本年度部長 出石邦保

部員

岡田一夫 山岸進 横山基嗣 小島康正 山口俊郎 若菜英作 中村喜光 五*嵐純也 小松研一 植西信子 太田実 長友清利 山形彰人 山本晃弘 楠戸俊宣
寄森辰夫 花森節夫 山森良枝 宮地信行 鎌田博 植野誠之 早川勝 上田達彦 梅田雅昌

◆昭47.4.28	朝日レガッタ予選(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	3位	3'17" 7	1位北大3'14" 1
47.4.28	朝日レガッタ予選(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	2位	3'38" 3	1位九大3'38" 3
47.4.29	朝日レガッタ準決勝(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	1位	2'59" 0	慶大以下に勝利
47.4.29	朝日レガッタ準決勝(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	6位	3'15" 2	1位北大3'02" 0
47.4.29	朝日レガッタ決勝(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	5位	3'13" 6	1位北大3'10" 6
47.6.10	中日本レガッタ予選	愛知池	エイト	1000	1位	3'20" 5	慶大以下に勝利
47.6.11	中日本レガッタ準決勝	愛知池	エイト	1000	1位	3'05" 0	早大B以下に勝利
47.6.11	中日本レガッタ決勝	愛知池	エイト	1000	1位	3'02" 6	早大B以下に勝利
47.7.29	関西選手権大会予選	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	1位	4'10" 0	神戸大以下に勝利
47.7.30	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	2位	4'03" 4	1位東レ滋賀3'52" 4
47.7.30	関西選手権大会決勝	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	2位	4'01" 2	1位東レ滋賀3'53" 3
47.7.29	関西選手権大会予選	琵琶湖漣艇場	Sスカル		1位	5'15" 0	大衛大以下に勝利
47.7.30	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漣艇場	Sスカル		1位	5'13" 3	京府医大以下に勝利
47.7.30	関西選手権大会決勝	琵琶湖漣艇場	Sスカル		1位	5'17" 9	永泳会以下に勝利
47.7.29	瀬田川杯予選(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	1位	4'10" 7	神戸大以下に勝利
47.7.29	瀬田川杯予選(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	5位	4'57" 6	1位関学A4'19" 2
47.7.29	瀬田川杯敗復(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	6位	5'04" 5	1位名工大4'32" 0
47.7.30	瀬田川杯準決勝(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	1位	4'08" 8	大市大A以下に勝利
47.7.30	瀬田川杯決勝(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1500	1位	4'13" 0	関学A以下に勝利
47.8.26	全日本選手権大会予選	戸田漣艇場	エイト	2000	3位	6'27" 8	1位東大6'18" 8W3
47.8.26	全日本選手権大会敗復	戸田漣艇場	エイト	2000	1位	6'30" 5	大府大以下に勝利E1
47.8.26	全日本選手権大会準決勝	戸田漣艇場	エイト	2000	2位	6'41" 3	1位東大6'38" 6E3
47.8.26	オックスフォード盾予選	戸田漣艇場	エイト	2000	1位	6'34" 0	福島大以下に勝利SW1.5
47.8.26	オックスフォード盾準決勝	戸田漣艇場	エイト	2000	1位	6'53" 0	慶大以下に勝利E2
47.8.27	オックスフォード盾決勝	戸田漣艇場	エイト	2000	1位	6'23" 4	北大以下に勝利S3.5
47.8.20	日韓親善琵琶湖レガッタ予選	琵琶湖漣艇場	Sスカル		1位	8'11" 6	東京海上以下に勝利 0
47.8.20	日韓親善琵琶湖レガッタ準決勝	琵琶湖漣艇場	Sスカル		2位	8'00" 7	1位東大7'53" 4NW3
47.8.20	日韓親善琵琶湖レガッタ決勝	琵琶湖漣艇場	Sスカル		5位	8'31" 7	1位東レ滋賀8'03" 4NE1.5

本年度部長 平山玄(代理)

部員

小島康正 山口俊郎 若菜英作 中村喜光 五*嵐純也 小松研一 植西信子 太田実 長友清利 山形彰人 山本晃弘 楠戸俊宣 寄森辰夫 花森節夫
山森良枝 宮地信行 鎌田博 植野誠之 早川勝 上田達彦 梅田雅昌 渡良三 坂本雄二 畠敏 武尾豊 渡裕子 坂本美恵子

◆昭48.4.28	朝日レガッタ予選(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	1位	3'04" 6	関学以下に勝利
48.4.28	朝日レガッタ予選(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	1位	3'25" 5	阪大以下に勝利
48.4.29	朝日レガッタ準決勝(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	1位	3'27" 3	東大以下に勝利
48.4.29	朝日レガッタ準決勝(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	1位	3'28" 6	鹿児島大以下に勝利
48.4.29	朝日レガッタ決勝(同大A)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	2位	3'12" 9	1位関学3'12" 3再レース
48.4.29	朝日レガッタ決勝(同大B)	琵琶湖漣艇場	エイト	1000	3位	3'13" 3	1位関学3'12" 3再レース
48.4.28	朝日レガッタ予選	琵琶湖漣艇場	Sスカル	1000	1位	3'37" 1	猪名川RC以下に勝利
48.4.29	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漣艇場	Sスカル	1000	2位	3'58" 0	1位東レ滋賀3'52" 4
48.4.29	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漣艇場	Sスカル	1000	4位	3'50" 4	1位東レ滋賀3'46" 9

48.6.9	中日本レガッタ準決勝	愛知池	エイト	1000	1位	3'03" 4	中央大以下に勝利
48.6.10	中日本レガッタ決勝	愛知池	エイト	1000	1位	3'12" 3	日大以下に勝利
48.8.5	関西選手権大会決勝(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	1位	4'45" 5	韓国海士以下に勝利
48.8.5	関西選手権大会決勝(同大B)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	3位	4'55" 3	1位同大A4'45" 5
48.8.25	全日本選手権大会予選	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'24" 4	韓国海士以下に勝利
48.8.26	全日本選手権大会準決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'19" 4	明治大以下に勝利SW1.0
48.8.26	全日本選手権大会決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'21" 0	日大以下に勝利S3.5
48.8.25	オックスフォード盾予選	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'43" 0	茨城艇友会以下に勝利
48.8.26	オックスフォード盾準決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'30" 8	明治大以下に勝利 0
48.8.26	オックスフォード盾決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'28" 9	茨城艇友会以下に勝利S1.5

本年度部長 出石邦保

部員

中村喜光 五嶋純也 小松新一 植西信子 太田実 長友清利 山形彰人 山本晃弘 植戸俊宣 寄藤辰夫 花森節夫 山森良枝 宮地信行 鎌田博
植野誠之 早川勝 上田達彦 梅田雅昌 渡良三 坂本雄二 島敏 武尾豊 湊裕子 坂本美恵子 山口忠博 荻野義明 中野貴夫 矢島正恒 河畑宣伸
馬杉淳一 西村 佐藤和弘

◆昭49.6.8	中日本レガッタ予選	愛知池	エイト	1000	2位	3'14" 0	1位日大3'08" 4
49.6.9	中日本レガッタ準決勝	愛知池	エイト	1000	2位	3'16" 4	1位京大3'15" 2
49.6.9	中日本レガッタ決勝	愛知池	エイト	1000	3位	3'09" 0	1位日大3'03" 6
49.8.4	関西選手権大会準決勝(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	1位	4'55" 2	京大以下に勝利
49.8.4	関西選手権大会準決勝(同大B)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	失格		
49.8.4	関西選手権大会決勝(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	1位	5'02" 5	京大以下に勝利
49.8.31	全日本大学選手権大会予選	戸田清艇場	エイト	2000	3位	6'52" 9	1位明治6'41" 8E3
49.8.31	全日本大学選手権大会敗復	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'54" 6	早大以下に勝利SE5
49.8.31	全日本大学選手権大会準決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	7'22" 9	慶大以下に勝利E5
49.8.31	オックスフォード盾予選	戸田清艇場	エイト	2000	2位	7'26" 1	1位千葉大7'13" 6SE5以上
49.8.31	オックスフォード盾敗復	戸田清艇場	エイト	2000	1位	7'05" 0	中央大以下に勝利SE5以上
49.8.31	オックスフォード盾準決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	7'39" 0	福島大以下に勝利E3
49.11.2	全日本選手権大会予選	戸田清艇場	エイト	2000	4位	6'33" 6	1位明治6'25" 3 0
49.11.2	全日本選手権大会敗復	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'36" 1	北大神威以下に勝利NW1.7
49.11.3	全日本選手権大会準決勝	戸田清艇場	エイト	2000	2位	6'20" 0	1位東レ滋賀6'18" 4W1.0
49.11.4	全日本選手権大会決勝	戸田清艇場	エイト	2000	3位	6'27" 9	1位東レ滋賀6'19" 0W0.3

本年度部長 出石邦保

部員

宮地信行 鎌田博 植野誠之 早川勝 上田達彦 梅田雅昌 渡良三 坂本雄二 島敏 武尾豊 湊裕子 坂本美恵子 山口忠博 荻野義明 中野貴夫 矢島正恒
河畑宣伸 馬杉淳一 植田英俊 石鍋寿寛 佐藤和弘

◆昭50.4.26	朝日レガッタ予選(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1000	1位	3'00" 8	鹿児島大以下に勝利
50.4.26	朝日レガッタ予選(同大B)	琵琶湖清艇場	エイト	1000	3位	3'37" 5	1位静岡大3'27" 8
50.4.26	朝日レガッタ敗復(同大B)	琵琶湖清艇場	エイト	1000	2位	3'26" 6	1位龍谷3'24" 4
50.4.27	朝日レガッタ準決勝(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1000	1位	3'03" 3	龍谷大以下に勝利
50.4.27	朝日レガッタ準決勝(同大B)	琵琶湖清艇場	エイト	1000	4位	3'16" 2	1位東北大3'03" 3
50.4.27	朝日レガッタ決勝(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1000	2位	3'10" 8	1位東北大3'06" 4
50.8.2	関西選手権大会予選(同大A)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	2位	4'28" 6	1位東レ滋賀4'25" 2
50.8.2	関西選手権大会予選(同大B)	琵琶湖清艇場	エイト	1500	3位	4'47" 1	1位龍谷4'43" 2
50.8.3	関西選手権大会準決勝	琵琶湖清艇場	エイト	1500	1位	4'47" 5	京大以下に勝利
50.8.3	関西選手権大会決勝	琵琶湖清艇場	エイト	1500	2位	4'33" 9	1位東レ滋賀4'27" 5
50.8.3	瀬田川杯予選	琵琶湖清艇場	エイト	1500	4位	5'33" 1	1位神戸大5'09" 7
50.8.30	全日本大学選手権大会予選	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'40" 9	大市大以下に勝利E1.5
50.8.31	全日本大学選手権大会準決勝	戸田清艇場	エイト	2000	1位	6'28" 6	東工大以下に勝利NW1

50.8.31	全日本大学選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'25" 3	1位東北大6'18" 3 0
50.8.30	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'36" 9	1位東北大函南6'36" 2E0.2
50.8.30	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	7'09" 3	立命大以下に勝利NE1
50.8.31	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'48" 4	1位日清選抜6'27" 7ENE1.6
50.11.1	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'56" 6	1位日清選抜6'55" 6N5.5
50.11.2	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'42" 8	早大以下に勝利E1
50.11.2	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'41" 7	1位東レ滋賀6'33" 4NE4

本年度部長 出石邦保

部員

湊良三 坂本雄二 畠敏 武尾豊 渡裕子 坂本美恵子 山口忠博 荻野義明 中野貴夫 矢島正恒 河畑宣伸 馬杉淳一 稲田英俊 石鍋寿寛 木村俊雄
高橋正樹 松川信之 森信秀 村田市郎 小笠原司 藤井浩 幸田龍一 永坂隆明 佐藤和弘 荻野正也 米川仁 吉川義弘 梶原正明 中村正博
斎藤博之 服部善司 桑田都男

◆昭51.5.1	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	5位	3'25" 5	1位広島RC3'21" 6
51.5.2	朝日レガッタ敗復	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	3'26" 8	1位龍谷3'14" 4
51.8.1	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位	5'01" 2	1位東レ滋賀4'48" 9
51.8.1	瀬田川杯決勝(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	5'21" 7	関大A以下に勝利
51.8.28	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'23" 9	1位東大6'22" 9W0.2
51.8.28	全日本大学選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'33" 7	早大理工以下に勝利NE1
51.8.29	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'30" 9	1位日大6'20" 7 0
51.8.28	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'36" 3	1位早稲田6'32" 3N0.5
51.8.28	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'59" 8	千葉大以下に勝利NE2
51.8.29	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'42" 3	1位立命6'40" 3 0

本年度部長 出石邦保

部員

山口忠博 荻野義明 中野貴夫 矢島正恒 河畑宣伸 馬杉淳一 稲田英俊 石鍋寿寛 木村俊雄 高橋正樹 松川信之 森信秀 村田市郎 小笠原司 藤井浩
幸田龍一 永坂隆明 城生清孝 小関隆一 石鍋寿明 益田秀仁 井頭感 根本寛明 水野正成 玄道秀明 桜井隆夫 北川浩二 上浦英明 吉川義弘 桑田都男
井上克也 塚本啓統

◆昭52.5.2	朝日レガッタ準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3	
52.5.2	朝日レガッタ準決勝(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	3'26" 0	1位関学3'17" 6
52.5.3	朝日レガッタ決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'01" 9	早大以下に勝利
52.6.12	中日本レガッタ準決勝	愛知池	エイト	1000	2位	3'29" 37	1位中央3'24" 35NW6.0
52.6.12	中日本レガッタ決勝	愛知池	エイト	1000	3位	3'23" 97	1位一橋3'21" 36WNW4.0
52.7.30	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	4'43" 2	立命大以下に勝利
52.7.30	瀬田川杯決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位		
52.8.27	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	舵フォア	2000	2位	7'33" 25	1位大倉大7'26" 15
52.8.27	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	舵フォア	2000	3位	7'37" 86	1位東大7'31" 54
52.8.27	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'22" 43	新潟大以下に勝利
52.8.27	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'31" 28	福島大以下に勝利
52.8.28	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'35" 95	1位東大6'31" 58E1.1

本年度部長 出石邦保

部員

稲田英俊 石鍋寿寛 木村俊雄 高橋正樹 松川信之 森信秀 村田市郎 小笠原司 藤井浩 幸田龍一 永坂隆明 城生清孝 小関隆一 石鍋寿明 益田秀仁
井頭感 根本寛明 水野正成 玄道秀明 桜井隆夫 北川浩二 上浦英明 池谷香 荒山元秀 細見博 坂井俊夫 中辻努 中住慎一 石田雄治 内海久俊
野瀬正治 吉川義弘 塚本啓統 金原宣秀

監督 杉本茂雄 対校コーチ 高橋湛

◆昭53.5.4	朝日レガッタ準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'13" 9	1位早稲田3'09" 3
53.5.5	朝日レガッタ決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	3'14" 9	1位東レ滋賀3'03" 7
53.7.30	関西選手権大会準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	4'43" 7	中京大以下に勝利
53.7.30	関西選手権大会決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位	4'45" 5	1位東レ滋賀4'35" 7
53.7.30	瀬田川杯準決勝(同大C)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	5位	5'16" 1	1位鳥根大4'58" 4
53.8.2?	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	舵フォア	2000	2位	7'52" 72	1位福島大7'45" 50
53.8.2?	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	舵フォア	2000	3位	8'12" 23	1位慶大8'00" 7
53.8.25	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'45" 54	1位東レ滋賀6'30" 65
53.8.25	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	7'02" 80	1位北大6'58" 34
53.8.25	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'48" 88	中央大以下に勝利
53.8.26	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'41" 13	北大以下に勝利
53.8.27	オックスフォード盾決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'53" 50	1位茨城高進6'50" 96S2.5

本年度部長 出石邦保

部員

木村俊雄 高橋正樹 松川信之 森信秀 村田市郎 小笠原司 藤井浩 幸田龍一 永坂隆明 城生清孝 小関隆一 石鍋寿明 益田秀仁 井頭感 根本寛明
水野正成 玄道秀明 桜井隆夫 北川浩二 上浦英明 池谷晋 荒山元秀 細見博 坂井俊夫 中辻努 中住慎一 石田雄治 内海久俊 野瀬正治 目片雅喜
河毛樹 森保二 林圭介 林田尚之 久保智之 山本健也 松山厚志 永野巖 安都裕一郎 松山厚志 永野巖

◆昭54.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'06" 3	関学以下に勝利
54.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'11" 0	東北大以下に勝利
54.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'15" 2	1位住金鹿島3'12" 9
54.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'14" 7	1位日大3'12" 9
54.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	1位	4'01" 2	三菱商事以下に勝利
54.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	3位	4'12" 1	1位愛短大4'07" 1
54.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	5位	4'14" 0	1位飛水会4'07" 2
54.6.24	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位	5'12" 9	1位東レ滋賀5'12" 0
54.6.24	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	5'18" 4	滋賀大以下に勝利
54.6.24	関西選手権大会決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位	5'20" 9	1位東レ滋賀5'11" 1
54.6.24	関西選手権大会決勝(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	4位	5'37" 5	1位東レ滋賀5'11" 1
54.6.24	瀬田川杯準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	4位	5'54" 7	1位関学5'20" 5
54.8.24	オックスフォード盾予選(同大A)	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'56" 30	韓国檀国大以下に勝利
54.8.24	オックスフォード盾予選(同大B)	戸田漕艇場	エイト	2000	6位	7'37" 03	1位立命7'06" 90
54.8.24	オックスフォード盾敗復(同大B)	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'56" 62	1位檀国大6'32" 47
54.8.25	オックスフォード盾準決勝(同大A)	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'28" 49	立教大以下に勝利
54.8.26	オックスフォード盾決勝(同大A)	戸田漕艇場	エイト	2000	5位	6'53" 95	1位東大映6'35" 85E1.2
54.8.24	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'22" 48	京大以下に勝利
54.8.25	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'04" 81	鳥取大以下に勝利3'21" 8 佐賀大以下に勝利
54.8.25	全日本大学選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'04" 26	1位東北大6'02" 00WNW2.0
54.8.26	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'15" 31	1位東大(三四郎)6'08" 54W2.1

本年度部長 出石邦保

部員

城生清孝 小関隆一 石鍋寿明 益田秀仁 井頭感 根本寛明 水野正成 玄道秀明 桜井隆夫 北川浩二 上浦英明 池谷晋 荒山元秀 細見博 坂井俊夫
中辻努 中住慎一 石田雄治 内海久俊 野瀬正治 目片雅喜 河毛樹 森保二 林圭介 林田尚之 久保智之 山本健也 松山厚志 永野巖 杉本英男
小森進治 和田学 武田泰一 阿部和久 松田弘一 田中秀昭 高山一也 吉田寛伸 明石逸二 貝賀俊之

◆昭55.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'21" 8	
55.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	3'08" 2	1位住金鹿島3'02" 3
55.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	3'04" 2	1位住金鹿島2'57" 9

55.7.26	関西選手権大会準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	4位	4'55" 1	1位京大A4'40" 7
55.7.27	関西選手権大会準決勝(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	5位	5'09" 3	1位京大B4'44" 6
55.7.26	関西選手権大会準々決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	5位	4'31" 9	1位韓国光山高4'10" 7
55.7.27	瀬田川杯準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位	5'00" 0	1位岡山大学4'54" 3
55.8.22	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'23" 74	立命大以下に勝利 0
55.8.23	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'15" 88	1位東北大6'14" 97 0
55.8.24	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'23" 86	1位東北大6'14" 18N1.6
55.8.23	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'27" 23	防衛大以下に勝利ENE0.8
55.8.24	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'44" 57	滋賀大以下に勝利ENE0.5
55.8.25	オックスフォード盾決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'31" 26	筑波大以下に勝利ENE0.8

本年度部長 出石邦保

部員

池谷晋 荒山元秀 細見博 坂井俊夫 中辻努 中住慎一 石田雄治 内海久俊 野瀬正治 目片雅幸 河毛樹 森保二 林圭介 林田尚之 久保智之 山本健也
 松山厚志 永野巖 杉木英男 小森達治 和田学 武田泰一 阿部和久 松田弘一 田中秀昭 高山一也 吉田寛伸 明石逸二 貝賀俊之 米村康弘 松村勲
 河南潤治 谷口幸一 前谷浩 作間秀樹 松本収平

◆昭56.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	3'23" 6	1位明治3'08" 4
56.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	3'10" 2	1位中央3'00" 0
56.5.5	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	3'05" 6	1位桜門艇会友3'02" 8
56.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	2位	4'06" 4	1位福岡美浜RC4'02" 6
56.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	3位	4'10" 0	1位日本鋼管福山4'02" 7
56.6.12	中日本レガッタ予選	愛知池	エイト	1000	2位	3'14" 28	1位早稲田3'13" 42NNW1.1
56.6.13	中日本レガッタ準決勝	愛知池	エイト	1000	5位	3'09" 09	1位東レ滋賀3'01" 15 0
56.6.13	中日本レガッタ予選	愛知池	エイト	1000	3位	3'09" 19	1位静岡大3'02" 75SW0.6
56.6.13	中日本レガッタ敗復	愛知池	エイト	1000	1位	3'13" 28	早大以下に勝利SW1.5
56.6.14	中日本レガッタ準決勝	愛知池	エイト	1000	3位	3'08" 12	1位法政3'01" 58SSW1.5
56.6.14	中日本レガッタ決勝	愛知池	エイト	1000	6位	3'08" 98	1位法政2'57" 42SSW1.5
56.7.25	関西選手権大会予選(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	5位	4'54" 08	1位山口大4'37" 04N3.5
56.7.25	関西選手権大会予選(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位	4'49" 01	1位龍谷4'40" 04N3.0
56.7.25	関西選手権大会敗復(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位	4'46" 06	1位京大4'44" 03京大3.0
56.7.25	関西選手権大会敗復(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	4'51" 00	関学以下に勝利N4.0
56.7.26	関西選手権大会準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位	4'44" 08	1位龍谷4'35" 06NNW3.0
56.7.26	関西選手権大会準決勝(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位	4'46" 05	1位山口大4'43" 04N3.0
56.7.25	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	3位	4'06" 05	1位滋賀銀行3'45" 01N2.0
56.7.25	関西選手権大会敗復	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	2位	4'10" 06	1位大府大飛翔会4'04" 00N2.0
56.7.26	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	2位	4'03" 08	1位東レ滋賀3'53" 08NNW1.0
56.7.26	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	5位	4'06" 06	1位滋賀選抜少年3'49" 01 NNW5.0
56.7.25	瀬田川杯予選(同大C)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	4'50" 08	追手門以下に勝利NW4.0
56.7.26	瀬田川杯準決勝(同大C)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位	5'08" 01	1位関大5'05" 08NNW2.0
56.8.27	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'49" 10	1位東大6'17" 76
56.8.27	全日本大学選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'37" 12	1位法政6'26" 92
56.8.27	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'31" 28	小樽・札幌以下に勝利NNE0.8
56.8.28	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'19" 81	九大以下に勝利WNW1.7
56.8.30	オックスフォード盾決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'21" 71	1位権国大6'16" 27 NNW2.1~W0.5

本年度部長 出石邦保

部員

目片雅幸 河毛樹 森保二 林圭介 林田尚之 久保智之 山本健也 松山厚志 永野巖 杉木英男 小森達治 和田学 武田泰一 阿部和久 松田弘一
 田中秀昭 高山一也 吉田寛伸 明石逸二 貝賀俊之 米村康弘 松村勲 河南潤治 谷口幸一 前谷浩 作間秀樹 松本収平 伊藤寛 小山一 石鍋寿久
 矢野英明 岸本伸司

◆昭57.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'06" 0	1位日大2'58" 2
57.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	2位	3'59" 3	1位小松RC3'56" 4
57.5.3	朝日レガッタ二時予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	2位	4'02" 7	1位京阪電鉄4'02" 2
57.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	2位	4'30" 1	1位新日鉄八幡4'25" 3

本年度部長 出石邦保

部員

杉本英男 小森進治 和田学 武田泰一 阿部 和久 松田弘一 田中秀明 高山一也 吉田寛伸 明石逸二 貝賀俊之 米村康弘 松村勲 河南潤治 谷口幸一
前谷浩 作間秀樹 松本収平 伊藤寛 小山一 石鍋寿久 矢野英明 岸本伸司 川崎五代嗣 田中義力 今井智 高下康治 松原久能 磯田秀樹 田中薫
谷川真司 今井崇雄 中村俊裕 安田智雄 安田克裕

◆昭58.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'01" 5	1位京大2'56" 4NNW2
58.5.3	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'06" 2	1位日大3'01" 6NNW2
58.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	5位	3'03" 8	1位日大2'56" 6NNW2
58.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	1位	3'59" 5	三菱重工以下に勝利NNW2
58.5.3	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	3位	4'01" 1	1位京阪電鉄3'56" 5 0
58.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	Kフォア	1000	6位	4'02" 0	1位美浜RC3'55" 1NNW2

本年度部長 出石邦保

部員

米村康弘 松村勲 河南潤治 谷口幸一 前谷浩 作間秀樹 松本収平 伊藤寛 小山一 石鍋寿久 矢野英明 岸本伸司 川崎五代嗣 田中義力 今井智
高下康治 松原久能 磯田秀樹 田中薫 谷川真司 今井崇雄 中村俊裕 安田智雄 安田克裕 城生栄二 奥谷勇人 高橋良明 樋口健一郎 安田一郎 後藤嘉樹
森川博有 大沼弘幸 屋久浩典 森田哲哉 志賀理

◆昭59.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'21" 1	大府大以下に勝利NW3
59.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	2'59" 1	1位京大2'57" 2SW 0
59.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	2'58" 6	龍谷大以下に勝利NE3
59.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	2'59" 4	1位京大2'53" 5NNW12
59.8.24	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'27" 32	1位中央大6'08" 11NW3.4
59.8.24	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'13" 71	1位東大6'09" 91W5
59.8.24	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	7'06" 85	1位東大淡青6'45" 55ESE1.6
59.8.24	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'46" 76	東北大北斗以下に勝利
59.8.25	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'45" 18	1位中央大6'26" 23

本年度部長 出石邦保

部員

伊藤寛 小山一 石鍋寿久 矢野英明 岸本伸司 川崎五代嗣 田中義力 今井智 高下康治 松原久能 磯田秀樹 田中薫 谷川真司 今井崇雄 中村俊裕
安田智雄 安田克裕 城生栄二 奥谷勇人 高橋良明 樋口健一郎 安田一郎 後藤嘉樹 森川博有 大沼弘幸 屋久浩典 森田哲哉 志賀理 阿江亮彦 斎藤繁明
佐藤亘 原一雅 平松靖之 星沢慎二

◆昭60.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'04" 0	龍谷以下に勝利NNW4
60.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	2'59" 0	1位阪大2'57" 2NNW2
60.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	3'02" 9	1位日大2'57" 4
60.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	S スカル	1000	2位	4'37" 5	1位舞鶴高4'24" 5 0

戦績・名簿

60.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	5位	4'13" 9	1位瀬田漕艇クラブ3'50" 0 0
60.8.22	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'34" 70	東経大以下に勝利N1
60.8.23	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'41" 73	1位中央大6'23" 36E2
60.8.22	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'44" 56	1位一橋大HERMES6'43" 74E1
60.8.22	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'27" 92	1位慶大6'21" 57

本年度部長 出石邦保

部員

川崎五代嗣 田中義力 今井智 高下康治 松原久能 磯田秀樹 田中薫 谷川真司 今井崇雄 中村俊裕 安田智雄 安田克裕 城生栄二 奥谷勇人 高橋良明
樋口健一郎 安田一郎 後藤嘉樹 森川博有 大沼弘幸 屋久浩典 藤田哲哉 志賀理 阿江亮彦 斎藤繁明 佐藤豆 原一雅 平松靖之 星沢慎二 石田政隆
関谷晴彦 井上周一 末瀬雅巳 西田智明 桜井昭子

◆昭61.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'00" 3	金沢大以下に勝利N1
61.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	3'01" 3	京大以下に勝利N1
61.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	3'15" 2	1位東北大城波3'08" 4SE4
61.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	5位	3'08" 2	1位東レ滋賀2'58" 2E5
61.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1000	2位	3'30" 3	1位広島大臥虎3'24" 0N1
61.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1000	3位	3'29" 8	1位広島大臥虎3'24" 1NNW4
61.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1000	4位	3'35" 5	1位トヨタ3'27" 7SE5
61.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	5位	4'29" 6	1位松江IRC3'49" 9NE1
61.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	5位	4'19" 4	1位インテック3'46" 0
61.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	4位	4'17" 4	1位阪大3'57" 0NNE1
61.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	5位	4'16" 7	1位松江IRC3'48" 1
61.7.26	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1300	2位	3'57" 1	1位京大叡風3'54" 1NNW5
61.7.27	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1300	3位	3'54" 4	1位滋賀大経3'54" 0NNW2
61.7.26	瀬田川杯予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1300	1位	4'10" 2	山口大黎明以下に勝利NNW2
61.7.27	瀬田川杯準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1300	1位	3'57" 5	神戸大夏斗雲以下に勝利NNW2
61.7.27	瀬田川杯決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1300	4位	3'58" 9	1位滋賀大経九州3'53" 6
61.7.26	瀬田川杯予選(同大B)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1300	3位	4'41" 5	1位京大芝蘭会4'36" 6NNW2
61.7.26	瀬田川杯予選(同大A)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1300	2位	4'40" 7	1位龍谷4'34" 1NNW5
61.7.26	瀬田川杯敗復(同大B)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1300	3位	4'52" 0	1位膳所高B4'45" 6NNW2
61.7.27	瀬田川杯準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1300	3位	4'33" 0	1位岐阜大4'26" 5NNW2
61.8.21	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'36" 74	1位東大8'20" 72ENE2.5
61.8.21	全日本大学選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'25" 51	1位早大理工6'21" 62ENE1
61.8.22	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	7'15" 12	1位早大6'56" 72NE3.5
61.8.21	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	7'12" 69	1位岡山山7'04" 51NE4
61.8.21	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'51" 32	1位熊本大6'48" 80NE1.5
61.8.22	オックスフォード盾準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	7'06" 50	1位慶大6'39" 69ENE4.5

本年度部長 出石邦保

部員

城生栄二 奥谷勇人 高橋良明 樋口健一郎 安田一郎 後藤嘉樹 森川博有 大沼弘幸 屋久浩典 藤田哲哉 志賀理 阿江亮彦 斎藤繁明 佐藤豆 原一雅
平松靖之 星沢慎二 石田政隆 関谷晴彦 井上周一 末瀬雅巳 西田智明 桜井昭子 朝倉伸二 石橋雅信 坂本竜一 佐伯誠 島田恭典 内藤正樹 西田利彦
配川隆司 前田崇 米原栄一 喜多隆博 川崎優子

◆昭62.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位	3'03" 58	1位中国賽艇隊3'00" 18N0.5
62.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位	3'33" 15	1位中国賽艇隊3'21" 01SW2.5
62.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	2位	4'16" 51	1位本田技研鈴鹿4'13" 00 0
62.7.25	関西選手権大会予選(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位	5'18" 60	1位大府大5'15" 11SW7
62.7.25	関西選手権大会予選(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	4'58" 08	関大以下に勝利
62.7.25	関西選手権大会敗復(同大B)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位	4'41" 33	1位東レ滋賀4'38" 84W5
62.7.26	関西選手権大会準決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位	4'30" 07	滋賀大経湖龍以下に勝利 N1

62.7.26	関西選手権大会決勝(同大A)	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	4位	4'36" 77	1位京大4'25" 14N5
62.7.25	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	3位	6'51" 61	1位長浜農高6'11" 81S2
62.7.25	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	棄権		
62.7.25	関西選手権大会敗復	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	失格		
62.7.25	瀬田川杯予選(同大B)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	3位	6'22" 40	1位龍谷6'03" 49SW2
62.7.25	瀬田川杯予選(同大C)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	4位	6'13" 97	1位山口大竜王6'03" 83SW5
62.7.25	瀬田川杯予選(同大A)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	4位	6'46" 08	1位神戸大6'25" 23S7
62.7.25	瀬田川杯敗復	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	3位	6'04" 25	1位香川大飛鷹5'49" 76
62.7.25	瀬田川杯敗復(同大C)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	1位	5'51" 91	高知大以下に勝利
62.7.25	瀬田川杯敗復(同大B)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	2位	5'54" 60	1位勝所高5'53" 81
62.7.26	瀬田川杯準決勝(同大C)	琵琶湖漕艇場	舵フォア	1500	3位	5'21" 25	1位山口大竜王5'16" 11
62.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'15" 18	1位東レ滋賀3'09" 01SE0.5
62.8.27	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	Wスカル	2000	1位	7'09" 42	慶大以下に勝利SSW4
62.8.28	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	Wスカル	2000	1位	7'26" 34	日大以下に勝利ENE0.5
62.8.29	全日本大学選手権大会決勝	戸田漕艇場	Wスカル	2000	2位	7'28" 27	1位東海大7'21" 24NNW1.5
62.8.27	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'14" 43	1位鹿児島大6'11" 46SW3
62.8.27	全日本大学選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'22" 61	1位京大6'12" 71W3.5
62.8.28	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'28" 62	1位日大6'15" 46 0
62.8.27	全日本選手権大会予選	戸田漕艇場	Wスカル	2000	4位	7'37" 25	1位東大7'12" 54 ENE1
62.8.27	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	Wスカル	2000	4位	7'53" 72	1位西日本大学選抜7'32" 27
62.8.28	全日本選手権大会準決勝	戸田漕艇場	Wスカル	2000	4位	7'32" 85	1位トヨタ7'17" 99 0
62.8.27	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'40" 06	1位東大天龍6'20" 83E0.5
62.8.27	オックスフォード盾予選	戸田漕艇場	エイト	2000	3位	6'32" 32	1位慶大6'21" 14
62.8.27	オックスフォード盾敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'29" 29	1位早大理工6'26" 65

本年度部長 岡本博公

部員

阿江亮彦 斎藤繁明 佐藤豆 原一雅 平松裕之 星沢慎二 石田政隆 関谷晴彦 井上周一 末瀬雅巳 西田智明 桜井昭子 朝倉伸二 石橋雅信 坂本龍一
佐伯誠 島田泰典 内藤正樹 西田利彦 配川隆司 前田崇 米原栄一 喜多隆博 川崎優子 乾健治 大竹宏 岡田太一郎 小原隆史 重松健一 榊原雅也
佐藤将人 杉山伸 田中隆一 津嶋泰 畠山尚弥 三上和彦 山下進 井上京子 中村祥子 若山清和

◆昭63.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位		滋賀大経済以下に勝利
63.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位		
63.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位		1位東レ滋賀
63.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	6位		1位東レ滋賀
63.5.3	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	フォア	1000	1位		神戸大以下に勝利
63.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	フォア	1000	2位		1位NTT関西
63.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	フォア	1000	3位		1位トヨタ
63.7.24	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	4位		
63.7.24	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	Wスカル	1500	1位		
63.7.24	瀬田川杯決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	2000	1位		
63.8.25	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	5位		1位日大
63.8.25	全日本選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	2位		1位滋賀大経済

本年度部長 岡本博公

部員

石田政隆 関谷晴彦 井上周一 末瀬雅巳 西田智明 桜井昭子 朝倉伸二 石橋雅信 坂本龍一 佐伯誠 島田泰典 内藤正樹 西田利彦 配川隆司 前田崇
米原栄一 喜多隆博 川崎優子 乾健治 大竹宏 岡田太一郎 小原隆史 重松健一 榊原雅也 佐藤将人 杉山伸 田中隆一 津嶋泰 畠山尚弥 三上和彦 山下進
井上京子 中村祥子 大友彰一郎 岡本竜人 小田切拓 勝本泰 加藤康 功力英俊 小林重之 小林俊樹 近藤泰裕 嶋本貴夫 下田亨 竹下岳 谷昌二郎 三村秀之
宮崎寿春 宮脇信行 山口賢太郎 吉田拓生 吉田武史 米山尚吾 高羽浩司

◆平 1.5.4	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位	2'57"	京大以下に勝利
----------	----------	--------	-----	------	----	-------	---------

1.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位		阪大以下に勝利
1.5.5	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位		立命大他に勝利
1.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位		1位早大
1.5.4	朝日レガッタ予選(Jr.)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	3'03"	1位九大
1.5.4	朝日レガッタ準々決勝(Jr.)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位		1位東レ滋賀
1.5.2	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	Sフォア	1000	1位		広大医学部以下に勝利
1.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Sフォア	1000	1位		三洋電機滋賀以下に勝利
1.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	Sフォア	1000	2位		1位東レ滋賀
1.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	Sフォア	1000	6位		1位浜寺ローイングクラブ
1.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	2位		1位インテック
1.5.4	朝日レガッタ準々決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1000	3位		1位東レ滋賀
1.6.11	中日本レガッタ	愛知池漕艇場	エイト	1000	5位		1位慶応大
1.7.29	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位		関大以下に勝利
1.7.30	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位		京大以下に勝利
1.7.30	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位		京大以下に勝利
1.7.30	瀬田川杯	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	4位		
1.8.24	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	1位	6'01"	小樽商大以下に勝利
1.8.26	全日本大学選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	6'01"	1位中央大
1.8.27	全日本選手権大会決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	4位	7'22"	1位慶応大

本年度部長 岡本博公

部員

朝倉伸二 石橋雅信 坂本龍一 佐伯誠 島田泰典 内藤正樹 西田利彦 配川隆司 前田崇 米原栄一 喜多隆博 川崎優子 乾健治 大竹宏 岡田太一郎 小原隆史
重松健一 柳原雅也 佐藤将人 杉山伸 田中隆一 津嶋泰 島山尚弥 三上和彦 山下進 井上京子 中村祥子 岡本竜人 小田切拓 勝本豪 加藤康 功力英俊
小林重之 小林俊樹 嶋本貴夫 下田亨 谷昌二郎 宮崎寿春 宮脇信行 吉田拓生 吉田武史 米山尚吾 原田昌彦 井上賢治 宇戸大輔 奥原利行 高橋涉 井上真樹
今井彰 田村浩二 石口雄三

◆平 2.5.2	朝日レガッタ予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	1位		
2.5.4	朝日レガッタ準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	2位	2'55"	1位NTT東京
2.5.5	朝日レガッタ決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	4位		1位NTT東京
2.5.3	朝日レガッタ準々決勝(Jr.)	琵琶湖漕艇場	エイト	1000	3位		1位立命大
2.6.9	中日本レガッタ予選	愛知池漕艇場B	エイト	1000	2位		1位慶応大
2.6.10	中日本レガッタ準決勝	愛知池漕艇場B	エイト	1000	2位		1位立教大
2.6.10	中日本レガッタ決勝	愛知池漕艇場B	エイト	1000	3位	1位中央大	
2.8.28	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位		1位立命大
2.8.29	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位		京大以下に勝利
2.8.29	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	2位		1位東レ滋賀
2.8.28	瀬田川杯予選	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	1位		関大以下に勝利
2.8.29	瀬田川杯準決勝	琵琶湖漕艇場	エイト	1500	3位		1位京大
2.8.28	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	1位	5'42"	
2.8.28	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	1位	5'40"	
2.8.28	関西選手権大会準々決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	1位		
2.8.29	関西選手権大会準決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	1位		
2.8.29	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	Sスカル	1500	2位	5'29"	1位NTT
2.8.28	関西選手権大会予選	琵琶湖漕艇場	フォア	1500	2位		
2.8.29	関西選手権大会決勝	琵琶湖漕艇場	フォア	1500	5位		1位滋賀大教育
2.8.23	全日本大学選手権大会予選	戸田漕艇場	エイト	2000	2位	6'13"	1位日大
2.8.23	全日本大学選手権大会敗復	戸田漕艇場	エイト	2000	1位		神戸大以下に勝利
2.8.24	全日本大学選手権大会準決勝	戸田漕艇場	エイト	2000	2位		1位京大

本年度部長 中村宏治(代行)

部員

乾健治 大竹宏 岡田太一郎 小原隆史 重松健一 柳原雅也 佐藤将人 杉山伸 田中隆一 津嶋泰 金子好守 島山尚弥 三上和彦 山下進 井上京子

中村祥子 大友彰一郎 岡本竜人 小田切拓 勝本肇 加藤康 功力英俊 小林重之 小林俊樹 近藤泰裕 嶋本貴夫 下田亨 竹下岳 谷昌二郎 三村秀之
宮崎寿春 宮脇信行 山口賢太郎 吉田拓生 吉田武史 米山尚吾 高羽浩司 原田昌彦 井上賢治 宇戸大輔 内田琢也 高橋渉 堀内昭宏 松城敬 中西孝夫
喜多栄太 押領司哲也 藤井啓宏 三野順一郎 中沢郁男 早坂真一 木内良典 竹内秀暢 山口雅司 小島康夫 北尾冬子 田村麻理子 余谷有紀枝 堀智子
祖父江智香 川島裕美子

◆平3.

本年度部長 岡本博公

部員

大友彰一郎 岡本竜人 小田切拓 勝本肇 加藤康 功力英俊 小林重之 小林俊樹 近藤泰裕 嶋本貴夫 下田亨 竹下岳 谷昌二郎 三村秀之 宮崎寿春 宮脇信行
山口賢太郎 吉田拓生 吉田武史 米山尚吾 高羽浩司 原田昌彦 井上賢治 宇戸大輔 内田琢也 高橋渉 堀内昭宏 松城敬 中西孝夫 喜多栄太 押領司哲也
藤井啓宏 三野順一郎 中沢郁男 早坂真一 木内良典 竹内秀暢 山口雅司 小島康夫 北尾冬子 田村麻理子 余谷有紀枝 堀智子 祖父江智香 川島裕美子
佐伯明 近藤邦彦 森田徳教 小吹悟 河口充男 金契越郎 伊藤崇 西村泰隆 藤牧宏彰 古山裕基 大西直子 二瓶伸子 加藤文徳

同志社ローザンヌ100年

年 表

年	ローイング関係	学内関係	社 会
明治10	山崎為徳、横井（伊勢）時雄、和田正幾の三名東京開成学校を退学して同志社に入学。彼らがボートを関西に伝えた可能性あるも未確認	同志社英学校開校（M8） 英学校第1回卒業式（M12）	「廃刀令」公布（M9） 西南戦争（M10）
明治12	この頃同志社にボートがあったと伝えられる（「関西漕艇界小史」）		口つき紙巻たばこ流行しはじめる 国会開設運動盛ん 鹿鳴館竣工（M16）
明治16	この頃琵琶湖でボートを漕ぐ同志社学生あり（大國壽吉談）	校友会組織される（M18）	日本、メートル法条約に加入調印（M18）
明治22	この頃同志社学生春季に嵐山にて和船による水合戦を行う習わしあり		時局風刺のOPPケペー節大流行 大日本帝国憲法発布（M22）
明治23	疎水工事竣工に伴い大津美保ヶ崎に五人乗り貸ボート多数出来、学生盛んに練習を始める	新島襄永眠。山本覚馬臨時総長に（M23）	帝国ホテル開業（M23） 都ホテル開業（M23）
明治24	同志社における体操科（週四時間兵式操練）の内二時間を自由運動にするとの決定あり。 またこの頃比叡登山、大津～石山間でのボート乗りも学生の間で盛んに行われる 4/15 福井大三郎が中心となり、石山にて第一回春季水上大運動会挙行される。 種目は短艇競漕と競泳。当時の記録に名をとどめる者、牧野虎次、加藤太郎松、岡本桜、二宮峯男、小林峯三、郡淳、大石七郎、千谷論之助 他		大津事件（M24） 水準原点創設 カーネギーホール落成
明治25	4/20 春季水上運動会 5/6 同志社端艇競走会 対泰西学館戦に勝利 対第三高等中学戦に勝利 この年初めての琵琶湖周航を行う	小崎弘道社長（総長）就任（M25）	山高帽、パナマ帽大流行
明治30	4/23 水上大運動会 4/25 滋賀師範及び滋賀尋常中学と対戦 両者に勝利 5/9 滋賀商業学校と対戦 勝利 7/18 琵琶湖聯合大競漕大會 慶応義塾と対戦 勝利 10/30 この頃ボート新造運動始まる	同志社の徽章できる（M26） 神学館（現クラーク記念館）竣工（M26） 横井時雄社長（総長）就任（M30）	日清戦争（M27～28） 樋口一葉「たけくらべ」 尾崎紅葉「金色夜叉」 島崎藤村「若菜集」 「ハイカラ」が流行語に
明治31	4/13 新艇「阿蘇」「霧島」「浅間」進水式 8/7 大日本聯合端艇大会	綱領変更問題起こる（M31）	電話交換手が女子職業の花形となる

年	ローイング関係	学内関係	社 会
明治31	大阪商業と対戦 勝利		
明治32	大日本聯合端艇競漕大会で優勝 日本記録を樹立 (1000メートル4分51秒)	下村孝太郎臨時名誉社長に 就任 (M32) 西原清東社長に就任 (M32)	海老茶袴が活動的な女学生 に愛好される
明治33	学制改革の打撃により全国大会への出漕中止		与謝野鉄幹「明星」を創刊
明治34	8/4 武徳會端艇大競漕會 普通競漕 (予選?) にて大阪耶志摩倶楽部に大勝 名誉競漕には特殊事情により選外となり不出漕 10/12 唐崎にて饅頭レース		田中正造足尾鉍毒問題を直 訴 (M34)
明治35	4/18 春季水上大運動會 6/25 運動會用優勝旗製作 端艇部に授与 8/4 武徳會端艇競漕會 嶋根第一中学に敗退	片岡健吉社長に就任 (M35)	日英同盟協約調印 (M35) 唱歌「ふるさと」できる 八甲田山雪中行軍遭難事件 (M35)
明治36	4/14 春季水上大運動會 聯合大会には不出漕 10/14 饅頭レースにて三隻のボートに紫の校旗を新 調	下村孝太郎臨時名誉社長に 就任 (M36)	六甲山に日本初のゴルフ場 オープン
明治37	4/1～4/5 湖水周航 4/22 春季水上大運動會 米賓競漕にてスタートの手違いによる不利により滋賀 師範に惜敗 5/15 滋賀師範と再戦し雪辱	同志社専門学校を設立 (37)	日露戦争始まる (M37) 与謝野晶子「君死にたまふ こと勿れ」
明治38	他校との対戦なし		夏目漱石「吾輩は猫である」 ポーツマス条約調印 (M38)
明治39	5/18 春季水上大運動會 8/4 武徳會端艇競漕 コース侵入の失策あり、愛知中学に敗退		日本社会党旗あげ (M39)
明治40	5/18 春季水上大運動會 8/4 武徳會端艇競漕 責任競漕で勝つもタイム不足で名誉競漕不出漕	原田助社長に就任 (M40)	足尾銅山で大暴動
明治41	二月 この頃端艇新調募金運動始まる 4/3 新艇「比叡」進水式 さらに「愛宕」「鞍馬」も完成 5/22 春季水上大運動會		第1回ブラジル移民 (M41)
明治42	3/26 五艘の艇による琵琶湖周航 5/8 春季水上大運動會 十月 尾花ヶ崎の新艇庫落成式兼饅頭レース		伊藤博文ハルビン駅頭で射 殺される (M42)

年	ローイング関係	学内関係	社 会
明治43	3/26～3/29 琵琶湖周航 5/13 春季水上大運動会		逗子開成中学生12人および小学生一人、七里ヶ浜で遭難 (M43)
明治44	4/11 三高大会に出漕 京都第二中学に敗退 4/16 帝大大大会に出漕 京都第二中学に敗退 5/6 春季水上大運動会		大逆事件で12名に死刑判決 (M44) 「デカンショ節」が流行
大正1	5/10 春季水上大運動会	「専門学校令」による同志社大学設立 (M45)	天皇機関説論争 (M45) 乃木希典殉死 (T1)
大正2	京津電車開通 5月 春季水上大運動会		岩波書店開業 (T2)
大正3	10/11 新艇「鴨」「桂」「淀」進水記念運動会		第1次世界大戦始まる (T3) 宝塚少女歌劇第1回公演 (T3)
大正4	5/16 春季水上大運動会	図書館書庫竣工 (T4) 致遠館定礎	対華21カ条要求 (T4) 新聞の夕刊発行開始
大正5	5/12 春季水上大運動会		軍需景気で貿易収支大幅黒字となる 坂田三吉、関根金次郎将棋八段に勝利 (T6)
大正7	5/11 春季水上大運動会 7/2～7/5 琵琶湖周航 9/28 京都第二中学水上大会 10/2 京都市立第一商業学校レース 京都医専と再戦して勝利 10/27 大阪高等工業学校レース 大阪高等商業学校と対戦 勝利		第1次世界大戦終わる (T7)
大正8	5/9 春季水上大運動会 法学部が優勝 沖の島付近にて転覆事故 この年滑席艇日本に入る	中村采助社長に就任 (T8) D.W.ラーネット学長就任 (T8)	自動車取締法公布。最高時速は24キロ (T8)
大正9	第一回東西帝大対抗レースを観戦 同志社滑席艇導入を決める 5/8 春季水上大運動会	図書館本館新築工事竣工 (T9) 海老名弾正総長に就任 (T9) 海老名弾正学長に就任 (T9)	わが国初のメーデー (T9)

年	ローイング関係	学内関係	社 会
大正9		「新大学令」による大学設立 文部大臣より認可 (T9)	
大正10	滑席艇建造案成立 (東辻・渡辺・中川の苦心による) 4/8～4/12 春季遠漕 5/13 第41回ボートレース (水上運動会) 大谷仁兵衛氏1200円を寄付	弘風館落成 (T10)	原敬首相東京駅頭で刺殺される (T10)
大正11	5/12水上大会 7/1～7/3 琵琶湖周航 新艇建造 「時津風」「天津風」ーエイト 「陽炎」ーフォア 「村雨」ーベア 9月 第1回慶応定期戦 初代エイト接戦の末敗れる 中学、大阪高等工商学校ボートレースにて八幡商業と 対戦、5艇身差で大勝	旧書籍館を有終館と命名 (T11) 「専門学校令」による大学を 「同志社専門学校」と改称。 高等商業部を含む4つの学 部を置く (T11)	わが国初の飛行機旅客輸送 に成功 (T11) 「未成年者飲酒禁止法」公布 (T11)
大正12	水上大運動会 遠漕	高等商業部徳照館落成 (T12)	「文藝春秋」創刊 (T12) 関東大震災 (T12)
大正13	5/16 水上大運動会 春 隅田川にて大震災後の復興レース——フォアのみ 参加20校で準優勝		大阪に円タク登場
大正14	5/11第4回関西漕艇大会 同志社スカーリングクラブの室原が優勝 5/30水上大会 7月 同志社スカル隊瀬戸内海縦断 第1回関西選手権大会 (フォアのみ) で優勝		「治安維持法」公布 (T14) ラジオ放送開始 (T14)
大正15	5/23 第1回対明大定期戦で敗れる 11/30 明治神宮競技会にてシェルフォア全国制覇		人見絹枝、国際女子陸上競 技大会で個人総合優勝 (T15)
昭和2	5/12 大学高商連合水上大運動会	有終館出火事件 (S3)	金融恐慌。支払猶予令公布 (S2) 芥川龍之介自殺 (S2)
昭和4	菊水會 (艇友会母体) 結成 四条大橋「菊水」にて加藤小太郎他5名	高等商業部岩倉新校舎に移 転 (S4) 大工原銀太郎総長就任 (S 4)	張作霖爆死事件 (S3) トーキー映画盛んになる
昭和5	5/18 明大定期戦に初勝利	高等商業部、専門学校より 独立して高等商業学校とな	紙芝居「黄金バット」登場

年	ローイング関係	学内関係	社 会
昭和5		る (S5) 大工原銀太郎学長就任 (S5)	紙芝居「黄金バット」登場
昭和6	4/26 KR&ACと対戦 2戦2勝		満州事変 (S6)
昭和7	対明大定期戦僅差で敗れる	アーモスト館竣工 (S7) 新島会館竣工 (S7)	第1回日本ダービー (S7) 5・15事件 (S7)
昭和8	対明大定期戦僅差で敗れる この定期戦は以後中断 エイト「クロガネ」新造 7月末 瀬田川新艇庫完成 9/10 関選 準決勝で京大にカンバス差で敗れる		大阪梅田～心斎橋間に地下鉄開通 (S8) 三原山での投身自殺が流行
昭和9	4月 宇高芳丸練習中遭難死 6月 桜宮レースに優勝 6月 京大校内レガッタ招待レース(フォア)で勝つ 第1回三校エイトリーグ戦に大学優勝 9/9 関選 大学、京大に敗れる 高商フォア優勝 室戸台風により艇庫倒壊		初のプロ野球チーム「大日本東京野球倶楽部」が結成される (S9)
昭和10	6月 オリンピック予選 慶応および商大に完敗	湯浅八郎総長就任 (S10) 湯浅八郎学長就任 (S10) 神棚事件 (S10)	「大阪野球倶楽部」(タイガース) 結成 (S10)
昭和11	海軍記念日競漕に優勝 第1回対大商大定期戦に勝つ 京都I.C 高商優勝 大学は2位		2・26事件 (S11)
昭和12	9/5 関選 高商優勝 大学はフォアで優勝 全日本選手権 高商3位 新艇「イーグル」建造	勅語誤読事件 (S12) チャペル龍城事件 (S12)	盧溝橋事件 (S12)
昭和13	9/4 関選 高商優勝 (2連覇)	牧野虎次総長事務取扱就任 (S13)	「国家総動員法」公布 (S13)
昭和14	5/11 対大商大定期戦に勝利 5/28 3校レースに高商優勝		69連勝の横綱双葉山安芸ノ海に敗れる (S14)
昭和15	9/8 大学、関選初優勝 全日本2位	正門前に「良心碑」建設 (S15)	大政翼賛会発足 (S15) カーキ色の国民服制定 (S15)
昭和16	海軍記念日競漕に大学優勝 非常態勢により他都道府県への競技参加禁止となる	牧野虎次総長就任 (S16) 黒川芳蔵学長就任 (S16)	米の配給制実施 (S16) 太平洋戦争開戦 (S) 16
昭和17	9/6 関選 高商優勝		ミッドウエー海戦で日本軍大敗 (S17)
昭和18	学徒出陣始まり、多数の部員が失われる		連合艦隊司令長官山本五十六戦死 (S18)

年	ローイング関係	学内関係	社 会
昭和18			徴兵適齢19歳に引き下げられる (S18)
昭和19		高等商業学校を同志社経済専門学校と改称 (S19)	サイパン島の日本軍玉砕 (S19) テニヤン島の日本軍玉砕 (S19)
昭和20			東京大空襲 (S20) 大阪焼夷弾爆撃 (S20) 硫黄島の日本軍玉砕 (S20) 沖縄戦 (S20) 広島・長崎に原爆投下 (S20) 玉音放送 (S20)
昭和21	10月 琵琶湖レガッタ 高商優勝 10月 関選 (国体予選) 高商優勝 11月 全日本選手権大会 (国体) 高商僅差で東大に敗れる	田畑忍学長就任 (S21)	天皇、人間宣言 (S21) 食糧メーデー、25万人デモ (S21) 東京裁判始まる (S21)
昭和22	関選フォアで高商優勝	湯浅八郎総長就任 (S22) 湯浅八郎学長就任 (S22)	日本国憲法施行 (S22) 古橋広之進水泳400メートル自由形で世界新記録達成 (S22)
昭和23	8月大学、高商ボート部合併	新制大学発足。経済専門学校は商学部昇格 (S23)	国民の祝日制定 (S23)
昭和24	関選準決勝で三高と接触トラブル、失格負け 対立教大定期戦に勝利		松川事件 (S24) 湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞 (S24)
昭和25	5月 琵琶湖レガッタに優勝 関西リーグ始まる 関選で京大と接触トラブル。再レースで敗退	大塚節治学長就任 (S25) 大学院発足 (S25)	朝鮮戦争勃発 (S25) 聖徳太子像千円札発行 (S25)
昭和26	関選準優勝	大塚節治総長就任 (S26)	サンフランシスコ講和条約調印 (S25)
昭和27	新艇「WILD ROVER」建造 関選優勝	田畑忍学長再就任 (S27)	ボクシングの白井義男世界チャンピオンとなる
昭和28	関選準優勝	大学生協同組合結成 (S28) 明德館竣工 (S28)	伊藤絹子ミス・ユニバース3位入賞、「8頭身」が流行語になる (S28)
昭和29	来日のケンブリッジ大と対戦、接戦の末僅差で敗れる	同志社健康保険組合設立	特撮映画「ゴジラ」が封切

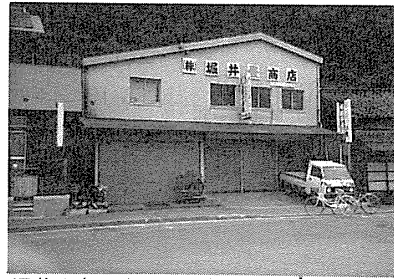
年	ローイング関係	学内関係	社 会
昭和29		(S29) 大下角一学長就任 (S29)	られて大人気 (S29)
昭和30	第1回対京大教養戦に敗退 関選準優勝	「新島襄書簡集」岩波文庫と して刊行 (S29)	力道山を頂点としたプロレ ス・ブーム 神武景気始まる アルミー円貨発行 (S30)
昭和31	関選優勝		猪谷千春冬季五輪で銀メダ ル (S31)
昭和32	関選ナックルフォアで優勝	大下角一学長再就任 (S32)	フラフープが大流行
昭和34	オックスフォード大と対戦して敗れる	「新島襄先生詳年譜」出版 (S34)	
昭和35	対京大教養戦に初勝利	上野直蔵学長就任 (S35)	ダッコちゃん人形が大人気
昭和36	対京大教養戦に勝利 艇庫完成		インスタントラーメン発売 ソ連、ガガーリン搭乗の人 間衛星打ち上げに成功 (S36)
昭和37	対京大教養戦に勝利 合宿所完成		堀江謙一小型ヨットで太平 洋単独横断 (S37)
昭和38	対京大教養戦舵フォア、シングルスカルで勝利	上野直蔵学長再就任 (S38) 住谷悦治総長就任 (S38)	ケネディー米大統領暗殺さ れる (S38)
昭和39	関選準優勝 全日本、シングルスカルで準優勝		東京五輪大会開催 (S39) シンザンが優勝し三冠馬と なる (S39)
昭和40	関選優勝	学生会館開く	ベトナム北爆開始 (S40)
昭和41	関選優勝 瀬田川杯優勝 全日本3位	星名泰学長就任 (S41)	「敬老の日」「体育の日」新 設される (S41) ビートルズ来日 (S41)
昭和42	関選準優勝 全日本2位		藤猛世界ウェルター級チャ ンピオンに (S42) 第3次中東戦争始まる (S42)
昭和43	関選優勝 全日本優勝 メキシコ五輪遠征		米空母エンタープライズ佐 世保入港 (S43) 参議院選挙で横山ノックな どのタレント議員が多数当 選 (S43)

年	ローイング関係	学内関係	社 会
昭和43			東京府中市で3億円事件発生 (S43)
昭和44	朝日レガッタ優勝 関選優勝 全日本優勝 オックスフォード盾準優勝		東大安田講堂占拠事件 (S44) 連続射殺犯永山則夫逮捕 (S44) アポロ11号月面着陸に成功 (S44)
昭和45	全日本5位	山本浩三学長就任 (S45)	よど号ハイジャック事件 (S45)
昭和46	朝日レガッタ優勝 関選優勝		連続殺人犯大久保清逮捕 (S46)
昭和47	中日本レガッタ優勝 関選準優勝 関選シングルスカル優勝 瀬田川杯優勝 オックスフォード盾優勝		浅間山荘事件 (S47) 元日本兵横井庄一グアム島で発見 (S47) 大阪千日デパートビル火災 (S47) 上野動物園でパンダ初公開 (S47)
昭和48	朝日レガッタ準優勝 中日本レガッタ優勝 関選優勝 全日本優勝 オックスフォード盾優勝	松山義則学長就任 (S48)	ベトナム和平協定調印 (S48) 金大中事件 (S48) 琵琶湖が34年ぶりの大湧水 (S48)
昭和49	関選優勝 全日本3位		手品師ユリ・ゲラーで超能力ブーム (S49) 小野田寛郎元少尉ルバン島で発見 (S49)
昭和50	朝日レガッタ準優勝 関選準優勝 全日本大学選手権大会3位	上野直蔵総長就任 (S50)	サッチャー英保守党初の女性党首に (S50) 沖縄海洋博開催 (S50)
昭和51	瀬田川杯優勝	松山義則学長再就任 (S51)	ロッキード事件 (S51)
昭和52	同大ボート部人命救助で表彰される 朝日レガッタ優勝 関選優勝 全日本4位		王貞治本塁打756号の世界新記録 (S52)
昭和53	全日本4位 オックスフォード盾準優勝		嫌煙権運動広がる キャンディーズさよならコンサート (S53)

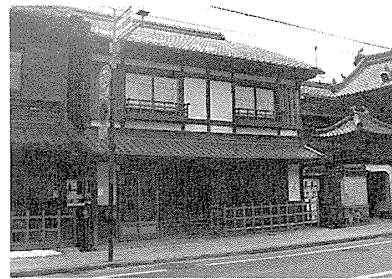
年	ローイング関係	学内関係	社 会
昭和54	全日本大学選手権大会2位 全日本3位	大谷實学長就任 (S54)	三菱銀行北島支店で猟銃強盗事件 (S54)
昭和55	全日本4位	松山義則学長就任 (S55)	モスクワ五輪ボイコット問題 (S55)
昭和56	オックスフォード盾3位		マンザイ・ブーム
昭和58		木枝燦学長就任 (S58)	
昭和60		松山義則総長就任 (S60)	
昭和61		田辺校地開校 (S61)	土井たか子日本初の女性党首に
昭和63	関選優勝 瀬田川杯優勝		瀬戸大橋開通 (S63) リクルート事件で国会証人喚問 (S63)
平成1	関選優勝 全日本大学選手権大会4位 全日本4位	笹田友三学長就任 (H1)	天安門事件 (H1) 美空ひばり死去 (H1) 千代の富士、史上最多の965勝を達成 (H1)
平成2	関選準優勝 関選シングルスカル準優勝	新島襄永眠100周年事業	ゴルバチョフ、ソ連初の大統領に就任 (H2) イラク、クウェートに進攻
平成3	英国ヘンリー・ロイヤル・レガッタへ派遣		湾岸戦争

瀬田川コースと旧合宿所

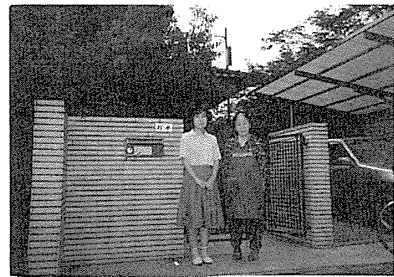
※写真は現在のもの
()内は合宿時期



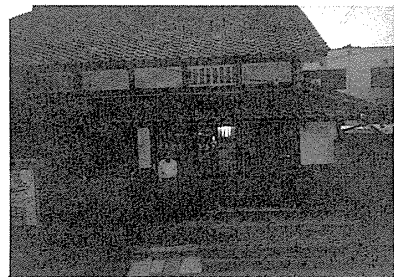
堀井方(S30年代後半)



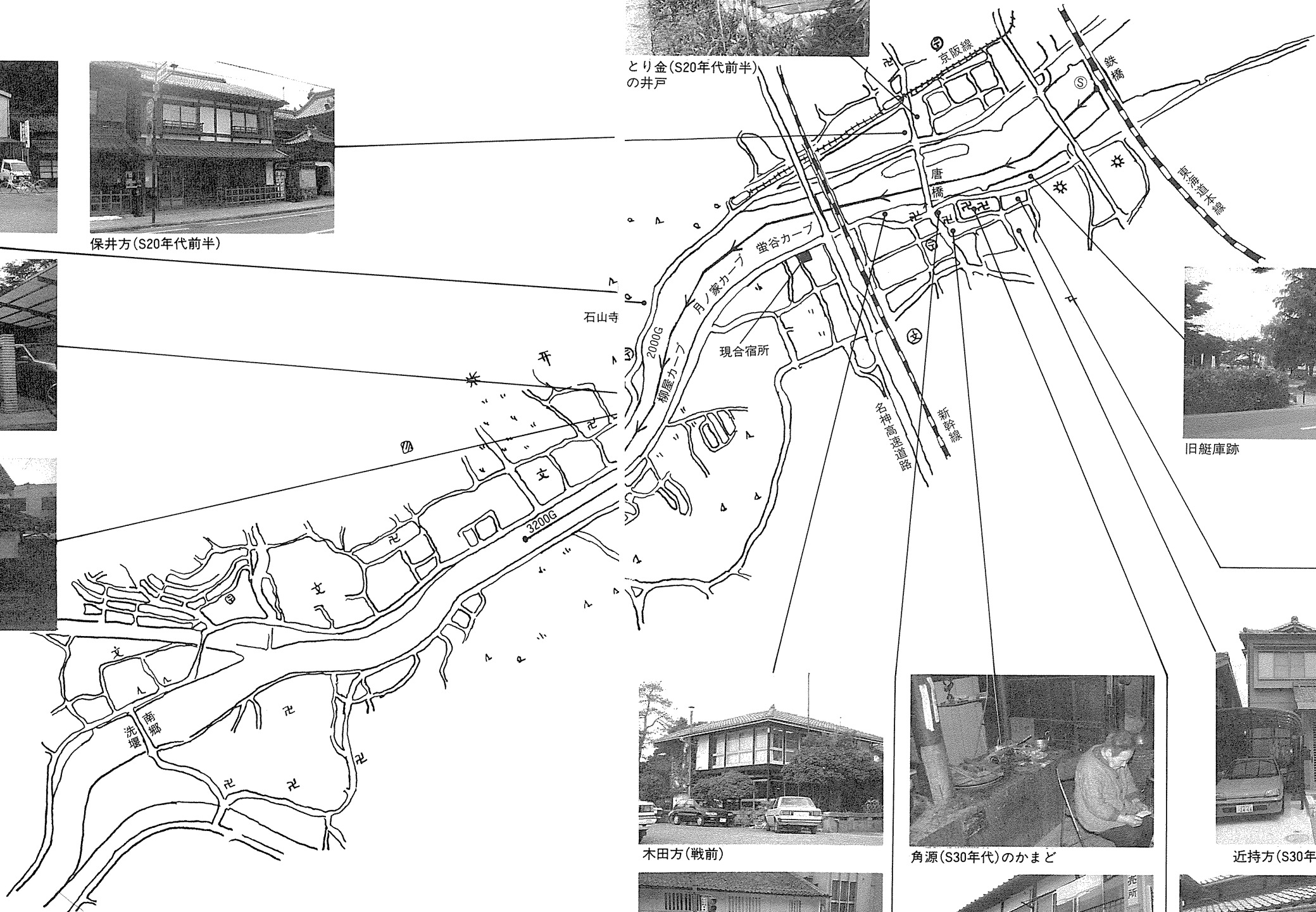
保井方(S20年代前半)



杉本方(S30年代後半)



原田方(S30年代後半)



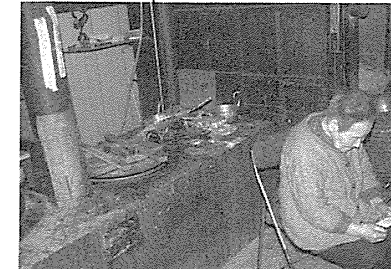
とり金(S20年代前半)
の井戸



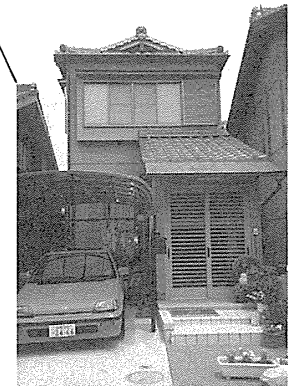
旧艇庫跡



木田方(戦前)



角源(S30年代)のかまど



近持方(S30年代前半)



大橋屋(S20年代前半)

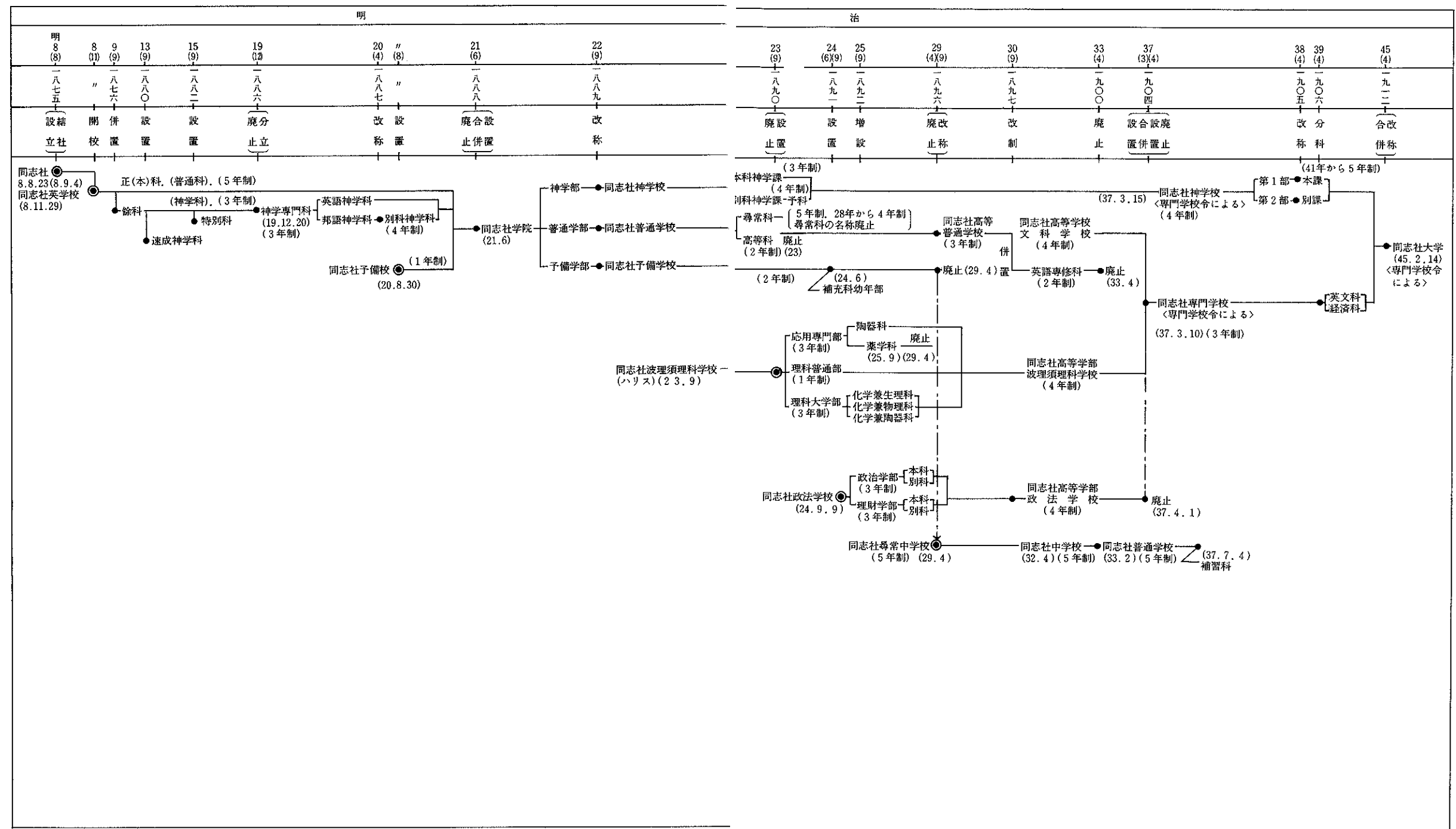


磯田方(戦前)



安土方(S20年代後半)

明治期の同志社学制の変遷



[A]

阿部和久 191,272
 阿部忠二郎 29
 阿江亮彦 272
 愛敬元成 236,197,255
 赤川雅俊 158,264
 赤井一夫 143,260
 赤松勘六 29,32
 赤尾正明 163,265
 明石逸二
 赤塚弘高 149,213,261
 明田重義 61
 秋元秀太郎 29,32
 雨宮清之 134,135
 網島信一 70,71,72,74,75
 穴田健次郎 259
 安藤学 150,262
 青木 85,124
 青木喜三 120,132,237,258
 青盛繁男 69
 青山彦五郎 70,71,72,74,75,87,246,254
 荒井英之 266,
 新井喜範 174,178,179,192,220,266
 荒木節郎 78,83,84,86,98,102,196,254,
 荒木茂治 124,130,237,238,258
 荒尾信太郎 66
 荒山元秀 191,270
 有本常太郎 29
 有元豊 262
 有田志朗 67,68,69
 浅田孝 261
 浅井清治(青仁) 262
 朝倉伸二 275
 浅野源二郎 254
 芦田亮 58
 厚見 85
 鮎川浩(弘) 86,89,98,255
 東勝熊 29,32

[B]

馬場 68
 馬場龍雄 68
 坂邦夫 137,238,239,244,259

[C]

千葉 62
 千葉有明 116
 陳 69
 陳清忠 70

[D]

壇上春清 255
 土肥信一郎 134,259

[E]

江花継夫 265
 榎原 86

榎原忠一 255
 江原祐明 151,262
 遠藤 85,86
 遠藤英二郎 55
 遠藤市二 31
 遠藤重順 254
 遠藤直一 31
 榎三郎 132
 榎本昌浩 150,156,263
 榎坂景次 124,130,131,208,237,238,258

[F]

藤井 85
 藤井明雄 134,135
 藤井浩 188,189,224,269
 藤井啓宏 276
 藤牧宏彰 276
 藤森慎次 139
 藤森慎治(次) 260
 藤野章 265
 藤野修吉 29,31
 藤田嘉五郎 29,32
 藤田新治 31
 藤田哲哉 272
 藤原竹治 31
 深井料一 237
 武津真佐太 83,84,85,86,89,254
 福原勤之 70
 福井大三郎 27,55,64,65,254
 福益敏 164,171,174,265
 福元清輝 256
 普門洋一 263
 船木重徳 260
 舟槻伝四郎 255
 古市 62
 古川良一 139
 古谷久綱 29,33,254
 古山裕基 276
 符阪直吉 29
 伏原 62
 二星八郎 83

[G]

蒲善毅 150
 玄道秀明 270
 後藤直一 31
 後藤嘉樹 272

[H]

蜂須賀文人 256
 萩徳太郎 258
 配川隆司 275
 浜田 142
 浜田正穂 31
 浜松(坂本)美恵子
 浜崎潔 265
 花井重美 113
 原 67

原忠体 70
 原田 62, 64
 原田昌彦 276
 原田助 58
 原一雅 272
 長谷川和之 140, 260
 長谷川祥輔 29
 橋井半次 115, 257
 橋詰良吉 31
 島敏 185, 186, 268
 畑山純一 150, 151, 213, 262
 島山尚弥 275
 波多野培根 29
 島野寅夫 83
 初田利三郎 29, 33
 初田助太郎 257
 八田常吉 29, 33
 八田勇吉 150, 151, 262
 服部清矣 29
 服部周三 266
 服部祐一 66, 254
 早川勝 186, 268
 早坂真一 276
 林 64, 75, 87
 林朝太郎 29, 32
 林田尚之 191, 271
 林源三郎 113
 林圭介 191, 226, 271
 林孝一 254
 林(湊)裕子
 樋田治三郎 29
 樋上 86
 東田多喜男 83, 85, 86, 89, 255
 東辻嘉三郎 79, 82, 83, 85, 86, 106, 122, 132, 236, 254
 樋口明 108, 110, 112, 113, 198, 237, 256
 日野義樹 153, 263
 平井秀彦 264
 平井亀之助 29
 平井弘一 116, 120, 124, 204, 237, 257
 平井貞男 131, 132, 139, 240, 241, 243, 245, 259
 平井忠 131, 132, 259
 平松靖之 231, 272
 平野直樹 58
 平瀬四郎 71, 72, 73, 74, 75, 79, 82, 83, 254
 平田 67
 平田甫 70
 平田隆司 157, 159, 263
 平田留造 254
 弘中慶一 55
 広瀬 68
 広瀬香一郎 69
 広瀬恒善 264
 広田松次郎 31
 広田恒夫 158, 159, 162, 163, 264
 久木弥一郎 110, 112, 113, 114, 140, 237, 240, 241, 256
 人見健造 86, 89, 91, 106, 237, 255

保土田憲吉 255
 本莊崇郎 263
 本間満秋 139, 241, 260
 堀井 85, 86, 114,
 堀井礼三 116, 120, 138, 237, 257
 堀井要壮 135, 137, 138, 141, 210, 241, 243, 260
 堀野喜七 254
 堀智子 276
 堀内昭宏 276
 堀内正一 264
 干畑七郎 83
 星野徳治 31
 干谷諭之助 29
 星沢慎二 272
 細見博 189, 191, 270

[I]

市田勇 85, 86, 88, 98, 104, 109, 237, 255
 市田(大宮)隆 104, 114, 119, 140, 158, 161, 237, 241, 256
 市村敏昭 150, 151, 262
 市谷光之助 115, 257
 一戸清海 29, 32
 井田(大橋)通三郎 113, 256
 五十嵐純也 266
 飯田一馬 31
 飯田正充 256
 飯森寿 70
 飯義寿 83
 井尻進 69
 池田 62
 池田徳茂 125
 池田宜郎 159, 161, 162, 218, 235, 264
 池畑勇 218, 263
 池見清 259
 池本甚平 55
 池尾 82, 83, 86
 池尾孝正 254
 池谷晋 189, 191, 270,
 池内泰三 89
 今井 74
 今井真次 29, 31
 今井崇雄 272
 今井智 272
 今村大三 256
 稲垣襄之助 31
 稲垣謙介 159
 稲垣茂春 266
 稲井丸人 137, 239, 240, 260
 稲岡二郎 55
 伊野甚内 29, 32
 井上平二 29
 井上嘉太郎 31
 井上賢治 276
 井上謙蔵 258
 井上金吾 256
 井上京子 275
 井上周一 274

井上竹次 48
乾健治 275
乾正治 115, 118, 198, 257
入江豊 263
石場 67
石橋雅信 275
石田 62, 69
石田政隆 232, 274
石田龍介 70
石田孝成 150
石田米一郎 66
石田雄治 271
石井虎太郎 55
石川廣吉 29
石川弘 41
石川濟治 31
石本君夫 159, 162, 163, 171, 173, 235, 264
石鍋寿明 189, 270
石鍋寿寛 188, 189, 268
石鍋寿久 189, 270
磯田 138, 240
磯田秀樹 272
磯田留三郎 55
板原兵三郎 29
伊藤 85
伊藤寛 272
井頭感 189, 270
伊藤良蔵 29
伊藤菁悟 158, 264
伊藤助貞 83
伊藤章司 151, 153, 262
伊藤崇 276
伊藤竹美 149, 150, 151, 214, 262
伊東虎雄 83
岩波春喜 149, 150, 151, 213, 262
岩崎匡利 263
岩武利邦 256
井澤克己 29
出石邦保 192

[J]

神宮茂八 29
神野理策 138, 258

[K]

加畑哲夫 150
加悦 114
鏡敏光 153, 263
加賀武四郎 31
貝賀俊之 226, 272
蛸崎敏雄 55
格田愛治郎 83
格谷 115
鎌田 67, 124
鎌田博 186, 268
亀井量太 135, 138, 260
龜山 62
龜山克一 65

上出雅孝 67, 70
神阪唐太郎 31
神坂静太郎 29, 31
神谷仙吉郎 115, 116
上谷統 29, 32
鴨脚恵 60
嘉村義輝 135, 138, 139, 209, 260
金沢重光 266
金澤鶴吉 29, 32
金城栄太郎 263
神原顕次 152, 263
神田重太郎 108, 110, 112, 132, 237, 255
金尾信雄 31
金咲越郎 276
加野豊司 158, 162, 264
刈谷(蒔田)芳郎 134, 138, 259
笠松辰造 60
柏原博 120, 259
柏木邦太郎 60
片見鏈三郎 29
片岡与三郎 197, 256
片山与太郎 31
加藤 83, 167
加藤文穂 276
加藤克明 137
加藤勝彦 131, 133, 258
加藤貞寛 67, 69
加藤(倉野)智 262
加藤備 29
加藤忠正 171, 174, 176
加藤卓嗣 141, 142, 260
加藤太郎松 46, 254
加藤達平 31
加藤康 276
勝井周達 31
勝本肇 276
桂喬 131, 132
勝山實 145, 261
河畑宣伸 224, 268
川島裕美子 276
河林(植西)信子 266
河口勇 276
川口勝 256
河原 67
河原政勝 254
河原幸男 256
河合道正 83, 85, 86
河上英彦 55
川上也須子 171, 265
河本 67
川本見悦 256
河村 110
川中 67
河南潤治 272
河原崎文二 31
川崎五代嗣 229, 272
川崎優子 275
河邊治六 49

河田 62
 川田泰久 262
 亀甲 67
 亀甲金次郎 64
 菊池 114
 菊岡楨一 153, 263
 木村 68
 木村明 113, 115
 木村憲司 262
 木村正 264
 木村俊雄 188, 189, 225, 269
 金小路芳正 131, 259
 絹笠梅治郎 83
 岸本伸司 163, 228, 272
 喜多 84
 喜多栄太 276
 喜多一二郎 70, 236, 254
 北島健一 131, 132, 259
 北川 112
 北川寛一郎 113, 256
 北川浩二 270
 北川正夫 83
 北村 62, 150
 北村 74, 79, 82, 86
 北村国次郎 89, 98, 114, 255
 北村久弥 151, 262
 北野耕蔵 255
 北野進 263
 北尾冬子 276
 北尾元藏 141, 142, 145, 147, 211, 261
 喜多隆博 275
 北脇 62
 北脇春吉 55, 58
 北脇鴻造 68, 70, 74, 75, 254
 北脇作治郎 46, 48
 北脇末吉 65
 木内良典 276
 清原清二 259
 清田 67, 68
 清田博 108, 110, 256
 小林 67
 小林千代 29, 32
 小林愿 29
 小林順三 83
 小林峯蔵 29, 254
 小林重之 276
 小林修亮 60
 小林徹 221, 266
 小林俊樹 276
 小林芳郎 70, 71, 74, 75
 小吹悟 276
 幸田龍一 188, 189, 269
 古賀快象 31
 小池勝 255
 小島 110
 児島重太郎 60
 小島今朝二郎 62, 96
 小島龍三 98, 108

小島康正 266
 小島康夫 276
 額額武司 160, 264
 国府 62
 小牧 110
 小松研一 185, 186, 222, 266
 戸名肱三郎 31
 河毛樹 191, 226, 271
 小森進治 191, 271
 近藤憲司 116, 120, 121, 138, 237, 257
 近藤賢二 26
 近藤邦彦 276
 近藤誠三 66
 近藤鷹馬 67
 近藤光男 150
 近藤泰裕 276
 小西 62
 小杉良平 116, 120
 郡淳 254
 功力英俊 193, 276
 小滝無事郎 29
 小谷益次郎 55, 74
 木安望 61
 耕山愛太郎 89
 小山隆 258
 小山隆治 191, 215, 263
 小山一 272
 小関隆一 189, 270
 久保智之 191, 271
 久下(原田)貴三 145, 147, 262
 國富卓也 141, 142, 143, 145, 260
 国友(山根)藤策 130, 131, 132, 140, 238, 241, 259
 黒田 67
 黒田方辰 142, 261
 黒川一郎 67
 黒川俊夫 254
 黒住猪太郎 29
 車均 83
 日下部 62
 日下部純一 65
 日下部純吉 254
 草野堅二 31
 楠正喜 83
 楠戸俊宣 184, 266
 桑田郁男 188, 189
 桑田一夫 83
 久世一三 258
 京谷祐弘 114, 257
 京口謙一郎 64, 254

 [M]
 町田甚太郎 55
 町田進一郎 55
 前田 67
 前田平四郎 29
 前田和男 263
 前田崇 275
 前島 63

前谷浩 191,272
牧野正 83
牧野虎次 23,28,29,49,254
楨和一郎 29
円尾紀 113,115,116,120,124,132,237,257
丸山英敏 218,264
丸山信吾 151,215,263
益田秀仁 270
益江惠吾 67,69
馬杉淳一 268
増子惣一 203,237,258
増本茂 197,255,
増谷昭夫 217,263
俣野 62
松原博 31
松原久能 272
松田弘一 272
松平忠正 265
松井 86,96
松井万緑 41
松井嘉一郎 31
松井一雄 134,138,259
松居清 255
松井七郎 70,71,74,254
松井進 98
松井時二郎 29
松井(四方)久男 134,135,137,138,140,162,163,
164,167,169,173,176,177,180,
184,188,241,243,259
松川信之 269
松川寿久 114,115,200,237,257
松見孝一郎 256
松村晴夫 216,263
松村勲 272
松本 67
松本談井 69
松本洋 163,164,165,166,167,264
松本欣二 141,142,145,241,260
松本清 131
松本捨男 138,259
松本収平 272
松岡 62,96,138
松岡亀雄 29,32
松岡一男 55,61
松岡(西田)稔 138,240,245,259
松岡秀三 98,255
松尾一男 65
松尾武嗣 150,263
松島寛三郎 29,32,254
松島誠 114,198,257
松城敬 276
松下 96
松下勇 255
松山 138,240
松山厚志 271
松山淳吉 31
松崎雄一 261
丸井広次 135,137 259

丸井博嗣 259
篠鷗二郎 29,32
三上和彦 193,248,275
三方茂 263
美馬武夫 115
三村秀之 276
三村茂 256
南珍一 32
南本虎一 83,85,254
南昌吾 150,151,262
湊良三 185,186,268
湊修一 132,137,259
峰尾元庸 264
美濃部 62,67,68
三野順一郎 276
三砂和一郎 29,31
三竹(加藤)偉雄 145,147,149,150,262
三浦 62
三輪与次郎 31
宮川正夫 124,130,131,132,237,238,258
宮川滋 174,178,266
三宅(鎌田)亥四郎 31,49
三宅驥一 25,28,31,58
宮城博 171
宮地信行 268
宮本清 120,125,130,238,258
宮本興 58
宮尾 86
宮脇信行 276
宮崎寿春 193,276
溝川 62
水野 120,257
水野正成 188,189,270
水野義男 135,137,138,260
水崎基一 29,58
水谷伴治 256
目片雅喜 191,271
望月三郎 31
森口潔 60
森口迪治 150,262
森景経世 263
森川博有 229,272
森川正雄 83
森光太郎 41
森宗定 58
森信秀 269
森岡正宏 164,219,264
森島昭三 137,140,210,235,239,241,242,260
森田 112,122
毛利匡之 135,137,139,260
森田勝美 150
森保二 271
森田信雄 113,237,240,256
森田茂樹 132
森田徳教 276
森脇義朗 29
森雄吉 89
森実章三郎 31

元持勝一 84,85,86,89,98,236,255
 元持昌二 83
 麦生陸郎 61
 村井藤十郎 254
 村井富雄 169,170,171,174,178,179,265
 村井利康 142,145,212,261
 村上 62,96
 村上和也 265
 村上武夫 98
 村上敏道 256
 村木 115
 村尾 68
 村瀬宗一 262
 村田 62,85
 村田市郎 188,269
 村田典彬 264
 村津 68
 村山幹夫 211,260
 室原慶一 86,89
 牟田博人 257

[N]

永野巖 191,271
 長尾柳吉 29
 長尾豊 32
 永坂隆明 188,189,270
 長崎英一 132
 永瀬 120
 永田 67,71
 長田 74
 長友毅嘉 163,164,264
 長友清利 186,223,266
 名古屋義男 83
 内藤啓吉 29,32
 内藤謙二 113,115,198,231,257
 内藤正樹 232,275
 中原克己 162,163,217,264
 中川 79
 中川儀一郎 29
 中川健次郎 55
 中川正生 135,138,259
 中川雅夫 263
 中川孝史 83,254
 中島兼次 55
 中島政一 29,32
 中島俊一郎 262
 中村泰博 263
 中島靖之 265
 中村栄二郎 29,32
 中村三郎 83
 中村信 83
 中村祥子 275
 中村俊裕 193,229,248,272
 中村年男 131
 中村弥三郎 70
 中村喜光 186,266
 中西 62
 中西寛 135,139,260

中西順三郎 66
 中西孝夫 276
 仲野太蔵 29,31
 中野貴夫 186,268
 中野靖夫 258
 中瀬古六郎 49
 中田二三男 174,178,266
 中田康夫 153,155,263
 中辻努 271
 中山文哉 31
 中山周作 29,32
 中山俊彦 263
 中沢郁男 276
 中住慎一 226,271
 難波孝也 262
 南部 62
 南(横)部實之助 29
 南里勇 83
 根本寛明 189,270
 二瓶伸子 276
 新美康則 163,220,264
 二宮峯男 29,68,254
 西 106
 西堀龍雄 141,142,241,260
 西田蔵 260
 西田正大 258
 西田稔 264
 西田智明 232,274
 西田利彦 275
 西川秋弥 135,138,139,260
 西村 66,86
 西村伍一 64
 西村伍一郎 69,254
 西村幸之進 31
 西村稔 32
 西村(花森)節夫 185,268
 西村昌二 255
 西邨省三 86,255
 西村泰夫 159,263
 西村泰隆 276
 西野盛衛 55
 西岡啓太郎 58
 西尾孝二 110,112,113,132,256
 西谷 82
 西谷清 83
 丹羽 67
 野田義男 263
 野間辰次 70
 野村 62,67
 野々垣明 135,137,243,259
 能勢啓 153,263
 野瀬正治 191

[O]

大庭 62
 大場 65
 小原貫一 83
 小原隆史 275

大林一 134,259
大林政雄 55
小田切拓 276
大江 66
大賀 67,69
小笠原司 189,269
緒方徳一郎 29
小川 67
小川政雄 83
荻野義明 187,192,223,268
小栗栖六郎 55
大浜 86,89
大原隆美 55
大橋幸平 31
大橋宗四郎 60,61
大橋行正 266
及川 62
大石七郎 29,32,254
岡田 67
岡田一夫 178,266
岡田光雄 262
岡田太一郎 275
岡田友貞 70
岡原正幸 152
岡美智雄 158,159
岡本 68,69
岡本桜 31,254
岡本繁哉 31
岡本竜人 276
岡野基吉 31
桶田英俊 188,189,268
大久保 67
奥田 138
奥藤 114
奥村重蔵 132
奥村信伍 31
奥野茂 262
大倉三郎 67,69
奥谷勇人 231,272
大町弘蔵 83,84,85,86,90,92,236,254
大宮久 163,164,264
大森兵造 31
大西猪之助 48
大西二三男 115,256
大西直子 276
大西治 150,153,156,263
大西義則 160,264
小野 67
小野寺寿雄 41,43,254
小野木伸 143,211,261
小野木利男 150,262
小野博善 149,151,213,262
大野準一郎 262
大沼 68
大沼弘幸 272
大岡 62
渡橋透安 131,259
押領司哲也 276
大崎艇介 124,254

納三治 31
大塩 120
大角 68
太田博 255
大竹宏 275
太田実 266
大谷英一 29,32
大谷恭助 31
大谷保 84,114,255
太田誠一郎 131,259
太田豊彦 124,126,128,130,131,138,150,207,235,
237,238,240,241,258
大友彰一郎 276
大塚英雄 46
大塚享 151,262
大脇 68

[R]

楽 67
李鐘峻 67,69
流郷吉勝 132,137,239,259
路次二郎 264
六嶋博司 262

[S]

斎藤繁明 272
佐伯 62
佐伯明 276
佐伯誠 275
佐原 138,240
西条信之 83,85,86,87,254
斉藤忠一 31
斉藤七郎 83
坂上安蔵 29
酒井猛夫 83,83,85,254
坂井俊夫 189,191,270
酒井幸男 110,112,114,236,237
榊原雅也 193,
榊原哲文 55,275
坂本 62
阪本章 264
阪本厚 263
坂本竜一 193,275
坂本雄二 185,186,192,268
坂野 81,85,86,96,104
坂野公夫 98,110,196,255
阪田良之助 147,149,150,151,262
作間秀樹 272
佐久間秀雄 29,32
桜庭十蔵 29,31
桜田東土 163,164,165,167,265
桜井 122,124
桜井昭子 274
桜井隆夫 270
桜井太郎 83
桜井弥一郎 84,85,86,87,132,236,254
佐野閔一 152,161,164,235,263
佐野新吾 259

猿丸 86
 猿丸源太郎(元) 89,255
 猿丸正三 89
 佐々田正 132
 佐々木胞吉 29
 佐々木讓 178,266
 佐藤 79
 佐藤賢治 83
 佐藤将人 193,275
 佐藤信温 55
 佐藤亘 229,272
 沢田 254
 沢田実 41,43
 関 66
 関目成道 70,71,74,75,86,87,236,254
 関谷晴彦 232,274
 瀬尾 68
 芝貞光 55
 柴田民部 116
 柴崎鶴 264
 志賀正夫 108
 志賀理 272
 重松健一 275
 島田 68
 島田恭典 275
 島益吉 29
 島本 62
 島本進 83
 島本貴夫 276
 清水 254
 清水団三郎 29
 清水裕 260
 清水正俊 167,171,174,178,179,266
 清水治 263
 清水三郎 41
 清水徳三郎 29
 清水和三郎 41,43,46,48
 下田亨 276
 下間 62
 下西辰夫 138,140,141,161,235,243,260
 品川 62
 新開明夫 116,237,256
 神明 62
 神明万次郎 60
 篠田昌武 29
 篠塚八郎 31
 塩見勇吉 29,84
 塩瀬治房 83
 塩澤龍次郎 29,31,254
 塩津誠作 41,43
 白井茂 131,259
 白石嘉十郎 29,32
 白井季吉 58,60
 城生栄二 272
 城生清孝 188,189,192,270
 園英明 147,149,261
 末瀬雅己 274
 末田範造 29,32

管 67
 菅巖男 69
 菅谷雄太郎 29,31
 杉木英男 191,271,
 杉本勝義 262
 杉本正男 61
 杉本茂雄 150,152,157,188,245,262
 杉野寿男 124,130,131,132,238,259
 杉浦良太郎 123,236,255
 杉浦義人 70
 杉山伸 248,275
 洲浜祐一 174,176,188,265
 角田健三 83
 住井富士男 83
 諏訪 68
 鈴木 68,69
 鈴木文治 178,266
 鈴木淳蔵 114,255
 鈴木重嶽 29,32
 鈴木基夫 114
 鈴木岡造 41
 鈴木史朗 150
 鈴木庄造 32
 鈴木達治 29
 鈴木吉満 48,254
 正田熊太郎 29
 庄山章信 150,262,214

 [T]
 田畑良夫 150,151,262
 橘 68,69
 橘威 70
 田口長 164,165,167,264
 田伏徳次 86,96,98,255
 田島 239,240
 田島了 132,137
 田島虎衛 29,33
 鷹羽昭 260
 高羽浩司 276
 高田富治 29,32
 高口庄司 29
 高橋 62,68
 高橋明 131,258
 高橋彦太郎 29,33,254
 高橋潔 164,167,169,171,184,192,265
 高橋正樹 188,225,269
 高橋重義 70
 高橋滋 178,179,181,266
 高橋宗 114,115,116,122,124,126,139,140,150
 153,203,235,240,241,257
 高橋良明 231,272
 高橋涉 276
 高井正明 132,137,140,210,235,238,239,241
 242,260
 鷹野真臣 158,264
 高下康治 272
 高山一也 227,272
 武田泰一 124,130,132,238,258

竹田和彦 147, 149, 150, 261
武田君太 31
武田喜藏 124, 130, 132, 238, 258
武田正宏 164, 167, 171, 265
武口公一 255
竹村栄造 142, 145, 147, 261
武尾豊 186, 268
武重善八 29, 32
竹下岳 276
竹内 66
竹内秀暢 276
竹内孝三 138, 139, 260
竹内仙之助 83
瀧川 85
瀧口忠夫 139, 141, 260
田村長太郎 29
田村宏 131, 132, 139, 259
田村健次郎 131
田村麻理子 276
田辺 134
田中 62, 66
田中兵二 31
田中秀昭 272
田中重次郎 171, 173, 174, 178, 179, 182, 266
田中薫 272
田中啓造 29
田中清 135, 137, 139, 241, 243, 260
田中隆一 193, 275
田中弥太郎 29
田中羊一 124, 130, 131, 237, 238, 259
田中義力 229, 272
谷 62
谷川真司 272
谷口 62
谷口幸一 227, 272
谷昌二郎 276
旦太助 31
田沢明 155
龍村和憲 150, 262
寺田英三 153, 263
寺田英夫 115, 116, 124, 237, 257
寺田耕吉 255
寺元弘 260
寺本不二雄 258
寺西勲 264
寺島宗一 31
寺沢 67
寺沢愛之 70
照井丙吉 29
鉄谷高久 263
友高敏夫 215, 263
土倉龍二郎
津田 86
津田清(礼作) 89, 255
津下紋太郎 45, 46, 47, 106, 254
辻井愛之助 29
辻昇 258
辻良之助 29

辻武夫 255
塚本純一 106, 122, 124, 138, 140, 167, 236, 244, 254
塚本好子 140
塚本義夫 140
津村鶴松 29
綱木直之 83
津島泰 275
筒井弘 141, 261
都留信郎 41, 43, 46, 48, 254
露口四郎 68, 86
露無 68
津崎晴功 158, 159, 263
飛田 67, 68, 69
富田潤 261
富田孝治 265

[U]

内田文章 261
内田順己 149, 150, 151, 153, 161, 164, 165, 166,
167, 169, 177, 184, 262
内田琢也 276
内保忠勝 159, 162, 264
内貴康夫 150, 262
宇高芳丸 112, 113, 114, 236, 237, 256
植田 62
上田 66, 68
上田敏 124
上田正典 29
上田清次郎 69
植田惣七 67
上田詔三 256
上田達彦 186, 268
上野誠之 185, 223, 268
上野義一 70
上野洋一 262
上浦英明 270
梅田雅昌 185, 186, 268
梅村数之助 254
梅岡克次 263
梅沢武一郎 28
宇野重喜 59
魚忠一 83
卜部八右衛門 41, 43, 46, 48, 254
卜部京三郎 46
漆原英定 263
白杵 62
宇戸大輔 276
宇津均 32
内海久俊 271

[W]

和地永堯 31
和田 68, 114
和田久雄 262
和田学 191, 271
若松兎三郎 29, 32
若村直三 254
若菜英作 184, 266

脇方勇 150,151,262
 鷺北東 218,264
 鷺田平一郎 134,138,243,259
 渡井 68
 渡辺 62,106
 渡辺勇 70,71,74,75,79,82,83,86,87,114,236,
 254
 渡辺 85,
 渡辺節二郎 43
 渡辺隆弥 116,120,258
 亘理省三郎 29,31

 [Y]
 矢吹 86,
 八神弘雄 150
 八木重兵衛 71,75,79,254
 八木茂 256
 八木辰馬 83
 八木由三郎 55
 矢島正恒 186,268
 屋久浩典 272
 山辺正 112,113,114,115,116,140,237,240,256
 山田善一 135,138,140,241,243,260
 山田昭児 140,210,241,260
 山田庄太郎 60
 山田義弘 60
 山岸進 266
 山形彰人 186,222,264
 山口賢太郎 276
 山口雅司 276
 山口実 55
 山口精一 49
 山口忠博 186,224,248,268
 山口隆史 163,164,165,264
 山口俊郎 167,266
 山路清 158,263
 山森良枝 268
 山本 254
 山本晃弘 186,266
 山元博 131,209,259
 山本兵一 41
 山本克美 169,170,171,174,265
 山本健吉 70
 山本信蔵 135,137,139,241,243,260
 山本健也 271
 山本民三郎 65
 山本寅太郎 65
 山本善之助 131,258
 山村剛一 115,116,120,140,237,240,257
 山中 74
 山中平次 61
 山根基 60
 山野良吉 60
 山内龍 29
 山内谷雄 83
 山崎 62
 山崎恒夫 131,205,258
 山崎恒司 29

山下 62
 山下元治 29,32
 山下雅男 89
 山下進 275
 山添敏雄 150,151,153,157,262
 矢野 67
 矢野英明 272
 矢野光太 29
 安田一 69
 安田一郎 272
 安田克裕 272
 安田智雄 272
 安井 85
 安井義人 86,89,92,140,158,161,236,241,254
 安川 62
 安川鐵藏 65
 吉年晃 124,130,204,237,258
 横田 67
 横山基嗣 184,193,221,235,248,266
 横山昌次郎 31,49
 横矢重勝 29,32
 米原栄一 275
 米村康弘 272
 米山尚吾 276
 寄藤辰夫 186,266
 吉田 62,67,68,69,86
 吉田寛伸 191,272
 吉田清吉 55
 吉田武史 276
 吉田拓生 276
 吉川 114
 吉川安達 29
 吉川久雄 131,258
 吉川喜土太 29,31
 吉川義弘 189
 吉益四郎 120,121,124,125,126,127,130,133,237,
 238,257
 吉津孝甫 258
 余谷有紀枝 276
 湯川長保 145,147,150,261
 行宗 62
 百合実 258

あ　と　が　き

「1991年には100周年を迎えることになるが、どんなことをやろうか」と役員会で話が出たのが、もう10年ほど前のことでした。各種記念事業の企画が提案される中、1988年2月の艇友会総会でまず記念誌の刊行が決定されました。これをうけて記念誌編集委員会が発足、第1回目の会合を持ったのが1989年6月でした。十分とはいえない時間の中で編さんに取り組み、本当に記念誌ができるのかという思いを味わったときもあります。いまはなき人々も含めて幾多の方々にこの記念誌の誕生のきっかけを可能にさせていただいたことを心底から感謝いたしたく存じます。

一方、この誌が同志社ローイニングに対する誤ったイメージをいささかなりとも表現していないかという、編集者としての危惧があることも告白しておきたいと思います。「一艇ありて一人なし」ではありますが、各人それぞれの見方もありましょうし、記述がすべての読者を満足させるものであるかどうか、はなはだ心もとないというのが偽らざるところです。

また戦績、人名等の調査に不備な点も多く残したことをお詫びするとともに、訂正、充実は次の機会にゆだねたいと思います。もはや我々は「この事業たるや、決して一新島の事業ではありません。実に神の御事業であります。先ず、200年後を期さなければなりません」との新島先生のお言葉に救いを求めるしかないのです。

最後に参考文献、資料、写真などをご提供いただいたり、企画、取材にご協力下さった数多くの皆様に厚く感謝いたします。

記念誌編集委員会

本誌上の人名、記録に関して訂正、補充などお気づきのことがありましたら次ページ奥付に記載の艇友会本部事務所までお知らせください。将来における次回記念誌制作のための資とさせていただきます。また写真、パンフレットなどは複写の上返却いたしますので、お手持ちのものをお寄せくださいますようお願いいたします。

参考文献

「同志社文学會雑誌」
「同志社校友會報」
「同志社時報」
THE DOSHISHA TIMES
「同志社90年史」
「同志社100年史」
「同志社端艇部後援会誌」
「力漕」同志社大学ボート部
「同志社ボート資料摘要」岡村完道氏提供
「関西漕艇界小史」井狩甫氏提供
「京都府漕艇協会史」京都漕艇協会
「同志社スポーツの歩み」同志社大学体育会
「同志社柔道のあゆみ」同志社大学柔道部後援会
「漕艇強化ニュース」日本漕艇協会
「月刊漕艇」日本漕艇協会
「第三高等学校壬辰會雑誌」
「第三高等学校水上部年表」間新氏提供
「京都大学端艇部年表」
「京都大学端艇部50年史資料」
「濃青」京都大学端艇部
「東京大学漕艇部百年史」東京大学漕艇部
「百年のあゆみ」慶応義塾大学端艇部
「一橋ボート百年の歩み」四神会
「見よ蒼溟につづきたる」津高等学校百周年記念誌刊行委員会
「ボート五十年」久保勘三郎・宮田勝善著 時事通信社
「ボート百年」宮田勝善著 時事通信社
京都日出新聞, 京都新聞, 朝日新聞, 毎日新聞, 読売新聞, サンケイ新聞

同志社ローイング100年

1991年9月14日発行

発行者	同志社艇友会 同志社ローイング100年記念事業実行委員会
編集者	同志社ローイング100年記念誌編集委員会 滋賀県大津市瀬田3丁目2-30同志社大学ボート部合宿所内 同志社艇友会本部事務所 電話(0775)45-0702
企画	株式会社大丸京都店「創本工房」
製作	株式会社出版文化社
印刷	大平印刷株式会社

